



Title	篆隸万象名義の研究 [全文の要約]
Author(s)	李, 媛
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 <a href="https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/">https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/</a>
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12517号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/65755">https://hdl.handle.net/2115/65755</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Li_Yuan_summary.pdf



平成 28 年度博士学位論文

# 篆隸万象名義の研究

北海道大学大学院文学研究科

李 媛

# 目次

はじめに.....	1
1 本研究の目的と方法.....	1
2 本研究の対象資料.....	5
3 本研究の構成.....	7
4 用語の定義.....	8
<b>第1章 玉篇系字書に関する先行研究.....</b>	<b>9</b>
1.1 文字学的方法による先行研究.....	9
1.2 情報処理学的方法による先行研究.....	10
<b>第2章 データベースの構築による情報処理学的な研究方法.....</b>	<b>11</b>
2.1 平安時代漢字字書総合データベース (HDIC).....	11
2.2 篆隸万象名義データベース (KTB).....	13
2.3 篆隸万象名義と原本玉篇残巻との対応.....	14
2.4 本文データベース化における情報処理上の問題.....	16
2.5 本文データベース化から見た文字情報学的な研究方法.....	24
2.6 まとめ.....	35
<b>第3章 書誌学的研究.....</b>	<b>36</b>
3.1 高山寺本篆隸万象名義.....	36
3.2 篆隸万象名義の近世写本.....	39
3.3 高山寺本と近世写本とから見た錯簡の問題.....	45
3.4 近世写本による本文研究.....	49
3.5 まとめ.....	58
<b>第4章 埋字と脱字.....</b>	<b>59</b>
4.1 掲出字数をめぐる問題.....	59
4.2 掲出字についての先行研究.....	60
4.3 篆隸万象名義における掲出字の種類及び掲出字数の集計について.....	62
4.4 埋字と脱字についての分析.....	64
4.5 本研究における篆隸万象名義の掲出字の集計.....	75

4.6	まとめ	77
附表1	埋字Aリスト	80
附表2	埋字Bリスト	86
附表3	脱字Aリスト	105
附表4	脱字Bリスト	106
<b>第5章</b>	<b>字体と字種との区別から見た重出字</b>	<b>119</b>
5.1	重出字の問題	119
5.2	重出字に関する先行研究	119
5.3	篆隸万象名義の重出字についての実際	121
5.4	原本玉篇残巻との比較	134
5.5	篆隸万象名義の重出字の分布	137
5.6	重出字からみる第5帖の特殊性	139
5.7	重出字の類型	140
5.8	まとめ	141
附表5	字体レベル重出字 T1	143
附表6	字種レベル重出字 T2	149
<b>第6章</b>	<b>掲出字の文字同定</b>	<b>153</b>
6.1	高山寺本の原本字形	153
6.2	先行研究における文字同定	155
6.3	掲出字同定の総合	158
6.4	調査結果	159
6.5	掲出字翻刻の階層化	161
6.6	まとめ	163
<b>第7章</b>	<b>大乘理趣六波羅蜜經積文による本文研究</b>	<b>164</b>
7.1	日本資料と篆隸万象名義の本文研究	164
7.2	研究資料	165
7.3	大乘理趣六波羅蜜經積文における原本玉篇逸文の分布	166
7.4	大乘理趣六波羅蜜經積文における原本玉篇逸文の特徴	168
7.5	大乘理趣六波羅蜜經積文の逸文を利用した本文校正	170
7.6	まとめ	171

<b>第8章 篆隸万象名義の全文テキストと公開システム</b> .....	<b>172</b>
8.1 全文テキスト公開の背景 .....	172
8.2 掲出字認定の成果 .....	172
8.3 全文テキスト .....	173
8.4 公開システム .....	180
8.5 まとめ .....	184
<b>おわりに</b> .....	<b>186</b>
<b>参考文献</b> .....	<b>190</b>
<b>使用テキスト</b> .....	<b>194</b>
<b>規 格</b> .....	<b>194</b>
<b>附 録</b> .....	<b>195</b>
台北故宮博物院文献館所蔵近世写本八冊本 .....	195
北京中国国家図書館古籍館所蔵近世写本二冊本 .....	202
<b>附 記</b> .....	<b>218</b>

# はじめに

## 1 本研究の目的と方法

本研究は、日本の平安時代に編纂された漢字字書である『篆隸万象名義』を中心にして、文字学と情報処理学との二つの観点から本文解読へアプローチする古辞書の研究である。

『篆隸万象名義』は、9世紀前半、唐から日本に戻った弘法大師空海が、梁・顧野王撰述の原本『玉篇』を抜粋した字書である。約16,000字の掲出字に対して、字音・字義・字体の記述を収録する。原本『玉篇』は、後の時代の日本古辞書編纂に大きな影響を与えたが、現在では逸書となっており、日本に八分の一しか残存しない。ゆえに、『篆隸万象名義』は、原本『玉篇』を再構するための重要な資料であると同時に、日本語学においても字音・字訓・字体の成立・変遷を考察する基礎資料となる。しかし、『篆隸万象名義』は永久二年(1114)に書写された高山寺本しか存せず、加えて誤写・誤脱が多いことが早くから指摘されており、利用するには精密な本文校訂が要求される。

本研究では、先行研究を踏まえた上で、玉篇系字書<sup>1</sup>(原本『玉篇』・『大広益会玉篇』[以下宋本『玉篇』という])、『篆隸万象名義』の近世写本、さらに『新撰字鏡』、『類聚名義抄』等の日本古辞書を突き合わせ異同を見比べる。参照する関連資料を次の図0-1に示す。

### A 関連資料

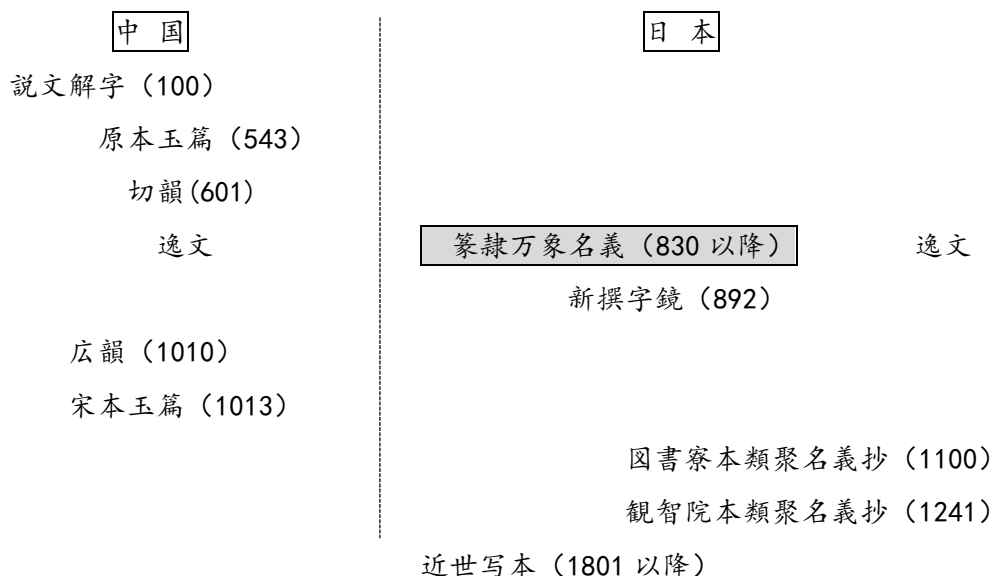


図 0-1 篆隸万象名義本文研究の関連資料群

<sup>1</sup> 池田 (2016c) : 顧野王の原本『玉篇』と同じ部首分類体系と判断される字書を玉篇系字書と呼ぶ。詳細後述。

## B 『篆隸万象名義』の構造・部首体系・内容

本文の内容上、『篆隸万象名義』は原本『玉篇』の節略本であるが、書物の形態、全体の構成、篆書掲出字の増加などの変更がある。『篆隸万象名義』自体の構成を把握するには、基本内容と構成上の識語の整理が重要になる。

基本内容→ 掲出字、注文〔音注（反切・類音注）、義注、字体注〕

構成識語→ 表題、帖記、巻記、

総目録、巻首部首目、文中部首標識、部首字数注記

（書物全体の仕組みを示す情報）

『篆隸万象名義』は、原本『玉篇』と比べると、全体的に次のような特徴を有している。（図0-2）。

- ①部首序列・掲出字配列は原本『玉篇』を比較的忠実に反映している。【忠実な部分】
- ②本文では原典の書名、注釈家の明記、用例などが削られ、単字による意味注記のみ残されている。異体字に関する扱い方も異同が観察される。【節略の部分】
- ③書物の形態（卷子本・冊子本）、内容のまとめ方（分帖・分巻の仕方）が異なり、さらに篆書掲出字が加えられている。【変更の部分】

上記の節略や変更は、編纂が行われた時代や実用的な用途の違いを反映していると考えられる。『篆隸万象名義』を利用・研究する際には、上述の【忠実な部分】【節略の部分】【変更の部分】、つまり玉篇系字書における内省的な観点からアプローチすることは重要である。

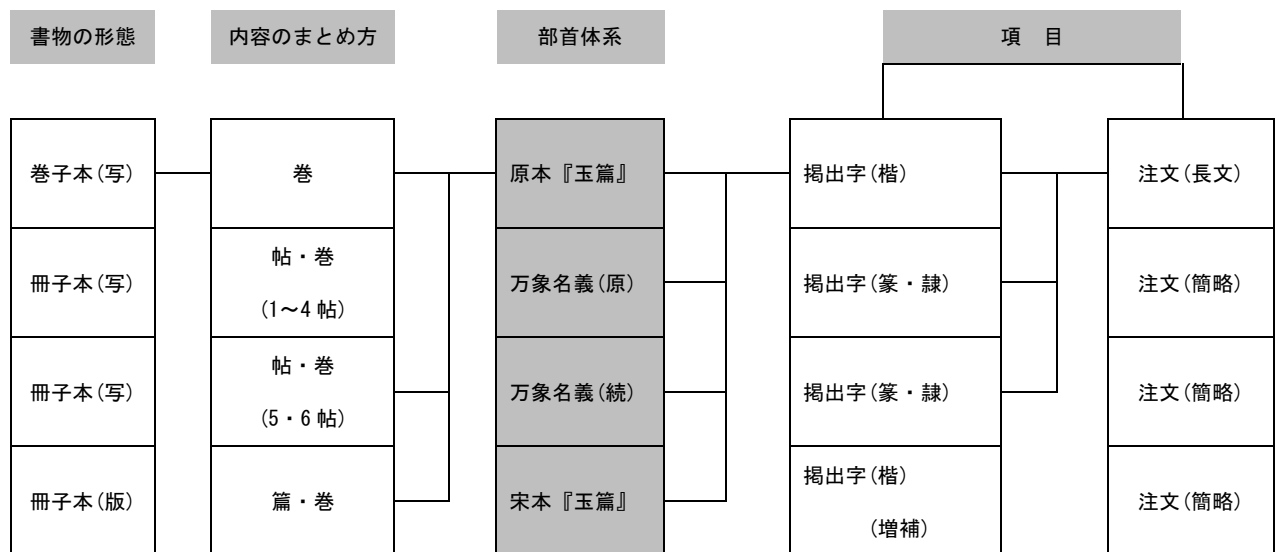


図0-2 玉篇系字書の全体図

\*原本『玉篇』の内容を忠実に継承した部分の右側に実線で示した。

## C 先行研究との照合

上述のように、高山寺本『篆隸万象名義』では、誤写誤脱が多く、古い字体情報も保存されている。写本の状況は複雑である。本文中の誤写がどの段階（編纂の段階か抄写の段階か）で生じたかは不明である。また、平安初期に成立した漢字字書であるため、中国の南北朝時代の字体が保たれており、現代の字体意識をそのまま適応することはできない。この問題に関しては、『篆隸万象名義』における掲出字の認定や本文解読についての研究成果が参考になる。掲出字の認定に際しては、日中両側の学者の認定結果を照合した上で、異同のあるものを見分けて、さらに内容・関連文献の記述を確認して総合的に判断する必要がある。諸家認定意見の照合は不可欠なステップである。

以上、『篆隸万象名義』の解読・本文研究を行うには、次の通りの三方面の文献資料・内容と構成情報・研究成果を整合する必要がある。

### A 関連資料群の内容との照合

### B 『篆隸万象名義』の構造・部首体系・内容

### C 先行研究の成果との照合

その際、課題となるのは適切な研究方法の選択である。

従来型の古辞書研究は、書誌・校勘学による伝統的な文字学の手法に則ることが多く、情報学からのアプローチが少ない。従来の研究方法では、特定の内容（例えば、字音に関する説明の部分など）の抽出が難しく、追調査が困難になることがあった。情報学の知見は、こういった難点を克服する上で大きな役割を果たす。一方で、古辞書研究である以上、第一次資料を蒐集・確認するには、文字学的な手法によるほかはない。よって、従来型の方法論で、研究資料を確保、解読した上で、情報処理学の観点から内容の整理、データの分析を行うべきである。文字学と情報処理学からのアプローチを組み合わせることが重要である。

したがって、本研究では、文字学的な手法と情報処理学的な研究方法の二つの観点から『篆隸万象名義』の研究を進めた。

#### (1) 文字学（書誌・校勘）的アプローチ

- ① 『篆隸万象名義』の書物としての構成特徴の整理
- ② 高山寺本原本調査で、影印本に誤写・誤脱、符号類（転倒符・抹消符・補入記号）等判然としない部分の確認
- ③ 篆隸万象名義近世写本の調査を通して、これまで重視されていない資料の蒐集
- ④ 関連資料群と照合し、本文内容の解読・校訂

## (2) 情報処理学的アプローチ

- ①データベースの設計・作成
- ②文字の包摂・翻刻方針の策定
- ③入力済みのプレーンテキストを研究目的に応じた適合

本研究ではこのように、文字学及び情報処理学の研究方法を総合して、『篆隸万象名義』の本文研究に取り組む。さらに、データベースの構築によって、本文研究を画期的に推進させるのが、本研究のねらいである。

(筆者の所属する研究室では「平安時代漢字字書総合データベース(HDIC)」を構築するプロジェクトを推進している。『篆隸万象名義』データベースは HDIC の一環となすものである。筆者は篆隸万象名義データベースを担当するが、データベースの設計・本文入力などは研究室の共同作業によるものである。データベースの構築及び役割分担などについては後節で詳述する。なお、本論文で示す高山寺本『篆隸万象名義』の図版は高山寺典籍文書総合調査団代表の石塚晴通教授御所蔵の焼き付け写真による。また、画像掲載の許可が得られない箇所は、掲載省略とする。)

## 2 本研究の対象資料

本研究では、『篆隸万象名義』に加え、玉篇系字書の原本『玉篇』および宋本『玉篇』も資料として参照する。玉篇系字書とは池田(2016)で示された解説であり、原本『玉篇』、『篆隸万象名義』、宋本『玉篇』の三書からなるとされる。

池田(2016c)では、『玉篇』について、次のように「系統 (genealogy)」と「体系 (system)」とそれぞれの意味用法を示し、さらに切韻系韻書と比べながら、玉篇系字書を説明している：

原本系『玉篇』と「系」を付けて系統 (genealogy) の意味で使用することが最近は多くなっており、それでもよい。ただし、中国では「系」は体系 (system) の意味で使用するので、『玉篇』系字書のように表現する。顧野王『玉篇』と宋本『玉篇』とは、同じ部首分類の体系を持つと判断されるので、『玉篇』系字書と呼ぶのである。『切韻』系韻書と言った場合にも、陸法言『切韻』の系譜の韻書という意味ではなく、陸法言が立てた韻の分類体系を基本とする韻書という意味であり、『広韻』まで含めて『切韻』系韻書と呼ぶのである。

上記の論文では、『篆隸万象名義』には触れられていないが、上の「同じ部首分類の体系を持つ」という規準に従えば、『篆隸万象名義』も玉篇系字書と呼ぶことができる。逆に言えば、古辞書に限定する場合、玉篇系字書は原本『玉篇』、『篆隸万象名義』、宋本『玉篇』の三書を指すと言える。

以下、本研究で活用する資料についての概要を簡潔に述べる。

平安初期(830以降)に弘法大師空海によって編纂された『篆隸万象名義』は現存する日本最古の字書である。六帖構成をとり、第一帖から第四帖までは空海撰述であるが、第五帖と第六帖は別人の手によるものである。約16,000字の掲出字に対して、字音・字義・字体の記述を収録する。永久二年(1114)に書写された高山寺本が唯一の古写本である。(明治三十二年(1899)に国宝に指定され、現在国立京都博物館に寄託)。他の転写本はこの伝本の系統を引くものである。内容は中国・梁の顧野王の原本『玉篇』から音注や義注を簡略した字書である。原本『玉篇』は早く散逸し、日本では零本しか残っていない。それゆえ、完本である『篆隸万象名義』は原本『玉篇』の元の姿を窺う資料として価値が高い。

原本『玉篇』は中国南北朝時代(543)に成立した典拠や用例を充実させた部首別の漢

字字書であり、後世の字書に大きな影響を及ぼした。原本『玉篇』の字数は、唐・封演の『封氏聞見記』に「梁朝顧野王撰玉篇三十卷、凡一萬六千九百一十七字」とある通り、16,917字である。原本『玉篇』は中国では逸書となり、約八分の一の残巻が日本に存する。原本『玉篇』を受け継ぐものとして今に伝わっているのが、前述の日本側の『篆隸万象名義』と中国側の宋本『玉篇』である。両書の編纂の方針は類似しているが、相違点も少なくない。

宋本『玉篇』は、原本『玉篇』を唐の孫強が高宗の上元元年（674）に修訂・増字したものを、宋の大中祥符六年（1013）勅命により陳彭年等が重修したのである。注文内容は原本『玉篇』にあった長文の訓注を略し、掲出字を増補したものである。約 22,000 字の掲出字を収録する。

顧野王の原本『玉篇』は漢字の訓詁の書物として、奈良平安時代の日本で広く利用され、日本古辞書の主材料ともなった。零本となった原本『玉篇』の内容を知るには、原本『玉篇』の残巻、逸文に加えて、11世紀に簡略化した宋本『玉篇』と『篆隸万象名義』を総合する必要がある。中国語学はもちろんのこと、日本語学においても字音・字訓・字体の成立・変遷を考察する基礎資料として利用されてきた。しかし、『篆隸万象名義』は古写本しか存せず、これには誤写・誤脱が多いのは再三指摘した通りであり、その本来の価値を見出すには、精確な校訂が要求される。

幕末以来、世の中に『篆隸万象名義』写本が多く流布した（近世写本という）。清末に駐日公使の随員として渡日の学者楊守敬によって、その存在と文献の価値を中国に知らしめたものである。それを抄写したものが現在日本国内、中国大陸、台湾に所蔵している。

これまで『篆隸万象名義』は、主に四種の複製本が刊行されてきた。最初の複製本である『崇文叢書』第1輯之27-43（1926）は、国立国会図書館デジタルコレクションに登録されその画像が公開されている。このほかの複製本としては、『篆隸萬象名義』（1966）、『高山寺本古辞書資料第一』（1977）、『弘法大師空海全集』第七巻（1984）に収録された影印テキストがある。崇文叢書のテキストは、海外で再度複製され、中国大陸・台湾では広く使われている。

### 3 本論文の構成

本稿の構成は、次の通りである。

第1章においては、本研究の考察対象とする玉篇系字書（原本『玉篇』・『篆隸万象名義』・宋本『玉篇』）に関する先行研究を概観する。主に文字学的方法によるものと情報処理学的方法によるものとの二方面にわたる研究成果を確認する。

第2章においては、篆隸万象名義データベースの構築、包摂、翻刻方針及び情報処理学的方法を述べる。まず、筆者所属する研究室に推進する HDIC プロジェクトの要略、篆隸万象名義データベースとの関係を概説する。次に篆隸万象名義データベース構築の詳細について論じる。最後に、データベースに整備済みのテキストデータに基づく応用について、情報処理学的方法を述べる。

第3章においては、書誌学的な観点から、まず、高山寺本原本調査と近世写本調査に関する書誌情報を記述する。次に、高山寺本と近世写本とを比較することにより、錯簡の問題を指摘する。さらに近世写本を利用した本文研究を報告する。

第4章においては、成立当初の『篆隸万象名義』、もしくは原本『玉篇』に存在した可能性のある掲出字の全体像を描くために、記述構造の観点から高山寺本を整理し、説文解字、原本『玉篇』残巻、宋本『玉篇』、『新撰字鏡』などを総合することによって、掲出字を隸書掲出字・埋字・脱字との三種のカテゴリーに区分した上で、掲出字数として認定できる範囲を提示する。

第5章においては、字体と字種との区別から『篆隸万象名義』における重出字を考察する。まず先行研究を検討し、その成果と比較しながら重出字の実際を考察し、分類する。さらに原本『玉篇』における重出字についても検討し、翻って『篆隸万象名義』の重出字の特徴を分析する。

第6章においては、篆隸万象名義データベースを利用して、原本『玉篇』残巻に対応する掲出字についての諸家認定の結果を照合し、相違があるものを分類・分析する。そして、データベースにおける掲出字翻刻表現階層の設計を提言する。

第7章においては、平安初期に撰述した仏典音義『大乘理趣六波羅蜜經釈文』における原本『玉篇』の逸文を整理し、その逸文を利用した『篆隸万象名義』の本文校正の実例を分析する。

第8章においては、『篆隸万象名義』を中心にして、古写本の全文テキストの電子化とその公開システムについて、その現状と課題を報告する。

「おわりに」では、全体の議論を整理し、現在まで研究の進捗状況を示し、あわせて残された課題を述べる。

#### 4 用語の定義

本稿で用いる漢字の書体・字体・字形・字種の定義は、石塚（1984）および石塚（2012）により、次の通りとする。

書体：漢字の形に於て存在する社会共通の様式。多くは其の漢字資料の目的により決まる。楷書・草書等。

字体：書体に於て存在する一々の漢字の社会共通の規準。

字形：字体に於て認識する一々の漢字の書写（印字）された形そのもの。

字種：社会通念上同一のものとして認識された、一般的に音訓と意味が共通する漢字字体の総合。

## 第1章 玉篇系字書に関する先行研究

### 1.1 文字学的方法による先行研究

『玉篇』に関する研究は、岡井（1933）から始まるが、その逸文蒐集をさらに進めた研究成果が馬淵（1952）である。貞荊（1958）は『篆隸万象名義』が原本『玉篇』を簡略化したものであることを明確に論証したものである。胡（1989）は、宋本『玉篇』の掲出字の配列を規準に、原本『玉篇』残巻を取り込み、さらに原本『玉篇』の出典にあたる典籍と校勘を行って、原本『玉篇』の逸文も考証したものである。

『篆隸万象名義』掲出字の翻刻について、白藤（1977b）と宮澤（1977）は『高山寺古辞書資料第一』に収録され、影印テキストと照らし合わせ、利用に至便である。白藤（1977b）は影印テキストの掲出字を検出するための索引である。検字が主目的であるため、通行字体たる康熙字典体を用いながら、原本字形を重視する特徴がある。宮澤（1977）は『篆隸万象名義』の骨組みとなる掲出字を解読したうえ、高山寺本の配列形式で一覧した研究成果であり、原本『玉篇』残巻及び逸文、宋本『玉篇』の情報をまとめている。近年、中国側も『篆隸万象名義』への関心が高まり、研究成果としては呂（2007）が挙げられる。その『篆隸万象名義校釋』は中華書局写真版のテキストを基礎とし、『高山寺古辞書資料第一』に収録されたテキストも参考に、『説文解字』、宋本『玉篇』、『干祿字書』などの文献と照合し、校勘を加え、全文を翻刻したものである。なお、上田（1986）は、すべての反切に厳密な校訂を加えており、掲出字の同定にも参考になるところが大きい。

周（1966）と河野（1979）はほぼ同時期に出され、『篆隸万象名義』の反切を利用し、原本『玉篇』の音韻体系を研究する優れた研究成果である。上田（1986）は、上記の二つの研究成果の上に、『玉篇』の反切に残巻、逸文及び『篆隸万象名義』の所在を記して、声類・韻類に分別した著作である。

孔（2000）は、玉篇俗字の類型、変遷に着目し、唐宋字書の俗字と比較研究を行い、玉篇俗字の現象とその形成した源流を総合的に論じ、朱（2004）は、『玉篇』における文字を類型化し、特に合併・新增などの現象を取り上げ、反切用字で六朝時代の常用字の状況を調査している。

大柴（2008・2009a・2011）は、後漢から魏晉まで、魏晉から隋唐までの書体・字体変化の視点から、多くの実例を集め、『篆隸万象名義』の俗字の分析を行い、所用の俗字を共通する文字ごとに250種類に分類した。

以上は現代における伝統的な文献学視点の先行研究をまとめた。それ以前の近代にお

ける日中の書誌学・校勘学の学者も、玉篇系字書について多くの研究がある。後の 3.2 「篆隸万象名義の近世写本」において、ややその詳細を触れていく。

## 1.2 情報処理学的な方法による先行研究

Unicode の普及・定着に伴い、版本資料による『説文解字』・『広韻』等主要な中国辞書の Web 版がオープンアクセスで続々と公開されている。一方で、日本においては奈良時代以来の古写本が数多く伝存するが、体例・難字・誤脱など、写本には避けられない問題の影響で、データ化が遅れている。

『篆隸万象名義』の電子化について、池田氏は一連の論考を発表している。池田（1994・2003b・2011）は篆隸万象名義データベースの詳細について符号化の問題を中心に論じ、掲出字データベース UCS 対応版は 2011 年において公開済みである。近時の池田（2014a）、池田他（2016）は平安時代漢字字書総合データベース（HDIC）プロジェクトの構想と進捗について詳しく解説したものである。その内容を要約すれば次のようになる。

『篆隸万象名義』の電子テキストは、全掲出字を対象とするものが池田（1994）で公開した暫定版データベースがある。篆隸万象名義データベースは、本文研究を主要な目的とするものである。公開した暫定版を通して、『篆隸万象名義』に掲出される 16,000 余字の所在、諸橋大漢和辞典番号、玉篇巻数・部首番号、JIS 区点番号等の情報を得ることができる。

池田（2003b）の調査により、『篆隸万象名義』の全掲出字のうち 46 字のみが今昔文字鏡（ver.3 単漢字 10 万字版）で未登録であり、今昔文字鏡を使えばほとんどの掲出字が処理できるようになったのである。しかしながら、データ処理にはかなり制約があった。

池田（2011）では、この論文発表時点での情報処理環境では、Unicode の CJK 統合漢字は約 7 万の漢字が使用可能であり、『篆隸万象名義』の掲出字について調査したところ、ほぼすべてを扱うことが可能となったとした。

池田（2014a）は『篆隸万象名義』全文テキスト入力 of 完成を機にその概要と課題をまとめ、『新撰字鏡』と『類聚名義抄』に拡大する計画を述べた。

一方、『篆隸万象名義』の解読積文の公刊である呂（2007）が注目を集めたが、紙媒体故に情報処理的な側面において、制約があった。それゆえ、全文データベース化が期待されていた。また、王平（2005）と大柴（2008・2009a・2011）によれば、それぞれ『篆隸万象名義』のデータベース化が進行中の模様であり、Web では未公開である。また社会科学文献電子音像出版社による『篆隸万象名義』と宋本『玉篇』の CD-ROM もあるようであるが、実見していない。

## 第2章 データベースの構築による情報処理学的な研究方法

### 2.1 平安時代漢字字書総合データベース (HDIC)<sup>2</sup>

#### 2.1.1 HDICの要略

筆者の所属する北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座池田研究室では、平安時代漢字字書総合データベース (Integrated Database of Hanzi Dictionaries in Early Japan, 略称 HDIC) を構築するプロジェクトを推進している。HDIC は 7 万字を超える漢字のコード化ができる Unicode を用いて、平安時代を代表する部首分類体字書である『篆隸万象名義』『新撰字鏡』『類聚名義抄』を総合した全文テキストデータベースを整備・構築して、日本古辞書の研究基盤の確立を目指す。これらの漢字字書は、語彙・音韻・漢字字体等の日本語史研究の重要な資料である。

HDIC の対象とする漢字字書は、次の 4 点である。KTB 等は各サブデータベースの略称である。

高山寺本『篆隸万象名義』(京都・高山寺所蔵)、KTB: Kozanjibon Tenrei Bansho meigi

天治本『新撰字鏡』(宮内庁書陵部所蔵)、TSJ: Tenjibon Shisen Jikyo

図書寮本『類聚名義抄』(宮内庁書陵部所蔵)、ZRM: Zushoryobon Ruiju Myogi sho

観智院本『類聚名義抄』(天理図書館所蔵)、KRM: Kanchiinbon Ruiju Myogi sho

これらの漢字字書に見える掲出字と注文とを電子テキスト化し、掲出字のリレーションシップを設定することによって、自在に検索するシステムを構築し、その公開によって学術研究の発展に資することを意図している。

また、このデータベースには、次の中国側の漢字字書・韻書等を含める計画である。

原本『玉篇』残卷、YYP: Yuanben YuPian

原本『玉篇』逸文、YQF: Yuanben Yupian Quoted Fragments in other books

宋本『玉篇』(『大広益会玉篇』)、SYP: Songben YuPian

宋本『広韻』、SGY: Songben GuanYun

『切韻』残卷、QYF: QieYun Fragments

『干祿字書』、GZ: Ganlu Zishu

高麗版『龍龕手鏡』、GLS: Gaoliban Longkan Shoujing

漢字字書の掲出字は、コンピュータで入力処理が可能な文字と、原本画像から一文字ごとに切り出した画像と対象としてデータベース化を進める。発音・意味・字形を説明する

<sup>2</sup> HDIC と KTB の説明は、主に池田他 (2016) による。

注文の部分は、コンピュータで入力処理が可能な文字を入力する。

HDIC プロジェクトの設計者及び総合責任者の池田氏は、日本古辞書の研究について、次の観点を主張している。

日本古辞書の研究では、その土台となった中国字書、特に玉篇系字書である原本『玉篇』、『篆隸万象名義』、宋本『玉篇』との対照作業が不可欠となっている。これまでの古辞書データベース化では、玉篇系字書のデータベース化を疎かにしていた。HDIC の全体は玉篇系字書データベースを基礎とした計画である。

HDIC の主に対象とした日本・中国の漢字字書、及びそのリレーションシップの設定を次の図 2-1 で示す。黒い枠で示す三つの字書は玉篇系字書である。

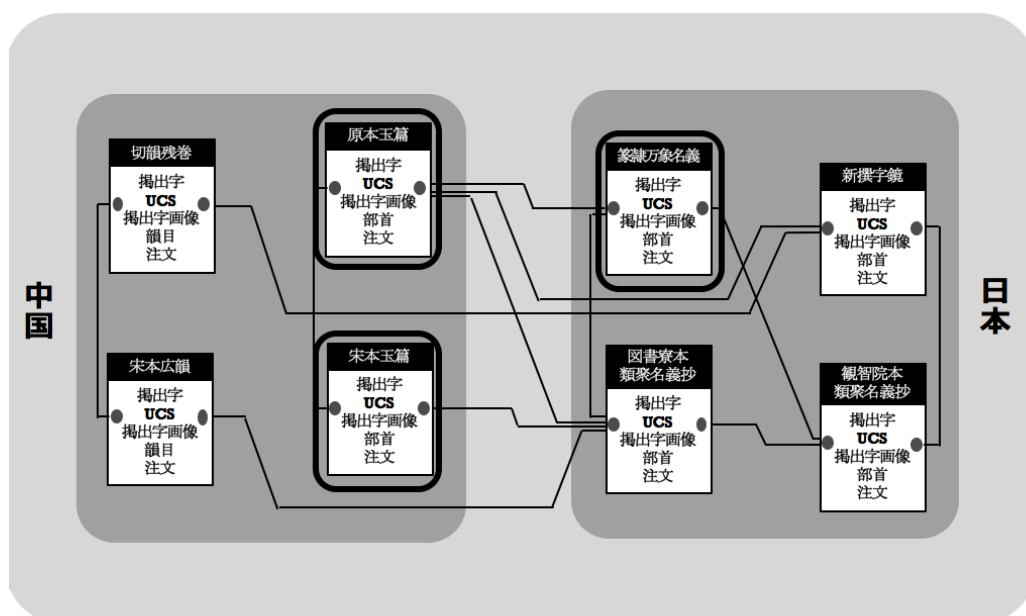


図 2-1 HDIC の主に対象とする漢字字書及びそのリレーションシップの設定

### 2.1.2 リレーションシップの設定

まず、中国側の漢字字書である原本『玉篇』残巻及び宋本『玉篇』をデータベース化し、宋本『広韻』は「漢字データベースプロジェクト」による公開データを取り込む。次にそれらと日本側の漢字字書とのリレーションシップを設定する。その上で、両者を照合しながら本文解読の作業を進める。リレーションシップ設定のキーは、ソフトウェアの Unicode 対応の現状を配慮して掲出字の漢字を避け、掲出字の漢字を Unicode の 16 進文字コードに変換したものをを用いた。掲出字のリレーションシップを適切に設定すると、複数の字書の情報を同時に呼び出して、参照・編集することが可能になる。

### 2.1.3 入力できない文字の処理

#### 2.1.3.1 Unicode における漢字の処理

約七万字の漢字が現在のコンピュータで使用可能であり、構築中の平安時代漢字字書総合データベースで入力できない漢字は僅少である。これで符号化できない字は IDS (Ideographic Description Sequence、漢字構成記述文字列)で表現する。IDS は、Unicode Standard 3.0 以降に採用され、漢字構成記述文字を用いて漢字の部品とその配列を指定するものである。CJK 統合漢字と IDS について、Unicode Standard 7.0 をもとに説明する。Lunde (2008) は規格の概要や背景を理解するのに参考になる。

#### 2.1.3.2 CJK 統合漢字

Unicode によって実装可能な漢字 74,605 字の内訳は、基本多言語面の CJK 統合漢字が 20,941 字、CJK 統合漢字拡張 A が 6,582 字、追加漢字面の CJK 統合漢字拡張 B が 42,711 字、拡張 C が 4,149 字、拡張 D が 222 字である。

#### 2.1.3.3 IDS

漢字構成記述アルゴリズムの基礎は次の 2 点にある。まず、ほぼすべての CJK 漢字はさらに小さな漢字部品に分解することができるということ。次に、Unicode では大多数の漢字符号化はすでに実現されているということ。これらの符号化された漢字と IDC (Ideographic Description Character、漢字構成記述文字)の組合せで、別の漢字を記述する。その配列は IDS という。Unicode では 12 個の漢字構成記述文字 IDC(☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐☐、U+2FF0~U+2FFB)を提供し、これらの IDC によって漢字部品の位置関係を示すことができる。IDS は難字の多い漢字文献のデータ処理に有用と評価できる。IDS は漢字を表現する方法の提示に過ぎない。よって、漢字を表現する IDS は確定しない。例えば、「語」の IDS による記述は、☐☐言吾と☐☐言☐☐五口とが可能である。複数の IDS があり得る場合は、Unicode 規格書では最短の文字列を採用することが推奨される。HDIC データベースでは、最短の文字列にこだわらず、運用上、適切と判断される IDS 文字列を選択している。運用上の適切さは、漢字部品の検索のしやすさと難字の視認性の高さから総合的に判断する。

## 2.2 篆隸万象名義データベース (KTB)

この 2.2 では篆隸万象名義データベース構築の成り立ちを紹介する。

池田氏の研究グループは、1990 年代から古辞書のデータベース化を目指して、Unicode

等の漢字情報処理に関する研究と、日本古辞書が土台として中国古辞書の原本『玉篇』の節略本である『篆隸万象名義』のデータベース化に関する研究に取り組み、高山寺本『篆隸万象名義』全文テキスト入力を完成させた。

筆者は主としてHDICの中の篆隸万象名義データベース(Kosanjibon Tenrei Bansho Meigi, 略称 KTB)を担当している。関連して、玉篇系字書全般のデータ化作業にも関与している。また、部分的に『新撰字鏡』、『類聚名義抄』の入力もかかわった。データベースの設計は主に池田氏によるが、進行中適宜調整することはあった。

修士課程では『篆隸万象名義』の本文データベースに注文を追加する作業に携わっており、研究室の共同作業として、原本『玉篇』残巻と対応する部分の注文を入力した。入力済のデータに基づき、修士論文では、主に次の三つの方面から分析を行った。

- (1) 本文データベース化における翻刻方針や UCS によって『篆隸万象名義』の文字コード化などの情報処理の問題を整理し、本文入力方法を策定した。
- (2) 漢字字体研究史の観点からデータベースを利用して、『篆隸万象名義』、原本『玉篇』残巻諸本の字体差を考察した。漢字字体から『篆隸万象名義』は初唐標準字体(古い字体規範)を基本とするが、原本『玉篇』諸本には一部に開成標準(新しい字体規範)を用いるテキストがあることを指摘した。
- (3) 『篆隸万象名義』を原本『玉篇』と宋本『玉篇』と照合し、帖、巻、部首レベルの対照表を作成し、三者の帖、巻、部首レベルの対応関係を明らかにした。

博士後期課程でも引き続き『篆隸万象名義』の注文を追加する作業にあたっている。研究室のプロジェクトとしては、全文のテキスト化し終えた。共同作業として、筆者はその三分の一程度の分量について入力した。『篆隸万象名義』の全文のテキストを2016年9月に公開した。つぎ、原本『玉篇』残巻と対応する部分の本文データベース化を中心に、篆隸万象名義本文データベースの構築を解説する。

## 2.3 篆隸万象名義と原本玉篇残巻との対応

### 2.3.1 原本玉篇残巻

原本『玉篇』は中国ではすでに散逸したが、日本では巻8、巻9、巻18、巻19、巻22、巻24、巻27の7巻の残巻が存する。『篆隸万象名義』の編集方針を考察するため、原本『玉篇』残巻にある部首を対象としてまず本文データベースの整備をはじめた。原本『玉篇』残巻の7巻は、書写年代や底本の相違から、それぞれに異なる性格を有する。上田(1970)は原本『玉篇』残巻の反切用字の特色から、各巻の性格を述べている(詳細後述 p.31)。

これらの残巻は、首尾完存、首尾欠、あるいは中間部が欠損するなど現存状況が異な

る。このため、残された各部首の収字状態も異なっている。例えば、「心部」の場合、『篆隸万象名義』では、450字の掲出字があるが、原本『玉篇』は巻8の断片17行のみであり、次に翻刻で示すものしか残っていない。全存する字は4字であり、欠損する字は3字である。

(悻) (前欠) 与怨憾同為忿恨之恨也。

𢇛 眉隕反。『説文』、古文、閔字也。閔、病也。存門部。

𢇛 古顔反。『説文』、古文、姦字也。姦、私也、邪也、為也、賊、在外也。在女部。

悻 公翻反。『字書』、亦諱字。諱、更也、變也。飾也、謹也、戒也。在言部。

𢇛 所革反。『周易』𢇛々終吉。王弼曰處多懼之地故曰𢇛々也。公羊傳𢇛而再拜。何休曰𢇛、驚兒也。『説文』、亦訃字。野王案訃、告也、譖也。又音蘇故反。在言部。

悻 仇營反。『尚書』、無害悻獨、孔安国曰、悻單也、謂無兄弟也、無子曰獨。『周礼』、凡遠近悻獨老幼之欲有復於上者、鄭玄曰、無兄弟曰悻。字書亦營字、營々、無所依也。在卂部。或為孃字。(以下欠)

𢇛 力高反。『説文』、古文勞(以下欠)

原本『玉篇』の残存する7巻、63部首について、その存欠の状況をまとめれば、次の通りである。

巻8	心部(首尾欠)(1部首)
巻9	言部(首欠)、詔部、曰部、乃部、丂部、可部、兮部、号部(首欠)、丂部、云部、音部、告部、凵部、𠂔部、品部、臬部、禽部、册部、𠂔部、只部、肉部、欠部(中欠)、食部、甘部(中欠損)、旨部(中欠)、次部(中尾欠損)、牽部(中尾欠損)(27部首)
巻18	放部、丌部、左部、工部(尾欠)、卜部(首欠)、兆部、用部、爻部、𠂔部、車部(中欠)、舟部(中欠)、方部(12部首)
巻19	水部(首尾欠)(1部首)
巻22	山部、屾部、嵬部、𡵓部、广部(ほぼ全存、虫喰欠損)、厂部、高部、危部、石部(中欠)、磬部、自部、阜部、𠂔部、𠂔部(14部首)
巻24	魚部(首尾欠)(1部首)
巻27	糸部(首欠)、系部、素部、絲部、𦉳部、率部、索部(7部首)

### 2.3.2 篆隸万象名義と原本玉篇との比較

次に、『篆隸万象名義』、原本『玉篇』残巻、宋本『玉篇』の対応部首の字数を表1に示す<sup>3</sup>。

(原本『玉篇』残巻に欠損のある字を統計から除く)

<sup>3</sup> 本文の点検・校正により数値は変動すると見込まれるので、一応の目安である。

表 2-1 原本『玉篇』残巻・『篆隸万象名義』・『宋本『玉篇』』対応部分の字数

	掲出字数 (A)	注文字数 (B)	平均注文 字数 (B/A)
原本玉篇	2,049	80,614	39.3
篆隸万象名義	3,279	21,928	6.7
宋本玉篇	4,864	35,079	7.2

表 2-1 の通り、『篆隸万象名義』の掲出字 3,279 字（延べ字数）の注文の字数は全 21,928 字である。平均一つの掲出字に約 7 字の注文がある。実際の注文は最少 2 字で、最も多いのは 31 字である。注文平均約 7 字の内訳は、反切（音注）3 文字で、意味注記（義注）4 字が基本となる。『篆隸万象名義』は、反切が一つ、意味注記に単字注の二つ付く注文様式が最も一般的であると推測できる。一方、原本『玉篇』残巻には、集計対象掲出字 2,049 字に、注文字数 80,614 字を存する。一つの掲出字に平均約 40 字の注文がある。これらのデータにより、『篆隸万象名義』が顧野王の原本『玉篇』の長文の注文を 2 割程度にまで簡略化した字書であるという性格が認定できる。

下記の例でも簡略化の程度が確認できる。（対応する箇所の下線を施した）

託 a 他各反、b 寄也、c 依也、d 累也。（『篆隸万象名義』3 帖・11 丁・裏）注文 9 字  
 託 a 他各反、『公羊傳』、託不得已、何休曰因託以也、『論語』可以託六尺之孤，野王案『方言』託 b 寄也，凡寄爲託，『廣雅』託 c 依也，託 d 累也，或爲佗字在人部。  
 （原本『玉篇』巻 9）注文 54 字

託 a 他各切、b 寄也、c 依憑也。（宋本『玉篇』上篇・83 丁・裏）注文 8 字

## 2.4 本文データベース化における情報処理上の問題

### 2.4.1 翻刻について

#### 2.4.1.1 包摂

包摂（unification）とは、複数の字体を区別せず一つの区点位置を与えることをいう<sup>4</sup>。

この概念を翻刻するときの文字同定に適用し、同じ抽象化の字体について、具象化の字形は違っても、同じ字と認める字体の範囲が存在する。一つの漢字が視覚的に実現する際、特に手書き文献において、それぞれの実現形は、筆画や角度に揺れが現れやすい。しかしながら、コンピュータで情報処理をする上で、そのような揺れは整理せざるを得ない。そのため、写本の字形から離れた字形をコンピュータで扱うことになる。そのようなときの規準として包摂規準が必要となる。例えば、「しんにょう」は 1 点「丿」に書かれても、2 点「丿」に書かれても、文字の同定上区別しない。このようなものを文字同定の「包摂

<sup>4</sup> JIS X 0208 : 1997 (p.4) 包摂規準を用いている。

規準」という。

漢字の書写は、筆画の角度や長さなどの手書きの影響で、個人差が出るものである。古辞書の写本も例外でなく、字形の揺れが生じる。そして漢字を処理し、符号化するときに、手書きの揺れの要素をなるべく排除する。故に、古典文献を翻刻する際に、文字コードと写本の字形のずれが生じる。このずれを情報処理の障りにならないように、上記の「包摂規準」を運用する必要がある。

豊島（1999）は文字計量研究における「明示的で操作可能な文字の同定規準」の重要性を強調し、文字調査では「暗黙の文字包摂を排除出来ない」と指摘した。さらに、池田（2003a）は「明示的で操作可能な文字の同定規準」について、「字形・字体を異にしても、同じ文字（字種）と認める文字の一覧表を作成し、それによって文字同定を行うものである」とし、「暗黙の文字包摂」に関して、「文字調査者が漢字の常識を働かせて、異なる字形・字体の文字を同じ文字として処理してしまうことである」と定義する。

大柴（2011）は、『篆隸万象名義』の俗字の分析を行い、所用の俗字を共通する文字ごとに250種類に分類している。この研究成果は『篆隸万象名義』文字同定の一種の明示的で操作可能な規準となり、可能な限り暗黙の文字包摂を排除する有力な手段としても利用できるものである。

#### 2.4.1.2 翻刻の方針

古写本を電子テキスト化するときに、異体字の処理は避けられない問題である。例えば、「於」と「矜」、「因」と「囧」のような通行字体と古い字体は、両方ともUnicodeによって区別できる。翻刻方針により、どちらかの字体で文字コード化することとなる。古い字形情報を保つ方針だと、古写本に近い字体「矜」・「囧」で表現すべきであるが、古典文献を解釈した結果を広く提供する方針では通行字体「於」・「因」に改める方がよい。

また、データ検索を考慮すれば、異体字の翻刻には一貫した方法をとることが求められる。実際の古写本をデータベース化の作業を進めながら、上記の翻刻方針の問題の深刻性を感じる。古典文献を如何に分かりやすく紹介できるかを特に考慮して、古写本に忠実翻刻する方針（古い字形情報を保つ観点）より現行字体に直す方針（古典文献を解釈する角度）を採ることとした。

掲出字の場合は字体を示す役割を担うため、注文とは異なり、字形が大きく異なる場合、現行字体と写本に近い字体の二通りで対応する必要もあるが、これは当面の例外的処理としておく。

通行字体を基本とする翻刻と、古写本に近い字体を基本とする翻刻の二つの方法があ

る。検索の便を考慮して、当面は前者とするが、将来後者を併用することも視野に入れている。

## 2.4.2 Unicode における漢字の扱い

### 2.4.2.1 CJK 統合漢字

古辞書はその時代の漢字体系を示す書物であり、現代の視点から見ると常用性の低い漢字の比率が高く、翻刻や文字コード化の作業にさまざまな難点をもたらす。しかしながら、近年 Unicode の拡張により、扱える漢字が数的に増加し、古典文献の文字コード化についてもより対応しやすくなった。

Unicode 6.2 では、漢字を扱う文字のブロックは基本多言語面<sup>5</sup>と追加漢字面<sup>6</sup>に配置される。詳細は次の通りである。

#### CJK 統合漢字

##### ○基本多言語面

CJK 統合漢字	CJK Unified Ideographs	U+4E00～U+9FFF	20,941 字
CJK 統合漢字拡張 A	CJK Unified Ideographs Extension A	U+3400～U+4DBF	6,582 字

##### ○追加漢字面

CJK 統合漢字拡張 B	CJK Unified Ideographs Extension B	U+20000～U+2A6DF	42,711 字
CJK 統合漢字拡張 C	CJK Unified Ideographs Extension C	U+2A700～U+2B73F	4,149 字
CJK 統合漢字拡張 D	CJK Unified Ideographs Extension D	U+2B740～U+2B81F	222 字

上記を合わせると 74,605 個の漢字が利用できる。後から追加されたものほど使用頻度は低い。一方、Unicode では次のように符号化されていない漢字を表現する手段が用意されている。

### 2.4.2.2 IDS 漢字構成記述文字列

Unicode 6.2 では次の 12 個の漢字構成記述文字 IDC (Ideographic Description Character) が定義されている。

IDC	内容	Unicode 番号	IDC	内容	Unicode 番号
☐	左→右	U+2FF0	☐	下→囲む	U+2FF6
☐	上→下	U+2FF1	☐	左→囲む	U+2FF7
☐	左→中央→右	U+2FF2	☐	左上→囲む	U+2FF8
☐	上→中央→下	U+2FF3	☐	右上→囲む	U+2FF9
☐	四方→囲む	U+2FF4	☐	左下→囲む	U+2FFA

<sup>5</sup> Basic Multilingual Plane、BMP、Unicode の第 0 面。最初の 65536 の符号位置である 0000<sub>16</sub>～FFFF<sub>16</sub> からなる。

<sup>6</sup> Supplementary Ideographic Plane、SIP、基本多言語面に入りきらなかった漢字を収録する補足面の一つ。補助漢字面とも呼ばれる。

㇀ 上→囲む U+2FF5 ㇁ 重ねる U+2FFB

漢字構成記述文字は、任意の漢字の構成要素を表す複数の漢字に使用され、漢字を構成する各部分の要素の位置関係を示す。この方法により、符号化されていない漢字の構造を示すことが可能になる。IDS を使って漢字を表現した例について、『篆隸万象名義』における実例は次の通りである。

遂 → ㇀ 冫 家 (2 帖 83 丁表)      侑 → ㇀ 亻 ㇀ 左 月 (2 帖 86 丁表)      藁 → ㇀ 艹 辟 米 (3 帖 33 丁表)

これらの IDC「漢字構成記述文字」を利用し、漢字の「部品」の合成により符号化されていない漢字を表現する手段が IDS 方式であり、そのコード列は IDS「漢字構成記述文字列」(Ideographic Description Sequence) という。IDS で漢字を表現する場合、その漢字の構造を考慮しなければならない。一般的な規則としては、形声構造の形の旁と音の旁を分けて記述すべきである。記述の順序は左から右へ、上から下にするのがよく、文字列は短いのが好ましい。古典文献の場合、符号化できない漢字が出現する比率が比較的高く、IDS 方式によって、符号化されていない漢字の図形的な構造を示すことが可能になる。

#### 2.4.2.3 翻刻方針と包摂の具体例

Unicode で扱える漢字数は膨大な数にのぼり、古典文献を翻刻する際に、利用できる字体は豊富である。現在、日本では新字体と旧字体(康熙字典体)があり、中国では簡体字と新体字が共存し、韓国や台湾などもそれぞれ違う字体が使われている。これらの諸国・地域の文字集合は Unicode の CJK 統合漢字に統合され、多くの漢字の種類が利用できる。ただ、すでに述べたように、古写本の字体の細部まで精確忠実に表現するのは、無理がある。翻刻方針として、古写本の漢字を符号化する規準を立てないと、混乱をもたらす。そこで、まず康熙字典体を規準とすることを翻刻方針として、入力作業を行う。次に、実例を挙げ、写本の字形と符号化された文字のずれについて検討する。実例は、写本字形\_「符号化字形」/ 翻刻用例(該当字に下線)の順に示す。

- ① 写本の字形と康熙字典体と極く僅かな違いがある場合、Unicode の包摂の範囲とみなして、康熙字典体で入力する。

詰 — 「詰」/ 詰 去質反。治也、謹也、責也、無也。(3 帖・16 丁・裏)

- ② 写本の字形が康熙字典体と明らかに異なり、ほかの新字体などでも写本の字形に近い字体がない場合、康熙字典体の字体に改める。

對—「對」/潰 胡對反。乱也、漏也、遂也。(5帖・91丁・表)

- ③ 写本の字形が簡略字体（日本の新字体や中国の現行簡体字など）に近い場合、これらの簡略字体で対応する。

亂—「乱」/潰 胡對反。亂也、漏也、遂也。(5帖・91丁・表)

- ④ 写本の字形と康熙字典体の漢字の構成要素が一致するが、構成の位置が違う場合、康熙字典体の字体で翻刻する。

蘓—「蘇」/壘 蘇庭反、辰也。(3帖・26丁・裏)

- ⑤ 符号化できない漢字の場合、IDS方式で表現する。

滯—「滯」/滯 滯台丰 / 滯 滯台丰 子内反、繪也。(6帖・143丁・裏)

現在のデータベースでは、この方針を取るが、それ以前は入力者が複数であり原本通りの字体を表現しようとした部分もある<sup>7</sup>。

### 2.4.3 篆隸万象名義データベース化における文字コード化の処理状況

#### 2.4.3.1 篆隸万象名義・原本玉篇・宋本玉篇の項目の構造

Unicodeで『篆隸万象名義』を文字コード化し、項目構造の各部分のコード化された状況を確認したい。そのため、まず、符号化対象の『篆隸万象名義』と対照する原本『玉篇』、宋本『玉篇』の項目の構造を確認する。

漢字の三要素は、形、音、義であり、字書はこれらの三要素について説明を行う。字書の項目の各構成部分は形、音、義によって分類すると、次のようになる。

形…掲出字・字体注記

音…反切・直音注

義…意味注記

掲出字、反切、意味注記は、それぞれ形、音、義を解釈する役割を担う。字体注記は形、直音注は音の説明を補足する。

原本『玉篇』の構造は、まず反切を示し、次いで多くの儒家経典や訓詁書を網羅引用するのが基本である。さらに必要に応じて、著者顧野王の案語、異体注記、部首の違う異体字を参照する注記を加える。「託」を例にその項目の構造と内容を示せば、次の通り

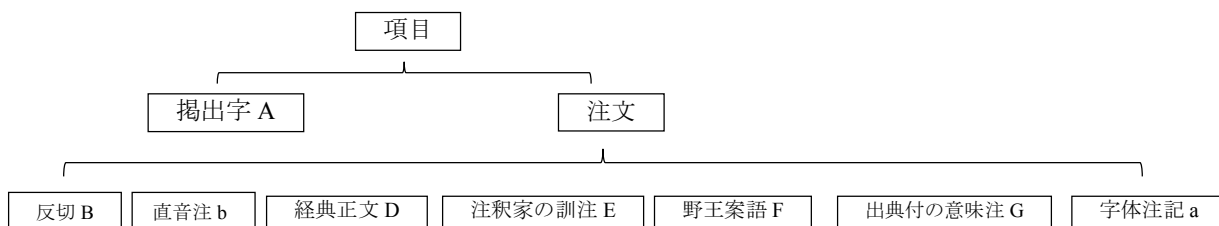
<sup>7</sup> そのため、「於」と「於」、 「因」と「因」のような同字種異体字について、原文に合わせて、通行字体「於」・「因」と「於」・「因」とを混在させて翻刻してきた。以前の方針の問題点としては、検索の用として一字種のことを二度検索しなければならない効率上の問題が挙げられる。

である。

### ○原本『玉篇』の項目の構造

A 託 B 他各反。D『公羊傳』託不得已、E 何休曰因託以也。D『論語』可以託六尺之孤。F 野王案『方言』託寄也、凡寄爲託。G『廣雅』託依也、託累也、a 或爲佗字在人部。(原本『玉篇』卷9)

構造：



内容：

形 A 掲出字 a 字体注記

音 B 反切 b 直音注

義 D 經典正文 E 注釈家の訓注 F 野王案語 G 出典付の意味注

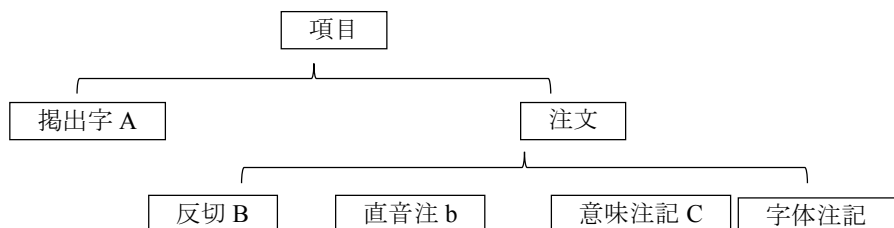
原本『玉篇』のこのような特徴を有するため、項目構造も『篆隸万象名義』と宋本『玉篇』より複雑である。

『篆隸万象名義』と宋本『玉篇』は、いずれも、原本『玉篇』の注文を縮約した字書であり、それぞれ「恕」、「言」を例にその項目の構造と内容を示す。

### ○『篆隸万象名義』の項目構造

A 恕 B 古多反。C 法也、範也。a 柯字。(『篆隸万象名義』3帖5丁表)

構造：



内容：

形 A 掲出字 a 字体注記

音 B 反切 b 直音注

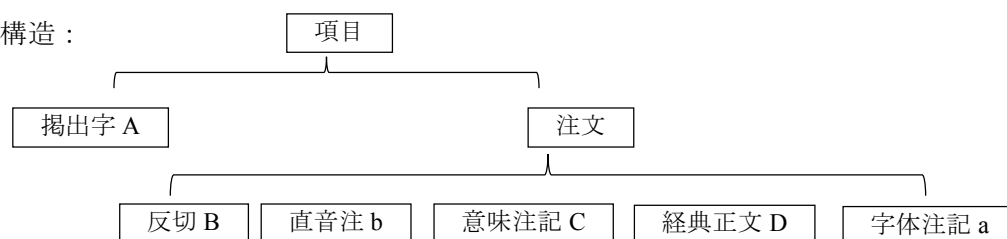
義 C 意味注記

## ○宋本『玉篇』の項目の構造

A 言 B 魚鞞切。C 言辭也、我也、問也。D 『説文』云直言曰言、論難曰語。

(宋本『玉篇』上篇 82 丁裏)

構造：



内容：

形 A 掲出字 a 字体注記

音 B 反切 b 直音注

義 D 經典正文 C 意味注記

意味注記の主体は両書とも単字注によるが、『篆隸万象名義』の方が網羅的で、単字注の数が多。一方、原本『玉篇』に反切が二つか三つある場合、『篆隸万象名義』は一つしか採らないことが多いが、宋本『玉篇』は全部を採ることが多い。

『篆隸万象名義』の原本『玉篇』を簡略化した様相を見ると、形、音、義それぞれの抄出のしかたは大略次のようになる。

形 字体注記の部分には異体字だけを挙げる。「古文」「同上」のような字体注記だけのものもある。部首の違う異体字を参照する注記は省略する。

音 原本『玉篇』で反切が二つ以上の場合、原則一つしか採らない。

義 意味注記のうち、經典の正文、注釈家の名前は省略し、訓注と野王案語では単字注を網羅的に載せる。

### 2.4.3.2 各構成部分の Unicode による符号化率

『篆隸万象名義』の各構成部分は担う機能が異なり、それらの用字の特徴も異なることから、符号化の状況が異なると推測される、この点を確認するために、次に、『篆隸万象名義』の原本『玉篇』残巻に対応する部分の各構成部分の Unicode による符号化率を掲出字、注文、反切、意味注記、字体注記に分けて表 2-2 から表 2-6 に示す。

文字コード	字数	CJK 統合漢字	拡張 A	拡張 B	IDS
延べ字数	3,279	2,406 (73.4%)	373 (11.4%)	495 (15.1%)	5 (0.2%)
異なり字数	3,256	2,391 (73.4%)	372 (11.4%)	493 (15.1%)	5 (0.2%)

表 2-2 掲出字の符号化率

文字コード	字数	CJK 統合漢字	拡張 A	拡張 B	IDS
延べ字数	21,928	21,644 (98.6%)	90 (0.4%)	123 (0.6%)	71 (0.3%)
異なり字数	3,932	3,674 (93.4%)	80 (2.0%)	112 (2.8%)	66 (1.7%)

表 2-3 注文の符号化率

文字コード	字数	CJK 統合漢字	拡張 A	拡張 B	IDS
延べ字数	9,430	9,376 (99.4%)	11 (0.1%)	28 (0.2%)	15 (0.2%)
異なり字数	1,413	1,365 (96.6%)	8 (0.6%)	27 (1.9%)	13 (0.9%)

表 2-4 反切の符号化率

文字コード	字数	CJK 統合漢字	拡張 A	拡張 B	IDS
延べ字数	11,596	11,409 (98.4%)	66 (0.6%)	76 (0.6%)	45 (0.4%)
異なり字数	2,221	2,054 (92.5%)	59 (2.7%)	66 (3.0%)	42 (1.9%)

表 2-5 意味注記の符号化率

文字コード	字数	CJK 統合漢字	拡張 A	拡張 B	IDS
延べ字数	922	879 (95.2%)	13 (1.9%)	19 (2.8%)	11 (1.6%)
異なり字数	298	255 (85.6%)	13 (4.8%)	19 (7.0%)	11 (4.1%)

表 2-6 字体注記の符号化率

以上の『篆隸万象名義』の項目の各構成部分を、CJK 統合漢字で処理できる割合の小さいものから大きいものの順にならべると次の通りである<sup>8</sup>。

掲出字 (73.4%) < 字体注記 (85.6%) < 意味注記 (92.5%) < 反切 (96.6%) < 直音注 (100%)

掲出字の延べ字数と異なり字数からは、重複字が少ないことが窺える。これは、掲出字は字書の骨組みであり、説明対象であるため、ユニークな存在である性格を反映する。また、注文部分の符号化率と比較すると、掲出字は CJK 統合漢字で処理できる割合が低く、拡張 A と拡張 B が高い。掲出字は字形を示す役割を担うので、認識度の低い難字や異体字が多いことが反映されたものである。

注文の、CJK 統合漢字、拡張 A、拡張 B、IDS 方式で処理できる割合について、掲出字データと見比べると、違う傾向が見える。また、延べ字数は 21,928 字があるに対し、異なり字数は 3,918 字であり、重複字が多いことが分かる。字書の注文部分は比較的理

<sup>8</sup> また字音の説明に直音注を含む項目は、今回の調査範囲で 11 項目があり、直音注に使われる文字コードはすべて CJK 統合漢字に含まれるものだった。

解しやすい文字を利用して掲出字を解釈するという性格が窺える。

IDS 方式によるものは、いずれの場合も僅少である。康熙字典体を基本とする翻刻方針によったため、僅少となったのであり、古写本の字形に忠実に翻刻しようとするれば、この数値は大きく変わると考えられる。

## 2.5 本文データベース化から見た文字情報学的な研究方法

古辞書のデータベース化は、文字情報学的な文献研究の基礎を形作る。池田（2016c）は、近年の国語学・文献研究分野における主要なデータベース、検索サイトに触れながら、XML 化データ・検索・古辞書収録字の範囲や文献における掲載語彙の使用など、新たな研究の視点・方法について論じている。HDIC については、次のように指摘されている。

HDIC データベース構築にあたっては、このデータベースを利用して、これまでの研究の成果を確認すること、さらにそれにとどまらず、新たな研究の視点や方法、思いがけない研究のアイデアを生み出すことが期待される。

HDIC の一環をなす篆隸万象名義データベース KTB は、全文テキスト化が完了した。

すでに入力済みのプレーンテキストを、いかに工夫して利用するかが喫緊の課題である。研究目的に応じて、プレーンテキストの加工・運用の方法も変わってくる。例えば、具体的な運用方法としては、次の三つがあげられる。このうち、(1) と (2) は実際に本研究で試みたアプローチである。(図 2-2)。

- (1) 単漢字レベルの検索 【2.5.1】
- (2) 漢字部品レベルの検索（単漢字の下位）【2.5.2】
- (3) 文字列レベルの検索（単漢字の上位）

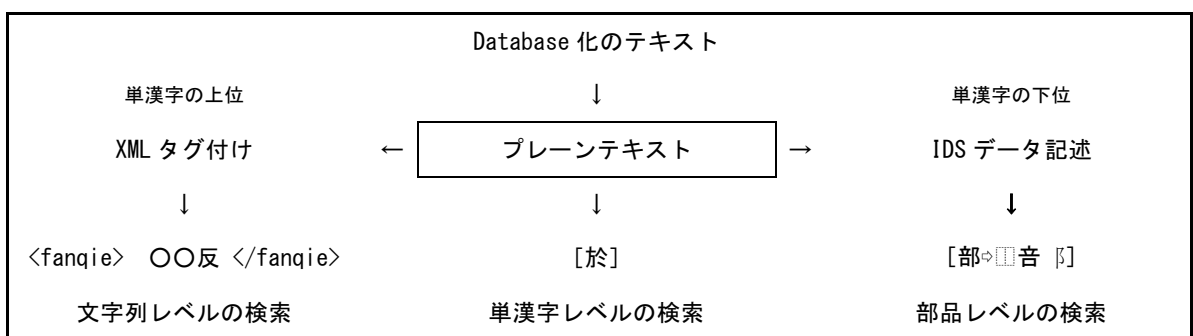


図 2-2 データベース化のテキストを利用する検索

- (1) について、文献の中の同一字種の使用字体について考察を行い、『篆隸万象名義』と原本『玉篇』諸本の字体差を観察した。
- (2) について、IDS データで漢字を記述することによって漢字の部品レベルの検索を実現した。例えば：[部→音] CHISE の IDS データを取り込んで、HDIC に収録さ

れた古辞書掲出字の原本画像・翻刻テキストを利用することにより、部品レベルで宋本『玉篇』における漢字字体のバリエーションを考察した。

- (3) について、XML 言語でプレーンテキストをマックアップ（タグ付け）することにより、文字列レベルの検索が実現するだろう。例えば：`<fanqie>〇〇反</fanqie>`。このような形式でタグ付けを行うことにより、特定の内容（字音・字義を説明する部分など）の検索や抽出ができるようになる。この方法による分析は今後の課題とし、この論文では具体的に展開しないことにする。

## 2.5.1 篆隸万象名義と原本玉篇の漢字字体史研究へのアプローチ

### 2.5.1.1 HNG<sup>9</sup>を利用した篆隸万象名義の字体研究

字体に関する研究は通時的な視点による研究と共時的な視点による研究の二つがある。通時的な研究は、各時代・各地域の標準的な文献の中の相違を明らかにしようとする。それに対して、共時的な視点からの研究は、同時代の文献の字体を見比べることになる。一つの文献の同一字種を検討すると、その文献の字体の体系的な特徴を把握できる。古典文献をデータベース化すると、大量のデータの集約や検索などの作業ができるため、同じ文献の中の同一字種の使用字体を把握しやすくなり、字体研究に進展をもたらすものとなる。

石塚字体変遷モデルに基づき、齋木・池田（2011）は「開成標準」と「初唐標準」が一致しない 60 字種を指摘した。本章では、その中の 12 字種を取り上げ、『篆隸万象名義』（原本『玉篇』残巻との対応部分）、原本『玉篇』残巻諸本での使用実態の調査を試みる。

調査対象は「事・流・来・定・所・礼・悪・土・説・能・於・為」の 12 字種とする。篆隸万象名義本文データベースで所在情報を確定したうえで、そして高山寺本の画像で確認する。12 字種について、開成標準と初唐標準のそれぞれの画像を対照して、調査した結果は次の通りである。字種、「開成標準」－「初唐標準」の順に示す。

---

<sup>9</sup> 漢字字体規範データベース（HNG）は、漢字の字体には時代・地域（国）による標準が存し、その標準は時代・地域（国）により変遷することを示すものである。このデータベースは、漢字字体の変遷について次のような考え方によっている。中国では、初唐期（618-712）に、異体字が強く意識されるようになり、「正俗通訛」の規準が生まれ、「初唐標準」と呼ぶことのできる標準字体が形成される。「開成標準」は開成石経（837）において示された字体を指し、宋版において実践され、普及していく。一方、日本では「初唐標準」を受容、そして定着する。宋版の影響は部分的であり、近世初期以降の版本から「開成標準」の影響が大きくなる。この漢字字体変遷に関する見解は「石塚字体変遷モデル」と呼ばれる。

- ・事 「事」 - 「事」    ・所 「所」 - 「𠂔」    ・説 「説」 - 「説」
- ・流 「流」 - 「流」    ・礼 「禮」 - 「礼」    ・能 「能」 - 「𠂔」
- ・来 「來」 - 「來」    ・惡 「惡」 - 「惡」    ・於 「於」 - 「於」
- ・定 「定」 - 「定」    ・土 「土」 - 「土」    ・為 「爲」 - 「為」

12 字種について『篆隸万象名義』と対照した結果をまとめれば表 2-7 となる。例えば、「事」は第 2 帖に 2 例あり、その字体は A 初唐標準であることを示す。表 2-7 から『篆隸万象名義』はすべて初唐標準であることが分かる。

万象名義	事		流		来		定		所		礼		惡		土		説		能		於		為	
第 2 帖	2	A	1	A	2	A	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	20	A	1	A
第 3 帖	2	A	1	A	6	A	0	-	11	A	2	A	4	A	1	A	3	A	2	A	54	A	9	A
第 5 帖	2	A	39	A	4	A	5	A	19	A	8	A	12	A	3	A	0	-	1	A	34	A	10	A
第 6 帖	6	A	2	A	3	A	1	A	19	A	3	A	3	A	6	A	0	-	1	A	50	A	10	A

表 2-7 『篆隸万象名義』の字体調査

### 2.5.1.2 HNG を利用した原本玉篇残巻諸本の字体研究

次に、同じ手順で原本『玉篇』残巻の字体の状況を確認する。詳細は表 2-8 に示すとおりである。A は初唐標準、B は開成標準を示す。

原玉	事		流		来		定		所		礼		惡		土		説		能		於		為	
巻 8	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	1	A	0	-	0	-	4	A	0	-	1	A	3	A
巻 9	10	A	9	A	11	A	5	A	29	A	116	A	22	A	5	A	74	A	18	A	74	A	105	A
巻 18	19	A	6	A	3	A	3	A	20	A	27	A	1	A	2	A	9	A	7	A	26	A	43	A
巻 19	14	A	13	A	1	A	2	A	15	A	37	A	0	-	4	A	4	A	6	A	19	A	39	A
巻 22	14	A	4	A	7	A	7	A	54	A	71	A	4	A	52	A	74	A	7	A2 B5	58	A	20	A
巻 24	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	0	-	6	A	0	-	2	A	0	-
巻 27	28	A	5	A	7	A	1	A	61	A	102	A	4	A	5	A	8	A	5	A	33	A17 B16	158	A

表 2-8 原本『玉篇』残巻の字体調査<sup>10</sup>

調査対象の 12 字を原本『玉篇』残巻の巻ごとに確認すると、「事・流・来・定・所・礼・惡・土・説・為」の 10 字種の字形は「初唐標準」に類似する。字体の揺れの見られる字種は「能」と「於」である。「能」の場合、巻 22 の 7 箇所確認され、「初唐標準」の字

<sup>10</sup> 原本『玉篇』残巻の字体調査用例を付した。

体は2例、「開成標準」の字体は5例ある。「於」の場合、巻27の33箇所揺れが確認され、「初唐標準」の字体は17例、「開成標準」の字体は16例ある。

ところで、原本『玉篇』残巻は、書写年代や底本の相違から、それぞれ異なる性格を有する。これについて上田（1970）は原本『玉篇』残巻の反切用字の特色から、各巻の性格について、「総合して玉篇の残巻を大別すると、A巻十八・十九が古い姿を示すもの、B巻九・二二・二七を新しい姿を示すものと二つに分ち、さらに後者を、b万象名義に最も近いものとして巻二七、c名義にやや近いものとして巻二二、d名義に最も差のあるものとして巻九と、三分することができる」ことを指摘した。

調査で確認した「能」と「於」の字体の揺れからは、巻22と巻27が開成標準字体を用いる新しいものであることが窺え、上記の上田（1970）の指摘と一致する。『篆隸万象名義』は、調査範囲では、字体の揺れが観察されず、用いられた字体は「初唐標準」に近いと言える。

#### 原本『玉篇』残巻の字体調査用例

##### 【能】

###### A 初唐標準

破 普餓反。毛詩矢舍而破、爰云發矢即中、如推破物也、礼記孔子曰君子語小天下莫<sup>能</sup>破焉、説文破碎也、廣雅破壞也。（原本『玉篇』巻22）

###### B 開成標準

隄 渠鎧午哀二反。司馬如賦臨回江之隄州、漢書音義曰隄長也、方言隄企立也、東齊海伐燕之郊謂委<sup>能</sup>广委而跪謂之隄企、郭璞曰脚蹙不<sup>能</sup>行者也、又曰隄倚也、郭璞曰江南人呼梯爲隄、所以倚物而攻者。（原本『玉篇』巻22）

##### 【於】

###### A 初唐標準

綦 <sup>(ママ)</sup> 於<sup>宮</sup> 反。毛詩葛藟綦之、傳曰綦旋也、説文綦收輦也。（原本『玉篇』巻27）

###### B 開成標準

縛 扶矍反。左氏傳襄公縛秦囚、野王案説文縛束也、又曰許男面縛、杜預曰縛手<sup>於</sup>後見其面也。（原本『玉篇』巻27）

## 2.5.2 IDS データによる古辞書の漢字字体研究

ここでは、宋本『玉篇』を中心に、IDS データと HDIC に収録された古辞書掲出字原本画像・翻刻テキストを利用し、部品レベルで古辞書の字体状況を調査・考察するものである。守岡知彦氏による CHISE の多粒度漢字構造モデルに基づき、漢字字体規範データベース HNG に収録された標準文献の字体を整理した研究成果である。この研究成果に対して、本研究は、漢字部品レベルで、標準文献と性質の異なる古辞書について調査を行うものである。

### 2.5.2.1 漢字字体研究から見た古辞書掲出字

古辞書は、数多くの掲出字を収録する。漢字字体研究において、HNG に収録された標準文献に比べて、次の二つの特徴が指摘できる。

- ①掲出字は古辞書の説明対象としての骨組みであり、少数の重複字以外、ユニークな存在である。一方で、個々の掲出字そのもののバリエーションが僅少であるが、掲出字を網羅的に収録し、異体字も併記するため、漢字字体の多様性を備える。
- ②同じ辞書、あるいは異なる辞書において、異なる掲出字の間に、同一漢字部品が持つものが多く存在する。漢字部品レベルでは、字体の同一性（単一パターン）と多様性（複数パターン）が観察できる。

次に、やや詳しく説明してみる。

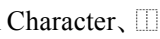
①について、例えば、宋本『玉篇』では、掲出字として「伴」が上巻二十五丁表の一箇所しか存せず、「伴」の字自体は唯一の存在である。しかしながら、宋本『玉篇』は 22,804 の掲出字が収録される。「伴」の傍の「半」を含む掲出字は、「半」・「畔」・「伴」などの 21 字がある。原本画像では、「半」/「𠂔」/「𠂔」との字体があることも確認できる。

②は、古辞書において漢字部品レベルで、字体の同一性と多様性とを観察することである。同一性について、同じ辞書、あるいは異なる辞書の間に、単一パターンだけ存在する部品がある。これらの部品の字体は、同一性があると言える。多様性について、部品によって、二種類の状況がある。一つは、同じ辞書の中バリエーションがあるものである。例えば、「糸」の字体は、高山寺本『篆隸万象名義』の中、「𦉳」・「𦉳」が共存する。もう一つは、一つの辞書では単一パターンであるが、異なる辞書の間バリエーションが観察できる。例えば、「月」の字体は、高山寺本『篆隸万象名義』の中、「月」の単一パターンであるが、天治本『新撰字鏡』の中、「肉」に近い字体である。高山寺本『篆隸万象名義』と天治本『新撰字鏡』とでは、「月」の多様性が確認できる。

さらに、HDIC に収録された古辞書は、古写本と古版本とがある。古写本は、字体のバリエーションが豊富であり、同時に誤写や誤脱を含むものである。原本『玉篇』、高山寺

本『篆隸万象名義』、天治本『新撰字鏡』、図書寮本『類聚名義抄』、観智院本『類聚名義抄』はいずれも古写本である。古版本は、字体のバリエーションが少なくなり、写本より印刷が鮮明である。掲出字の解読が写本よりしやすい面がある。宋本『玉篇』は古版本である。HDIC の作業は、宋本『玉篇』の掲出字テキストデータベースを作成し、これを土台として古写本の辞書の作業を進める方針をとっている。また、字体が翻刻する際に用いる康熙字典体も宋本『玉篇』に近い。そこで、本研究は古版本である宋本『玉篇』を取り上げ、その漢字字体の実態を考察する。そして、宋本『玉篇』データベースにおける掲出字符号化する際の包摂の実際を整理する。

#### 2.5.2.2 IDS データ

IDS は部品レベルで漢字を記述する方法である。Unicode では 12 個の漢字構成記述文字 IDC (Ideographic Description Character、, U+2FF0~U+2FFB) を提供し、これらの IDC によって漢字部品の位置関係を示すことができる。CHISE では、Unicode 統合漢字の約 7 万字の IDS データが公開されている。IDS は、翻刻の際に、符号化できない難字を表現する手段である。一方で、大多数の漢字が IDS データによる記述があるため、IDS データによって、漢字の部品検索ができる。原本画像と併用することによって、部品レベルの原本字体の確認を実現することが可能となっている。

#### 2.5.2.3 HDIC 原本画像・翻刻テキスト

HDIC では、原本画像から一文字ごとに切り出した画像を対象としてデータベース化した。掲出字画像データベースは、漢字字体史研究に利用することを目的として作成しはじめたものである。掲出字画像データベースを構築して、掲出字のテキスト入力の効率化をはかる。そして、掲出字画像データベースによって、掲出字の字形の細部を観察できる。宋本『玉篇』データベースについて、HDIC のプロジェクトでは、2014 年にその掲出字と注文とを入力済みである。その後、一次点検・校正の上、宋本『玉篇』のテキストを試行公開中<sup>11</sup>であり、筆者は担当者である。今回の調査は、試行公開中の掲出字テキストを利用したものである。宋本『玉篇』データベースの原本画像は宮内庁書陵部に所蔵する宋版テキストによった。

#### 2.5.2.4 漢字部品リストの抽出

調査手順は、まず上述の CHISE では公開された IDS データによって、漢字を構成する部品を整理する。次に、抽出した漢字の部品を手がかりにして、HDIC の掲出字原本画

<sup>11</sup> <http://hdic.jp>

像・翻刻テキストに基づき、宋本『玉篇』における漢字字体のバリエーションを考察する。

CHISE で公開する Unicode 統合漢字・基本多言語面の IDS データを利用し、Excel で繰り返してマッチング作業を行う。この手順によって、534 個のもう分割できない基本漢字部品<sup>12</sup>が得られた。ただし、これらの部品の中に、簡体字による部品も混在し、選別する抽出作業が必要となる。これらの部品を対象として、宋本『玉篇』の掲出字の原本字体の調査を行う。

HDIC の掲出字原本画像・翻刻テキストによって、次の三種の漢字部品、計 96 個を選別し、字体調査の対象外とする。これ以外 438 個の漢字部品の調査結果を次節で示す。

- ・簡体字による部品 (27 個)
- ・原本字体に含まれない部品 (44 個)
- ・原本字体に孤例である部品 (25 個)

#### 2.5.2.5 漢字部品から見た字体のバリエーション

対象となる 438 個の部品を調査したところ、原本字体により、字体の同一性を示す単一パターンの部品 (237 個) と多様性を示す複数パターンの部品 (201 個) とに分けられることが分かった。次に、実例を示しながら説明する。


##### ・単一パターン

(1) 31

IDS	Entry	IMG
𠄎イ司	伺	
𠄎イ童	僮	
𠄎イ二	仁	
𠄎イ𠄎	僂	
𠄎イ丕	𠄎	

<sup>12</sup> なお今回の調査、「音」のような中間部品や符号化されていない CDP 外字 (台湾中央研究院) などを対象外とした。

## (2) 6 ㇀

IDS	Entry	IMG
㇀另㇀	別	
㇀蒯㇀	蒯	
㇀荊㇀	荊	
㇀肖㇀	削	
㇀奇㇀	劓	






一部の原本字体しか示さないが、「イ」と「㇀」の字体は、宋本『玉篇』ではすべて異同がない。原本字体のレベルでは、単一パターンであることが確認できる。単一パターンであることが確認できた漢字部品は次の 237 個がある。宋本『玉篇』において、これらの部品は、字体の同一性が確認できた。

3	6	9	10	14	15	16	20	21	22
イ	㇀	𠂇	𠂈	𠂉	𠂊	𠂋	𠂌	𠂍	𠂎
25	27	28	29	30	31	32	36	39	45
月	𠂏	𠂐	𠂑	𠂒	𠂓	𠂔	𠂕	𠂖	𠂗
50	52	53	55	57	58	59	64	65	67
比	𠂘	𠂙	𠂚	𠂛	𠂜	𠂝	𠂞	㇀	册
68	72	73	81	82	83	85	86	87	88
册	𠂟	𠂠	𠂡	𠂢	𠂣	𠂤	𠂥	𠂦	𠂧
89	91	92	94	100	102	103	104	108	109
虫	𠂨	川	𠂩	寸	𠂪	イ	𠂫	𠂬	𠂭
111	112	114	116	117	120	122	124	129	130
丁	𠂮	𠂯	𠂰	𠂱	𠂲	𠂳	𠂴	𠂵	𠂶
132	133	134	136	137	145	149	152	154	155
非	𠂷	𠂸	𠂹	𠂺	𠂻	𠂼	𠂽	𠂾	𠂿
156	157	160	161	162	166	168	173	180	181
更	工	谷	骨	瓜	𠂿	𠂿	𠂿	𠂿	𠂿






184	185	187	188	194	197	201	203	209	211
火	灬	及	亟	豨	甲	見	糸	斤	金
215	218	225	226	229	232	233	234	236	237
九	韭	夬	繼	牛	來	彡	老	了	耒
239	240	246	247	248	249	250	252	254	258
立	吏	龍	鹵	鹿	率	麻	馬	毛	門
260	263	264	265	268	269	270	272	273	277
糸	民	皿	黽	木	目	乃	內	年	鳥
281	282	283	285	286	287	290	291	298	300
牛	牝	女	皮	片	丿	冫	平	欠	青
304	305	306	311	312	316	317	318	319	325
曲	犬	隹	日	肉	三	彡	色	山	申
326	327	328	330	331	333	334	336	337	338
申	身	生	尸	十	石	史	豕	士	氏
339	340	341	344	346	347	351	353	356	359
礻	示	世	事	手	頁	疋	黍	東	水
361	362	367	374	375	381	382	384	387	389
巳	四	夂	土	屯	亡	王	口	為	爲
393	394	395	396	397	399	409	411	413	417
我	巫	无	毋	乂	五	下	乡	心	熏
419	421	426	428	430	431	432	433	435	436
牙	兩	言	央	幺	爻	也	业	曳	頁
437	439	441	443	444	445	446	447	450	451
一	衣	夷	乙	巳	厂	父	弋	乚	音
453	455	460	466	470	473	475	479	483	489
彳	尹	尤	于	禺	羽	禹	日	龠	乍
491	496	497	499	500	501	502	503	505	509
丈	丞	之	止	滹	豸	中	重	州	隹
511	512	513	514	515	516	517	519	520	521
自	辵	宀	卩	充	者	疋	彡	圭	卅
523	525	528	529	530	532	533			
宀	宙	具	冗	刃	既	直			

・複数パターン

(3) 38 巴

IDS	Entry	IMG
月巴	肥	
止巴	此	
立巴	圮	
戸巴	扈	
木巴	杷	

(4) 148 甘

IDS	Entry	IMG
弋甘	音	
甘覃	譚	
甘兼	謙	
嘗甘	嘗	
干甘	香	

「巴」と「甘」の字体は、宋本『玉篇』ではそれぞれ二つのパターンが観察される。原本字体レベルでは、複数パターンであることが確認できた。

複数パターンであることが確認できた漢字部品は次の 201 個がある。宋本『玉篇』において、これらの部品は、字体の多様性が確認できる。

2	5	7	8	11	12	18	19	23	24
乚	几	卜	ㄣ	彡	氷	四	ネ	如	𠂇
26	37	38	40	41	43	44	47	48	49
ㄥ	八	巴	𠂇	白	半	勺	貝	本	匕
51	54	60	61	62	63	66	70	74	76
必	采	卜	不	才	ㄥ	冊	雷	厂	車
77	78	79	90	93	95	96	99	101	105
𠂇	臣	辰	丑	ㄣ	串	垂	束	大	丹
106	107	115	118	119	121	123	125	126	128
刀	、	兜	鬥	盟	夕	儿	耳	二	女
138	140	141	143	144	146	147	148	151	153
缶	、	市	由	甫	阜	丐	甘	戈	鬲
158	159	163	164	165	170	171	172	174	175
弓	井	𠂇	乖	卅	龜	鬼	丁	禾	黑
176	177	179	182	183	186	189	190	191	192
乎	虎	互	黄	黄	丌	几	己	ㄣ	亅
193	196	199	204	205	206	207	208	213	214
死	夾	東	角	子	走	丰	巾	井	卩
216	219	220	221	222	227	228	230	238	241
久	白	白	巨	丿	丂	口	ㄣ	力	隶
242	253	255	256	259	261	266	267	271	275
彡	匝	矛	卵	米	丐	末	母	内	廿
280	284	288	289	292	293	295	296	297	299
甫	月	水	朮	支	七	齊	千	冂	且
302	303	307	308	309	313	314	320	323	324
丘	求	丹	冉	人	肉	入	夾	上	舌
329	335	348	349	354	355	357	358	360	363
尸	矢	首	几	鼠	丨	爽	水	厶	四
366	368	369	370	371	373	376	377	383	388
肅	少	田	酉	冂	凸	瓦	丸	网	章
390	391	392	400	401	402	404	408	410	412
未	一	文	兀	戊	夕	西	丁	巳	小

414	415	416	429	438	440	442	449	452	454
辛	玄	穴	羊	衤	乚	臣	邑	尢	乚
457	458	459	461	462	463	464	465	467	468
乚	永	用	尢	由	酉	卵	又	臽	臽
471	472	474	476	477	481	482	485	486	487
魚	予	雨	玉	聿	月	戍	戠	先	矢
492	493	494	495	498	504	506	510	518	531
爪	丩	兆	フ	攴	舟	竹	子	マ	叀
534									

粟

CHISE で公開する Unicode 統合漢字・基本多言語面の IDS データを利用し、さらに分割できない基本漢字部品リストが得られた。簡体字による部品、宋本『玉篇』に含まれない部品、宋本『玉篇』では孤例である部品以外、438 個のものを対象にし、部品検索によって、HDIC に収録された宋本『玉篇』の原本画像を利用し、宋本『玉篇』の漢字字体の実態を考察した。

## 2.6 まとめ

本章では、篆隸万象名義データベースの構築による情報処理学的な研究方法について報告した。まず、筆者の所属する研究室が推進する HDIC プロジェクトの要略、篆隸万象名義データベースとの関係を概説した。次に、原本『玉篇』残巻と対応する部分を中心に、篆隸万象名義データベースの構築、包摂問題、翻刻方針の詳細を検討した。最後に、データベースに整備済みのテキストデータを研究目的に応じ、如何に適合させるかについて、つまり情報処理学的な研究方法を論じた。具体的には、単漢字レベルの検索に関する『篆隸万象名義』と原本『玉篇』の漢字字体史研究へのアプローチ [2.5.1] と漢字部品レベルの検索に関する「IDS データによる古辞書の漢字字体研究」[2.5.2] を例にとり考察を行なった。本章では 2.5.2 の IDS データによる部品レベルの漢字字体研究について、研究手順として、字体が翻刻する際に用いる康熙字典体に近い、版本である宋本『玉篇』を取り上げた。この研究方法を書写された状況が複雑である『篆隸万象名義』やほかの古辞書に適用することと、さらに XML 言語によるタグ付けテキストを利用する文字列レベルの検索とは課題となっている。

### 第3章 書誌学的研究

#### 3.1 高山寺本篆隸万象名義

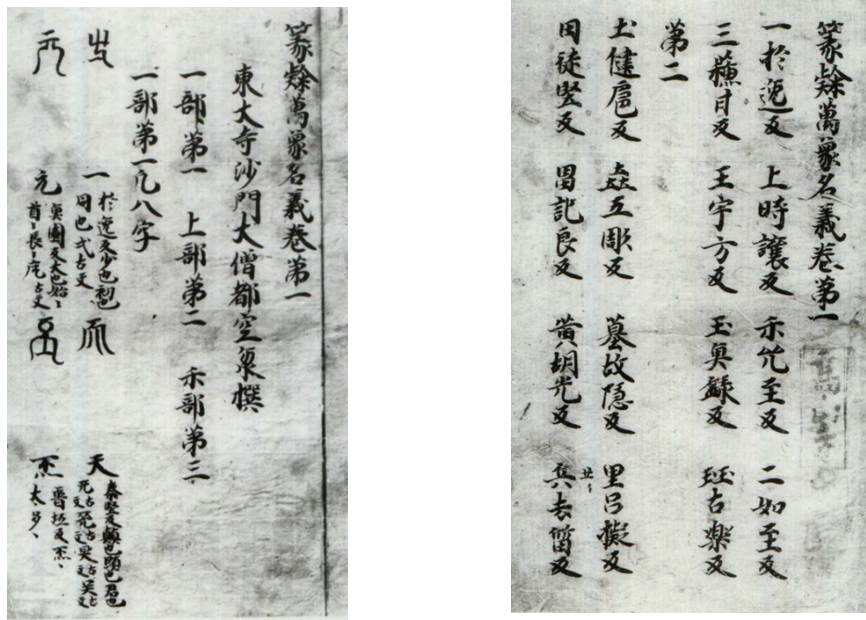


図 3-1 高山寺本『篆隸万象名義』総目録・本文の冒頭の部分

『篆隸万象名義』は、弘法大師空海の著作であるため、しばしば複製本が刊行されてきた。『崇文叢書』第1輯之27-43（1926）、『篆隸萬象名義』（1966）、『高山寺本古辞書資料第一』（1977）、『弘法大師空海全集』第七卷（1984）に収録された影印テキストがある。崇文叢書本は、海外で再度複製され、中国大陸・台湾では広く使用されている。このように影印テキストは容易に利用可能である。ただし、一般に、影印本の複製テキストの使用には次のような限界がある。

- ① 別筆、修正痕跡の確認
- ② 抹消符・転倒符・補入記号などの記号類の確認
- ③ 虫喰・欠損箇所判読

しかし、国宝である『篆隸万象名義』（図 3-1）については、今までの研究ではすでに原本調査による書誌データが多く記録、刊行されている。例えば、山田（1928）、川瀬（1955）、神田（1966）、白藤（1977a）、築島（1984）、高田（1995）などである。複製本としては、高山寺典籍文書総合調査団編『高山寺古辞書資料第一』に所収本が最善とされ、研究に広く使われている。その解説である白藤（1977a）に高山寺本の書誌について次のように記している。

大きさが、縦二六・八糎、横一四・六糎の、やや豎長大版の粘葉装で、六帖より成る。料紙は、薄黄味がかった白楮紙で、各葉は、六行四段に押界を施してあり（但

し、第五帖の四丁より六帖末まで上下二段)、界高は二二・九糎、各行の幅は一・九糎である。掲出字は、各行に、上下二項目収めることを原則とし、各行第一段と第三段(四段の部分のみ)に篆體を、第二段・四段は、隸體の見出しと、割行しての音注と義釈を原則としている。全帖一筆と認められ、その書写は、第六帖の奥書に(但し、朱で抹消されている)、「永久二年六月以敦文王之本書写之了」とある、永久二年(西暦一一一四年)、院政期のものと考へられる。敦文王については未詳。丁数は、第一帖百二(表紙共、以下同)、第二帖九四、第三帖九一、第四帖八六、第五帖一五三、第六帖一九〇で、第一・二・四・六帖の後表紙外の綴際に各々、「五十一」「卅七」「四十三」「九十五」と小書されているものと符合する。

筆者は2016年9月17日から20日まで、高山寺典籍文書綜合調査団が行った現地調査に加わり、高山寺本『篆隸万象名義』の原本調査に参加する機会に恵まれた。この原本調査において書誌を確認したが、先行研究の記述との大きな齟齬は見つからなかった。しかし、押界については先行研究に詳細な報告がないため、次に筆者による調査結果を記す。

表 3-1 高山寺本『篆隸万象名義』における押界の寸法 [cm]

帖数	押界分段/紙数	一段	二段	三段	四段	界高
一	四 / 102	4.51	5.21	5.90	5.76	11.81 x 22.79
二	四 / 94	3.89	7.29	4.02	7.50	11.89 x 22.78
三	四 / 91	3.87	7.21	3.06	7.51	12.43 x 22.75
四	四 / 86	3.91	7.24	4.13	7.54	12.15 x 22.92
五	四 / 4	3.85	7.29	3.18	6.52	11.75 x 22.83
	二 / 149	11.31	11.65	-	-	11.67 x 22.93
六	四 / 190	3.89	7.28	4.01	7.53	11.89 x 22.84

押界は基本的に四段に分かれている。上述の白藤(1977a)には四段に納められる内容について、「掲出字は、各行に、上下二項目収めることを原則とし、各行第一段と第三段(四段の部分のみ)に篆體を、第二段・四段は、隸體の見出しと、割行しての音注と義釈を原則としている」との記述がある。したがって、表 3-1 のデータを確認すると、一段と三段は比較的短く、二段と四段は長い傾向が見て取れる。これは、白藤の記述と符合する。

このように、『篆隸万象名義』における項目の基本形式は「篆 隸 ○○反。○也、○也。」である。篆書・隸書掲出字は原則としてそれぞれ一字である。統計データ<sup>13</sup>から反

<sup>13</sup> 本稿の第2章「データベースの構築による情報処理学的な研究方法」における「2.3 篆隸万象名義と原本玉篇残巻との対応」を参照されたい(p.20)。

切一つにつき三字、義注二つにつき四字があてられていることが推測される。この基本形式を例に分段は原則的に、次の図 3-2 で示すような形で行われている。

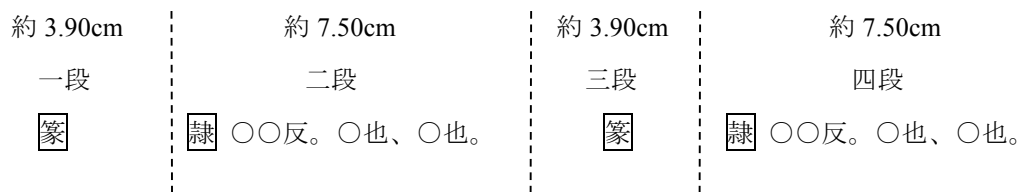


図 3-2 『篆隸万象名義』における押界の四段構成

しかし、表 3-1 のデータで確認できるように、第一帖と第五帖は、他の帖と比べ異質である。

(1) まず、分段において、第一、二、三、四、六帖はすべて四段構成である。これに対し、第五帖の押界は、1 丁表～4 丁表においては四段に分段されているものの、4 丁裏以降は二段均等の形式になっている (図 3-3)。他の帖において四段の押界がなされているのは、篆書掲出字を記すスペースの確保のためであると考えられる。対して、第五帖が二段押界を取るのには、篆書掲出字を書く意図がなくなり、隸書掲出字と注文内容のみを書写しているからであろう。

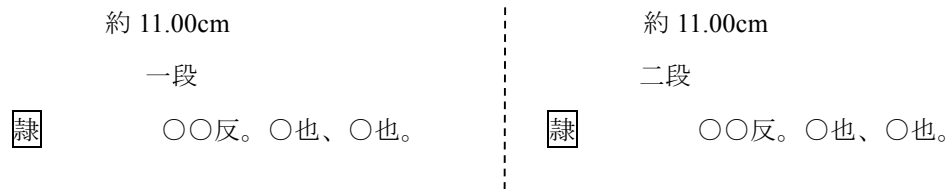


図 3-3 第五帖における押界の二段構成

(2) 次に、押界が四段構成の他の帖のデータと比べれば分かるように、第一帖の四つの分段は比較的均一である (図 3-4)。これは、次のような事情に起因すると考えられる。第一帖の冒頭には約 15 丁分の総目録がある。例えば、一列目は「一於逸反 上時讓反 示允至反 二如至反」であるが、これは部首字とその字の反切を示している。各葉は六列四段の押界が押されており、その枠内 (四段) に内容がおさめられている。字数が均等であるため、押界の寸法もそれに合わせてほぼ均一となっている。16 丁表から本文が始まるが、第一帖の最後まで押界の分段は総目録と同じである。故に、第一帖本文の部分は、一段・三段には篆書・隸書掲出字が納められ、二段・四段には注文の内容のみが記されている。要するに、第一帖において押界の作業を行った時、内容に応じて押界の分段を調整するのではなく、最初の総目録の形式を踏襲したものと判断できる。

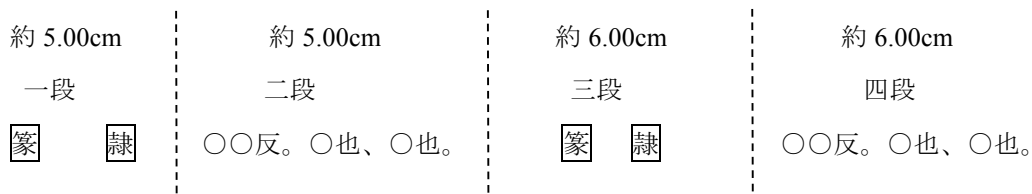


図 3-4 第一帖における押界の四段構成

なお、白藤（1977a）では「但し、第五帖の四丁より六帖末まで上下二段」と述べられているが、今回の調査で、第五帖は4丁裏から末尾まで上下二段の分段であり、第六帖は前半と同じく四段構成であることを確認できた。「……六帖末まで上下二段」との記述は誤認であると思われる。

### 3.2 篆隸万象名義の近世写本

筆者は2015年度の文献調査で、宮内庁書陵部図書寮（東京）、国立故宮博物院文献館（台北）、国家図書館善本書室（台北）、中国国家図書館古籍館（北京）、京都大学附属図書館（京都）に所蔵される『篆隸万象名義』の近世写本を閲覧できた。調査に基づき、以下篆隸万象名義の近世写本について報告する。

#### 3.2.1 近世写本の研究価値

高山寺本『篆隸万象名義』の研究価値が高いことと誤脱が多いことについて、早くから清末の学者楊守敬の『日本訪書志』では指摘があった。楊守敬は光緒六年（1880）清の駐日公使の随員として東京に渡った。日本の蔵書家である森立之、向山黄村、島田重禮と親交を深めた。『経籍訪古志』を手掛かりにして、日本で大量の古書を入手し得て、その多数を後の『古逸叢書』に複製した。訪書の成果は多岐にわたるが、小学書における原本『玉篇』残巻、『篆隸万象名義』、『新撰字鏡』についての蒐集は注目すべきところである。阿部（1983）では、楊守敬蒐集した古辞書の近世写本の海外での所蔵状況や基本的な書誌情報が記述されている。

高田時雄「篆隸万象名義解説」（1995）では、楊守敬による原本『玉篇』残巻の発見、『篆隸万象名義』の高山寺本及びその転写本について詳しく解説されている。近世写本（転写本：『篆隸万象名義』の転写本の書写年代は幕末明治にかかるため、以下近世写本という）について、日本国内では宮内庁書陵部図書寮をはじめ、京都大学附属図書館、群馬県立文書館、高野山三寶院、尊経閣文庫などに所蔵されると記す。そして、『篆隸万象名義』は資料として、誤字、脱字がすこぶる多いことが弱点になっており、有効な利用のために、『玉篇』残巻や逸文の存するものを利用し、さらに『説文解字』などの中国字書

をも参考し、誤謬を正す厳密な校定作業が必要であることが指摘されている。また、楊守敬の蒐集した『篆隸万象名義』の近世写本は海外では主に国立故宮博物院文献館(台北)、国家図書館善本書室(台北)、中国国家図書館古籍館(北京)に所属される。

前述のように、阿部(1983)では、楊守敬蒐集の古辞書の近世写本、特に台湾に所蔵する四種類の『篆隸万象名義』の近世写本が紹介されている。ただし、近世写本の内容を利用し、『篆隸万象名義』の本文研究を行うものは管見の限りはない。これらの近世写本は日本国内、台北、北京で分散して所蔵されているため、それぞれの所蔵館で文献調査を行うことが容易ではない。

『篆隸万象名義』について、従来本文研究、音韻、文字などの方面では、数多くの研究成果がある。また、近年日本や中国では『篆隸万象名義』に関しての研究が進展し、異体字や本文についての研究成果が注目されている。ただし、『篆隸万象名義』の近世写本との比較対照に関する研究はほとんど見られない。

### 3.2.2 楊守敬蒐集の篆隸万象名義の近世写本

#### 3.2.2.1 楊守敬の日本訪書

楊守敬は中国清末の学者である。地理歴史学、版本目録学、金石学、書道等の方面で卓越した成果を収めた。先行研究の鄒(1997)、黄(1995)では楊守敬の生涯、学術経歴、著述等の方面について詳しく紹介されている。楊守敬の日本訪書に関連する部分の要点を次のようにまとめる。

楊守敬、字は惺吾であり、星吾とも作り、号は隣蘇老人である。湖北宜都の出身である。清の道光十九年生まれ、民国四年(1915年)に歿。終年七十六歳である。かつて七回上京会試に参加したがうまく行かず、功名を求める心を絶え、著述に専念した。

光緒六年(1880)四月、清の駐日公使何如璋の誘いで、楊守敬は、随員として日本に渡った。日々東京の書肆をまわる楊守敬は、書肆には大量の漢文古籍が比較的low価格で販売されており、その中には中国では早く散逸した貴重な典籍も存することに気がついた。私財を投じて、一年未満の間に三万巻余りの本を購入した。したがって、日本所蔵の漢籍の種類、特色及び分布状況を徐々に把握してきた。

その後、書肆をまわって本を探すのでは満足できなくなって、日本の蔵書家との交際をはじめた。さらに珍しい古籍を求める。まずは森立之と知り合った。森立之は、字立夫、号枳園である。江戸後期の考証医家であり、蔵書家でもある。森立之は本草学に精通し、蔵書に富む。楊守敬は森立之と澠江全善等で共著した『経籍訪古志』を獲た。この本は日本所蔵の漢籍善本の解題目録である。収録された本について、その成立年代、所蔵館、闕筆、旧蔵書印などを記載し、楊守敬の日本訪書の手がかりとなった。後に、

『日本訪縁起条例』を起草し、後任の公使である黎庶昌に支持され、高い評価を受けた。その頃彼が友人に送った手紙では、蔵書がすでに数十万巻に登り、中でも秘本が数万巻におよび、宋版のものだけでも五、六千冊を入手できたという。これで楊守敬の訪書の成果の豊富さを窺える。

楊守敬の日本訪書を達成させたのは次のいくつかの契機があった。まずは、明治維新の影響で、儒家経典等の漢文書籍はそれまでと同様に重視されていない。楊守敬はちょうどその時期に日本に渡った。次に、先人に啓示されたことである。楊守敬以前、すでに多くの人が日本では、中国で早く散逸した古籍を入手できる可能性があることに気づいていた。宋代の欧陽修が「日本刀歌」で「徐福行時書未焚、逸書百篇今尚存」と書いた。また、駐日公使黎庶昌の支持を獲たことも一つの契機である。

楊守敬の日本訪書は主に四種の方法があった。一つ目の手段は購買であった。金で手に入れられる本はすべて入手した。二つ目の手段は交換であった。金銭で購入できない本は、渡日した時に携帯した漢魏六朝の金石碑や古銭等で古籍を交換した。残り二つの手段は日本友人による寄贈であり、抄写であった。

楊守敬の日本訪書では、古籍の購入以外に、日本所蔵の善本漢籍を紹介した著述を撰述した。主に『留真譜』、『日本訪書志』及び『古逸叢書』である。この三種類の著書は、はじめて日本所蔵の漢籍について中国の学界に紹介した。

楊守敬訪書の成果は多岐にわたるが、小学書では、原本『玉篇』残巻、『篆隸万象名義』、『新撰字鏡』についての蒐集は注目すべきところである。筆者は2015年度の文献調査を通し、日本国内や海外に所蔵される『篆隸万象名義』の近世写本を拝見し、資料も入手できた。次から『篆隸万象名義』の近世写本と文献調査による詳細を中心に触れてみる。

### 3.2.2.2 近世写本の序文と跋文

830年頃に成立した『篆隸万象名義』の当時の原本または平安時代の古い写本は残っておらず、永久二年(1114)に書写された高山寺本が唯一の古写本である。他の転写本はこの伝本の系統を引くものである。先述のように、日本で伝わる原本『玉篇』残巻と『篆隸万象名義』は、楊守敬の日本訪書によって、その存在と文献の価値を中国に知らしめたものである。台北国家図書館善本書室に所蔵されている『篆隸万象名義』の近世写本では、楊守敬による次の序文が付されている。

篆隸萬象名義三十卷 舊鈔本 日本東大寺沙門大僧都空海撰 空海入唐求法、兼善詞翰、歸後遂為日本聞人之冠。今世彼國所傳假字即空海所創造也。此書蓋據顧野王玉篇為本、而以一篆一隸配之（隸即今之真書）。其注文則如大廣益本玉篇、但舉訓詁、不載所引經典。唯所載篆書每部中或有或無、當是鈔胥省之。又自卷首至面部分析為十二卷、而總目則仍顧氏原卷、此不可解。今古鈔原卷子本尚在高山寺、余曾於紙幣局見之。原卷雖古亦非空海親筆。此又狩谷掖齋所藏其籤題、尚是掖齋親筆、據跋則源弘賢不忍文庫中物也。按野王玉篇一亂於孫強、再亂於陳彭年、其原本遂不可尋。今得古鈔卷子本五卷、刻入古逸叢書中、可以窺見顧氏真面目。然亦只存十分之一二。今以此書與五殘卷校之、則每部所隸之字一一相合、絕無增損凌亂之弊。且全部無一殘缺、余以為其可寶當出玉篇五殘卷之上、蓋廣益本雖刪顧氏所引經典原文、而經典義訓大抵尚存。唯顧氏上承說文、其所增入之字皆有根據、而其隸字次第亦多與說文相合、其有不合者正足與今本說文互相證驗、則此中之原流升降、有關於小學者匪淺。況空海所存義訓較廣益本亦為稍詳（顧氏原書於常用之字往往列四五義、廣益本概存二三義而已）。若據此書校刻餉世、非唯出廣益玉篇上、直當一部顧氏原本『玉篇』可矣。唯鈔此書者草率之極、奪誤滿紙、此則不能不有待深於小學者理董焉。

この序文で、楊守敬は高山寺本『篆隸萬象名義』の研究価値が高いことと誤脱が多いことを指摘した。また、「又自卷首至面部分析為十二卷、而總目則仍顧氏原卷、此不可解。」とあるが、これは楊守敬が『篆隸萬象名義』原撰部分の分巻状況、さらに前載の総目録との対応問題について気づいたの上で述べられた箇所と思われる。序文の内容から、楊守敬は『篆隸萬象名義』と原本『玉篇』とを比較対照し、本文や構成に問題意識を持ったと思われる。

『篆隸萬象名義』の近世写本について、高田（1995）では「幕末以来世の中に流布した『篆隸萬象名義』写本の多くは、高山寺の原本から出たものではなく、屋代弘賢所蔵写本から出たものと想像される。楊守敬が近代における「篆隸萬象名義」再発見の功労者であったことは間違いないが、その再発見も不忍文庫の本とその転写本の流通がなければありえなかったに違いない。」と指摘されている。近世写本の後ろに弘賢の跋文が多く掲載され、また楊守敬によって『日本訪書志』にも移録された。

弘賢嘗讀弘法大師作書目錄有篆隸萬象名義卅卷、而不知其存亡。余固勤于小學、求之有年于茲矣。享和元年冬、稻山秋月二公以寫本見寄云原本藏于山城國高山寺、首

始一終亥。一依説文玉篇至於音訓、與二書互有出入、不知當時據何書。數十年聞其名而不得見者、一旦獲之、吾不忍文庫之榮莫加焉。十襲以蔵源。弘賢踴躍歡喜識。

楊守敬はこれに「按ずるに弘賢の玉篇と出入ありと謂うは、蓋し見る所の広益本に據りて言えるならん」と注釈する。この跋文に対して、高田（1995）は、弘賢が「万象名義」写本を獲た享和元年（1801）を初めとして「万象名義」は次第に学者間に転々鈔写され、伝本を増やしていくこととなったことを指摘した。これは『篆隸万象名義』近世写本の年代性についての明確な指摘である。

### 3.2.2.3 近世写本の書誌

高田（1995）では、『篆隸万象名義』の近世写本が、日本国内では宮内庁書陵部図書寮をはじめ、京都大学附属図書館や群馬県立文書館などの六箇所、海外では台北の国立故宮博物院文献館・国家図書館善本書室に所蔵されていることを紹介した。これ以外に、筆者の調査により、北京の中国国家図書館古籍館にも所蔵本が二種あることを確認できた。詳細を次の表 3-2 にのせる。

表 3-2 『篆隸万象名義』近世写本文献調査概況

番号	調査状況	所蔵機関	年代	分冊	入手状況
1	調査済	国立故宮博物院文献館（台北）	江戸写本	八冊	部分
2	調査済		江戸写本	六冊	-
3	調査済		江戸写本	一冊	-
4	調査済	国家図書館善本書室（台北）	光緒癸未 1883	六冊	全巻
5	調査済	中国国家図書館古籍館（北京）	清光緒年間	八冊	-
6	調査済		日本鈔本	二冊	部分
7	調査済	宮内庁書陵部図書寮（東京）	江戸写本	四冊	-
8	調査済	京都大学附属図書館（京都）	天保二年 1831	六冊	部分
9	未調査		弘化三年 1846	-	-
10	未調査	富岡鉄斎旧蔵本（不詳）	-	-	-
11	未調査	群馬県立文書館（群馬）	-	-	-
12	未調査	高野山三宝院	文政十三 1830	-	-
13	未調査	尊経閣文庫（東京）	-	-	-

九箇所の所蔵機関に13種の『篆隸万象名義』近世写本がある。筆者は2015年度の文献調査にわたって、上記の五箇所の8種の『篆隸万象名義』の近世写本を調査してきた。

『篆隸万象名義』は六帖の構成で、第一帖から第四帖までは空海撰述であるが、第五・六帖は別人の手による。量的に第五帖と第六帖は多く、前半の四帖分に相当する。各半丁を上下二段、左右六列に書写する体例を基本とする。近世写本は左右八列に書写されるものが多い。高山寺本と同じく六冊とするものもある。そして分量の多い第五・六帖は各二分して八冊とするものもある。

調査済みの8種の近世写本では、六冊構成のものは3種あり、八冊構成のものは3種あり、零本となるものは2種ある。さらに、掲出字だけが掲載されたものは1種あり、上下二冊の構成である。

次に、文献調査による書誌情報を記述する。

1 所蔵者 故宮博物院文献館（台北）

請求番号 天字〇二五三號 経部小学類

外題 篆隸萬象名義 三〇巻 八冊 27.0 x 19.5cm

観海堂旧蔵 紺表紙冊子本 見返しに楊守敬の写真あり 無界 上下二段 八行  
書き込みあり

2 所蔵者 故宮博物院文献館（台北）

請求番号 故観 001031-001033 経部小学類

外題 篆隸萬象名義 三〇巻 六冊 28.0cm x 20.0cm

観海堂旧蔵 紺表紙冊子本 見返しに楊守敬の写真あり 無界 上下二段 八行  
書き込みあり

3 所蔵者 故宮博物院文献館（台北）

請求番号 観字二百十九號 経部小学類

外題 萬象名義 一冊 28.7cm x 17.5cm

観海堂旧蔵 茶表紙冊子本 零本 無界 上下二段 八行 書き込みあり

4 所蔵者 国家図書館善本書室（台北）

請求番号 01062-03823 経部小学類字書之属

外題 篆隸萬象名義 三〇巻 六冊 27.6cm x 19.7cm

紺表紙冊子本 見返しに楊守敬の写真あり 無界 上下二段 八行 書き込みあり

5 所蔵者 中国国家図書館古籍館（北京）

請求番号 字 431/433.1

外題 篆隸萬象名義 三〇卷 八冊 27.2cm x 19.6cm

紺表紙冊子本 見返しに楊守敬の跋文あり 無界 上下二段 八行 書き込みあり

6 所蔵者 中国国家図書館古籍館（北京）

請求番号 字 431/433.2

外題 篆隸萬象名義 二冊 27.5cm x 17.1cm

觀海堂旧蔵 紺表紙冊子本 見返しに楊守敬の写真あり 無界 上下二段 八行

書き込みあり 掲出字の一覧 茶表紙冊子本 朱子欄 末尾に弘賢の跋文あり

7 所蔵者 宮内庁書陵部図書寮（東京）

請求番号 119 函-315 號

外題 篆隸萬象名義 二冊 27.6cm x 18.6cm

浅茶表紙冊子本 見返しに書き込みなし 無界 上下二段 八行 書き込みあり

8 所蔵者 京都大学附属図書館

請求番号 4-87||テ||1（屋代弘賢ノ抄本ヨリ写ス）

篆隸万象名義（天保二年百々俊太郎贈）六冊 27.9cm x 21.4cm。

上下二段 八列の書写 上欄に問題箇所に対する書き込みあり。

### 3.3 高山寺本と近世写本とから見た錯簡の問題

『篆隸万象名義』の高山寺本と近世写本との対照調査において、「第一帖・卷第十一・頁部」の中で、双方の字順が一致しない箇所があることに気づいた。筆者の調査した八種の近世写本における字順はすべて同じである。つぎに、全巻を入手することができた台北国家図書館所蔵の六冊本を例にこの問題を考察する。

#### 問題箇所の所在

高山寺本（第1帖 81 丁裏…第1帖 82 丁表～第1帖 83 丁裏…第1帖 84 丁表）

近世写本（第1帖 61 丁表…第1帖 61 丁裏～第1帖 62 丁裏…第1帖 63 丁表）

## 問題点の記述

表 3-3 「頁部」における字順の不一致（高山寺本と近世写本）<sup>14</sup>

字順(近)①	-	-	-	-	-	-	-	-	33	34	35	36	37	38	39	40	41
字順(高)②	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
掲出字	頁	頭	顔	頤	顛	顛	顛	頂	頤	顛	顛	頤	顛	顛	顛	顛	顛
所在(高)	81b	81b	81b	81b	81b	81b	81b	81b	82a	82a	82a	82a	82a	82a	82a	82a	82a
所在(近)	-	-	-	-	-	-	-	-	83a	83a	83a	83a	83a	83a	83a	83a	83a
字順(近)①	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	9	10
字順(高)②	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
掲出字	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛
所在(高)	82a	82a	82a	82b	82b	82b	82b	82b	82b	82b	82b	82b	82b	82b	82b	83a	83a
所在(近)	83a	83a	83a	83b	83b	83b	83b	83b	83b	83b	83b	83b	83b	83b	83b	82a	82a
字順(近)①	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27
字順(高)②	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51
掲出字	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛
所在(高)	83a	83a	83a	83a	83a	83a	83a	83a	83a	83a	83b	83b	83b	83b	83b	83b	83b
所在(近)	82a	82a	82a	82a	82a	82a	82a	82a	82a	82a	82b	82b	82b	82b	82b	82b	82b
字順(近)①	28	29	30	31	32	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
字順(高)②	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68
掲出字	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛	顛
所在(高)	83b	83b	83b	83b	83b	84a	84a	84a	84a	84a	84a	84a	84a	84a	84a	84a	84a
所在(近)	82b	82b	82b	82b	82b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

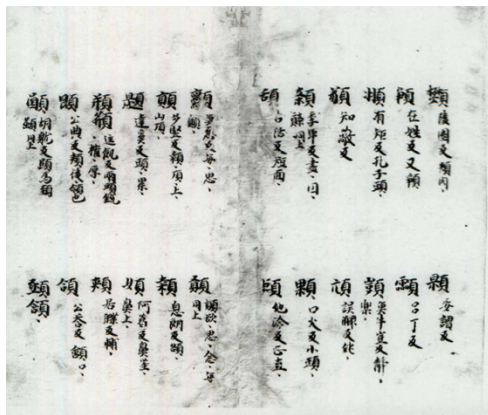
以上のデータは、次のようにまとめられる。(近世写本は毎葉8列の書写であるため、高山寺本の丁数を規準に説明を行う。)

- ①近世写本の字順は [81 裏・83 丁 (表裏)・82 丁 (表裏)・84 丁裏]
- ②高山寺本の字順は [81 裏・82 丁 (表裏)・83 丁 (表裏)・84 丁裏]

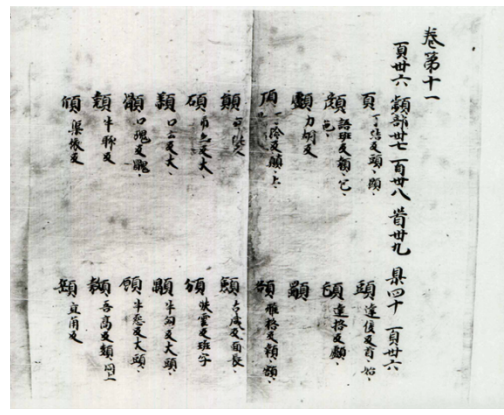
前述のように、筆者の調査した八種の近世写本での配置はすべて同じである。高山寺本は『篆隸万象名義』の唯一の古写本で、近世写本はいずれも高山寺本の系統を引くものである。しかしながら、上の通り、該当箇所について両写本のページ配置は異なっている。近世写本の作成にあたっては高山寺本が参照されたはずであるが、にもかかわらずこういった不一致が生じたのはなぜであろうか。

高山寺本と近世写本の問題箇所の紙面の様子は次の図 3-5 と図 3-6 の通りである。(a は表、b は裏を示す)

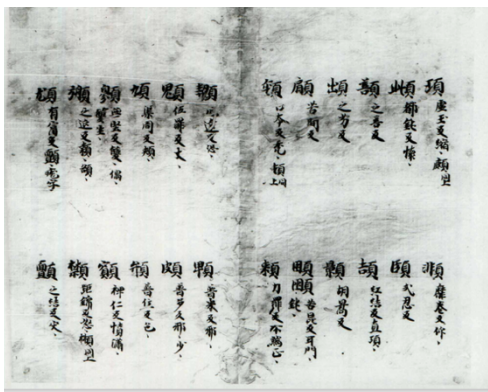
<sup>14</sup> 「-」で表記する部分は、高山寺本と近世写本と字順が一致する。



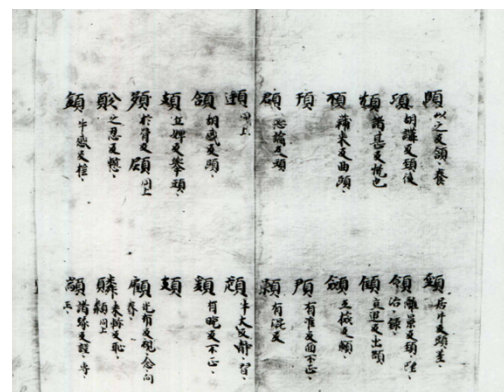
83a



82a



85a



84a



82b



81b



84b

図 3-5 高山寺本における問題箇所紙面



図 3-6 近世写本における問題箇所紙面 (台北国家図書館六冊本)

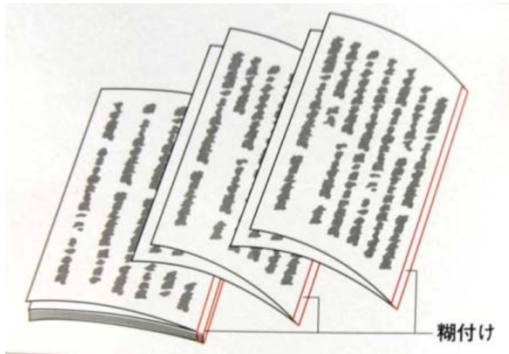


図 3-7 粘葉装の図示

されていることが分かる。図示すると次の図 3-8 になる。

高山寺本の装丁は左図 3-7 のような粘葉装である。二つ折りにした紙の山の部分に細く糊をつけ、それを綴じ代として重ね貼り合わせることで本に形にする。この装丁は本を開いたときに紙が平らに開き切るところと開き切らないところが交互に現れることになる。上記の高山寺本の画像でみると、問題箇所第 1 帖の 82 丁表・裏、83 丁表・裏は一紙の両面に書写されていることが分かる。図示すると次の図 3-8 になる。

<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; padding: 5px;"><b>83a</b></td> <td style="width: 50%; padding: 5px;"><b>82b</b></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">字順①：I</td> <td style="padding: 5px;">IV</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">字順②：III</td> <td style="padding: 5px;">II</td> </tr> </table>	<b>83a</b>	<b>82b</b>	字順①：I	IV	字順②：III	II	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; padding: 5px;"><b>82a</b></td> <td style="width: 50%; padding: 5px;"><b>83b</b></td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">III</td> <td style="padding: 5px;">II</td> </tr> <tr> <td style="padding: 5px;">I</td> <td style="padding: 5px;">IV</td> </tr> </table>	<b>82a</b>	<b>83b</b>	III	II	I	IV
<b>83a</b>	<b>82b</b>												
字順①：I	IV												
字順②：III	II												
<b>82a</b>	<b>83b</b>												
III	II												
I	IV												
裏	表												

図 3-8 一紙の表裏に書写された 82 丁表裏と 83 丁表裏

\*この「表裏」は説明の便宜のため用いる用語で、所在の表裏と異なるものである。

高山寺本における錯簡は、このような見開きのページを綴じる際に折る向きを誤ったことに起因すると考えられる。すなわち、元々山折であった見開きを、次に述べるように修繕の際に谷折で綴じたことにより、ページ順が逆転し 83 丁に対して 82 丁が先行してしまったのである。

このように製本上の誤りが高山寺本には見受けられるが、この間違いは近世写本の成立にかかわっていると考えられる。

高山寺本は虫損等が進んでいたため、近世写本の作製後に修繕されたと推測する。筆者による原本調査では、虫喰いや闕損のある箇所に対して紙の裏打ち修繕がなされていることを確認した。裏打ちの処置を行うときは、元の状態から紙を剥がす必要がある。近世写本が作製された理由の一つは、修繕後再製本を行う際に生じる乱丁を防ぐためであったと考えられる（高山寺本には丁数の記載がないため、解体作業を行うとページの順番が不明になる恐れがあった。）ただし、この仮説は、高山寺本の修繕と近世写本の作成が同時期であったことが確認された場合にのみ成立する。

前にも引いた通りに、近世写本の年代性について、高田（1995）は「弘賢が「万象名義名義」写本を獲た享和元年（1801）を初めとして「万象名義」は次第に学者間に転々鈔写され、伝本を増やしていくこととなった」と指摘している。今回の筆者の調査した範囲では、それら近世写本の書写年代は1830～1883年の間であることが分かった。上記の仮説が成り立つとすると、高山寺本の修繕の時期は近世写本の成立以降であると想定できる。ただし、現在高山寺本の修繕の時期ははっきりしていない。また、残り五種の近世写本はまだ未調査である。よって、仮説の検証は今後の課題にしたい。最後に、高山寺本の紙質の変容は現在も進行中であるため、近世写本は、今の高山寺本では確認できない部分を参照できるという点で、研究資料として価値の高いことを附言しておく。

### 3.4 近世写本による本文研究

#### 3.4.1 掲出字判読

近年日中両国では、ともに『篆隸万象名義』についての研究が盛んに行なわれている。音韻、字体、本文内容などの多方面に研究成果が挙げられている。なかの本文内容の研究について、今まで利用された資料は主に原本『玉篇』残巻、宋本『玉篇』、原本『玉篇』に所引された多くの経典籍及び日本の古辞書などに集中している。一方で、『篆隸万象名義』の近世写本の利用は重視されていない。

筆者の文献調査の結果に基づき、近世写本は『篆隸万象名義』の本文内容の研究上、近世写本の形態や書写年代等の影響で、次の三つの方面の応用ができる。

- 1 掲出字判読（北京中国国家図書館古籍館所蔵二冊本）
- 2 書き込みによる校正（台北故宮博物院文献館所蔵八冊本）
- 3 近世写本の依拠本（台北国家図書館善本書室六冊本）。

以下、入手した資料を分析しながらこの三方面の内容を展開する。

（参考に入手した近世写本の資料の一部を附録に載せる）

近世写本の中、中国国家図書館古籍館に所蔵している二冊構成の一種は、注文の内容を載せず、『篆隸万象名義』の掲出字を全部一覧してある（図 3-7）。



図 3-7 北京中国国家図書館古籍館所蔵二冊本

高山寺本『篆隸万象名義』の書写の際、あるいはそれ以前に、掲出字の脱落、誤写、重出、さらに掲出字が注文に繰り込まれるといった問題が生じており、『篆隸万象名義』の掲出字を体系的に整理、研究する必要がある。後述の第 4 章では掲出字の形式に着目し、『篆隸万象名義』における注文に繰り込まれた掲出字、脱落した掲出字を整理した。結果として掲出字全体を隸書掲出字・埋字・脱字に体系的に分類した。主に掲出字認定に関する先行研究〔宮澤（1977）・白藤（1977）・上田（1986）・工藤（2002）・呂（2007）・柳・劉・李（2013）〕を踏まえた。

北京近世写本二冊本は上述のように、掲出字のみを一覧したものであり、注文内容の面では参考にできないが、掲出字字体の解読上や掲出字体系を研究する上で非常に価値がある。都合で次に示す範囲の部分複製を申請し入手した。

初頁

本文の初頁

本文 21 部首

「一部」「上部」「示部」「二部」「三部」「言部」「誥部」「水部」「杼部」

「く部」「く部」「阜部」「鬲部」「宀部」「韋部」「糸部」「未部」「申部」「酉

部」「曾部」「亥部」

跋文

入手した部分は全部で 21 部首が含まれる。字数の少ないものは「一部」「上部」「二部」「三部」「言部」「林部」「く部」「く部」「韻部」「宀部」「未部」「申部」「曾部」「亥部」などの 14 部首がある。字数の多いものは「示部」「言部」「水部」「阜部」「韋部」「糸部」「酉部」の 7 部首がある。中では、原本『玉篇』残巻のあるものは「言部」「水部」「阜部」「糸部」の 4 部首となる。次は、言部を例にして、北京近世写本二冊本の掲出字一覧と篆隸万象名義データベースの翻刻結果と比較してみる。

**言部（高山寺本『篆隸万象名義』隸書掲出字 360 字、原本『玉篇』現存 329 字、宋本『玉篇』482 字）**

調査方法は、北京本近世写本の言部の掲出字を篆隸万象名義データベースの解読した掲出字と比較し、字形が異なるものが 50 字存在することを確認した。この字形の差異がある 50 字をさらに原本『玉篇』、宋本『玉篇』と比較すると、北京本近世写本の字形は次の五つのグループに分けられる。

**A 高山寺本『篆隸万象名義』の字形と一致するもの：10 字**



訊 思各反。問也、訊也、辞也。（高山寺本第 3 帖 9 丁裏）

高山寺本では、「訊」の旁は「丸」に作り、北京本も高山寺本に一致する。

高山寺本 北京本

**AB 高山寺本篆隸万象名義と原本『玉篇』の両者字形一致するもの：11 字**



図版省略

訓 之救反。詛也、咒也、詛也。譌字。（高山寺本第 3 帖 14 丁表）

高山寺本と原本『玉篇』では、「訓」の旁は三つの「习」の並びで

高山寺本 北京本 あり、北京本と一致する。



原本『玉篇』

**B 原本『玉篇』の字形と一致するもの：15 字**



図版省略

謹 莫放反。相責望也。（高山寺本第 3 帖 17 丁裏）

高山寺本 北京本 高山寺本と原本『玉篇』との字形が異なって、北京本は原本『玉篇』の字形と一致する。



原本『玉篇』

### C 宋本『玉篇』の字形と一致するもの：8字



図版省略

譬 匹臂反。喩也。（高山寺本第3帖8丁裏）

高山寺本 北京本

高山寺本と宋本『玉篇』との字形が異なり、北京本は宋本『玉篇』の字形と一致する。



宋本『玉篇』

### D 規準不明のもの：6字



図版省略

誥 相旅反。長也。（高山寺本第3帖10丁表）

高山寺本 北京本

高山寺本の旁部分の字形は「胥」の異体字となり、北京本では「骨」と誤認されたが、規準は不明である。

対照比較した結果、北京近世写本二冊本の一覧にある掲出字は、高山寺本『篆隸万象名義』にある掲出字字形をそのまま書写したのではなく、近世写本の作者が判読した上で作成した掲出字の一覧であることが分かった。作者の基づいた当時の資料は不明であるが、高山寺本、原本『玉篇』、宋本『玉篇』と比較し、原本『玉篇』と高山寺本と字形が異なる場合、原本『玉篇』に近い字形で翻刻するように見える。その次は高山寺本自体に近い字形を採用するものが多い。さらに宋本『玉篇』に近い字形を取る場合もある。また、判読規準不明なものもある。言部を比較した結果から見る限り、北京近世写本二冊本の掲出字の判読は原本『玉篇』と高山寺本の字形を重視しているように思われる。なお、北京近世写本二冊本だけではなく、ほかの近世写本の解読した掲出字を利用すれば、高山寺本の字体認定に参考になる。

#### 3.4.2 書き込みによる校勘

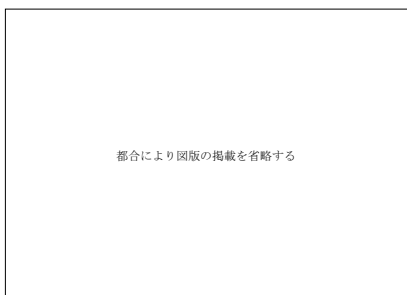
近世写本では欄外や本文中に、本文校訂の書き込みが付くことが多い。筆跡からすると、楊守敬によるものがほとんどである。これらの書き込は、本文解読上に大変参考になる。台北故宮博物院文献館に所蔵されている八冊本の写本（図3-8）は、特に本文の冒頭から十九丁の表までに朱や墨により書き込みが多くある。



図 3-8 台北故宮博物院文献館所蔵八冊本

入手した資料によって、次に十九丁の表までの近世写本の書き込みの内容を確認してみる。これらの書き込みは、書かれた位置や示した内容によって、おおよそ次の 6 種類が確認できた。

(1) 冒頭に部首リストの追加



本文冒頭に高山寺本『篆隸万象名義』と同様、「篆隸万象名義卷第一 東大寺沙門大僧都空海撰 一部第一 上部第二 示部第三」とあり、その下に朱による「二部第四 三部第五 王部第六 玉部第七 珏部第八」との部首リストを追加する書き込みがある (図 3-9)。

図 3-9 部首リスト

## (2) 部首の冒頭に掲出字数確認の注記



図 3-10 部首冒頭の掲出字数の記述

本文十三丁表に「示部第三凡一百十二字」の下に朱による「除重文不計今按正文九十四字」との書き込みがあり、示部の重文を除いた隸書掲出字の字数を示した。実際に数えたところ示部の隸書掲出字は 94 字であり、この書き込みに一致する

(図 3-10)。

## (3) 注文における圏点、実点（主に義注字や字体注記に付される）



図 3-11 圏点・実点（篆書）

この種の書き込みが最も多く、これは参考文献と対照しながら注文内容を確認した注記のように思われる。しかし、どの文献を参照したかは不明である。また、義注字・字体注記の横に加えられている圏点・実点の符号類の使い分けも不明である。例えば、十二丁表本文にある「元」の注文「魚園反大也始也首也元（篆書）古文」では、「大」と「元」の横に朱の「○」が付されている（図 3-11）。

## (4) 判然としない字に判読字（掲出字と注文と両方ともに存する）



図 3-12 判読字

十三丁表の「示」の掲出字の横に朱による「示」が書かれている。北京本近世写本の「示」の字形は高山寺本の字形と一致し、「禾」の形に見える。「示部」の最初の掲出字であり、注文「時志反語也見也兀古文」の内容も「示」の解釈である。したがって、この書き込みは「示」を明示する判読である（図 3-12）。

### (5) 注文に繰り込まれる埋字の提示



図 3-13 埋字の提示

篆隸万象名義の掲出字は主に隸書の大字で掲げられるが、ほかの項目の注文に繰り込まれる埋字もある。この種の埋字は書き込みによって示されている。十四丁表の「襪」の注文「居依反祥也又襪思離反福也」では、「又襪思離反福也」が朱によって括られ、「襪」を説明する部分と区別されているように見える。これ以外に「示部」での埋字も何箇所か同様に示される（図 3-13）。

### (6) 欄外の書き込みによる本文校訂

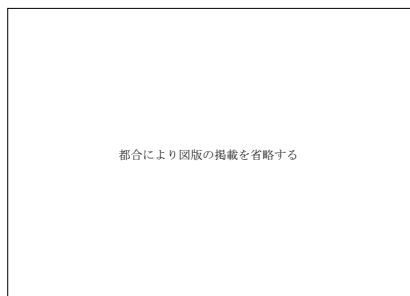


図 3-14 欄外の書き込み

十五丁表の「襪」の注文「使旅反祠神米也作糴字」における「米」の横に補入記号がある。これと対応した、上欄に朱による「襪 説文玉篇並祭具注米字疑是具字」書き込みがある。これは『説文解字』と宋本『玉篇』の内容に基づき、注文の「米」の字に対する校訂である（図 3-14）。

調査済みの近世写本では、程度は多少異なるが、すべて書き込みがあることが確認できた。書き込みの中では、文字の異同を注記する書き込みが最も多い。上述の台北故宮博物院八冊本の書き込みは全体的な分量が少ないが、十九丁の表までかなり具体的に記入されている。楊守敬による本文校勘の方法が窺える。資料を入手した上で、本文解読に応用する一例としてここで示した。ほかの近世写本における書き込みによって、当時の書写または校勘者の意見を参考できるため、『篆隸万象名義』本文校勘の一つの有効な方法であると考えられる。

### 3.4.3 近世写本の依拠本

近世写本の依拠本は高山寺本『篆隸万象名義』であると言われるが、その点今までの先行研究を見る限り、実証されていない。本調査にあたって、台北国家図書館善本書室に所蔵する『篆隸万象名義』近世写本六冊本写本（図 3-15）の全巻を入手した。入手した資料を高山寺本のテキストと比較してみる。

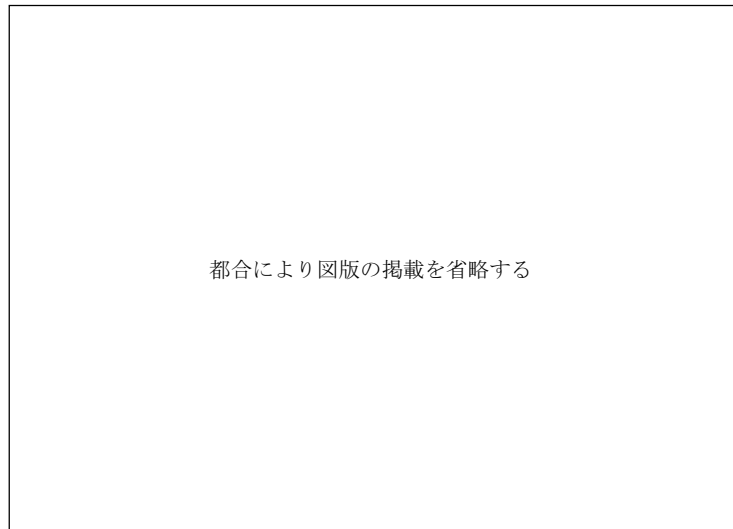
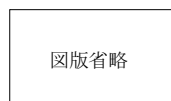


図 3-15 台湾国家図書館善本書室所蔵六冊本



高山寺本




台湾六冊本

高山寺本では、「莅」の注文は「力□↑秀反。衆也、視也、位、何□」となり、「何」以下の義注字は虫損となる。何字欠損したかは不明であり、義注字の形も確認できない状態である。対応する箇所を台湾国家図書館近世写本六冊本で確認したところ、「何」以下「也臨也」の三字としたことが確認できた。



図版省略

高山寺本 台国六冊本

高山寺本では、「蠟」の注文は「力制反。水口也。」となり、「水」以下の義注字の右半分が虫損となり、字形が確認できない状態である。対応する箇所を台湾国家図書館近世写本六冊本で確認したところ、「水」以下の義注字は「虫念(蠟)」であることが確認できた。

上述の「苳」と「蠟」との二例を確認した。いずれも高山寺本『篆隸万象名義』では虫損で判然としない箇所であるが、近世写本でははっきり書写されたことを確認できた。これはいくつかの可能性が考えられる：①近世写本の依拠本は高山寺本『篆隸万象名義』ではない；②近世写本で確認できた内容は、高山寺本の虫損や紙質の変容が進む前の段階で、高山寺本を書写・校勘した近世学者の判読である；③近世写本を作成された時にもすでに高山寺本は判読できない状態であったが、考証した結果を記入した。①も否定はできないが、高山寺本『篆隸万象名義』は現存する唯一の古写本であり、その可能性は高くない。①より②と③の方がより合理的な解釈になる。

研究で一般に用いる『篆隸万象名義』の覆製本は高山寺本に基づくものである。主に崇文叢書（1926）、『篆隸萬象名義』（1966）、『高山寺本古辞書資料第一』（1977）、『弘法大師空海全集』（1984）に収録されたテキストが利用されている。表 3-2 の『篆隸万象名義』近世写本文献調査概況で示すように、近世写本の書写年代は 1830～1883 年の間となる。したがって、高山寺本の覆製本はいずれも、楊守敬の日本訪書の時期に遅れているため、高山寺本の虫損や紙質の変容が進む前の段階の写本を覆製したものと考えられる。

従来の研究では、このような原本が虫損で判読できない箇所は、先行文献、逸文、ほかの古辞書類の内容を参考にして推測するしかなかった。近世写本の内容は絶対に正確であると言い切れないが、近世写本で確認できた内容は、高山寺本の虫損や紙質の変容が進む前の段階で、高山寺本を実見・書写した近世学者の判読になる。この意味で、高山寺本『篆隸万象名義』の内容を知る上には非常に参考になる。さらに、近世の日本や中国の学者による古書校勘の態度や内容を検討する方法などについても確認できると考えられる。

### 3.5 まとめ

以上、本章では高山寺本『篆隸万象名義』の原本調査と近世写本の調査に基づき、書誌情報や本文内容について検討した。

『篆隸万象名義』はこれまで複製本が出版されており、容易に利用可能となっている。しかし、写本の常として誤写が避けられない。体例の不統一、難字、異体字、誤字、脱字、衍字、顛倒、錯簡、符号類（抹消符、補入記号等）のほか、押界も影印本では判然としない部分が多いため、学術的利用には原本調査が不可欠である。

また、これまでに近世写本は書誌研究以外にはほとんど重視されず、近世写本を利用した本文研究はほとんど皆無であった。筆者の調査により、近世写本の内容、高山寺本の虫損や紙質の変容が進む前の段階で高山寺を実見・書写した近世学者の判読であり、『篆隸万象名義』の本文研究に非常に参考になることが明らかになった。

高山寺本は明治三十二年（1899）に国宝に指定され、容易に原本調査できる書物ではない。さらに、近世写本も近現代のさまざまな歴史的な原因で、日本国内、中国大陸、台湾に分散して所蔵されているため、全所蔵機関の蔵本をすべて調査、資料入手するのは容易ではない。

このように、困難は多いが、高山寺本原本の調査、近世写本の調査は『篆隸万象名義』の研究を推進する上では非常に重要である。文献調査による本文研究も肝要なテーマであるため、本章では实例の指摘にとどまったものの、今後も調査を続行したい。

## 第4章 埋字と脱字

### 4.1 掲出字数をめぐる問題

高山寺本『篆隸万象名義』の掲出字数は、おおよそ16,000字と言われる。しかしながら、具体的な字数について、先行研究の集計では、15,657字から16,917字までの開きがある。これはなぜかというに、高山寺本の書写の際、あるいはそれ以前に、掲出字の脱落、誤写、重出、さらに掲出字が注文に繰り込まれるといった問題が生じており、その取り扱いのちがいが掲出字数の認定に現われたものと考えられる。

高山寺本『篆隸万象名義』までの書写過程において各種の問題が生じたことを考えれば、『篆隸万象名義』の掲出字を認定、整理する際に、『玉篇』残巻と突き合わせる必要がある。一方で、現存する『玉篇』残巻諸本は、書写年代や底本の相違から、それぞれ異なる性格を有する。貞苺(1958)は、反切、部首内掲出字の配列、部首配列の考察によって、『玉篇』残巻諸本と『篆隸万象名義』の親近性を論じており、貞苺(1989)は『篆隸万象名義』によって残巻『玉篇』相互の異本性が確認されると指摘した。上田(1970)はさらに反切用字の特色から、『玉篇』残巻諸本の新古の階層を究明した研究成果である。したがって、『篆隸万象名義』の掲出字数をめぐる問題を整理することは、掲出字数を数えることにとどまらず、掲出字の観点から、『説文解字』・『宋本『玉篇』』・『玉篇』残巻などと照合することによって、成立当初の『篆隸万象名義』や依拠した原本『玉篇』の収録字として認定できる範囲を限定することを意味する。

『篆隸万象名義』の掲出字を整理し、総字数を検討するには、高山寺本『篆隸万象名義』における繰り込み・脱落・重出・誤写の諸問題を段階的に整理することが必要となる。本章では、その一段階として、掲出字認定に関する研究成果を踏まえ、掲出字の形式に着目して、万象名義における注文に繰り込まれた掲出字、脱落した掲出字を整理する。最後に、この整理の結果として、掲出字数として考えられる範囲を提示したい。

本章では、次のように用語を定義する。まず掲出字が注文に繰り込まれたものを「埋字<sup>うめじ</sup>」と呼ぶ。埋字には2種類がある。一つは、音注・義注が備えられており、本来掲出字であったと考えられるもので、これを埋字Aとする。もう一つは、音注や義注が備えられず、本来は掲出字として存在したが、異体関係を示すことに重点が置かれたと思われるものであり、これを埋字Bとする。脱字にも2種類がある。一つは、掲出字が脱落するが、注文のあるものであり、これを脱字Aとする。もう一つは、『説文解字』及び『玉篇』残巻<sup>15</sup>・逸文、『新撰字鏡』の玉篇引用部分、宋本『玉篇』(増補部分を除く)に本文が存する

<sup>15</sup> 調査は東方文化叢書の複製本により、これに欠ける部分は古逸叢書本による。

ため『篆隸万象名義』にも本文があったと考えられるものであり、これを脱字 B とする。

以下、まず先行研究を検討する。次に、集計の方針を述べ、埋字 A・埋字 B、脱字 A・脱字 B のそれぞれについて認定の規準と問題点を検討する。最後にこれらの集計結果を示し、『篆隸万象名義』の掲出字数を考える基礎とする。

## 4.2 掲出字についての先行研究

### 4.2.1 掲出字数について

『篆隸万象名義』の掲出字数は原本『玉篇』に相当するとされる。原本『玉篇』の掲出字数は、唐封演の封氏聞見記に 16,917 字と記録される。それに従えば、『篆隸万象名義』の字数もそれに相当することになる。

吉田 (1954) では、15,657 字と具体的な数が示されるが、その詳細な言及はない。

宮澤 (1977) は掲出字の全体を翻字した研究成果である。掲出字についての考察と説文解字、『玉篇』残巻、宋本『玉篇』、『新撰字鏡』などとの対照調査の結果も整理されている。ただし、集計の数値は示していない<sup>16</sup>。

呂 (2007) は万象名義全文の翻字である。集計した掲出字数は、「掲出字及び重文を合わせて 16,429 字あり、重複の 152 字を除外すると、16,277 字である」(「重文」とは異体字を指す) とする。

また、中国での近年の『篆隸万象名義』の掲出字数に関する注目すべき成果として、柳・劉・李 (2013) がある。説文解字と対照し、『篆隸万象名義』の巻 (前 4 帖は 50 巻、後 2 帖は 15 巻) ごとに掲出字を集計したもので、結果として 16,275 字 (掲出字 : 15,925 字、重文 : 630 字、重複字 : 280 字) あったとする。

これらの研究で掲出字数が異なるのは、それぞれの集計の規準に起因すると考えられる。その規準については、ほとんど明記されるところがなく、相違点を明確にすることは困難である。やみくもに異なる研究成果を積み重ねないためにも、今後は集計規準を明らかにし、結果の詳細を示したうえで掲出字数を論じる必要があると考える。

### 4.2.2 玉篇系字書における掲出字の認定についての研究

#### 4.2.2.1 宮澤 (1977)

宮澤 (1977) は『篆隸万象名義』の掲出字を一覧しただけでなく、『篆隸万象名義』

---

<sup>16</sup> 平成 26 年 11 月 2 日、訓点語学会第 111 回研究発表会において本章の概要を口頭発表した際、発表会の席上、宮澤氏の集計による篆隸万象名義の字数について、ご教示を賜った。その詳細は次の通りである。篆隸万象名義の掲出字数 15,629 字、他項へ繰込の親字 175 字、親字へ繰込の異体字 316 字、合計 16,120 字。篆隸万象名義にないもの、説文・宋本の両方にある親字 156 字、説文・宋本の両方にある異体字 307 字、宋本にのみある親字 (増補部分を除外) 185 字、合計 16,768 字。

で注文に繰り込まれている掲出字（本章のいう埋字に相当するもの）なども示される。そして、『篆隸万象名義』を『説文解字』、『玉篇』残巻、宋本『玉篇』、『新撰字鏡』などとも対照し、本章のいう脱字 B に相当するもの、つまり『篆隸万象名義』で脱落していると認められる字、宋本『玉篇』に存する字（増補部分を除く）、『新撰字鏡』または『説文解字』にも見られ、『玉篇』に本来存した可能性の高い字を一覧表に反映させた。

宮澤（1977）について、馬淵（1978）は、『篆隸万象名義』の資料的価値のひとつは、原本『玉篇』の骨格をかなり忠実に伝えているため、原本『玉篇』及び宋本『玉篇』との比較作業は絶対に必要であること、「掲出字一覧表」はその前段階の研究と認めべきであることを指摘した。

#### 4.2.2.2 工藤（2002）

工藤（2002）は、原本『玉篇』の重文について、『篆隸万象名義』・宋本『玉篇』における受容の状況を考察し、宋本『玉篇』の重文は、伝統的な注記として継承されたため、原本『玉篇』の重文の代替として用いることが可能であることを示した。対象字書の異体の表示の様式について、「A ある掲出字に続けて異体関係にある文字を掲出する様式」と「Ba ある掲出字の注文内に、異体関係にある文字を「○字」・「作○」等によって示す様式」とに分ける。本章の埋字 B は Ba に相当する。工藤（2002）は、「古文」・「籀文」などの特徴的な形式を中心に調査したものであり、網羅的全身的な調査には及んでいない。

#### 4.2.2.3 臧（2004）

臧（2004）では、玉篇の掲出字について、「項目構造」と「字体・字種」との二方面から論述する。「項目構造」について、宋本『玉篇』において、掲出字は見出しと注文との二つの部分に含まれ、注文レベルに収録される異体掲出字が多いが、従来の研究に見落としがあると指摘する。そして、「字体・字種」について、異体字をすべて異なる掲出字として集計する方法と異体を考慮せずに字種で集計する方法があると述べる。宋本『玉篇』を実例とし、この二種類の方法で集計すると、それぞれ 22,794 字と 20,493 字の結果になり、おおよそ 2,000 字の差があると指摘する。

#### 4.2.2.4 呂（2007）

呂（2007）は中華書局写真版のテキストを基礎とし、『高山寺古辞書資料第一』に収録されたテキストも参考に、『説文解字』、『玉篇』残巻、宋本『玉篇』などの文献と照合し、校勘を加え『篆隸万象名義』の全文を翻刻したものである。掲出字は大字で翻刻さ

れており、参考になる。

#### 4.2.2.5 大柴 (2009b)

大柴 (2009b) は『篆隸万象名義』の部首字一覧についてまとめたものである。『篆隸万象名義』の全文の解読も終了しているようであるが、まだ公開されていないため、本章は特に言及しない。

#### 4.2.2.6 柳・劉・李 (2013)

柳・劉・李 (2013) では、『篆隸万象名義』の掲出字を正字頭<sup>17</sup>、積文字頭、箋注字頭に分類する。正字頭は注釈の対象となる大字で掲出された掲出字であり、一方の積文字頭は注文の中に示された掲出字であるが、大多数は正字頭の重文である。箋注字頭は刊修者により、補充的な注釈の中に示された掲出字である。いずれも具体例が示されず、判断規準として不明なところがあり、また掲出字数を集計した際にも、分類ごとの数字は示されていない。

#### 4.2.2.7 池田 (2014a)

池田 (2014a) は、平安時代の日本の古辞書の総合データベース(HDIC)を構築するプロジェクトとして、日本の古辞書からは『篆隸万象名義』・『新撰字鏡』・『類聚名義抄』のデータベース化に取り組んでいる。『篆隸万象名義』に関しては、UCS (Universal Coded Character Set; 国際符号化文字集合) の範囲で掲出字・所在情報などを整理した UCS 対応版が完成し、公開済である<sup>18</sup>。さらに、本文データベースの構築が進められている。

### 4.3 篆隸万象名義における掲出字の種類及び掲出字数の集計について

漢字字書は、その時代の漢字を収録し、収録された漢字について、さらに字音・字義・字体の記述を加えたもので、漢字学習や社会生活の漢字基準として参考になる書物である。収録された漢字は、字書が説明する対象であり、骨組みであるが、国や研究者によって異なる名称が用いられている。例えば、掲出字のことを中国では主に「字頭」と呼び、日本では「標字」「標出字」「親字」「掲出字」「見出字」などと呼ぶ。本章で議論する内容は、宮澤俊雅「掲出字一覧表」(1977)を踏まえたうえで修正、発展させるものであるため、本章ではこれに倣い、「掲出字」という用語を「漢字字書における説明の対象となる漢字」の意味で使用し、考察の中心とする。

<sup>17</sup> 中国側の研究では掲出字を「字頭」とする。

<sup>18</sup> <http://rose.hucc.hokudai.ac.jp/~o16404/shikeda/kojisho.html>

高山寺本『篆隸万象名義』の掲出字に関して原本『玉篇』との関係を見ると、楊(1901)、張(1934)、周(1935)、貞苺(1958)、上田(1970)、宮澤(1998)は、『篆隸万象名義』は原本『玉篇』を抜粋し、現存の『玉篇』残巻とは細部な違いがあるものの、基本的には原本『玉篇』を忠実に継承するものと考えている。一方で、『篆隸万象名義』を『玉篇』残巻と比較した場合に観察される部首順、反切、字義の相違点については、山田(1928)、岡井(1933)、川瀬(1955)は、『篆隸万象名義』が編纂されたときに、撰者独自の見解が加えられたとする。このように『篆隸万象名義』と原本『玉篇』との関係については研究者によって意見が分かれていることから、字書としての骨組みである掲出字を精査する必要があると考える。

本章では『篆隸万象名義』は原本『玉篇』を忠実に継承していると仮定し、『篆隸万象名義』及び原本『玉篇』に存在した可能性のある掲出字を網羅的に考察しようとするものであるが、考察に入る前に「掲出字」について規定しておく。『篆隸万象名義』の掲出字は、その体裁や先行する字書である説文解字、原本『玉篇』から受け継がれていることを考慮すると、狭義のものと広義のものがあると考え。狭義の掲出字は『篆隸万象名義』における隸書大字の掲出字を指し、広義の掲出字は隸書大字の掲出字以外のものも含め、この中に「埋字」と「脱字」を設定する。

高山寺本『篆隸万象名義』は各葉を上下二段、六列に書写する体裁を基本とする。この枠内に篆書(全体の約6%の部分にしか篆書掲出字が付かない)と隸書<sup>19</sup>の大字で掲出字が掲げられ、下に注文が付される。高山寺本の体裁から判断して、隸書の大字で記されたものを狭義の掲出字(隸書掲出字)とする。

一方、『玉篇』残巻では大字の掲出字であるが、『篆隸万象名義』では隸書掲出字として掲げず、注文に繰り込まれるものがある。宮澤(1977)ではこのようなものを、「篆隸万象名義で注文に繰り込まれた掲出字」と認定し、掲出字一覧表の該当位置に一字下げ挿入している。本章ではこれを広義の掲出字の中の「埋字」と定義する。この埋字には2種類がある。

一つは、音注または音注・義注を備え、本来掲出字であったと考えられるもので、本章ではこれを埋字Aとする。埋字Aに該当するものは、周(1935)では「名義の正文は他の字の下に付すものが多く、例えば玉部における瑀の下にある理、瑠の下にある璃、土部における埜下にある墪などがそれである。」<sup>20</sup>との指摘がある。

もう一つは、音注や義注を備えず、異体関係だけを示すものであり、本章ではこれを埋字Bとする。埋字Bに該当するものは、原本『玉篇』では異体掲出字として存在する。

<sup>19</sup> 書名及び唐代の用法に従って「隸書」を用いる。現在一般に楷書と呼ぶものをさす。

<sup>20</sup> 周(1935: p.202)「且名義正文附於他字之下者甚多，如玉部瑀下之理，瑠下之璃，土部埜下之墪，是也」

上田（1970）ではこれを「重文」と称し、「古文・籀文・或体等、玉篇で標出字としているが、その上の字と同字で、反切を記していない字の総称として用いる」と定義した。本章では、『篆隸万象名義』の注文に繰り込まれている原本『玉篇』の異体掲出字を埋字 B として扱う。

これに対して、『篆隸万象名義』に脱落した掲出字を「脱字」と呼ぶ。脱字にも 2 種類があり、一つは、掲出字が脱落するが、注文のあるものであり、これを脱字 A とする。もう一つは、説文解字及び『玉篇』残卷・逸文、『新撰字鏡』の玉篇引用部分、宋本『玉篇』（増補部分を除く）に本文が存するため『篆隸万象名義』にもあったと考えられるものであり、これを脱字 B とする。この種のものは、宮澤（1977）では『篆隸万象名義』で脱落していると認められた字、宋本『玉篇』に存する字（増補部分を除く）、『新撰字鏡』、または『説文解字』にも見られ、『玉篇』に本来存した可能性が高い字として認定し、「掲出字一覧表」に反映させている。

本章では、高山寺本『篆隸万象名義』の掲出字を上記のように分類・認定する。まず、隸書の大字で記載された掲出字を集計する。次に、注文に繰り込まれた埋字<sup>21</sup>を、その性質の違いにより埋字 A と埋字 B とに分類・認定した上で、さらに、『篆隸万象名義』に脱落したと考えられるものを、その根拠によって、脱字 A と脱字 B とに分類する。分類の基準については以下の節に述べる。

#### 4.4 埋字と脱字についての分析

##### 4.4.1 篆隸万象名義埋字と脱字の問題を通した原本玉篇の原貌の復元

本章では掲出字数を確定するために、埋字と脱字の概念を設定し、これらを整理する作業を行うが、それは、高山寺本『篆隸万象名義』までの書写過程で生じた問題を念頭に置きながら、可能な限り『篆隸万象名義』が依拠した原本『玉篇』の原貌を復元したいからである。特に埋字 B を整理するのは、『篆隸万象名義』の掲出字とその字体の検討を通して、原本『玉篇』における異体字の状況を把握するのに必要な作業である。

埋字と脱字の問題を重視する研究は従来少なく、特に埋字については、十分な扱いを受けてこなかった。埋字 A については、掲出字とほとんど区別されずに集計されることが多く、埋字 B は、掲出字として認定せず、集計の対象外にされることが多かった。

以下、埋字 A・B、脱字 A・B について、それぞれ検討を加えていく。

---

<sup>21</sup> ある掲出項目の注文に繰り込まれる埋字という現象は、万象名義のみならず、ほかの古辞書や音義類にも存在する。埋字という概念は、この種の問題を整理するための便宜となる。

## 4.4.2 埋字 A

### 4.4.2.1 埋字 A の認定と分析

埋字 A の認定の方法を述べる。まず、項目の注文に、主字（埋字が繰り込まれた項目の掲出字）と異なる字の記述にかかわる部分を確定する。次に、音注・義注の両方またはそのいずれかを備えるものは埋字 A と認定する。全部で 150 項目が該当する。その帖ごとの内訳は、第 1 帖 105 項目、第 2 帖 1 項目、第 3 帖 1 項目、第 4 帖 2 項目、第 5 帖 40 項目、第 6 帖 1 項目である。次に例を示す。埋字、主字（埋字が繰り込まれた項目の掲出字）、主字の注文（埋字とその注文を含む）、所在の順で示す。埋字 A とその注文を [] でくくり下線を施す。句読点は筆者による。

- |     |   |   |      |   |
|-----|---|---|------|---|
| (1) | 柴 | 柴 | 仕佳反。 | 祭天曰焚、柴也。 <u>[柴:仕佳反。燹。]</u> 禱、柴文。<br>(第 1 帖 17 丁表)   |
| (2) | 玘 | 璵 | 湯典反。 | 古文。玘也。璵、古文。 <u>[玘:去理反。]</u> (第 1 帖 21 丁裏)<br><u>[理:力紀反。正也、吏也、分也、性也、事也、道也、從也、治也、媒也。]</u> (第 1 帖 27 丁表) |
| (3) | 理 | 瑀 | 魚胡反。 | <u>[理:力紀反。正也、吏也、分也、性也、事也、道也、從也、治也、媒也。]</u> (第 1 帖 27 丁表)  |
| (4) | 邲 | 都 | 如灼反。 | <u>[邲:舒甚反。]</u> (第 1 帖 48 丁裏)   |
| (5) | 囂 | 𠂔 | 詔煩反。 | 驚呼也。 <u>[囂:火元反。]</u> 驚也。(第 3 帖 26 丁表)   |
| (6) | 泛 | 泠 | 或敢也。 | <u>[泛:孚劒反。舟流兒。]</u> (第 5 帖 93 丁裏)   |
| (7) | 澗 | 澗 | 上同。  | <u>[澗:徒見反。滓也、澤也。]</u> (第 5 帖 97 丁裏)   |

埋字 A と対応する主字との関係を検討してみると、大きく四つのタイプに分けられる。

・注文用字を注釈するタイプ : (1) (2) の「柴」・「玘」ように、主字の注文に用いる字の音・義が難解である場合、それについてさらに説明を加えたもの。

・地名用字を合併するタイプ : (4) のように、主字の「都」と埋字 A の「邲」について、『篆隸万象名義』では反切のみが記述される。宋本『玉篇』で確認すると、

都 如灼切。左氏傳曰秦晉伐都、秦楚界小國也。(宋本『玉篇』上 22 丁表)

邲 舒甚切。左氏傳曰敗戎於邲垂。杜預云周地河南新城縣北有垂亭。

(宋本『玉篇』上 22 丁表)

との記述があり、いずれも中国の地名であり、宋本『玉篇』では詳しい説明がある。このような中国の地名を示す字は、『篆隸万象名義』では、字義を省き、字音を表す反切しか残しておらず、「邲」の項目が「都」の項目の注文に繰り込まれ、一つの項目に統合したと考えられる。このような例は「邑部」では 17 例が確認できる。これらは万象名義では、実用の面を考慮し、義注が省かれた地名用字を一項目に統合したと考えられる。

・脱落掲出字を補うタイプ : (6) (7) の「泛」と「澗」は、原本『玉篇』で確認すると、

主字の「泠」と「澹」の次項にある独立した掲出字である（詳細は後述する）。

『篆隸万象名義』では最初脱落した項目を順次に前項の注文に補われたと考えられる。

・主字と無関係のタイプ：(3)(5)の「理」・「囂」のように、主字の「瑀」と関連や共通するところがなく、単純に主字の注文に繰り込まれたと考えられる。

埋字 A のうち、(6) と (7) に対応する『玉篇』残卷（卷 19 水部）の内容は次の通りである。（『玉篇』残卷での出現順に示す。）

(8) 淦 □欠部。又音古暗□…□□□日淦、水所出西入湖漢。

(9) 泠 説文或淦字也。廣雅泠取也。

(10) 泛 孚劒反。國語泛舟于河、賈逵曰泛浮也。毛詩泛彼栢舟、傳曰泛と流兒也。又曰泛と其景、傳曰泛と駛疾而不疑也。説文從之聲也、此亦汜字、相似而不同。漢書或以爲罽字、罽覆也。音方隴反。罽駕之馬是也。在西部。

(11) 漉 理屋反。考工記清其灰而漉之。野王案漉猶瀝也。爾雅漉竭也。郭璞曰月令無漉陂と池是也。方言漉涸也、漉極也、郭璞曰漉滲極盡也。廣雅漉盡也。

(12) 澹 字書亦漉字也。或復為盪字、在皿部。

(13) 澱 達見反。爾雅澱謂之澁、郭璞曰澱滓也、江東呼澁。或為黶字、在黑部。

「泠」と「泛」は原本『玉篇』では連続して掲出され、類似形字とは考えられるが、内容上関連しない。「泠」は前項目の「淦」の異体字である。『篆隸万象名義』において、「泛」が埋字 A の形式で「泠」の注文にあるのは、編纂あるいは書写の段階で脱落した掲出字を補うものと考えられる。第 5 帖では、このように脱落した掲出字を順次補うものは 27 項目が確認できる。（原本『玉篇』残卷に存しない項目については、宋本『玉篇』にて確認した。）

埋字 A が、原撰部分<sup>22</sup>において、第 1 帖に集中するのは、字書編纂の最初の段階で、体裁上底本となる原本『玉篇』の掲出字をどのように取り入れるか、その方針がまだ固められていないため、隸書掲出字のほかに、埋字 A のかたちで注文に繰り込まれるものが多くなったと考えられるが、続撰部分では第 5 帖に埋字 A の例が多いことは、第 1 帖と同様に、編纂方針が固まっていないことが想定される。

<sup>22</sup> 万象名義は 6 帖の構成で、第 1 帖から第 4 帖までは弘法大師空海の撰述によるもので、原撰部分といい、第 5 帖・第 6 帖は他の撰者によるもので、続撰部分という。

#### 4.4.2.2 埋字 A の詳細

埋字 A と認定する 150 項目について、宮澤 (1977) と呂 (2007) と対照すると、収録しないものはそれぞれ次の 8 字と 5 字である。

宮澤 (1977) で収録しないもの：柴、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎

呂 (2007) で収録しないもの：柴、𠄎、𠄎、𠄎、𠄎

上記の「柴」・「𠄎」・「𠄎」の部首は、それぞれ主字と異なっているが、『玉篇』残巻の掲出字が該当部首と異なる部首に掲出されているものは、次の 18 字ある (説文解字、字書などで古文とする異体字が 14 字含まれる)。

𠄎 (言部)・𠄎 (言部)・𠄎 (言部)・𠄎 (欠部)・𠄎 (欠部)・𠄎 (甘部)・𠄎 (甘部) 𠄎 (甘部)・𠄎 (次部)・𠄎 (次部)・𠄎 (水部)・𠄎 (水部)・𠄎 (广部)・𠄎 (石部) 𠄎 (阜部)・𠄎 (糸部)・𠄎 (糸部)・𠄎 (糸部)

『篆隸万象名義』において、これらの中の𠄎・𠄎・𠄎・𠄎・𠄎・𠄎・𠄎の 8 字は隸書掲出字となっており、これは部首が異なっても掲出字項目として成立する傍証になる。𠄎・𠄎・𠄎の 3 字は後に述べる埋字 B となっており、いずれも説文解字や字書による古文や籀文としての異体字である。𠄎・𠄎・𠄎・𠄎・𠄎・𠄎の 7 字は脱字 B となっている。

以上のように、同一の部首の中に、異なる部首の字も掲出字項目として成立する例が確認でき、したがって、「柴」・「𠄎」・「𠄎」三字は埋字 A と認定し、『篆隸万象名義』では掲出字として単独の項目を立てず、弁似を目的として増訂され、注文レベルで収録された字と考えられる。

#### 4.4.3 埋字 B

##### 4.4.3.1 埋字 B の認定

埋字 B は、注文に繰り込まれた掲出字であり、音注や義注を備えず、異体関係だけを示すものである。全部で 561 項目が該当する。帖ごとの内訳は、第 1 帖は 183 項目、第 2 帖 11 項目、第 3 帖 29 項目、第 4 帖 58 項目、第 5 帖 269 項目、第 6 帖 11 項目である。次の例で確認してみよう。(埋字 B の部分を [] でくくり下線を施す。対応する原本『玉篇』残巻と宋本『玉篇』の内容も示す。)

(14) 廟 靡召反。兒。[𠄎：古廟。] (第 6 帖 9 丁裏)

(15) 廟 靡召反。尚書七世之𠄎可以觀德、孔安國曰天子七𠄎、有德之主則爲宗其𠄎干不毀。尔雅室有東西廂曰廟。韓詩鬼神所居曰𠄎神。礼記夫子七𠄎、三昭三穆与大祖之𠄎而五、大夫三𠄎、一昭一穆与大祖之𠄎而三、士一𠄎、鄭玄曰此同制也、殷即六𠄎之也。白虎通曰先祖之尊兒所在也。

(原本『玉篇』残卷 卷 22 广部)

廡 説文古文廟字也。(原本『玉篇』残卷 卷 22 广部)

(16) 廟 靡召切。宗廟也。(宋本『玉篇』下 15 丁裏)

廡 古文。(宋本『玉篇』下 15 丁裏)

(17) 廟 尊先祖也。从广朝聲。廡、古文。(説文解字卷 9 广部)

上記の例では、「廡：古廟」は「廡」と主字「廟」との異体関係を記述する部分である。原本『玉篇』でその点を確認される。この「廡」は、工藤(2002)の「ある掲出字に続けて異体関係にある文字を掲出する様式」にあたるものであり、重文あるいは異体掲出字ともいう。『篆隸万象名義』では、「廡」は埋字 B として処理され、説文解字の重文の形式に類似する。

埋字 B を認定する際、原本『玉篇』の対応項目と比較することが必要であるが、原本『玉篇』は大部分が散逸しているため、他の関連文献で確認し、判断しなければならない。

埋字 B を認定する手順は次の通りである。

- ① 項目の字体の記述にかかわる部分を確定する。
- ② 『新撰字鏡』の重文や宋本『玉篇』の重文を確認できる場合、埋字 B と認定する。  
宋本『玉篇』の重文は原本『玉篇』の重文の代替として用いることが有効であるとする工藤(2002)の見解に従うものである。また、『新撰字鏡』や宋本『玉篇』の重文との対照調査の結果を整理する宮澤(1977)も参考にする。
- ③ 『新撰字鏡』の玉篇引用部分の重文や宋本『玉篇』の重文を確認できない場合、該当字が籀文・古文に相当するか説文解字で確認し、相当する場合、埋字 B と認定する。
- ④ 籀文・古文に相当しない場合、該当字が『篆隸万象名義』のほかの掲出字項目であるかを確認し、該当字が主字と同部首で、そして掲出字項目でない場合は、埋字 B と認定する。
- ⑤ 該当字が『篆隸万象名義』のほかの掲出字項目である場合は、埋字 B でないと認定する。

なお、原本『玉篇』では異体関係を示すのは、同部首の場合、異体掲出字として立項して説明する。異部首の場合、「為○字」などの字体注記として注文の中で記し、これはずでにほかの部首で独立の項目として成立するため、本章では埋字 B として認定しない。

#### 4.4.3.2 原本玉篇と対応する部分の埋字 B

埋字 B は『篆隸万象名義』の依拠した原本『玉篇』の重文を掲出字と注文の両方に入れる方針にかかわる。項目構造の観点から、注文レベルにある異体掲出字に注目する。

『篆隸万象名義』と『玉篇』残巻を比較してみると、38 個の埋字 B を見出すことができる（表 4-1）さらに、宋本『玉篇』、説文解字とも対照すると、次のことが分かる。

- ① 原本『玉篇』の重文項目は主に説文解字、字書、聲類の三つの先行文献から取り入れている。
- ② 原本『玉篇』の項目ごとの注文は平均約 40 字であり、さまざまな典拠や用例によって意味を記述するが、重文項目の注文は平均約 9 字であり、異体関係を示すことに重点をおいている。
- ③ 『玉篇』残巻で確認でき、工藤（2002）で指摘された「ある掲出字に続けて異体関係にある文字を掲出する様式」の異体掲出字の一部は、『篆隸万象名義』の第 3 帖、第 5 帖と第 6 帖では埋字 B として処理される。（前掲例（14））
- ④ 説文解字で確認できる対応項目は 21 個あり、いずれの重文項目も主字の注文に繰り込まれる。原本『玉篇』ではある掲出字に続けて、異体関係にある文字を掲出する様式であるのに対して、『篆隸万象名義』の方は埋字 B であり、説文解字の形式と類似する。『篆隸万象名義』の編纂段階で、重文については、部分的に説文解字の形式を参照しながら、取り入れた可能性がある。次の例で確認する。埋字 B の部分を [] でくくり下線を施す。

(18) 漉 里屋反。竭也。[漉：同上。]（第 5 帖 97 丁表）

(19) 漉 理屋反。考工記清其灰而漉之、野王案漉猶瀝也、尔雅漉竭也、郭璞日月令無漉陂々池是也、方言漉涸也、漉極也、郭璞曰漉滲極盡也、廣雅漉盡也。（原本『玉篇』残巻 卷 19 水部）

漉 説文或漉字也。（原本『玉篇』残巻 卷 19 水部）

(20) 漉 浚也。从水鹿聲。一曰水下兒也。漉、漉或从泉。

（説文解字卷 11 水部）

表 4-1 『篆隸万象名義』における原本『玉篇』と対応のある埋字 B

番号	埋字 B	主字	主字 注文	原本 注文	宋本 注文	説文
第三帖						
1	諭	話	朝快反。謂也、調也。〔諭也話字。〕	説文籀文話字也。聲類或僮字也、僮合僮市也。音古會反。在人部。人部。字書古文為𠄎字、在舌部也。	許界切。怒聲。説文云籀文話。	籀文話从會。
2	諺	諺	直移反。離也、別也。〔諺：諺字。〕	聲類亦諺字也。	同上。	無
3	諍	諍	補潰反。乱也、逆也。〔諍古。〕	説文籀文諍字也。	同上。	籀文諍从二或。
4	譽	譽	子移反。量也、思也。〔譽：譽字。〕	字書或爲譽字也。	無	無
5	詢	詢	道力反。小兒未能正語也、祝也。〔詢：詢字。〕	説文或詢字也	同上。	詢或从包。
6	訇	訇	胡觸反。音大。〔訇：訇字。〕	説文籀文訇字也。	籀文。	籀文不省。
7	諗	諗	胡濫反。誕也、話也、調也。〔諗：諗字。〕	説文俗諗字也。	同上。	俗諗从忘。
8	諛	諛	似醯反。讓也、蹶也、訶也、嬈也、箴也。〔諛：諛字。〕	聲類亦諛字也。	無	古文諛从肖。周書曰亦未敢諛公。
9	讒	讒	居展反。難也、吃也。〔讒：讒字。〕	聲類亦讒字也。	同上。	無
第五帖						
10	巽	巽	助纘反。撰字。〔巽：古文數。〕	説文古文巽字也。	古文。	古文巽。
11	𠄎	其	渠基反。辭也、豈也。〔𠄎：古其。〕	亦古其。	古文。	無
12	卜	卜	補祿反。〔卜：古文。〕赴也。	説文古文卜字也。	古文。	古文卜。
13	較	較	古學反。見也、明也。〔較：同上。〕	字書亦較字也。	古學切。兵車也。又古孝切。	無
14	輻	輻	力庭反。門橫木。〔輻：同上。〕	説文司馬相如説輻字如此。	同上。	輻或从𠄎、司馬相如説。
15	輻	輻	視專反。无輻曰轉。〔輻：同上。〕	聲類亦輻字也。	同上。	無
16	輻	輻	魚鷄反。輻端橫木。〔輻：同上。〕	説文亦輻字也	同上。	輻或从互。
17	輻	輻	他同反。盛兒。〔輻：同上。〕	字書亦輻字也。	同上。	無

18	輶	輶	仕潤反。載柩車。 〔輶：同上。〕	聲類亦輶字也。	同上。	無
19	輶	輶	呼苟反。〔輶：同上。〕	字書亦輶字也。	同上。	無
20	般	般	菩安反。樂也、施也、大也。〔般：同上。〕	說文古文般字也。	無	古文般从支。
21	漚	砵	力蜀反。度也。水至心為砵。〔漚：同上。〕	說文亦砵字也。	同上。	砵或从厲。
22	漚	漚	直斬反。水不流。安也、沒也、露盛兒。〔漚：古文。〕	說文古文漚字也。	古文。	古文。
23	漚	漚	思微反。小雨。〔漚：同上。〕	淮南雨霓瀼瀼、則漚	先悲切。同上。	無
24	涵	涵	胡耽反。水澤多。〔亦涵。〕	胡耽反。說文水澤名也。毛詩僭始既涵。	同上。又下啗切。沒也。	無
25	洳	澤	如鹿反。漸濕也。〔洳：同上。〕	亦澤字也。	同上。	無
26	濕	溼	尸立反。水流就幽也、詩也、遲也、潤也、主也。〔濕：或。〕	字書亦溼字也。	同上。說文：他合切。	無
27	溲	溲	所留反。清汰也、小便也。〔溲：古文。〕	字書古文溲字也。	無	古文。
28	漚	漚	里激反。清酒也、沃。〔漚：今同上。〕	聲類今漚字也。	同上。	無
29	漚	漚	里屋反。竭也。〔漚：同上。〕	說文或漚字也。	說文與漚同。又音綠。水也。	漚或从录。
30	漚	浚	思閏反。須也、取也、深也。〔漚：同上。漚：古文。〕	說文古文漚字也。	同上。	古文。从水、从睿
31	漚	浚	思閏反。須也、取也、深也。〔漚：同上。漚：古文。〕	說文古文睿字也、睿谷深也、在谷部。聲類亦浚字也。	古文。	或从水。
32	牀	漿	子楊反。飲。〔牀：古。〕	說文古文漿字也。	古文。	無
33	漚	澆	公堯反。薄也、沒也、沃清也。〔漚：或也。〕	字書或澆字也。	同上。	無
34	沫	頰	呼憤反。洗面。〔沫：篆文。〕	說文此篆文頰字也、沫洒面也。廣雅沫洗也。	同上、又莫貝切、水名	無
第六帖						
35	嶼	嶼	同上字。〔嶼：同上。〕	聲類亦嶼字也。	同上。	無
36	廟	廟	靡召反。兒。〔廟：古廟。〕	說文古文廟字也。	古文。	古文。
37	礪	礪	渠桀反。時立。〔礪：同上古文。〕	說文古文礪字也。	古文。	古文。
38	礪	礪	力的反。小石。〔礪、同上。〕	字書亦礪字也。	同上。	無



の内訳は、第1帖34項目、第2帖92項目、第3帖110項目、第4帖132項目、第5帖35項目、第6帖73項目である。脱字Bについて、『玉篇』残巻と対応する箇所を確認すると、『玉篇』残巻で異体掲出字として掲載されたものの多数は、『篆隸万象名義』に見えない。原本『玉篇』の掲出字項目は主に一般掲出字項目と異体掲出字項目に分けられる。異体掲出字は、前述のようにある掲出字に続けて異体関係にある文字を掲出する様式である。一般掲出字項目は、典拠や用例によって意味を記述するに対して、異体掲出字項目は、異体関係を示すことに重点をおいている。

『玉篇』残巻の巻9を例にすると693掲出字項目がある。内訳は、一般掲出字項目が637項目、異体掲出字項目が56項目である。『玉篇』残巻の巻9の範囲で『篆隸万象名義』が『玉篇』残巻の異体掲出字と対応しないものは47項目ある(表4-2)。これに対して宋本『玉篇』が原本『玉篇』残巻の異体掲出字と対応しないものは5項目しかない。脱字B全体の476項目のうち、295項目の異体掲出字は『篆隸万象名義』では見えないことが確認できる<sup>23</sup>。

表4-2 篆隸万象名義における原本玉篇の異体掲出字の採録状況(原本玉篇残巻・巻9)

番号	異体掲出字	上字	原本『玉篇』の注文	万象名義	宋本玉篇
1	論	話	説文籀文、話字也。聲類或儻字也。儻合儻市也。音古會反。在人部。人部字書古文為𠄎字、在舌部也。	○	○
2	諺	諺	聲類亦諺字也。	○	○
3	𠄎	諄	説文福文諄字也。	○	○
4	𠄎	𠄎	説文古文𠄎字也。	×	○
5	𠄎	𠄎	字書或爲𠄎字也。	○	×
6	詢	詢	説文或詢字也。	○	○
7	詢	詢	説文籀文詢字也。	○	○
8	讞	讞	説文俗讞字也。	○	○
9	𠄎	誕	説文籀文誕字。	×	○
10	𠄎	講	字書或講字也。	×	○
11	𠄎	𠄎	聲類亦𠄎字也。	×	○
12	𠄎	𠄎	説文籀文龍字不省。	×	○
13	𠄎	𠄎	字書亦𠄎字也。	×	×
14	𠄎/𠄎	詢	説文亦詢字也。/説文亦詢字也。	×	○
15	訟	訟	説文古文訟字也。	×	○
16	𠄎	譙	聲類亦譙字也	○	×
17	𠄎	𠄎	聲類亦𠄎字也	○	○
18	𠄎	訴	説文亦訴字也	×	○
19	𠄎	𠄎	説文亦𠄎字也。	×	○

<sup>23</sup> 『玉篇』残巻と対応する部分は例示した巻9と同手順で確認し、『玉篇』残巻と対応しない部分は、原本『玉篇』の重文の代替として宋本『玉篇』の重文を用いて確認した。

20	調	調	說文亦調字也。	×	○
21	譟	譟	說文亦譟字也。	×	○
22	諛	諛	說文亦諛字也。	×	○
23	詢	詁	說文亦詁字也、聲類或爲詁字、在口部。	×	○
24	誦	誘	說文亦誘字也。	×	○
25	諳	諳	字書亦諳字也。	×	○
26	諺	詫	字書亦詫宅也。	×	○
27	曹	曹	字書今爲曹字也。	×	○
28	乃/𠄎	乃	說文古文乃字也。/說文籀文乃字也。	×	○
29	鹵	鹵	說文古文鹵字也。	×	○
30	于	亏	字書今爲亏字也。	×	○
31	𦉳	𦉳	說文籀文𦉳字也。	×	○
32	嚴	嚴	說文古文嚴字也。	×	○
33	齒/菀	次	聲類古文次字也。/字書亦古文次字也。	×	○
34	饑/餽	饋	說文或饋字也、饑、飧飯也。/說文亦饋字也。	×	○
35	糗	糗	說文籀文糗字也。	×	○
36	饌/飴	飴	說文亦飴字也。/字書亦飴字也。	×	○
37	饌	飧	說文或飧字也。	×	×
38	饌	饌	說文𠄎饌饌字也。	×	○
39	履	饋	字書古文饋字也。	×	○
40	錫	餼	說文或錫字也。	×	○
41	滄	餐	說文今滄字也。	×	○
42	飴	餽	字書亦為餽字。	×	○
43	餼	飴	字書亦為飴字。	×	○
44	飴/饌	飽	說文古文飽字也。/說文亦古文飽字也。	×	○
45	饌	饌	說文籀文饌字也。	×	○
46	饌	飧	亦飧字也。	×	○
47	飧	饌	字書古文饌字也。	×	○
48	飧	飧	字書古文飧字也。	×	○
49	饌	饌	方言饌饌也、字書亦為饌字。	×	○
50	饌	饌	聲類亦饌字也。	×	○
51	飧	饌	穀梁傳、惟哭飧粥。廣雅飧、饌也。說文亦饌字也。	×	○
52	飧	飲	說文古文飲字也。	×	○
53	飧/𠄎甘瓦	飧	說文亦飧字也。/字書古文飧字也。	×	×
54	甚	甚	說文古文甚字也。	×	○
55	旨	旨	說文古文旨字也。	×	○
56	次	次	字書籀文次字也。	×	○

#### 4.5 本研究における篆隸万象名義の掲出字の集計

本章の結果を表 4-3 に示す。表 4-3 には、巻ごとに隸書掲出字、埋字 A・B、脱字 A・B の字数と合計の結果を示す。比較対照として、柳・劉・李（2013）の結果も掲げる。

柳・劉・李（2013）の掲出字は、脱字 A に相当するものは含むが、注文に繰り込まれた掲出字、つまり埋字 A を隸書掲出字と区別せずに集計する。重文は埋字 B に相当するものである。ただ、柳・劉・李（2013）では、重文の認定規準が明記されないため、詳細に比較することは難しい。柳・劉・李（2013）の認定した掲出字 15,925 字に相当する本章の隸書掲出字・埋字 A・脱字 A の字数の合計は 15,962 字である。埋字 B（重文）を加えると、本章の集計結果は 16,523 字となり、柳・劉・李（2013）のものは 16,555 字となる。さらに、脱字 B を加算すると、本章における掲出字数の合計は 16,999 字になるが、誤写、重出の問題を整理すると、『篆隸万象名義』の掲出字数はこの結果よりいくぶん少なくなると推測される。

表 4-3 『篆隸万象名義』の掲出字数表〔柳・劉・李（2013）と対照〕

本研究						柳・劉・李（2013）		
巻数	隸書 掲出字数	埋字 A	脱字 A	埋字 B	脱字 B	巻数	字頭	重文
1	103	5	0	57	2	1	111	48
2	93	1	0	21	2	2	100	22
3	94	20	0	13	0	3	110	14
4	163	18	0	21	3	4	183	19
5	121	19	4	21	7	5	143	22
6	199	21	0	1	5	6	220	2
7	174	9	0	11	1	7	193	10
8	217	4	0	3	1	8	222	6
9	351	0	0	4	11	9	353	2
(10)	—	—	—	—	—	10	—	—
11	167	8	0	11	1	11	172	9
12	264	0	0	21	1	12	273	20
13	156	0	0	4	5	13	156	3
14	320	0	3	2	13	14	323	1
(15)	—	—	—	—	—	15	—	—
16	187	1	1	0	8	16	189	0

17	107	0	1	1	8	17	108	0
18	121	0	0	0	11	18	121	0
19	226	0	0	0	3	19	226	0
20	87	0	0	0	12	20	86	0
21	198	0	0	0	5	21	199	0
22	123	0	0	0	8	22	123	0
23	206	0	0	2	4	23	206	1
24	139	0	0	0	6	24	140	0
25	152	0	0	0	6	25	152	0
26	130	0	0	0	3	26	130	0
27	158	0	0	1	1	27	158	1
28	206	0	1	10	8	28	206	6
29	186	0	0	3	26	29	187	1
30	165	1	0	0	17	30	166	0
31	155	0	0	0	29	31	155	2
32	213	0	0	0	4	32	213	0
33	189	0	1	4	1	33	187	5
34	88	0	0	1	1	34	89	0
35	96	0	0	1	11	35	96	1
36	161	0	0	1	4	36	161	1
37	194	0	0	4	2	37	195	2
38	173	0	0	3	8	38	173	4
39	179	1	0	14	3	39	176	12
40	117	0	0	3	7	40	113	3
41	119	0	2	4	67	41	118	5
42	192	0	0	0	2	42	192	8
43	176	0	0	6	15	43	167	6
44	157	0	0	10	5	44	154	10
45	181	1	0	5	2	45	178	5
46	226	0	0	5	3	46	223	3
47	133	0	1	6	7	47	132	7
48	153	0	0	1	8	48	152	3

49	132	0	0	3	8	49	129	4
50	205	0	0	3	0	50	205	12
15	313	2	0	17	8	15 之 下	319	21
16	345	11	0	32	3	16	385	37
17	347	9	1	52	9	17	327	53
18	733	5	0	57	5	18	737	60
19	633	4	0	44	3	19	636	46
20	512	9	0	26	5	20	516	42
21	465	0	0	41	5	21	464	52
22	616	0	0	7	7	22	609	14
23	712	0	0	0	5	23	708	10
24	625	0	0	1	6	24	626	2
25	598	0	0	1	13	25	594	3
26	427	0	0	0	7	26	429	0
27	413	0	0	0	10	27	411	2
28	431	0	0	1	11	28	427	2
29	275	0	0	0	8	29	573	6
30	300	1	0	1	8	(30)		
合計	15,797	150	15	561	476	合計	15,925	630
	15,947		15	561	476			
	15,962			561	476			
	16,523				476			
	16,999							16,555

\* 卷数(10)・(15)は『篆隸万象名義』の原文に記載なし、卷(30)は柳・劉・李(2013)に脱けている

#### 4.6 まとめ

成立当初の『篆隸万象名義』、もしくは原本『玉篇』に存在した可能性のある掲出字の全体像を描くために、本章では記述構造の観点から高山寺本を整理し、説文解字、宋本『玉篇』、原本『玉篇』残巻、『新撰字鏡』などを総合することによって、考察対象の広義掲出字を三つのカテゴリーに区分したうえで、その範囲を限定したい。

次の図 4-1 で示しているように、隸書掲出字は 15,797 字あり、脱字 A は 15 字あり、埋字 A は 150 字あり、埋字 B は 561 字あり、脱字 B は 476 字ある。これらは a・b・c のカテゴリー別に分けられ、『篆隸万象名義』、もしくは原本『玉篇』に掲出字として収録された可能性の順序は次の通りである。  $a > b > c$

<b>a</b>		<b>b</b>		<b>c</b>
隸書掲出字 15,797	脱字 A 15	埋字 A 150	埋字 B 561	脱字 B 476
15,812		711		476
16,523				476
16,999				

図 4-1 篆隸万象名義における掲出字の階層について

- a : 隸書掲出字と脱字 A は『篆隸万象名義』では独立した項目である。体裁上、『篆隸万象名義』の掲出字として収録されていることを確認できた。
- b : 埋字 A と埋字 B とはほかの項目の注文に繰り込まれる項目である。埋字 A について、宮澤（1977）と呂（2007）では主字と別に立項した。埋字 B について、宮澤（1977）は主字と以外に立項したが、呂（2007）はほとんど注文内字として処理し、新たに立項しない。
- c : 説文解字及び原本『玉篇』残巻・逸文、『新撰字鏡』の玉篇引用部分、宋本『玉篇』（増補部分を除く）に本文が存するため、『篆隸万象名義』にも存在した可能性が高い項目である。宮澤（1977）は脱字 B について、『篆隸万象名義』や原本『玉篇』に本来存した可能性が高い字として認定し、「掲出字」一覧表に反映させている。

以上、主に『篆隸万象名義』の項目の記述構造に着目し、埋字と脱字を整理することによって、隸書掲出字以外に、『篆隸万象名義』の注文レベルに存した可能性のある掲出字と脱落したと考えられる掲出字を考察した。本章では、a・b を合わせ、つまり高山寺本『篆隸万象名義』にその存在を確認できる掲出字として、隸書掲出字・埋字 A・埋字 B・脱字 A を認定し、16,523 字とした。そして、c の脱字 B を加えると、16,999 字になる。現

在、誤写、重出の問題を整理するまえの段階であり、脱字 B すべてが『篆隸万象名義』にあったかどうかは確言できない。現段階では、本来『篆隸万象名義』の掲出字数を想定できる範囲は 16,523 字から 16,999 字である。

本章はまず準備段階として、『篆隸万象名義』の隸書掲出字、埋字、脱字を整理した。次に、掲出字中の誤字・重複字を確実に指摘整理した。この二つの分析によって、『篆隸万象名義』の掲出字を明らかにするとともに、本文の増訂と脱落を検討する基礎とする。さらに、説文解字から原本『玉篇』、原本『玉篇』から宋本『玉篇』への増字の状況の把握をも目的としている。これらの問題の解明は今後の課題にしたい。

附表 1 埋字 A リスト

埋字 A	主字	主字注文	宮澤 (1977)	呂 (2007)
第 一 帖				
衺	祀	徐理反。祭也、歳也。禩 β、上文。 〔衺:俾利反〕。禩 γ。	○	○
柴	柴	仕佳反。祭天曰焚、柴也。〔柴:仕佳 反。燔〕禱、柴文。	×	×
禩	禩	居依反。祥也。又〔禩:思離反、福 也〕。	○	○
禩	禩	始銳反。祭也。〔禩:力内反。月祭 也〕。	○	○
恆	二	耳異反。〔恆:恒字。常也〕。	○	○
𠄎	恒	何登反。久也、猛也、常也。𠄎、古 文。恒 β、同上。〔𠄎:求宣也〕。	×	×
玨	璵	湯典反。璵 β、古文。玨也。璵、古 文。〔玨:去理反〕。	○	○
璵	璵	翼(玉反)。珠也、玉美也。〔璵:翼居 反、美玉〕。	○	○
琳	球	渠周反。玉磬。〔琳:力金反。玉 名〕。	○	○
珙	塘	徒當反。玉名。〔珙:居庸反、玉 名〕。	○	○
璫	琛	勅林反。重也。〔璫:似瞻反。玉 名〕。	○	○
瑚	珊	珊、瑚也。〔瑚:后都反。璫也、簠簋 也〕。	○	×
理	玼	且礼反。鮮明也。〔理:力紀反、分 也、事也、治也、媒〕。	○	○
琨	琨	翼之反。五色石也。〔琨:五巾反〕。	○	○
理	瑀	魚胡反。〔理:力紀反。正也、吏也、 分也、性也、事也、道也、從也、治也、 媒也〕。	○	○
璫	璫	九鳩反。〔璫:力支反、璫也〕。	○	○
玳	珂	枯何反。馬璫也、螺屬也、白也。 〔玳:同上。思律反〕。	○	○
玳	璫	餘照反。〔玳:胡鐺反〕。	○	○
璫	璫	達黨反。金美也。〔璫:苦話反〕。	○	○
玳	璫	扶福反。〔玳:胡鐺反〕。〔璫:吁羽 反〕。	○	○
璫	璫	扶福反。〔玳:胡鐺反〕。〔璫:吁羽 反〕。	○	○
玳	班	補姦反。別次也、賦也、徧也、位也、 列也、賜也、布也、還。〔玳:胡恤 反〕。〔璫:苦話反〕。	○	○
璫	班	補姦反。別次也、賦也、徧也、位也、 列也、賜也、布也、還。〔玳:胡恤 反〕。〔璫:苦話反〕。	○	○

玨	瑟	所昵反。閑也。〔玨:古樂反〕。〔玨:扶福反、皮篋〕。〔班:補姦反。還也、次也、賜也、布也〕。	○	○
璉	瑟	所昵反。閑也。〔玨:古樂反〕。〔璉:扶福反、皮篋〕。〔班:補姦反。還也、次也、賜也、布也〕。	○	○
班	瑟	所昵反。閑也。〔玨:古樂反〕。〔班:扶福反、皮篋〕。〔班:補姦反。還也、次也、賜也、布也〕。	○	○
土	地	題利反。易也、辟也、底也。墜、古文。墜、上地文。〔土:達扈反、度也、居也、田也〕。	○	○
坳	塹	七艷反。坑也。〔坳:魚礼反、女唐(牆)也〕。	○	○
壘	壁	補歷反。壘文。〔壘:屢揆反、重也〕。	○	○
塚	塾	殊鞠反。門側堂也。〔塚:徒果反。上字〕。	○	○
圣	焮	除立反。汗也。〔圣:口骨反〕。〔圣:捕京反〕。	○	○
至	焮	除立反。汗也。〔圣:口骨反〕。〔至:捕京反〕。	○	○
坻	填	徒堅反。加也、塞也、滿也、定也。〔坻:直飢反、小渚〕。	○	○
坡	抹	摩撥反。塵也、壤也。〔坡:扶厥反。治〕。	○	○
塿	垚	毘利反。相連也。〔塿:非發反〕。	○	○
塿	塿	欲鬼反。〔塿:莫歷反。塗也〕。	○	○
壘	垚	力救反。隴也。〔壘:餘緒反。野〕。	○	○
厓	埤	蒲忽反。塵也、壤也。〔厓:胡狗反。厚〕。	○	○
塿	垚	力析反。塿也。〔塿:汝問反。前高後下丘也〕。	○	○
坳	墮	敕管反。鹿所踐。〔坳:居育反。西岸也〕。	○	○
墮	墮	徒睨反。堂也。〔墮:達計反。久也、停也、貯也、止也〕。	○	○
塚	塚	与瞻反。閭里、門也。〔塚:丑足反。牛馬所蹈也〕。	○	○
塿	塿	補鄧反。崩去。下棺也。〔塿:才山反〕。	○	○
墟	塿	區遊反。丘也。〔墟:去餘反。邑也、居也、塿〕。	○	○
塿	塿	力見反。墟名也。〔塿:壯交反〕。	○	○
塿	塿	蒲鑿反。塗也。〔塿:楚締反。三靈改〕。	○	○
塿	塿	如羊反。坻也、鼠壤也。〔塿:何黠反〕。	○	○

塔	壘	胡道反。土釜也。〔塔:物聲〕。	○	○
墀	墀	□兀工冢反。不安也。〔墀:餘石反、道也〕。	○	○
埋	塤	莫且反。杵也。〔埋:莫階反、瘞也〕。	○	○
坭	堯	堯 β、古文。𠄎、古文。五彫反。高、遠也。〔坭:乃礼反〕。〔埭:達載反〕。	○	○
埭	堯	堯 β、古文。𠄎、古文。五彫反。高、遠也。〔坭:乃礼反〕。〔埭:達載反〕。	○	○
釐	𠄎	側飢反。業也。〔釐:力之反。理也〕。	○	○
曠	町	達鼎反。區也。〔曠:仁緣反〕。	○	○
𠄎	𠄎	諸亥反。場也。〔𠄎:古法反。𠄎字〕。	○	○
𠄎	𠄎	居箠反。耕字。〔𠄎:力救反。耕字〕。	○	○
𠄎	𠄎	说良反。比田也。〔𠄎:记良反〕。	○	○
疊	黃	胡光反。𠄎 β、古文。〔疊:徒協反。懼也〕。	○	○
𠄎	虛	去餘反。〔𠄎:口浪反〕。〔𠄎:居吟反。黃〕。	○	○
𠄎	虛	去餘反。〔𠄎:口浪反〕。〔𠄎:居吟反。黃〕。	○	○
𠄎	𠄎	奴𠄎奚鳥反。〔𠄎:胡觥反〕。	○	○
𠄎	京	居貞反。倉也。〔𠄎:去留反。丘、同上〕。	○	○
𠄎	𠄎	苦勞反。遠界也。〔𠄎:奴𠄎奚鳥反。張字〕。壑、𠄎字。	○	○
鄰	鄴	子管反。聚也。〔鄰:力臣反〕親也。	○	○
鄴	鄴	諸逸反。登也。〔鄴:所留反〕。	○	○
鄉	鄴	胡光反。〔鄉:虛良反。方也〕。	○	○
鄴	鄴	公安反。〔鄴:胡經反〕。	○	○
鄴	鄴	与金反。〔鄴:渠詭反〕。	○	○
邨	鄴	欣陵反。〔邨:所間反〕。	○	○
邨	鄴	殆郎反。〔邨:黑言反〕。	○	○
邨	鄴	如灼反。〔邨:舒甚反〕。	○	○
邨	鄴	諸緣反。〔邨:禹君反〕。	○	○
鄴	鄴	胥果反。〔鄴:莊釐反〕。	○	○
邨	鄴	才含反。〔邨:渠今反〕。	○	○
邨	鄴	胡灰反。〔邨:子移反〕。	○	○
邨	鄴	空縛反。〔邨:莫郎反〕。	○	○

鄆	鄆	似矩反。〔鄆：胡光反〕。	○	○
鄆	鄆	時戰反。〔鄆：時真反〕。	○	○
鄆	鄆	口孤反。〔鄆：烏魂反〕。	○	○
鄆	鄆	下卑反。〔鄆：蒲故反〕。	○	○
鄆	鄆	於尺反。〔鄆：人丘反〕。	○	○
鄆	鄆	魚家反。〔鄆：知矩反〕。	○	○
詞	詞	似資反。〔詞：似茲反〕。	○	○
伺	伺	七旬反。喜也。〔伺：𠄎秋厘胥反、光志反〕。	○	○
征	征	徒鬪反。安也、靜也。〔征：之成反。擢〕	○	○
份	份	胡來反。𠄎字。〔份：彼反陳〕。斌字；彬字。	○	○
倂	倂	理攝反。〔倂：皮筆反〕。〔倂：仕卷反。具也〕。	○	○
倂	倂	理攝反。〔倂：皮筆反〕。〔倂：仕卷反。具也〕。	○	○
儻	儻	奴可反。節、度也。〔儻：徒鴉反〕。	○	○
仞	仞	疑輔反。〔仞：胡東反。大腹〕。〔健：渠建反。伉〕。	○	○
健	健	疑輔反。〔仞：胡東反。大腹〕。〔健：渠建反。伉〕。	○	○
佳	佳	下板反。猛也、武也。〔佳：革崖反。善〕。	○	○
伋	伋	力矩反。偃也、疾也、𠄎也、典也。〔伋：乚反。𠄎也〕。	○	○
儉	儉	丈利反。會也。〔儉：仕行反〕。	○	○
伋	伋	敕刺反。逃也。〔伋：扶巖反〕。	×	○
儉	儉	都柯反。〔儉：求敏反。櫛〕	○	○
體	體	去迂反。身也、體也。〔體：耻礼反。形也〕。	○	○
頷	頷	公答反。〔頷：口也〕。	×	×
顛	顛	孚紹反。〔顛：受仟反〕。	×	○
眈	眈	呼達反。嗔視也。〔眈：當含反〕。	○	○
暹	暹	欣衣反。望也、𠄎也。〔暹：餘運反〕。	○	○
睇	睇	一活反。滿也、塞。〔睇：一活反。滿也〕。	×	○
眊	眊	於外反、眉目間。〔眊：之盈反〕。	×	○
瞞	瞞	口苞反。面不平也。〔瞞：亡幸反〕。〔瞞：一活反。媚〕。	○	○

晚	膠	口苞反。面不平也。〔瞞:亡幸反〕。 〔晚:一活反。媚〕。	○	○
第二帖				
齟	齟	胡狡反。齟骨也。〔齟:魏結反。齟也、切也〕。	○	○
第三帖				
囂	囂	詡煩反。驚呼也。〔囂:火元反。驚也〕。	○	○
第四帖				
柎	柎	渠惟反。木也、大椎也、度也。〔柎:之戎反。椎也〕。	○	○
莖	莖	云揆反。似馬韭黃莖也。〔莖:時鄰反。草也〕。	○	○
第五帖				
罍	罍	同上。〔罍:子礼反。後酒也〕。	○	○
罍	罍	古法反。罍。〔罍:力鼎反。罍〕。	○	○
甌	甌	同上。〔甌:於侯反。盃〕。	○	○
甌	甌	力頰反。踏瓦破也。〔甌:布縮方但二反。瓦〕。	○	○
甌	甌	胡耽反。甌有耳。〔甌:力口反。甌也、罍也〕。	○	○
甌	甌	女刮反。甌皆也。〔甌:同上。都秋反〕。	○	○
甌	甌	同上。〔甌:無尤反。未燒瓦〕。	○	○
餅	餅	同上。〔餅:菩丁反。器也、汲水器也〕。	○	○
絞	絞	籀文。絞。〔絞:公的反。吹也〕。	○	○
膏	膏	籀文。〔膏:式羊反。煮〕。	○	○
甌	甌	(無)。〔甌:胡圭反。甌空也〕。	○	○
匱	匱	古文。〔匱:徒弔反。田器〕。	○	○
匱	匱	古。〔匱:皮變反。筥〕。	○	○
旒	旒	同上。〔旒:於烏反。旗也〕。	○	○
旒	旒	同上。〔旒:与堯反。旗〕。	○	○
彘	彘	虛葉反。弓彘。〔彘:女志反。彘〕。	○	○
斲	斲	俎減反。斲也、滅也、伐也、裂也、破也。〔斲:力可反〕。	○	○
穉	穉	子莢(筭)反。金。穉、同上。〔穉:丈置反。矛〕〔穉:魚偃反。矛〕。	○	○
穉	穉	子莢(筭)反。金。穉、同上。〔穉:丈置反。矛〕〔穉:魚偃反。矛〕。	○	○

穉	穉	扶庸反。矛。穉、同上。穉、上。 〔穉:如客反。同上〕。	○	○
勢	剔	他狄反。〔勢:同上。記歷反。屠也、 剝治也〕。	○	○
勢	剔	他狄反。〔勢:同上。記歷反。屠也、 剝治也〕。	○	○
錄	鋸	可結反。缺也。〔錄:丁果反。缺〕。	○	○
緄	鈹	同上。〔緄:奴礼反〕。	×	×
覲	彘	古文。〔覲:胡的反。巫〕。	○	○
甫	甫	用古。〔甫:弗禹反、男子美始稱〕。	○	○
輦	輦	籀文。〔輦:儿足反。直[ ]車表車〕。	○	○
潯	洋	同上。亡尔反。〔潯:字林反。旁深 也〕。	○	○
瀨	沚	說文。〔瀨:力大反。水上沙也。沙 字〕。	○	○
泛	泠	或取也。〔泛:孚劍反。舟流兒〕。	○	○
澱	澱	上同。〔澱:徒見反。滓也、澤也〕。	○	○
澱	澱	𠄎字。〔澱:胡国反。水流〕。	○	○
𠄎	𠄎	上文。〔𠄎:子来反。害也。今災〕。	○	○
𠄎	𠄎	籀文。〔𠄎:子来反。害也〕。	○	○
州	𠄎	古文。〔州:止由反。殊也、浮也、聚 也〕。	○	○
豁	豁	苦奚反。〔豁:呼活反。同上。空也、 大也〕。	○	○
霽	霽	同上。〔霽:思反。小雨。霰字〕。	○	○
零	零	同上。〔零:力各反。雨零也、落 也〕。	○	○
𠄎	𠄎	古文。〔𠄎:始仁反。神〕。	○	○
幹	朝	同上。𠄎。〔幹:柯旦反。强也、貞固 也、安也、本也、事也、主也、體也、友 也〕。	○	○
<b>第六帖</b>				
𠄎	𠄎	上字。〔𠄎:力反。痢字〕。	○	○

附表 2 埋字 B リスト

埋字 B	主字	主字注文	宋本
第 一 帖			
弌	一	於逸反。少也、初也:同也。(弌:古文)。	古文。
𠄎	天	秦堅反。顛也、顯也、君也。(𠄎:古文)、(𠄎:古文)、(天:古文)、(天:古)	並古文
𠄎	天	"	並古文
天	天	"	無
天	天	"	無
元	元	魚園反。大也、始也、首也、長也。(元(seal):古文)。	無
吏	吏	理致反。使也、君所使也。(吏(seal):古文)。三吏、三公也。	無
上	上	時讓反。前也、遠也、君也、登也。(上:古文)。	古文
帝	帝	都麗反。君也、諦也、天也。(帝:古文)、(帝:古文)。	古文
帝	帝	"	無
旁	旁	薄唐反。側也、方也。[旁:古文。][旁、旁、旁、旁、旁二方:皆古文帝(帝)旁。]	無
旁	旁	"	無
旁	旁	"	無
旁	旁	"	籀文。
旁	旁	"	歩忙切。古文旁。
旁	旁	"	並古文。
𠄎二方	旁	"	並古文。
帝	旁	"	無
下	下	遐緞反。去也、後也、賤也、落也、底也、服也、降也。(下:古文)、(下β:古文)。	無
下β	下	"	無
示	示	時志反。語也、見也。(示:古文)。	古文
神β	神	視仁反。鬼也、治也、慎也、重也、引也。(神β)、(神γ)、古文。	無
神γ	神	"	無
齋	齋	側階反。洗心曰齋、防患曰戒、敬也、莊莊也。(齋:古文)、(齋:齋文也)	無
齋	齋	"	無

祗 β	祗	諸時反。敬也。（祗 β:古文）。	無
祭 β	祭	子 = 反。祭也、至也、薦也、享也、祀也。（祭 β:古文）。	無
禩	祀	徐理反。祭也、歲也。（禩 β:上文）。祀:俾利反。（又禩 γ）。	同上
禩 γ	祀	"	無
𤇑	禋	於神反。燎柴、祭也、敬也。（𤇑:古文）。	同上
禋	柴	仕佳反。祭天曰禋、柴也。柴、仕佳反。燔。（禋:柴文）。	古文
𤇑	禘	補衡反。門祭也。（𤇑:上文）。（禘:上文）。	布庚切、祭、說文曰、門內祭先祖、所以徬徨也、亦作禘
禘	禘	"	無
禴	灼	餘灼反。夏祭也。（禴:上文）。	同上
禘 β	禘	徒計反。大祭。（禘 β:古文）。	無
祐 β	祐	胡救反。助也、從也、信也。（祐 β:古文）。作佑字。	無
祺 β	祺	勤基反。祥也、吉也。（祺 β）、（祺）、上文。	無
祺	祺	"	籀文
福 β	福	甫伏反。昨也、 = 也。（福 β:古文）。五福:一壽、二富、三康寧、四彼德、五孝終命、鬼神所祐也、三人道所吉、又二天所貴二。	無
祿 β	祿	旅穀反。福也、錄也。（祿 β:古文）。	無
祥 β	祥	似陽反。善也、象也、吉也、告也、恠也。祥 β、（古文）。	無
裸 β	裸	古換反。灌也。（裸 β:古文）。	無
𤇑	禱	都道反。請也、謝也。（又作𤇑）。（又作禱）。	籀文。
禱	禱	"	古文。
禮 β	禮	力底反。履也、理也。（禮 β:古文）。（禮 γ:古文）。（礼:上文）。	無
禮 γ	禮	"	無
礼	禮	"	無
袖	溜	徐留反。祝溜也。（袖:古文）。	恥霽切。古文溜。
袷	社	時野反。封也、母也、稷也。（袷:古文）。	古文。
襍	桃	吐堯反。遠祖之廟也。（襍:古文）、（桃 β字）。	古文
桃 β	桃	"	無
𤇑	崇	思遂反。神禍也。（𤇑:同文）。	籀文

祆	禡	於驕反。殄害物也。（祆:同上）。	於驕切、天反時為災、地反物為祆、說文作禡
祿	禪	思踐反。煞也。（祿:同上）。	思淺切、秋田祭也、与彌同
禩 $\alpha$	禩	時柳反。久也。壽字也。（禩 $\beta$ :古文）、（禩 $\gamma$ :古文）、（禩 $\delta$ :古文）。	無
禩 $\gamma$	禩	"	無
禩 $\gamma$	禩	"	無
𣦵	恒	何登反。久也、猛也、常也。（𣦵:古文）。（恒 $\beta$ :同上）。𣦵、求宣也。	古文
恒 $\beta$	恒	"	無
𣦵	王	禹方反。往也、大也、君也、姓也、威也。（𣦵:同上）。	古文
𣦵	皇	胡光反。大也、匡也、天也、君也、正也、主也、美也。（𣦵:古文）。	無
玉 $\beta$	玉	魚錄反。（玉 $\beta$ :古文）。（玉:古文）。	無
玉	玉	"	古文
璵 $\beta$	璵	湯典反。（璵 $\beta$ :古文）。玘也。（璵:古文）。玘、去理反。	無
璵	璵	"	古文
璵	瓊	求營反。玉樹也。（璵:同上）。（璵:同上）。（璵:同上）。	同上
璵	瓊	"	同上、又音畦、又羊水切、美兒
璵	瓊	"	似宣切、美石次玉、亦作璵
璵 $\beta$	璵	辭緣反。玉名。（璵 $\beta$ :古文）。（璵:同上）。（璵:同上）。	無
璵	璵	"	籀文
璵	璵	"	古文
玠 $\beta$	玠	柯薤反。（玠 $\beta$ :同上）。	無
玠	瑁	瑁、莫戴到反、冒也。（玠:同上）。	古文
瑁 $\beta$	瑁	他見反。塞耳玉也。（瑁 $\beta$ :古文）。	無
瑁	玠	俾蜜反。刀上銜也。（瑁:同上）。	古文
𠄎王𠄎立豕	璵	雉例反。劔鼻也。（𠄎王𠄎立豕(璵):同上）。	無
玠	珍	張陳反。寶也、獻也、重也。（珍 $\beta$ :古文）。	無
璞	璵	力高反。璞者真也。（璞:同上）。	普角切、玉未治者、老子曰、璞散則為器、王弼曰、璞真也

琿	璫	所昵反。(琿:同上)。	廣蒼、同上
璫	琿	居魂反。(璫:同上)。	說文同上
璫	璫	如亮反。(璫:同上)。	無
玕	璫	古咸反。(玕:字也)。	無
玕	璫	力德反。(玕:同上)。	同上
琿	琿	思救反。美石也。(琿:同上)。	說文、琿
璫	璫	於景反。(璫:字)。光也。	無
璫	璫	蒲鑄反。(璫:同上)。	同上
璫	璫	古廻反。珠也、圓玉也。(璫:同上)。	同上
璫	璫	柯寒反。(璫:古文)。	無
璫	璫	渠林反。(璫:古文)。(璫 β:又作)。	無
璫 β	璫	"	無
璫	地	題利反、易也、辟也、底也。(璫:古文)。 (璫:上地文)。	籀文
璫	地	"	扶方切、說文與防同
璫	璫	於報反。四奧地也。(璫:上文)。	並古文
璫	璫	徒頰反、垣也、〔又璫字〕	無
璫 β	璫	達當反。殿也。(璫 β)、(璫 γ)。又作殿也。 (璫:堂文)。	無
璫 γ	璫	"	無
璫	璫	"	並古文
璫	璫	甫墳反。糞也、除也。(璫:上文)。	古文
璫	璫	盱園反。萌也、坎也。(璫:上字)。(璫)、 (璫)、上字。	同上
璫	璫	"	並古文
璫	璫	"	並古文
璫	璫	胥紫反。印也。(璫:坵字也)。	同上
璫	璫	胡惟反。敗也。(璫:壞字)。	古文
璫	璫	紆恭反。蔽也、隄也、障也。(璫:同上)。	同上
璫	璫	於仁反。塞也。(璫:古文)。	古文璫
璫	坐	徐果反。守也、止也。(璫:古文)。	無
璫	璫	徒古反。塞也、冒也、閑也。〔璫、古玕字〕。	古文
璫	璫	胡光反。合殿也。〔璫、罅字也〕。	五各切、圻璫也

瘞 β	瘞	猗例反。埋也、幽也。（瘞 β:古字）。燔柴祭地也。	無
塌	塌	徒闔反。墮也。（塌:同上）。	古文
𪔐β	𪔐	胡八反。囚突出也。（又𪔐β字）。	無
垂	垂	時規反。遠、邊也。（垂:同上）。	說文垂
埵	堆	都廻反。高也、院也。（埵:同上）。	同上、又埵落也
堯 β	堯	（堯 β:古字）。（堯:古字）。五彫反。高、遠也。坭、乃礼反。	無
尅	堯	"	古文
堇	堇	姑隱反。（堇:古字）；（又茶:古字）；（菌:古字）。	同上
茶	堇	"	並古文
菌	堇	"	奇隕切。地菌。
艱 β	艱	居閑反。難也。（艱β:古字）；（艱:艱字）。	無
𪔐	艱	"	無
野	野	餘者反。（野）、百里郊、二百里州、三百（里）野也。	無
畚	畚	与居反。（畚:同上）；（畚:同上）。	無
畚	畚	"	古文
畝	畝	莫走反。畝也。（畝:同上）。	說文與畝同
畹	畹	於遠反。卅畝為畹。（畹:同上）。	同上
界	界	耕薶反。境也。（界:同上）。	耕薶切、爾雅云疆界、垂也
啜	啜	豬衛反。表也。（啜:啜字也）。	古文
畜	畜	許陸反。養也。（畜:同上）。	說文云同上、魯郊禮畜、从茲、茲益也
𪔐	𪔐	胡光反。（𪔐:古字）。豐、徒協反。懼也。	無
丘	丘	居貞反。倉也。𪔐、去留反。（丘:同上）。	同上
塋	塋	苦勞反。遠界也。𪔐、奴𪔐奚鳥反。張字。（塋:𪔐字）。	無
邛	邛	以井反。（邛:同上）。	同上
企	企	去豉反。望也。（企:古字）。	古文。
儻	儻	子殉反。絕異也。（又儻）。	同上俗作隼。
仲 β	仲	廚諷反。中也。（仲 β:古字）。	無
伊	伊	於時反。（伊:古字）。辭也。因、惟也、侯也。	無
倂	倂	詞駿反。疾也。（倂:同上）。	字書倂字。

𠂔	仿	芳往反。不諱也。（𠂔:同上）。	籀文。
𠂕	倂	桑截反。聲也。（倂:同上）。	字書同上。
件	侷	莫侯反。均、齊也。（件:同上）。	其輦切、說文云、分也、从人从牛、牛大物、故可分。
𠂗	儻	力迫反。（儻:同上）。兵也、望也、疲也、重也。	同上。
侶	傍	蒲當反、近也、輔也。（侶:聲類似字）。	二同、祥里切、像也。
𠂙	𠂚	且紫反、小也、細陋也。（𠂙字也）。	七紙切、小舞兒。
僮	仙	僮也。（或僮）。	說文、僮。
儻	儻	呂諸反。耦也、數也、伴也、侶也。（儻:同上）。	字書上同。
𠂛	儻	口礼反。開衣領也。（𠂛:夙字）。	思育切、並古文夙字。
𠂜	民	弭申反。宜也、眠也。（古𠂜）。	無
𠂝	義	魚琦反。理也、善也、宜也。（𠂝字）。	墨翟書、義字從弗。
𠂞	姐	子我反。子倚反。（𠂞:古文）。	無
𠂟	靈	力丁反。女字。（𠂟:嬖字）。	以諸切、婕妤。
顛	頂	丁冷反。顛也、上也。（顛:頂字）。	籀文
顛β	顛	吾高反。（顛β:也:同上）。	無
𠂡	頰	季卑反。畫也、=也。（𠂡:同上）。	同上
顛β	頰	胡𦏧反。頰、為頰。（顛β:同上）。	無
頰	頰	於骨反。（頰:同上）。	無
頰	麟	來軫反。恥也。（頰:同上）。	無
頰	頰	虛玉反。縮也。（頰:同上）。	同上
頰	頰	口本反。禿也。（頰:同上）。	口本口沒二切、禿也。
頰	頰	距錦反。怒也。（頰:同上）。	無
頰	頰	与恭反。容也。（頰:頰字）。	籀文。
𠂣	𠂣	𠂣字也:同上。（𠂣:同上）。（𠂣:同上）。	同上
𠂣	𠂣	"	字書𠂣字
出	𠂣	先晉反。頭會腦蓋也。（出:古文）。	古文
𠂥	𠂥	都計反。嚏也。（𠂥:同）。	二同、都計切、鼻噴氣、本作嚏。
𠂦	自	徐利反。由也。用也、率也、從也、大。（𠂦:古自）。	古文

囿	目	莫鹿反。眼也、見也、視也。（囿:古文）。	古文
晉	𠄎目𠄎	口系奚反。直視也。（晉:同上）。	𠄎目干干目或在 下。
旬	眴	胡遍反。目搖也。（旬:同上）。	胡絹切、目搖也。
崙	睦	莫穀反。和也、厚也、信大也。（崙:古文）。	古文
眡	眡	与之反。竊視也。（眡:古文）。	古眡字。
眦	瞋	昌真反。怒也。（眦:同上）。	同上
翰	看	苦安反。見也。（翰:同上）。	同上
瞬	瞬	尸潤反。（瞬:同上）。	同上
眇	眇	普未反。目不明也。（眇:同上）。	同上
眈	眈	達結反。目露也。（眈:同上）。	古文。
眈	眈	呼出反。眈。驚視也。（眈:同上）。	同上
眈	眈	千才反。目不正也。（眈:同上）。	同上
眈	眈	時指反。瞻。（眈:古文）。	無
𠄎	𠄎	古桓反。觀字也。（𠄎:同上）。	同上
<b>第二帖</b>			
眉	睂	莫飢反。老也。（眉:同上）。	今睂字。
省 β	省	思井反。善也、察也、審也。（省 β:古文）。 〔省〕。	無
𠄎	省	"	古文
見 β	見	居薦反。見也、禾也。（亦見 β）。	無
聃	聃	奴甘反。耳曼也。（聃:同上）。	說文、聃同。
啞	咽	於見反。吞也。（啞:古文）。	同上。
撻	拏	助也、取也、收也、升也。（撻字）。	同上。
臚	臚	先結反。臚中脂也。（臚字）。	同上
<b>第三帖</b>			
諱	諱	之純反。然也、佐也、罪也、憎也、苦也。（諱: 也諱也字也）。	同上
𠄎	𠄎	魚巾反。和悅而爭也。（𠄎:𠄎字也）。	同上
諱	詢	思導反。問親戚之議訪也。（諱:詢字）	無
諭	話	朝快反。謂也、調也。（諭:也話字）。	許界切。怒聲。說 文云：籀文語。
諱	諱	直移反。離也、別也。（諱:諱字）。	同上
𠄎	𠄎	補潰反。乱也、逆也。（𠄎古）。	無

磨	磨	子移反。量也、思也。（磨:磨字）。	無
詭	詢	道力反。小兒未能正語也、祝也。（詭:詢字）。	同上
訇	訇	胡鑄反。音大。（訇:訇字）	籀文
諗	讞	胡濫反。誕也、話也、調也。（諗:讞字）。	同上
誚	譙	似醮反。讓也、蹶也、訶也、燒也、煞也。（誚:譙字）。	才妙切、責也
譴	謫	居展反。難也、吃也。（譴:謫字）。	無
速	迹	子亦反。跡也、理也、步遽也、道也。（速:迹字）。	籀文
遞	遞	達礼反。失也、更易也。（遞:遞字）。	同上
道	道	徐留反。固也、終也、迫也、忿也、近也、道也。（道字也）。	同上
逶	逶	胡郎反。迹也、長也、短也、道也。逶字。（逶:逶字）。	同上
歲 β	歲	古文。（歲 β:古文）。	無
寮 β	寮	力條反。官也。僚字。（寮 β:古）。	無
疣	疣	尤富反。顫、搖頭也。（疣:疣字）。	羽求切。結病也。今疣贅之腫也。
癘	疔	除又反。腹疾也。（癘字）。又口也。	同上。又觀老切。病也。
癰	癰	行恭反。漂疽疾癰也。（癰字）。	同上
癩	癩	子結反。癰也。（癩:癩字）。	同上
疢	瘰	古和反。禿也。（疢也）。	古禾切。瘰也。又古花切。
殄	殄	在安反。賤字。禽獸所食餘也、多。（殄字:古文）。絕盡。	徒典切。絕也。
殄	殄	餘攝反。𠄎歹景也、病也、久病也。〔殄殄字。病也〕。	同上
<b>第四帖</b>			
櫛	柚	瑜售反。似橘酢也。（櫛:柚字也）	余舟切。木名。
杼	李	力子反。行李、譯也、非也。（杼:李字）	古文李。又音子。木工也。
粟	栗	力質反。（粟字）。	無
櫛	櫛	櫛字。（櫛:櫛字）。病。	並同上。
𣎵木虛	槔	敕於反。惡木也。𣎵木虛字。	無
𣎵	藁	力佳反。蔓也、莠也。（𣎵字）。	籀文。
橡	橡	辭兩反。實也、實橡也。（橡）。櫟子。（橡字）。	同上。
樣	樣	"	無

柠	楮	都古反。穀木。（柠字）。	同上。
𣎵木𣎵	檉	先栗反。（𣎵木𣎵字）。可爲杖也。	無
窠	松	聚恭反。（窠:榕字）。	無
𣎵	某	莫後反。酸果也。（𣎵字）。	古文。
𣎵	本	補衮反。舊也、基也、根也、幹也。（𣎵:古文）。	古文。
柝	榜	槌各反。判也。（柝字）。又劇也。	無
棬	𣎵	棬字。	去權切。屈木盂也。又居媛切。拘牛鼻。亦作𣎵。
棒	梃	蒲講反。大杖也、杭也、破也。（棒字）。	無
東 β	東	都公反。動也。（東 β:古文）。	無
樊	𣎵	（樊字）。	無
薑	薑	居良反。菜也。（薑字）。	同上。
荻	藹	達歷反。藿也。（荻字）。靱字。	同上。
替	茜	此見反。芳菟也。（替字）。茅字。	同上。
葦	蓬	蒲功反。（葦字）。非真達者也。	籀文。
茵 β	茵	馬衡反。貝母。（茵 β:古文）。策也。白華似韭也。	無
蓍	荒	儲𣎵彳連反。术字。（蓍字）。似薊。	同上。
蕪	菡	思賞反。生水中、華可食。（蕪字）。	思移切。草生水中、其花可食。
苻	苻	何梗反。萋茶也。（苻字）。	同上。
藪	英	徒結反。藪也。（藪字）。	同上。
菰	菰	古胡反。蔣也。（菰字）。	同上。
荊	荊	景貞反。楚木也。（荊字）。	古文。
藻	藻	績道反。（藻字）。	同上。
葦	葦	惟畢反。葦華也。（葦字）。榮也。	古文。
葶	葶	祥利反。泉也。葶提也。（葶:葶字）。	同上。
藿	藿	徒叫反。蓬蒿。藜藿也。（藿:藿字）。	同上。
茵	茵	力俱反。蒿也、香草也、龍也、天瓜也。（茵:萋字）。水草也。	力主切。小蒿草。
蕪	芸	右軍反。香草也、苔也。蕪字。（蕪:芸字）。	同上。
蕪	蕪	部毒反。莢反。毒也。（蕪:蕪字也）。	同上。
蕪	蕪	力九反。鳧葵也、茆也。（蕪:蕪字也）。	力官力卷二切。蕪葵也。

蓋	蒞	或蓋字。	同上。
葦	菴	猗廉反。菴蒿也。〔葦字〕。	古文。
藟	藟	黃句反。榮也。〔藟字〕。	同上。又音育。
藟	葬	子浪反。藏也。〔藟:古字〕。	無
籊	籊	力故反。美竹也、楛箭也。〔籊字〕。	同上。
籊	籊	逋園反。大箕也、蔽也。〔籊字〕。	同上。
籊	籊	補堅反。竹器也。〔籊字〕。	補堅切。竹器也。
籊	筵	胡交反。竿也、竹索也。〔籊字〕。	同上。
筵	筵	所洽反。扇也。〔筵:籟字〕。	同上。
籊	筵	子田反。絮簣也。〔籊字〕。	同上。
籊	籊	眉隕反。竹中空也。〔籊字〕。	同上。
籊	籊	胡戒反。菜也。〔籊字〕。	無
籊	籊	蒲卓反。雹。小瓜也。〔籊也〕。	同上。
籊	籊	徒結反。〔籊字〕。小也。	同上。
稍β	稍	公玄反。麥莖也、稟也。〔稍β字〕。	無
籊	秋	且丘反。斂也、白藏也。〔籊、秋字〕。	籊文。
<b>第五帖</b>			
帥	帥	同上。〔帥:上字〕。麥春。	孚穢切。春也。
龠	龠	力旬反。思也。〔龠:上字〕。	無
舍β	舍	式夜反。宮也、處也、執也。〔舍β:上字〕。	無
罔	罔	古文。〔罔〕、〔罔〕、〔罔〕皆古文。	并同上
罔	罔	"	并同上
罔	罔	"	古文
索	翼	先卷反。網。〔索:同上〕。	同上。
卵	翼	〔卵:同上〕。	同上。
罾	罾	扶尤反。同上。〔罾:同上〕。	同上。
罾	罾	扶流反。免網。同上。〔罾:同上〕。罾。	同上。
置	罾	同上。〔置:籊文〕。	籊文。
冀	冀	居致反。州。〔冀:同上〕。	同上
鹵	西	恩奚反。〔鹵:古文〕。	古文。
栖	鹵	籊文。〔栖、鳥宿〕。	無
醜	醜	胡乖反。〔醜:同上〕。	同上。

𩚑	𩚑	公咸反。鹵。(𩚑:同上)。	同上。
鹽β	鹽	公都反。地也、且也、如也。(鹽β字)。	無
瑟	瑟	所昵反。樂。(瑟:古文)。	古文。
𩚑喜心否	𩚑	普鄙郛反。大。(𩚑喜心否:上字)。	無
𩚑	豆	徒鬪反。(𩚑:古文)。大豆云未。	無
𩚑	𩚑	余贍反。美色也。(𩚑:古文)	無
盃	盃	余九反。甌。(盃:同上)。	同上。
盧	盧	力胡反。飲器也。(盧:籀文)。	同上
盞	盞	辭引反。竭。(盞:同上)。	同上。
𩚑	盞	扶淹反。盃。杯也。(𩚑:同上)。	并同上。
甌	甌	莫耕反。棟。(甌:上字)。	同上。
甌	甌	側胄反。脩井:同上、縮小也。(甌:古文)。	古文。
甌	甌	丘帶反。破甌。(甌:上字)。	同上。
甌	甌	所丙反。半瓦。(甌:同上)。	同上。
甌	甌	口郎反。瓠。(甌:同上)。	同上。
甌	甌	胡圭反。甌、下空。甌、同上。	同上。
甌	甌	胡經反。酒器。(甌:同上)。(𩚑圣瓦:上字)。	同上。
𩚑圣瓦	甌	"	無
𩚑	𩚑	時規反。明。(𩚑:古文)	無
甌	甌	旅激反。釜屬。(甌:同上)。	同上。
甌β	甌	公利反。土釜也。(甌β:同上)	無
甌β	甌	柯衡反。五味和也。(甌β:上文)。	無
且β	且	千野反。兼辭、(且β(seal):古文)、復也、辭也、將也、薦也、調。(且:古且字)。	無
且	且	"	古文。
𩚑	𩚑	甫王反。受物器。(𩚑:籀文)	籀文。
𩚑	𩚑	𩚑。渠救反。棺。(𩚑:古上文)	籀文。
𩚑	𩚑	補堅反。(𩚑:同上)	籀文。
曲β	曲	丘玉反。不直也。(曲β:古曲)。	無
𩚑	𩚑	側治反、又与周反。(𩚑:古)、(𩚑:古)、(𩚑:今𩚑)。	並古文。
𩚑	𩚑	"	並古文。

畱	出	"	側飢切、與蓄同、爾雅曰田一歲曰蓄、郭璞云今江東呼初耕地反草為蓄
𪗇	𪗇	千廉反。(𪗇同)。走、上上畱文。	同上。
畚	畚	補昆反。盛糧器。(畚:同上)	同上。
𪗇	盧	力胡反。飲器。(𪗇:籀文)	籀文。
𪗇	於	憶閭猗居明二反。(𪗇:古於文)(夔古)。	並古文。
夔	於	"	並古文。
𪗇	矢	尸旨反。(𪗇:同上)	同上、俗。
侯	侯	侯。胡溝反。𪗇。(侯:古文)、(疾:古文)。	無
疾	侯	"	古文。
矧	矧	尸忍反。(矧:同上)。況也、長也。	同上。
彌	彌	亡支反。廣也、偏也、終也、遠也、合也。(彌:同上)。	亡支切。大也、偏也。
弛	弛	詩紙反。弓解也、離也、易也、度也、量也、舍也。(弛:同上)、(弛:同上)。	同上。
弛	弛	"	無
張	張	同上。張也。〔礦同上〕。張也。	同上。
𪗇	𪗇	卑討反。弓戾。(𪗇:同上)。	同上。
彌	彌	皮蜜反。輔也。(彌:同上)、(彌:今。重也、高也、上也、備也)。(𪗇:同上古彌也)。	同上。
𪗇	𪗇	"	今文。
𪗇	𪗇	"	古文。
斷	斷	竹角反。削。(斷:同上)。	同上。
斷	斷	徒管反。(斷:古文)、(斷:上文)。	古文。
斷	斷	"	無
𪗇	𪗇	莫候反。(𪗇:古文)	古文。
𪗇	𪗇	子莢(筭)反。金。(𪗇:同上)。𪗇:丈置反。𪗇。𪗇:魚偃反。𪗇。	同上。
𪗇	𪗇	扶庸反。𪗇。〔𪗇:同上。𪗇、上。〕〔𪗇:如客反。同上。〕	同上。
𪗇	𪗇	莫候反。(𪗇:同上)。	無
𪗇	𪗇	時尤。懸物擊也。(𪗇:同上)。	市流切。懸物擊也。
殺β	殺	所點反。(殺β:古殺)。死也、截也、賊也、咸也、杼也、疾也。(𪗇:上古文)。	無
𪗇	殺	"	並古文。

𠄎	𠄎	五各反。劔刃。（𠄎:籀文）。	力灼切。今作略、又籀文劔。
剗	劓	居蟻反。刀。（剗:同上）。	同上。
劓	劓	九勿反。鏤刀。（劓:同上）。	同上。
劓	則	子勒反。法也、視也、常也、辭也、即也、式。（劓:古文）、（則 a:上文）、（劓:上文）、（則 b:古文）。	古文。
則 a	則	"	無
劓	則	"	籀文。
則 b	則	"	無
劓	劓	去則反。鏤。（劓:古文）。病也、貧也、識也。	古文。
劓	劓	之亮反。切也、漸。（劓:同上）。	徒官切。截也。又旨亮切。
劓	劓	普通反。（劓:同上）。析也、覆也。	籀文。
𠄎音司	劓	巨旦反。分。（𠄎音司:同上）。破也。	無
劓	劓	於玄反。挑取。（劓:古）。（劓:上）。	無
劓	劓	"	古文。
𠄎	劓	補角反。（𠄎:上同）傷也、削也、割也、落也。	同上。
劓	劓	力咨反。利也、書也。（劓:同上）	同上。
劓 β	劓	胡馘反。刀頭破物。（劓 β:古）、（劓:上）。	無
劓	劓	"	古文。
劓	劓	都忝反。缺也。（劓:古制）。	古文。
劓	劓	且致且賜且亦三反。斂也、賣也、非也、授也、怨也、書。（劓:同上）。	且利切。殺也。又七亦切。針刺也。
劓	劓	魚器反。截去鼻。（劓:同上）	魚器切。割也、截鼻也。
劓	劓	力一反。斷也、削。（劓:同上）	同上。
劓	劓	都條反。斷取穗。（劓:同上）	同上。
布	殺	所黠反。宰。（布殺 β 馘:古）、（斂:今作）、（殺:籀文）。	並古文。
殺 β	殺	"	無
斂	殺	"	並古文。
斂	殺	"	無
殺	殺	"	籀文。
金	金	居琴反。陰始方物禁止。（金:古金）。	古文
鑑	鑿	古儻反。察。（鑑:同上）。	同上

𩚑	𩚑	大口反。酒器。（𩚑:古文）。	無
鍤	鍤	余鍾反。銅屑也。（鍤:鐵字）。	古文。
鍤	鍤	才入反。鍤。（鍤:同上）。	祖立切。鐵鍤也。
鍤	鍤	魚距反。鉏也、鍤也。（鍤:上文）。	同上。
針	鍼	之謹反。刺。（針:今鍼）。	同上。
鈿	鑿	辭斂反。小𠄎毆金。（鈿:同上）。	無
鍤	鑄	子全反。琢金石。（鍤:同上）。	七桓切、鍤刀也
鍤	鍤	力兼反。刈器。（鍤:同上）。	力詹切、刈甸也
鍤	鍤	女輒反。鍤。（鍤:同上）	同上、又車慕也
鋁	鑪	力鹿反。錯也、摩也。（鋁:上文）。	同上。
鈇	銖	時朱反。一黍重也。（鈇:鈇字）。	同上
鍤	鍤	所劣反。量名。（鍤:古文）。	同上
鍤	鈞	居脣反。卅斤名。（鍤:古文）。	古文
鍤	鐘	之容反。酒器。（鍤:同上）。	同上。說文與鐘同。
鍤	鉞	時耶反。短矛。（鍤:上文）。	無
鍤	鍤	楚江反。矛。（鍤:同上）。	同上。
鍤	鋒	季恭反。刃。（鍤:同上）。	無
鍤	鈇	伊旦反。臂鍤。（鍤:同上）。	同上。又鍤器也。
鍤	鍤	余章反。（鍤:同上）。	同上
鈇	鍤	胡瓜反。鍤也。（鈇:上文）。	同上
鍤	鍤	大弔反。（鍤:古文）。鍤鍤。	無
鍤	鍤	他候反。石似金。（鍤:同上）。	同上
鍤	鍤	口耕反。鍤。（鍤:同上）。	同上。
鍤	鍤	奴協反。（鍤:同上）。	同上
𠄎金属	鍤	竹足反。（𠄎金属:上文）。	無
徹	徹	直列反。通也。（徹:古文）。道也、通也、明也、列也、去也、除也、治也、取也、壞也。	古文。
𠄎	𠄎	除珍反。列也。（𠄎:上文）。	無
𠄎	𠄎	舒夜反。放也、置也。（𠄎:同上）。	同上。
𠄎𠄎𠄎子𠄎耳𠄎	𠄎	胡教反。教。（𠄎𠄎𠄎子𠄎耳𠄎:上文）。	無
𠄎孝音	𠄎孝孚	𠄎。（𠄎孝音:古文）。（𠄎:上文）。（𠄎:上文）。	無
𠄎	𠄎孝孚	"	並古文。

𨾏	𨾏孝孚	"	並古文。
𨾏β	𨾏	都鈍反。頓字。（𨾏β:上文）	無
巽	巽	助禱反。撰字。（巽:古文數）。	古文。
亓	其	渠基反。辭也、豈也。（亓:古其）。	古文
五	巨	渠舉反。大也。（五:古文）、（王:上文）。	古文
王	巨	"	無
卜	卜	補祿反。（卜:古文）。赴也。	古文
輶	輶	充庸反。戰車。（輶:巢字）。	同上。
較	較	古學反。見也、明也。（較:同上）。	古學切。兵車也。 又古孝切。
輻	輻	力庭反。門橫木。（輻:同上）。	同上。
較	輶	渠支反。長轂。（較:同上）。	同上。
𨾏	𨾏	侯歲反、車軸頭。（𨾏:同上）。	同上。
輦	輦	（輦字）。竹利反。至也。	無
輻	輻	視專反。无輻曰轉。（輻:同上）。	同上。
輶	輶	魚鷄反。輶端橫木。（輶:同上）。	無
𨾏非乘	輶	古文。（𨾏非乘:上文）。	無
輶	輶	他同反。盛兒。（輶:同上）。	同上。
𨾏車包	輶	徒多反。駟疾兒。（輶(𨾏車包):上文）。	無
輶	輶	仕澗反。載柩車。（輶:同上）。	同上。
輶	輶	呼荀反。（輶:同上）。	同上。
般	般	菩安反。樂也、施也、大也。（般:同上）。	無
彤	彤	徒東反。船舷。（彤:同上）。	無
𨾏	𨾏	渠恭反。小艇。（𨾏:同上）。	同上。
滅	漢	呼爛反。（滅:古文）。達也、灑也。	古文。
𨾏	漆	且栗反。池也、木汁。（𨾏:古文）。	古文。
澆	汨	莫曆反。（澆:同上）。	同上。
漆	澆	戴銀反。（漆字）。	無
洑	洑	胡端反。（洑:同上）。	同上。
浸	澆	子社反。漸也、清也。（浸:同上）。	同上。
汜	澆	才里反。又澆。（汜:同上）。	詳子切。水名。
潮	澆	達驕反。（潮:同上）。	無

漉	漉	被彪反、扶彪反。流兒。（漉:同上）。	同上。
灑	汎	扶弓反、又孚劒反。美哉。（灑:同上）。	扶弓切。水聲。
湧	涌	俞種反。盡也、滕也、泉白。（湧:同上）。	同上。
澂	澂	置陵反。清湛也。（澂:同上。澄:同上）。	同上。
澄	澂	"	同上。
澆	澆	視力反。清見底、特正兒。（澆:同上）。	同上。
滓	灌	千罪反。深兒。（滓:或）。	同上。
困	淵	於玄反。深也。或測。（困:古文）。	古文。
潰	沸	不謂反。湯。（潰:或）。出也、波涌。	同上。
滄	派	普慳反。水別流。〔滄、上文〕。	無
潴	潴	胡角反。有水冬無水。（潴:或）。	同上。
沃	沃	於吉反。灌也、美也。（沃:同上）。	同上。
潯	潯	撫夫反、凶隅反。編木渡水、水名。（潯:同上）。	無
漣	泝	蘇故反。逆流上洄也。（漣:同上）。	無
灑	砵	力蜀反。度也、水至心為砵。（灑:同上）。	同上。
濞	濞	直斬反。水不流、安也、沒也、露盛兒。（濞:古文）。	古文。
滾	淩	思微反。小雨。（滾:同上）。	先悲切。同上。
涵	涵	胡虢反。水澤多。（亦涵）。	同上。又下啗切。沒也。
洳	淠	如鹿反。漸濕也。（洳:同上）。	同上。
濕	溼	尸立反。水流就幽也、詩也、遲也、潤也、主也。（濕:或）。	同上。《說文》：他合切。
灑	灑	所留反。清汰也、小便也。（灑:古文）。	無
灑	灑	里激反。清酒也、沃。（灑:今同上）。	同上。
淥	灑	里屋反。竭也。（淥:同上）。	《說文》與灑同。又音綠。水也。
濬	浚	思閏反。須也、取也、深也。（濬:同上。濬:古文）。	同上。
濬	浚	"	古文。
牀	漿	子楊反。飲。（牀:古）。	古文。
灑	澆	公堯反。薄也、沒也、沃清也。（灑:或也）。	同上。
沫	頰	呼憤反。洗面。（沫:篆文）。	同上、又莫貝切、水名
浣	澣	胡管反。濯也。（浣:同上。灑:水兒:上文）。	同上。
濺	濺	子旦反。相汙。（濺:同上）。	子賤切。濺水也。

汧	泮	普旦反。去也、脫也、隱也、水宮。(沂:同上)。(泧:上文)。	古文。
河	泮	"	無
瀕	濱	補民反。渥也、卑辰反、水涯。(瀕:同上)。处也、屋也。	蒲民切。《說文》本作類。水厓也、人所賓附類蹙不前而止。亦同上。
灋	法	甫乏反。則、數也、常也。(合(金)·灋:古文、法 β:古文)。	古文。
法 β	法	"	無
淨	滓	補蜜反。(淨:同上)。	同上。
劔	川	古州。尻也、脉也。(劔:或)。	同上。
𠄎 白 白	凜	力甚反。寒也。(𠄎 白 白:古文)	無
測	漸	斯奚反。解冰。(測:古文)。	古文。
雨	雨	雨詡反。雲中下水。(雨:古文雨)。	古文。
霑	霑	胡耽反。久雨。(霑:同上)。	同上。
霽	霽	所責反。雪下。(霽:同上)。	色麥切。雨。又山賁切。
會	黔	於林反。雲覆日。(會:古文)。(𠄎 勾 土:古文)。	古文
𠄎 勾 土	黔	"	無
風	風	甫融反。(風:古文)。(颯:古文)。(風:古文)。教也、放告也、衆也、聲也。	並古文。
颯	風	"	並古文。
風	風	"	並古文。
阜	白	菩格反。明也、告也、土也、語也。(阜:同上)。	古文。
皙	晰	之逝反、虛殷反。明也、察也。(皙:同上)。	同上
晃	晄	胡廣反。明。(晃:同上)。	乎廣切。光也。
皦	皓	胡老反。光也、明。(皦:同上)。	無
晉	晉	子吝反。進也、晝。(晉:今作)	同上。
睠	睠	那見反。日氣。(睠:同上)。	同上。又燠也。
昵	暱	女慄反。親近也。(昵:也、同上)。	同上。
睨	睨	公鳥反。如也、明也。(睨:上文)。	同上。
晴	曄	徐盈反。明也、不雨、无雲。(晴:同上)	無
曩	𠄎	渠基反。古期也。(曩:古基也)。會也、當也。	亦古文期。
朗	朧	力儻反。明也。(朗:同上)。	力儻切。明也。亦作眼。

夔	夔	余仁反。進也、大也、出也。〔夔:古〕。	籀文
外	外	吳會反。表也、疏也、遠也、乖也。〔外:古文〕。	古文
夂	多	怛何反。衆也、重也。〔夂:古〕。	古文
夂	𠃉	胡果反。多也。〔夂:古、多字〕。	古文
夂	玄	胡鑄反。天也、妙也。〔夂:古文〕。	古文
煨	焜	磨詭反。火也。〔煨:同上〕。	並同上。
燃	然	如仙反。燒也、成。〔燃:同上。〕	俗爲燒然字。
炳	蒸	而悅反。燒。〔炳:同上〕。	同上。
爇	爇	公倒反。木燃。〔爇:同上〕。	並同上。
燻	熹	虛疑反。蒸博也、熾也。〔燻:同上〕。	同上。
燧	裘	於根反。微火温肉。〔燧:同上〕。	同上。
焦	炮	薄交反。裏燒。〔焦:同上〕。	同上。
焦	焮	皮逼反。火乾物。〔焦:同上〕。	同上。
爛	爛	力旦反。熟。〔爛:同上〕。	同上。
炰	炰	待可反。〔炰:同上〕。	囚者切。燭晷也。
燼	晷	似進反。火餘木。〔燼:同上〕。	同上。
燼	焚	扶云反。燒。〔燼〕、〔焚〕、同上。	同上。
焚	焚	"	同上。
燻	燻	匹姚反。飛火。〔燻〕、〔焦〕、同上。	子姚切。火燒黑也、又炙也。
焦	燻	"	同上。
裁	灾	子來反。病也、害也。〔裁〕、〔災〕、〔狄〕、皆同上。	同上。
災	灾	"	籀文。
狄	灾	"	古文。
烟	煙	於賢反。火氣。〔烟:同上〕、〔燻:同上〕。	同上。又音因。
燻	煙	"	籀文。
燻	燻	許林反。爛湯浴。〔燻:同上〕。	同上。
炤	照	之曜反。燭也、明也、曉也。〔炤:同上〕。	同上。
焯	焯	余祝反。盛也、焮、燿也。〔焯:同上〕。	同上。
熿	煌	胡光反。光明。〔熿:同上〕。	同上。
炷	炷	古光反。明也。〔炷:古文〕。	古文。
戴	熾	齒志反。火盛。〔戴:古文〕。	古文。

燂	燂	於六反。煖也。（燂:同上）。	同上。
炂	炂	古惠反。見也。（炂:同上、吞字）。	古惠切。煙出兒。
燧	燧	慈醉反。墜。（燧:同上）。	同上。
爨	爨	創狹反。火乾物。（爨:同上）。	並同上。
燻	燻	子規反。臙也。（燻:同上）。	同上。
爨	爨	力照反。炙。（爨:同上）。	同上
爨	爨	且礼反。炊。（爨:同上）。	籀文
窗	囟	千公反。竈突。（窗）、（匆）、古文。	同上
匆	囟	"	無
終	赤	昌亦反。朱。（終:同上）。	同上。
跡	頰	（𠂔）、沫、並上。	無
𠂔	𠂔	牛胡反。国名。（𠂔:古文）。	無
𠂔	𠂔	古字。（𠂔:古文）。	並古文。
<b>第六帖</b>			
嶼	嶼	同上字。（嶼:同上）。	同上
廟	廟	靡召反。兒。（廟:古廟）。	古文。
礪	礪	孤並反。強也。（礪:同上）。	同上
𦉳	𦉳	渠桀反。時立。（𦉳:同上、古文）。	古文
礪	礪	力的反。小石。（礪:同上）。	同上
影	馬	莫雅反。武也、怒也。（影:古馬也）、（影:馬字）。	籀文。
影	馬	"	古文。

附表 3 脱字 A リスト

脱字 A	注 文
第 一 帖	
塋	區遊反。共字也。虚也、空也。
坎	陝反。深也、空也。
堞	杜交反。
里	旅擬反。
第 二 帖	
囁	竹又反。
喘	充兗反。轉也、疾息也。
右	禹九反。助也、道也、亮也。
鬪	囓字。犬食。
控	枯同反。引也、赴也、弦也。
第 三 帖	
譁	呼瓜反。化也、然也。
灋	字。造次忿遽也、就也、内也、即至也。
第 四 帖	
杵	普半反。判字也。
样	餘章反、縋(槌)也。
箝	所交反。竹器反、黍稷麥也。
第 五 帖	
戮	居桃反。古札反。持擊也、常也、礼也。

附表 4 脱字 B リスト

脱字 B	宋本『玉篇』注文
第一帖	
式	古文
式	古文
璇	同上、又徐宣切
璣	同上、見説文
坐	並古文
埽	水埽、亦同上
塋	在力切、疾也、虞書曰、龍朕塋讒說殄行、又音啣、火塾曰、塋檀弓曰夏后氏塋周、又古文塗字
垚	五爻切、説文云土高也
田	徒堅切、土也、地也、説文云陳也、樹穀曰田象四口、十阡陌之制也、易曰見龍在田、王弼易通曰龍於地故曰田也
畦	胡卦戶圭二切、鮮明黃色
北	去留切、虛也、聚也、冢也、夏書曰是降丘宅土、孔安國云吐高曰丘、周禮曰四邑為丘、四丘為甸、漢書云高祖過其丘嫂食丘孔也、廣雅云小陵曰丘、丘居也
垆	説文：同上。
回	説文曰：古文門从口、象國邑。
宥	余針切、説文云淫、淫行兒、从人出門
鄴	助交切、南陽棘陽鄉名
邙	丘紀渠紀二切、南郡有邙縣
邙	居里切、地名
鄴	同上、出説文
士	事几切、事也、傳曰通古今辯不然謂之士、數始於一終於十、孔子曰推一合十為士
備	同上俗。
傅	古文。
壅	籀文。
成	古文我。
歛	籀文。
慶	籀文。
媼	籀文。
伎	古文。
媼	籀文。
媼	同上。
媼	許兼説、媼媼美笑兒也。
媼	同上、見説文。
媼	同上。
順	食潤切。從也。

晨	同上。
<b>第二帖</b>	
覓	同上 俗。
覷	牛買切、視也。
𦉳	並古文
聾	並古文
聵	五怪切。說文云、聵也、國語曰、聵聵不可使聽。
喆	同上
嘉	古文。
哂	古文。
噉	同上。
嗚	古文。
杏	同上。
叭	同上。
噏	同上。噏噏也。
咳	古文。
噤	倉候切。或與噤同。
啗	同上。
噤	丘吏切。噤噤、無聞見。
噤	同上。
啣	同上。
𦉳	他念切。舌兒。从谷省、象形。一曰竹上皮。音他感切。
𦉳	並同上。
𦉳	並古文。
𦉳	同上。
𦉳	同上。
𦉳	古文。
𦉳	徐井切。說文云、清飾也。
𦉳	同上。
𦉳	同上。
𦉳	步侯切。手掬物也。
𦉳	或搯字。又兩指急持人也。
擲	雉戟切。投也。莊子曰、擲玉毀珠。
擲	同上。
摺	力合之涉二切。敗也、折也。
揜	同上。
拯	同上。
攀	同上。
揜	古文。



𦉳	古文
𦉴	同上。
𦉵	古文。
𦉶	同上。
𦉷	古文。
𦉸	同上。
𦉹	籀文。
𦉺	同上、又所江切。
𦉻	古文。
𦉼	古文。
𦉽	於代切、說文惠也、今作愛。
𦉾	同上。
𦉿	並、同上。
𦊀	古文。
𦊁	籀文。
𦊂	奴的切。憂兒。
<b>第三帖</b>	
𦊃	公厄切、智也。
𦊄	同上
𦊅	古文又作𦊆
𦊇	弋支切。𦊇自得也。
𦊈	無
𦊉	籀文
𦊊	同上
𦊋	同上。
𦊌	無
𦊍	無
𦊎	同上
𦊏	同上。
𦊐	古文
𦊑	同上。
𦊒	無
𦊓	同上
𦊔	同上。
𦊕	同上。
𦊖	同上。
𦊗	同上。
𦊘	同上、亦作。
𦊙	同上

詭	於嬌切、災也、又巧言兒
誦	無
諡	同上。
諺	同上。
諫	七賜切。數諫也。
諡	是闡切。大也。說文曰：吉也。
競	渠慶切。疆語也。一曰：逐也。
汨	同上、見說文。
曹	同上、今文
乃	奴改切、大也、往也、說文曰曳離之難也
孛	籀文
盧	古文
于	同上、今文
虧	去爲切、毀壞也、說文曰气損也、俗作𠄎虛兮
玃	古文
嚴	古文
筭	古文
壘	古文
噐	俗、同上。
齋	無
齋	籀文
齋	並古文
欸	同上
欸	呼物切、忽也
嗽	同上
徹	同上
歎	同上
𠄎 <small>小</small> 比	無
𠄎 <small>死</small>	無
饑	同上
饑	並同上
饑	同上
真	籀文
餽	古文
饑	無
饑	士卷切、飯食也
履	古文
飯	扶晚切。餐飯也。又符萬切。食也。
飭	同上

滄	同上。
𩚑	同上。
𩚒	同上
𩚓	並古文
𩚔	並古文
𩚕	籀文
𩚖	同上
𩚗	古文
𩚘	古文
𩚙	同上
𩚚	同上
𩚛	古文亦作𩚛
𩚜	無
𩚝	無
𩚞	古文
𩚟	古文
𩚠	古文
𩚡	籀文
𩚢	同上
𩚣	古文
𩚤	同上
𩚥	赴恭扶恭二切。爾雅曰、粵𩚥掣曳也。
𩚦	口化口瓦二切。跨步也。與跨同。
𩚧	七余切。𩚧𩚧也。
𩚨	同上。亦作𩚩。
𩚪	古文。
𩚫	音紛。芬芳。
𩚬	並同上。
𩚭	並同上。
𩚮	古文。
𩚯	古文。
𩚰	古文。
𩚱	籀文。
𩚲	說文：同上。又周禮注云：𩚲小孔貌。
𩚳	並古文。
𩚴	並古文。
𩚵	古文。
𩚶	古文。
𩚷	古文。

屋	籀文
瘞	同上
疣	同上
𦍋	並古文。
𦍌	同上
殞	胡對切。爛也。
瘞	羊至切。說文曰、瘞也。
竈	子到切、炊竈也。
𦍍	並古文
𦍎	籀文
<b>第四帖</b>	
𦍇	並同上。
杉	同上。
檮	同上。
𦍈	籀文。
栒	同上。
榴	呼骨切。高也。
檉	同上。
檉	於斬切。禁也、棟也。
楸	去減切。戶也。
檉	同上。
栒	詳里切。𦍉也。與栒同。
𦍉	籀文。
栒	同上。又思井切。
楸	同上。
檉	古文。
楸	同上。
栒	同上。說文女几切。
檉	力古切。彭排也。亦同上。
打	徒丁切。檉也。又音汀。
栒	與涉切。薄也。亦同上。
栒	居六切。栒栒也。
檉	胡本切。木未破也。
檉	楚鎮切。親身棺也。
檉	遵爲子遂二切。左氏傳曰越敗吳於檉李。
杵	同上。
椽	先刀切。船總名。或作艘。
椽	同上。
椽	補達切。海中大船也、泆也。亦作艘。

楫	才立子葉二切。行舟具也。
櫂	力底力計二切。小船也、又梁棟名。又所宜切。
檣	力底切。江中大船也。又作檣。
橫	胡觥胡孟二切。閑木也。
挾	公洽切。檢柙也。
械	亥誠切。器仗也、又桎梏也。
槎	仕雅切。國語山不槎蘖、槎斫也。亦與查同。
桎	之實切。在足曰桎。
槲	都角切。擊也、詩云槲之橐橐。
栝	古胡切。栝椽木也。
梏	古篤切。在手曰梏。
椽	力增切。栝椽。
枰	皮兵皮柄二切。枰仲木名、上林賦曰華楓枰檣、又博局也。
校	胡教切。械也。周禮校人掌王馬之政。又古效切。
蘖	魚割切。槁也。
采	且在切。色也、事也、又取也。
柿	蒲會孚吠二切。削朴也、枝附也。
櫛	並同上。
不	並同上。
櫛	力狄切。櫛櫛棹指也。
梓	並同上。
櫛	先奚切。櫛櫛也。
柎	當骨切。柎柎木頭。說文五滑切。斷也、一曰給也。
槍	千羊切。峒也、木兩頭銳也。莊子槍猶抵也。漢書云見獄吏則頭槍地。又楚庚切。機槍也。
櫛	力東切。櫛也、牢也。
柙	胡甲切。櫛也。
壽	徒勞切。斷木也。
析	思狄切。分也。
櫛	下黠切。闌也、櫛也。楚辭云櫛楯也。
榘	又垢側九二切。木也、柴也。
棺	古丸切。棺槨之言完、所以藏屍令完也。又古亂切。棺斂也。
椀	口管胡管二切。木名、又束薪。
櫛	餘涉切。牖也、又櫛榆、縣名。
榘	爲綴才芮二切。漢書曰給榘櫛葬埋、師古云榘櫛謂小棺。又音歲。
槨	古莫切。棺槨也。
楸	扶田切。左氏傳曰唯是楸柎、謂棺中荅牀也、又方木也
楸	渠列切。有表識謂之楸槨也。
楸	甫六切。持牛不令舐觸人也。說文又彼力切。以木有所逼束也。

榔	同上。
榲	古鄧切。竟也。今作巨。
櫟	仕交切。澤中守草樓也。
休	虛鳩切。息也、定也。
櫟	瞿龍切。小舟也。亦作櫟。
拱	居冢切渠恭二切。爾雅曰杙大者謂之拱。
檄	欣詭切。大椒也。
檣	古胡切。木名、木四布也。
檣	古回户乖二切。槐別名。
檣	巨月居月二切。門廂也。
檣	才陵切。豕所寢也。又子登切。
檣	思計切。檣陽山。
禁	古文。
菴	籀文。
菴	同上。
菴	布緬切。菴，竹草。爾雅曰竹菴蓄。郭璞云似小藜，赤莖節，好生道旁，可食，又殺蟲。
茗	音格。山葱也。
荳	同上。
葱	且公切。葷菜也、又淺青色。
藺	同上。
藺	徒含切。藺、苳藺。
蒯	同上。
藪	同上。
藪	力檢切。白藪也。
藪	同上。
藪	魚激切。小草有雜色、似綬。詩曰邛有旨藪。
藪	同上。司馬相如說藪从藪。
藪	同上。亦作藪。
芎	同上。說文云杜林說芎从多。
菊	居六切。說文云大菊、藪麥。
藪	居六切。治藪也。爾雅注云今之秋華菊。
藪	同上。
莖	且卧切。斬草。
蒸	章繩切。麤曰薪、細曰蒸、又炬也、衆也、君也、塵也。
萱	同上。
葵	莫侯切。說文云毒艸也。
葉	仕街切。
莽	古文。
蕨	籀文。

篠	同上。
簞	同上。
筴	同上。
筥	九呂切。盛米器也、方曰筥、圓曰筥。
筭	同上。
籥	同上。
箛	同上。
簞	同上。
竿	同上。亦竹器。
箬	同上。
簞	古文箬。
篋	同上。
箬	陟孝貞角二切捕魚具
𦵏	並古文。
𦵏	並古文。
𦵏	籀文。
𦵏	古文。
對	同上。漢文帝以爲責對而爲言多非誠故去其口以從土。
僕	步穀切。馭車也。
𦵏	古文。
𦵏	籀文。
𦵏	古文。
齋	同上。
𦵏	禹軍切。除草也。
𦵏	古文。
穗	同上。
秆	同上
稅	籀文。
<b>第五帖</b>	
春	舒庸切。雍父作春、黃帝臣也、又擣也。
臺	市倫切。熟也。
全	同上。
塩	同上、俗。
𦵏	古文、出說文。
𦵏	俗。
𦵏	徒鹿切。匱也。
𦵏	火玄切。角弓也。
𦵏	尺遙切。弓弛克。
弧	戶都切。木弓也。

彊	渠貞切。弓曲也。
強	同上。
彊	古鑊切。張也、說文滿弩也。
徽	並古文。
刊	口干切。削也、定也、除也。
鑊	靡各切。鑊鈔劍名。
鄒	同上。
鏗	力罪切。或作礪。
夂	同上。
巽	無
輓	子龍切、車跡也。
津	同上、出說文。
溢	弋質切。盈也、器滿也、餘也。
湏	古文。
𠂔	亦、古文、出說文。
𠂔	無
皂	無
𠂔	同上。
𠂔	於孔切。𠂔𠂔天氣不明也。
𠂔	似緣切。美兒。
農	同上。
𠂔	無
𠂔	籀文。
𠂔	籀文。
忽	千公切、忽忽多遽也
<b>第六帖</b>	
𠂔	古文出說文
𠂔	同上
𠂔	扶勿切、山兒
𠂔	五代切、止也、亦作闕
𠂔	亦與研同
𠂔	力竹切、礪礪田器
陶	呼矩切、鄉名
羔	古刀切。羊子。
𠂔	所留切。犬名、又秋獵也。亦作蒐。
獸	二古文。
𠂔	牛斤切。兩犬相齧也。
麋	白交普表二切。獸似鹿。
鷺	午何切。鷺屬。亦作鵠。

鷓	同上。
鴛	於元切。鴛鴦四鳥。
鶻	市羊切。鶻鶻。
鯨	七接切。魚名。
鯿	仄下切、藏魚也。
鼯	胡的胡姪二切。似鼠而白也。
鼯	徒當切。鼯鼯鼠名。
鼯	力知切。小鼠也。
蚶	同上。
蝶	同上。
蛺	古協切。蛺蝶也。
蝕	時力切。日月蝕也。
蝨	子老切。蝨蝨也。亦作蚤。
蠱	邳移切。蠱蝥。亦作蟬。
蠱	同上。
賈	使呂切。以賣財卜問也。
映	於兩切。無賞。
賂	力振切。貪也、難也。或作遴。
翳	並同上。
習	似立切。飛也、串也、又詩云、習習谷風。
翫	午亂切。習也、衆也、又貪悅也。
毳	大當切。毳毳屬、曲文者。
毳	仁志切。以毛羽爲飾。
旃	仕角切。說文角長兒。
笈	古文。
織	之力切、作帛布之總名、又之異切、織文錦綺之屬、
紕	並古文
結	並古文
縶	布一布結二切、止也、冠縫也、
纒	始移切、又思移切、粗細經緯不同者、
緘	同上
絆	補畔切、羈絆也
紕	力奚切、繫紕也、一曰、絰紕也
紕	同上
緝	自遵切、繞緝也
冪	同上。
幪	奴回奴昆二切。著也、塗也。
帑	七旦七見二切。幪頭也、幪也。
幪	大兮切。憫幪、又幪帷也。

幘	巨其巨記二切。巾也。亦作𦉳其中。
褻	且立切。裙緣上也。
襍	同上。
褫	子蒙切。禪衣也。
叩	皮筆切。輔信也。今作弼。
勺	居流切。聚也、解也。今作鳩。
旬	似均切。十日也、徧也、均也。
晝	無
之	止貽切、是也、至也、往也、發聲也、出也
𡗗	古文封字、說文云草。
亾	士嫁切、暫也、止也
无	同上。虛无也。
匸	下體切。袞袞有所挾藏也。
匹	普謐切。配也、四丈爲匹、又一馬也、輩也、二也。
𡗗	籀文。
丈	除兩切。十尺也、又丈夫也、長也、扶也、長扶萬物也。
𡗗	他禮切、橫首杖也
巴	布加切。國名、又巴蛇吞象三年而後吐其骨服之無心腹病、又三巴記云閬白水東南遠如巴字。
醋	才各切。報也、進酒於客曰獻、客答主人曰醋。今音措。
𡗗	而琰切。𡗗𡗗。
𡗗	又劣切。𡗗菹也。

## 第5章 字体と字種との区別から見た重出字

### 5.1 重出字の問題

本章は字体と字種との区別から『篆隸万象名義』における重出字を考察するものである。重出とは、同じ掲出字が二回以上出現することであり、その掲出字を重出字と呼ぶ。部首分類体の字書の出発点に位置する説文解字において既に、この重出の現象は見られるところである。また、原本『玉篇』、さらに日本で編纂された『篆隸万象名義』、『新撰字鏡』、『類聚名義抄』にも観察できる。これらの重出字は、同じ部首にともに存在する場合と異なる部首に存在する場合とがある。これらには、編纂時に意図的に配置したものと、転写の過程で生じた誤りの結果として重出されるに至ったものが混在する。類形別字も存在する。

重出字の形態には、異なる項目の掲出字として掲載されるもの（①別項目掲出）、同一項目の複数掲出字として併記するもの（②同一項目掲出）、または注文に繰り返されるもの（③同一項目内注記）の3通りがある。『篆隸万象名義』、『新撰字鏡』、『類聚名義抄』の三者における重出字のありようを観察すると、『篆隸万象名義』の重出字は、形態上で比較的単純で、整理しやすいが、『新撰字鏡』と『類聚名義抄』は上記の①②③が複雑に混在している。そこで、まずは『篆隸万象名義』を対象として、古辞書における重出字分析の方法を論じてみたい。また、この考察は、以前に論じた『篆隸万象名義』の掲出字数の問題を解決する上でも必要なものである。

重出字は、説文解字について、清代から考証があり、玉篇系字書の『篆隸万象名義』と宋本『玉篇』についても先行研究で検討されている。以下では、まずそれらの先行研究を検討し、次に先行研究と比較しながら『篆隸万象名義』の重出字の実際を考察し、分類を行う。さらに原本『玉篇』における重出について検討し、『篆隸万象名義』の重出字の特徴を分析する。

重出字を考察する際には、翻刻本文と原本画像との両方を用いて判断する。まず、HDICの入力済の本文データをもとに、情報処理の手法によって重出字の抽出と確認とを行い、その後、原本画像によって『篆隸万象名義』掲出字を比較し、字形が全同のものを字体レベルの重出字と認定し、字形のわずかに異なるものを字種レベルの重出字と認定する。

### 5.2 重出字に関する先行研究

#### 5.2.1 説文解字の重出字についての先行研究

張・孫（2007）は、説文解字の重出字に関する研究である。それによれば、清代までの説文解字の重出字に関する研究には、王鳴盛の「説文重出字」、胡秉虔の「重文見説解中」、

許瀚「與菴友論說文異部重文」があり、また王筠の「説文釋例・刪篆」の中で詳しく整理されているという。そして、張・孫（2007）は、説文解字における重出字について次のように定義する：「重出字とは、両者の字の篆書・古文・籀文・或体・俗体中のどれか二つが完全に同じもの、つまり、両者の字（隸定後の字体ではない）の形が一致するもので、かつ同じ部首或いは異なる部首で二度出現するものである。」そのうえで、説文解字における重出字の分類とその判定規準として具体的に次の4点を挙げている：①両者の篆書が同じもの、②一方の篆書が重出対象の篆書の或体と同じもの、③両者の古文が同じもの、④一方の篆書が重出対象の古文・籀文・俗体と同じもの。この判定規準についてくわしく検討すると、後の時代の楷書体字書では字体レベルの重出字になるもの、同様に字種レベルのもの（異体字の一部）、さらに異なる部首間で相互に字体注記とされるものの一部、これら三種のタイプを重出字と認定している。

## 5.2.2 玉篇系字書の重出字についての先行研究

玉篇系字書については、これまで主に字体・字種レベルで掲出字が二回以上立項されるものを重出として判定されてきた。次に玉篇系字書の重出字についての先行研究を概観する。

### 5.2.2.1 呂（2003）

呂（2003）は、『篆隸万象名義』に、重出字が156組のあることを指摘した。そのうち音義全同のもの21組、包括関係となるもの35組、それ以外のもの100組である。この100組の重出字のそれぞれに考証をしている。重出字となる項目を比較することによって、結論を3点にまとめている。①『篆隸万象名義』の中に誤写が多くあり、転写によって生じたことを指摘した。②義注の選別には恣意性が見られるが、転写の際に抄出されたものとし、『篆隸万象名義』の編纂された当初の義注はより多かったと推測した。③一部の重出字に対して、同じ発音を表記する異なる反切用字を用いたことから、それぞれ異なる先行文献を参照した可能性が高いとし、『篆隸万象名義』の編纂では顧野王の原本『玉篇』以外の資料も参照したと推測した。

しかしながら、挙げられた100組の重出項目は紙幅の関係であろうか、具体的な所在を示さず、所属部首のみを示している。また、論文全体は簡体字表記であるため、翻刻上さまざまな問題が生じた。呂（2003）で示された100組の重出項目は重要な材料であり、のちにその詳細を確認する。

#### 5.2.2.2 何 (2005)

何 (2005) は、宋本『玉篇』における重出字について行った調査で、284 組 569 字の重出字があり、同部重出 62 組 125 字、異部首重出 222 組 444 字と報告している。さらに、宋本『玉篇』の重出字の詳細と成因を詳細に分類して検討している。

#### 5.2.2.3 池田 (2016a)

池田 (2016a) は、大広益会玉篇 (宋本『玉篇』玉篇) データベースの構築と利用を示した研究成果である。その一環として、宋本『玉篇』の重出字を考察した。宋本『玉篇』では、270 組 540 字の重出字があり、そのうち同部重出 65 組 130 字、別部重出 205 組 410 字であることを指摘した。さらに、説文解字・原本『玉篇』残巻・『篆隸万象名義』・宋本『玉篇』での部首内出現順位を具体的に指摘しながら、重出字は宋本『玉篇』の増補字や『篆隸万象名義』の脱字を検討する材料となることなどを指摘した。

### 5.3 篆隸万象名義の重出字についての実際

#### 5.3.1 篆隸万象名義データベースを利用する研究方法

『篆隸万象名義』の重出字の判定について、隸書掲出字の字形を相互に直接的に比較するのが有効な方法である。ただし、異体字の時代差の影響で、現存本転写までの過程で誤写もあるため、高山寺本『篆隸万象名義』では字形が同じかあるいは類似するが、実は別字であるという項目が存在する。それゆえ、翻刻した掲出字と掲出字原本画像、そして注文も合わせて判断すべきである。このような作業は、データ化されていない場合、非常に手間がかかる。また、のちに検証する際に困難になる面がある。

池田 (2014a) の篆隸万象名義データベースは一回目の本文入力が終わりに、現在点検校正中である。本研究では、すでに入力済みのデータを利用し、重出字調査用のサブデータベースを作成して行うこととした。すなわち、情報処理の手法によって重出字の抽出と確認をする試みである。作成の手順およびその詳細は次の通りである。

まず篆隸万象名義データベースのデータを利用し、文字コード上同一の掲出字を抽出し、エクセルファイルで左右両側に、所在・部首・掲出字・注文の順で並列してリストアップする。次に、ファイルメーカーで重複字調査用のデータベースを作成した。

- ・ Excel による文字コード化掲出字が同じ項目の抽出

表 5-1 同じ文字コード化された掲出字項目リスト

Location1	Radical1	Entry1	Def1	Location2	Radical2	Entry2	Def2
第 1 帖 16 丁	上	霽	霽：古文。	第 5 帖 114 丁	雨	霽	普唐反。雪盛也。
第 1 帖 17 丁	示	禩	裸衣(禩 β)：上文。	第 1 帖 17 丁	示	禩	裸大(禩 γ)：上文。
第 1 帖 17 丁	示	衺	衺：俾利反。	第 1 帖 17 丁	示	衺	俾利反。祭伺(祠)命名也。
第 1 帖 18 丁	示	祉	勅理反。福也、祿也。	第 1 帖 57 丁	人	祉	丘基反。舞不止也。
第 1 帖 18 丁	示	褱	褱：思離反。福也。	第 1 帖 18 丁	示	褱	思離反。福也。
第 1 帖 19 丁	示	粹	粹：子内反。月祭也。	第 1 帖 19 丁	示	粹	子内反。月祭也。
第 1 帖 20 丁	示	醮	咨肖反。醮也、祭酒酬酢也。	第 6 帖 185 丁	酉	醮	醮字。
...	...	...	...	...	...	...	...
第 6 帖 149 丁	巾	幘	昌瞻反。絶。	第 6 帖 149 丁	巾	幘	昌瞻反。絶起。
第 6 帖 178 丁	𠂔	爽	式亦反。盛也、驚兒。	第 6 帖 178 丁	𠂔	爽	上字古文。

Excel の対照表 (表 5-1) を用いて、コード化された掲出字、注文データの比較作業ができるが、掲出字の原本画像の参照ができない。そこで表 5-1 のデータに基づき、次のようにファイルメーカーで重出字調査用のサブデータベースを作成し、掲出字画像を取り込み、原本画像の字形の比較ができるようにした。

- ・ファイルメーカーによる篆隸万象名義の重出字調査用のサブデータベース



A エリア →文字コード上  
同じ掲出字の  
情報

B エリア →判定

C エリア →凡例

図 5-1 篆隸万象名義の重出字調査用のサブデータベース

図 5-1 に示されているように、『篆隸万象名義』の重出字調査用のサブデータベースのインターフェースでは A・B・C との三つのエリアがある。A エリアには、データベースの文字コード上同じ掲出字について、『篆隸万象名義』における記述の情報（掲出字、掲出字原本画像、所在、データベースの ID、部首、注文）を示す。B エリアには、A エリアでの項目情報に基づき重出字に関する判定を記入する。C エリアには、重出字の判定を行うつぎの凡例を表示する。

P1:一字目の画像	P2:二字目の画像	×:翻字字形と不一致	○:翻字字形と一致
E1:一字目の掲出字	E2:二字目の掲出字		
T1:一組の重出字と判断する（字体レベル）	T2:重出字と判断する（翻字によった：異形同字→字種レベル）	F:重出字ではないと判断する	
R_diff: S same D different O out of scope (S 同じ部首 D 異なる部首 O 対象外)			

そして、両者の掲出字の項目情報から、単純重出・両部首所属・多音多義字分項・類形同字などの重出字となった原因を判定する。重出字の判定の例を「讒」によって示す。

(1) 「讒」の例



讒 仕咸反。譖也。（篆隸万象名義 第 3 帖 13 丁裏 言部）



讒 仕咸反。譖也。（篆隸万象名義 第 3 帖 16 丁裏 言部）

「讒」は、両方の掲出字の原本画像が一致し、注文内容も完全に同じである。それゆえ、この組は同部首言部の重出字と判定する。また、掲出字の原本画像が一致するため、字体レベルの重出字 T1 に分類する。『篆隸万象名義』の重出字についての調査の詳細を次に述べる。

### 5.3.2 本研究における篆隸万象名義の重出字の調査

以上の調査手順と方法によって、重出字について調査したところ、文字コード上同じ掲出字は 311 組 622 字あった。個々の例をまず非重出字と重出字とに分け、さらに重出字は、字体レベルの重出字、字種レベルの重出字のように分類した。詳細は次の通りである。

#### 5.3.2.1 非重出字と判断した項目

非重出字と判断した項目は 83 組 166 字である。高山寺本『篆隸万象名義』のテキストと翻刻の内容と比較すると、次の三つに分類できた。①は同形異字・類形異字のものであ

る。②は異字を同じ文字コードの文字としたものであり、③は篆隸万象名義データベースの入力ミス、あるいは符号化できない関係の項目である。以下に詳細を示す。

①同形異字・類形異字（7組14字）

(2) 「𠂔」の例



中 作可反。左手。(篆隸万象名義 第2帖51丁表 中部)



中 雉烈反。草字。(篆隸万象名義 第3帖89丁表 中部)

篆隸万象名義データベースでは両方を「𠂔」と翻刻している。それに対して、宮澤(1977)は、第一字を「𠂔」とし、第二字を「中」に翻刻しており、呂(2007)はそれぞれ「ナ」と「𠂔」と翻刻している。「𠂔」・「中」の相違については、大漢和辞典では「𠂔 ひだりの手(7826)」と「中 めばえ(7825)」とする。JIS X 0213では[𠂔 U+FA3C]と[中 U+5C6E]と区別されるが、Unicode3.2では同一の漢字として統合された。それゆえに、Unicodeでは、フォントによって表示される形が変わることはあるが、文字コードとして区別されない。第一字の判読について、「ナ」は字義に相応しい判読であり、「𠂔」は原本字形を反映する判読である。この組はデータベースの処理上の影響で、符号化の際に同一とされた同形異字と考えられるため、非重出字と判定する。

(3) 「𣎵」の例



𣎵 所錦反。水積柴補魚也、網林又森也。(篆隸万象名義 第4帖9丁表 木部)



𣎵 思俊反。車轂中空也。(篆隸万象名義 第4帖18丁表 木部)

篆隸万象名義データベースでは両方を「𣎵」と翻刻する。宮澤(1977)はそれぞれ「𣎵」と「𣎵」と翻刻し、呂(2007)は両方を「𣎵」と翻刻する。第二字の判読について、「𣎵」は字義に相応しい判読であり、「𣎵」は原本字形に近似させた判読である。それゆえに、この組は類形異字と考えられるため、非重出字と判定する。

② 異字の同一符号化

(画像では別字で、符号化する際に同じ字で翻刻した項目。55組110字)


(4) 「襍」の例


 襍 咨肖反。醕也、祭酒酬酢也。(篆隸万象名義 第1帖20丁裏 示部)

 𩚑 醕字。(篆隸万象名義 第6帖185丁表 酉部)

篆隸万象名義データベースでは両方を「襍」と翻刻した。宮澤(1977)は両方を「襍」と翻刻し、篆隸万象名義データベースと一致する。呂(2007)はそれぞれ「襍」と「𩚑」と翻刻した。後者の判読について、「襍」は字義に相応しい判読であり、「𩚑」は字形を近似させた判読である。ただし、「𩚑」の字義は「醕」と甚だしく異なるため、現段階では「𩚑禾酉」と翻刻すべきである。したがって、この組は異字の同一符号化と考えられ、非重出字と判定する。

(5) 「𠂔」の例

 𠂔 胥育反。早也。夙字。(篆隸万象名義 第1帖63丁表 人部)

 𠂔 古夙字。𠂔、同上。(篆隸万象名義 第1帖63丁表 人部)

篆隸万象名義データベースは両方を「𠂔」と翻刻した。宮澤(1977)はそれぞれ「𠂔」と「𠂔」と翻刻した。呂(2007)はそれぞれ「𠂔」と「𠂔」と翻刻した。第一字の翻刻は「𠂔」・「𠂔」・「𠂔」と三者の意見が分かれる。「𠂔」とする場合、二種の原本字体の違いが失われる。「𠂔」とする場合は、二種の原本字体が違うことを示せるが、原本字形の細部まで表現できるわけではない。このようにする利点は「𠂔」がすでに符号化可能であるという、情報処理上の理由である。「𠂔」の場合は、原本字形を忠実に反映できるが、符号化されていないため、作字やIDSで対応するしかない。いずれにせよ、原本では「夙」の二種の異体字として字体を区別する意図が見られ、この組は異字の同一符号化の例と考えられるので、非重出字と判定する。

以上二例で分析したように、このように高山寺本『篆隸万象名義』の画像では別字で、

符号化の際に同じ字で翻刻した項目は全部で 55 組 110 字である。

③ 篆隸万象名義データベースの入力ミス・符号化できない関係の項目。25 組 50 字。

この種のものは 25 組 50 字である。篆隸万象名義データベース点検・校正上で適宜修正を行った。

### 5.3.2.2 重出字と判断した項目 (224 組 448 字)

重出字と判断した項目は 224 組 448 字である。『篆隸万象名義』のテキストと翻刻の内容と比較したところ、二種類の状況に分類できた。①は掲出字原本字形が同じであるため、字体レベルの重出字に分類する。②は掲出字原本字形が細微な違いがあるが、包摂の範囲で処理できるため、字種レベルの重出字に分類する。次に例示しながら確認してみよう。

① 字体レベルの重出字：(141 組 282 字)

同部首：103 組 206 字 異部首：38 組 76 字

(6) 「愷」の例



愷 除蒸反。平也。(篆隸万象名義 第 2 帖 81 丁裏 心部)



愷 除承反。失志兒。(篆隸万象名義 第 3 帖 2 丁表 心部)

「愷」の万象名義での出現項目を確認すると、両者の字形が一致するが、注文はそれぞれ異なる字音と字義を示している。宋本『玉篇』と広韻では反切が二つあり、多音注記の字を分項して、異音異義で立項する可能性があると考えられる。重出字の判定について、掲出字の原本字形が同じであるため、同部首の字体レベルの重出字 T1 に分類する。

(7) 「躬」の例



躬 居雄反。身也、己也、親也。(篆隸万象名義 第 1 帖 68 丁裏 身部)



躬 居雄反。身也、親也。(篆隸万象名義 第 2 帖 80 丁表 呂部)

「躬」の『篆隸万象名義』での出現項目を確認すると、両者の字形が一致する。両者の

注文はほぼ同じであるが、「己也」の単字注は前者にしかない。そして両者はそれぞれ「身部」と「呂部」と異なる部首に属する。掲出字の原本字形が同じであるため、異部首の字体レベルの重出字 T1 に分類する。

② 字種レベルの重出字 T2 : (83 組 166 字)

同部首 : 66 組 132 字 異部首 : 17 組 34 字

(8) 「𤑔」の例

𤑔

𤑔 虚疑反。熱也、盛兒。(篆隸万象名義 第 5 帖 126 丁表 日部)

𤑔

𤑔 虚疑反。盛兒。(篆隸万象名義 第 5 帖 126 丁裏 日部)

「𤑔」の『篆隸万象名義』での出現項目を確認すると、両者の字形に細微な違いが観察できる。字書編纂当初は、異なる字体が示されていた可能性があると考えられる。両者の注文はほぼ同じであるが、「熱也」の単字注は前者にしかない。重出字の判定について、掲出字の原本字形が全同ではないが、包摂の範囲で処理できるため、同部首の字種レベルの重出字 T2 に分類する。

(9) 「單」の例

單

單 丁安反。一也、大也、隻也。(篆隸万象名義 第 3 帖 26 丁裏 四部)

單

單 時闡反。單榮也。(篆隸万象名義 第 6 帖 175 丁表 單部)

「單」の万象名義での出現項目を確認すると、両者の字形に細微な違いが観察できる。字書編纂当初は、異なる字体が示されていた可能性があると考えられる。宋本『玉篇』と広韻では反切が二つあり、多音注記の字を分項して、異音異義で立項している可能性があると思われる。重出字の判定について、掲出字の原本字形が全同ではないが、包摂の範囲で処理できるため、異部首の字種レベルの重出字 T2 に分類する。

以上、重出字と判断した項目は 224 組 448 字である。これらを『篆隸万象名義』のテ

キストと翻刻の本文と対照比較したところ、字体レベルの重出字 T1 と字種レベルの重出字 T2 とに分類することができる。内訳は字体レベルの重出字 T1 は 141 組 282 字（同部首 103 組 206 字、異部首 38 組 76 字）であり、字種レベルの重出字 T2 は 83 組 166 字（同部首 66 組 132 字、異部首 17 組 34 字）である。

### 5.3.3 呂（2003）との比較

#### 5.3.3.1 呂（2003）における実例の詳細

先に述べたように、呂（2003）では注文を相異にする重出字の 100 組（所属部首付き）を例示し、内容の考証を付している。その成果を踏まえ、篆隸万象名義データベースを利用し、所在を追記し、データベースにおける翻刻した掲出字との異同を分類して表 5-2 に整理した。表後にこれらの重出字の部首配属（同・異部）、『篆隸万象名義』の帖数の状況をまとめた。同じ部首に配属する項目の背景をグレーにした。

表 5-2 呂（2003）にて例示する重出字の詳細

No.	Location1	Radical1	Entry1	Def.1	Location2	Radical2	Entry2	Def.2	Diff
1	第 1 帖 21 丁表	二部	恒	何登反。久也、弦也、常也。	第 3 帖 7 丁表	心部	恒	何登反。久也、強也、常也、慨也、太也。	D
2	第 1 帖 21 丁表	玉部	玩	吾館反。翫也。	第 1 帖 25 丁裏	玉部	玩	五館反。弄也、戲也。	S
3	第 1 帖 21 丁表	珏部	班	補姦反。別、次也、賦也	第 1 帖 29 丁表	珏部	班	补奸反。还也、次也、賜也、布也。	S
4	第 1 帖 51 丁表	人部	健	渠建反。伉。	第 1 帖 51 丁表	人部	健	渠建反。伉也。	S
5	第 1 帖 51 丁裏	人部	佳	古崖反。佳大也。	第 1 帖 51 丁裏	人部	佳	革崖反。善。	S
6	第 1 帖 60 丁裏	人部	倅	会愤反。副也、盈也。	第 1 帖 63 丁裏	人部	倅	仓愤反。盈也、副也。	S
7	第 1 帖 61 丁表	人部	叟	苏舌反。老也。	第 1 帖 61 丁裏	人部	叟	苏后反。老也。	S
8	第 1 帖 61 丁裏	人部	僇	子開反。可求。	第 1 帖 63 丁表	人部	僇	子弁反。困也。	S
9	第 1 帖 63 丁表	人部	(作字) [蹇]	遐暇反。夏也。	第 1 帖 62 丁裏	人部	(作字) [蹇]	遐暇反。夏字也。	S
10	第 1 帖 63 丁裏	人部	俸	补孔反。屏棒也。	第 1 帖 64 丁裏	人部	俸	补孔反。屏俸也、上小貌也。	S
11	第 1 帖 68 丁表	身部	体[體]	耻礼反。形也。	第 2 帖 61 丁裏	骨部	体[體]	他礼反。形也、分也、生也、亲也、身、连结也、接纳也。	D
12	第 1 帖 85 丁裏	頁部	頰	力外反。疾也、难晓也。	第 5 帖 6 丁裏	米部	頰	力外反。鲜白。	D
13	第 1 帖 82 丁裏	頁部	顛	鱼牛岂反。静也、乐也。	第 5 帖 19 丁表	岂部	顛	鱼岂反。静。	D

14	第1帖99丁表	目部	睨	一活反。媚。	第1帖99丁裏	目部	睨	一活反。娥媚也。	S
15	第2帖4丁裏	見部	覲	尸甚反。深見也。	第2帖5丁裏	耳部	覲	尸甚反。窃見也。	D
16	第2帖4丁裏	見部	覲	于革反。惊也。	第2帖5丁裏	耳部	覲	于革反。视也。	D
17	第2帖4丁裏	見部	蔑	亡结反。劳也，目无光也。	第2帖5丁表	苜部	蔑	亡结反。目劳无精。	D
18	第2帖4丁裏	覲部	覲	昌反召。普见。	第2帖5丁裏	耳部	覲	入召反。并视也，比也。	D
19	第2帖4丁裏	覲部	覲	楷间反。畏视。	第2帖5丁裏	耳部	覲	楷间反。俱视也。	D
20	第2帖4丁裏	覲部	覲	欣衣反。见雨而上息。	第2帖5丁裏	耳部	覲	火利反。见雨止也。	D
21	第2帖5丁裏	耳部	聵	汝江反。耳中声。	第2帖5丁裏	耳部	聵	女江反。耳中聲也。	S
22	第2帖5丁裏	耳部	联[聯]	力彼反。聚也、连也、及也、合、续也。	第2帖5丁裏	耳部	联[聯]	力然反。聚也、连也、及也、续也、难也。	S
23	第2帖21丁裏	口部	哂	居候反。耻辱、詈也。	第2帖20丁裏	口部	哂	呼垢反。耻辱也、厚怒也。	S
24	第2帖11丁裏	口部	哉	子来反。间也。	第5帖40丁裏	戈部	哉	子来反。始也。	D
25	第2帖42丁裏	手部	押	古狎反。辅也，夹也，捡也。	第2帖43丁裏	手部	押	字拏反。辅也、捡也，夹。	S
26	第2帖30丁裏	手部	挈	苦節反。提也、擊也。	第5帖48丁裏	扌部	挈	连	D
27	第2帖81丁裏	心部	愷	除蒸反。平也。	第3帖2丁表	心部	愷	除承反。矢志兒。	S
28	第2帖90丁裏	心部	忧[憂]	于牛反。愁也、思也。	第3帖52丁表	攴部	忧[憂]	于尤反。忧字。愁思也。	D
29	第3帖28丁裏	欠部	钦	去金反。敬也、忧也。	第5帖62丁表	金部	钦	去音反。慕也。	D
30	第3帖29丁裏	欠部	歎	欣疑反。卒憊也、咲怒也。	第3帖31丁裏	欠部	歎	虛紀反。喜字。樂也。	S
31	第3帖49丁裏	彳部	𢇇	巳約反。倚度、橫木渡水也。	第3帖50丁表	彳部	𢇇	巳約反。猗渡也。	S
32	第3帖71丁表	尸部	属	時欲反。合、聚也、录也、会也、足也、解也、近也、续也、連也、系也、著也、独、適也。	第3帖72丁表	尾部	属	之時反。联也、会也、录也、解也、续也、近也、著也、独也、適也、定也、连也。	D
33	第3帖83丁表	歹部	𣦵	古胡反。辜字。罪也、干也、彌也。𣦵字。	第3帖83丁表	歹部	𣦵[𣦵]	苦胡反。𣦵也、干也、彌也。𣦵字。	S
34	第4帖39丁裏	艸部	蓐	具居反。菜似蘇也。	第4帖52丁表	艸部	蓐	渠与(與)反。𦰇艸舌(舌)賈也、菜也。	S
35	第4帖60丁裏	竹部	篔	力桑反。篔也、车篔也、盛物也。	第4帖68丁表	竹部	篔	力桑反。笑也、籃也。	S
36	第4帖74丁裏	耒部	耨	徒兀反。耕禾间也。	第4帖75丁表	耒部	耨	大兀反。	S







37	第 4 帖 81 丁裏	禾部	种	直中反。稚也。	第 4 帖 82 丁表	禾部	种	直忠反。稚也。	S
38	第 5 帖 9 丁表	亼部	全	聚縁反。完。	第 5 帖 10 丁表	入部	全	聚浴反。具也、完也。	D
39	第 5 帖 10 丁表	入部	令	力贞反。使。	第 6 帖 160 丁表	冂部	令	力政反。命也、善也、伶也、告也、使也。	D
40	第 5 帖 19 丁裏	豆部	豉	时寔反。五味和。	第 5 帖 19 丁裏	豆部	豉	时寔反。盐也。	S
41	第 5 帖 22 丁表	皿部	盪	力读反。竭。	第 5 帖 22 丁表	皿部	盪	力读反。盪字。	S
42	第 5 帖 36 丁表	弓部	𠂔	反。滿弓有所向。	第 5 帖 36 丁表	弓部	𠂔	口孤反。持也、張也。	S
43	第 5 帖 35 丁裏	弓部	彊	苦侯反。弦所居。	第 5 帖 37 丁表	弓部	彊	苦侯反。弓端弦所居。	S
44	第 5 帖 46 丁表	刀部	劊	力支反。分也。	第 5 帖 46 丁表	刀部	劊[劊]	力支反。分割。	S
45	第 5 帖 52 丁裏	金部	鍬	口結反。鎌。	第 5 帖 59 丁裏	金部	鍬	可結反。缺也。	S
46	第 5 帖 42 丁裏	殺部	弑	尸忌反。子煞文也。	第 5 帖 48 丁表	殺部	弑	尸至反。杀。弑，又杀。	S
47	第 5 帖 42 丁表	殺部	杀[殺]	所黠反。復古伐死也、截也、賊也、咸也、杼也、疾也。	第 5 帖 48 丁表	殺部	杀[殺]	所黠反。宰。	S
48	第 5 帖 98 丁裏	水部	灑	须芮反。飲敵。	第 5 帖 98 丁裏	水部	灑	须絹反。饮。	S
49	第 5 帖 109 丁表	谷部	谿	苦奚反。	第 5 帖 109 丁裏	谷部	谿	苦号反。	S
50	第 5 帖 109 丁表	谷部	繆	力彫反。空谷。	第 5 帖 109 丁裏	谷部	繆	力周反。空谷深。	S
51	第 5 帖 109 丁裏	谷部	洫	渠周反。澮。	第 5 帖 110 丁表	谷部	洫	渠周反。澮也、亭。	S
52	第 5 帖 109 丁表	谷部	𡗗	呼江反。谷。	第 5 帖 110 丁表	谷部	𡗗(谷空)[𡗗]	呼江反。谷空。	S
53	第 5 帖 109 丁裏	谷部	𡗘	渠陆反。谷。	第 5 帖 110 丁表	谷部	𡗘	渠六反。谷名。	S
54	第 5 帖 109 丁裏	谷部	𡗙	胡东反。大壑。	第 5 帖 110 丁表	谷部	𡗙(谷苦)[𡗙]	胡东反。大谷。	S
55	第 5 帖 110 丁裏	彳部	凋	丁■(弔)反。半傷。	第 5 帖 110 丁裏	彳部	凋	丁聊反。傷也、弊也。	S
56	第 5 帖 110 丁裏	彳部	洄[洄]	胡炯反。冷。	第 5 帖 111 丁表	彳部	洄[洄]	胡炯反。冷也。	S
57	第 5 帖 110 丁裏	彳部	淫[涇]	渠井反。寒。	第 5 帖 111 丁裏	彳部	淫[涇]	渠井反。寒貌。	S
58	第 5 帖 111 丁表	彳部	准	之允反。準字。	第 5 帖 111 丁裏	彳部	准	之允反。均平。	S
59	第 5 帖 112 丁裏	雨部	霰	力沾反。久雨。	第 5 帖 113 丁表	雨部	霰	力占反。久雨。	S
60	第 5 帖 113 丁表	雨部	霏	柯霰反。霏濡。	第 5 帖 113 丁裏	雨部	霏	匹各反。霏濡也。	S

61	第 5 帖 114 丁表	雨部	霓	五奚反。云似龙。	第 5 帖 114 丁表	雨部	霓	五奚反。又五結反。云色似龙。	S
62	第 5 帖 114 丁表	雨部	霈	息俱反。凝。	第 5 帖 114 丁表	雨部	霈	思俱反。不进。	S
63	第 5 帖 114 丁裏	雨部	霏	日立反。霽也。	第 5 帖 114 丁裏	雨部	霏	普立反。	S
64	第 5 帖 114 丁裏	雨部	霰	丑涉反。小雨。	第 5 帖 115 丁表	雨部	霰	力涉反。小雨。	S
65	第 5 帖 115 丁表	雨部	霽	虚鬼反。震雷貌。	第 5 帖 115 丁裏	雨部	霽	虚鬼反。雷震。	S
66	第 5 帖 115 丁裏	雨部	霽	徒桓反。露盛多。	第 5 帖 115 丁裏	雨部	霽	徒桓反。零露。	S
67	第 5 帖 114 丁裏	雨部	霽	唯壁反。大雨。	第 5 帖 115 丁裏	雨部	霽	惟辟反。大雨。	S
68	第 5 帖 116 丁表	雲部	隄	徒戴反。	第 5 帖 116 丁表	雲部	隄	他爱反。不明也。	S
69	第 5 帖 117 丁表	風部	𩇛 <small>袞風</small> [𩇛]	君绢反。小风。	第 5 帖 118 丁表	風部	𩇛 <small>袞風</small> [𩇛]	尹绢反。小风。	S
70	第 5 帖 117 丁表	風部	飈[𩇛]	附娛反。自上下。	第 5 帖 118 丁表	風部	飈[𩇛]	附娛反。风上下。	S
71	第 5 帖 117 丁表	風部	颼	所留反。風音。	第 5 帖 118 丁裏	風部	颼	所留反。颼。	S
	颼		于留反。風音。						
	[颼]								
72	第 5 帖 117 丁表	風部	颼	思陆反。寒風。	第 5 帖 118 丁表	風部	颼	思六反。寒风。	S
73	第 5 帖 117 丁裏	風部	颼	匹周反。风吹也。	第 5 帖 118 丁表	風部	颼	巨周反。吹貌。	S
74	第 5 帖 117 丁裏	風部	颼	楚饥反。疾风。	第 5 帖 118 丁表	風部	颼	楚饥反。疾貌。	S
75	第 5 帖 117 丁裏	風部	颼	丑交反。热风。	第 5 帖 118 丁表	風部	颼[颼]	丑文反。热风。	S
76	第 5 帖 117 丁裏	風部	颼	柯谐反。疾貌。	第 5 帖 118 丁裏	風部	颼	柯谐反。疾也。	S
77	第 5 帖 117 丁裏	風部	颼	似立反。和貌。	第 5 帖 118 丁裏	風部	颼	似立反。大也。	S
78	第 5 帖 120 丁裏	白部	皤[皤]	胡告反。鸟白。	第 5 帖 121 丁表	白部	皤	胡告反。鸟白貌。	S
79	第 5 帖 120 丁裏	白部	皤	去千反。际见白也。	第 5 帖 121 丁表	白部	皤	去弓反。际见貌。	S
80	第 5 帖 122 丁表	日部	晷	苦见反。干也。	第 5 帖 122 丁表	日部	晷	苦见反。告也、干也。	S
81	第 5 帖 122 丁表	日部	暘	余亦反。覆云暫見。	第 5 帖 122 丁裏	日部	暘	余亦反。日覆云暫見。	S
82	第 5 帖 122 丁裏	日部	𠄎[𠄎]	緡涉反。日跌。	第 5 帖 123 丁表	日部	𠄎	阻涉反。日跌(跌)。	S
83	第 5 帖 123 丁裏	日部	𠄎	禹况反。往也、美也。	第 5 帖 124 丁表	日部	𠄎	禹况反。美光也。	S
84	第 5 帖 124 丁表	日部	𠄎	所隘反。暴也。	第 5 帖 124 丁裏	日部	𠄎	所隘反。日干物。	S

85	第5帖124丁裏	日部	晞	许机反。暴也。	第5帖124丁裏	日部	晞	欣机反。燥。	S
86	第5帖124丁表	日部	昔	思亦反。往古也。	第5帖124丁裏	日部	昔[咎]	思亦反。夜也、古也、昨也。	S
87	第5帖125丁表	日部	噉	公鸟反。如也、明也。	第5帖125丁裏	日部	噉	公鸟反。明也、皎也。〔噉：上文。〕	S
88	第5帖125丁表	日部	暮	莫故反。冥。	第5帖126丁表	日部	暮	綿故反。晚也、夕也。	S
89	第5帖126丁表	日部	曖	于戴反。似春。	第5帖126丁裏	日部	曖	于戴反。暗也。	S
90	第5帖127丁裏	日部	噉	勅爰反。不明也。	第5帖127丁裏	日部	噉	徒爰反。不明也。	S
91	第5帖122丁裏	日部	晚	无远反。暮后也。	第5帖122丁裏	日部	晚	莫遠反。後也、暮也。	S
92	第5帖129丁裏	日部	明	靡京反。光。	第5帖129丁裏	明部	明	靡京反。辨皙也、洁也、朗也、齐也、照也、发也、著也、尊也。	D
93	第5帖133丁表	大部	奩	普教反。大也。	第5帖133丁裏	大部	奩	巨教反。大也。	S
94	第5帖133丁表	大部	戡	雉揅反。大。	第5帖133丁裏	大部	戡	知栗反。大。	S
95	第5帖133丁裏	大部	奩	丁计反。大。	第5帖133丁裏	大部	奩	丁计反。大。	S
96	第5帖133丁表	大部	奩	飢薤反。大也。	第5帖133丁裏	大部	奩	飢薤反。大、不大。	S
97	第5帖134丁裏	大部	奕	余石反。容也、盛也。	第5帖134丁裏	大部	奕	余石反。盛貌。	S
98	第5帖145丁表	黑部	黧[黧]	居咸反。黑。	第5帖147丁表	黑部	黧	五函反。釜底黑。	S
99	第6帖24丁裏	阜部	隆	力弓反。多也、丰大也。	第6帖167丁表	生部	隆	生力反。丰大。	D
100	第6帖149丁裏	巾部	幪	昌瞻反。绝。	第6帖149丁裏	巾部	幪	昌瞻反。绝起。	S

### 5.3.3.2 重出字について本研究の調査結果と呂（2003）との比較

本研究の調査結果と呂（2003）で挙げた100組の実例を比較したところ、次の9組18字については、篆隸万象名義データベースではそれぞれ別字で翻刻していて、掲出字原本画像も異なる字体を示しているため、本研究では非重出字と判定する。

- 1  復 (第1帖61丁裏)  愆 (第1帖63丁表) (8番)
- 2  徇 (第3帖49丁裏)  徇 (第3帖50丁表) (31番)
- 3  劓 (第5帖46丁表)  劓 (第5帖46丁表) (44番)

4	殺 (第5帖 42丁表)	殺 (第5帖 42丁裏) (47番)
5	震 (第5帖 115丁裏)	震 (第5帖 115丁裏) (66番)
6	颯 (第5帖 117丁裏)	颯 (第5帖 118丁表) (75番)
7	澁 (第5帖 122丁表)	啓 (第5帖 122丁表) (80番)
8	宿 (第5帖 122丁裏)	廂 (第5帖 123丁表) (82番)
9	昔 (第5帖 124丁表)	咎 (第5帖 124丁裏) (86番)

#### 5.3.4 埋字に関する重出字

前にも述べたように、高山寺『篆隸万象名義』の体裁と内容の実態から判断し、広義の掲出字は隸書大字の掲出字以外に、埋字と脱字も含むものである。確認された重出字項目の中、一方が埋字であるか、もしくは両方とも埋字である、つまり埋字と関係するものに次の36組72字がある。

「班・衺・柴・堞・癩・夕・録・仇・珉・輶・涵・璪・豁・佳・健・暎・儻・理・  
 斷・瞞・昵・雱・籤・牆・倭・褸・襪・勢・晝・晝・晝・玆・櫛・𠂔・聊・粹」

#### 5.3.5 双隸掲出字に関する重出字

高山寺『篆隸万象名義』の体裁上、隸書掲出字が一字で見出しとなるのが、原則である。しかし、数は少ないが、隸書掲出字が二字並列する項目が存在する<sup>24</sup>。このような体裁の掲出字を双隸掲出字と呼ぶことにする。万象名義で最初に出てくる双隸掲出字を例として説明する。

<sup>24</sup> 次節の5.1で挙げた原本『玉篇』の例6「巽」もこのような掲出字二字並列する項目である。

(10) 璠・璠の例



璠璠 作道反。雜文玉也。(篆隸万象名義 第1帖 24丁裏 玉部)

旁に「叅」と「臬」を持つ字体をデータベース検索し、原本画像で確認すると、原本の字体では「叅」と「臬」が通用する例が多数存在することが確認できた。そこから、この二字は異体字であると考えられるため、字種レベルの重出字と認定した。

(11) 俌 $\beta$ ・俌



俌 $\beta$ 俌 普丁反。辨也、俠也。(篆隸万象名義 第1帖 53丁裏 人部)

旁に「粦」を持つ字体をデータベースで検索し、原本画像で確認すると、原本字体では「」と「粦」が通用する例が多数存在することが確認できた。同様にこの二字も異体字であるといえるため、字種レベルの重出字と認定する。

万象名義では、体裁上双隸掲出字となるものは24項目48字がある。上記のように異体字を並列する項目もあるが、字体が全同のものもある。さらに、一方が誤写や衍文で、傍に見消記号が付される項目もある。先行研究における認定の違いが多くある。双隸掲出字の解明は、万象名義の注文字体、注文内容による字義の確認、他の古辞書と字体の比較などについての精査が必要となってくる。本研究では双隸掲出字と重出字との関係に言及するにとどめる。

## 5.4 原本玉篇残巻との比較

### 5.4.1 原本玉篇残巻での重出字の確認

原本『玉篇』残巻では文字コード化した掲出字が同一の項目は12組24字ある。表5-3に示す。

表 5-3 原本『玉篇』残卷での重出字の調査（符号化した掲出字が同一の項目）

No.	Volume	Radical	Pic.	Entry	Def
1	9	言部		諫	七清反。《説文》：數諫也。野王案：《詩》所謂風諫。亦諫也。《詩》今為刺字。在刀部。
	9	言部		諫	千吏反。《字書》：謀也。
2	9	言部		謔	呼縣反。《説文》：流言也。《蒼頡篇》：縣書有所求也。野王案：亦与夔字同。在旻部。
	9	言部		謔	呼縣反。《説文》：流言也。《蒼頡篇》：縣書有所求也。野王案：亦与夔字同。在旻部。
3	9	言部		誅	猪飢丑利二反。《方言》：誅不知也。沅澧之間凡相問而不知、荅曰誅。郭璞曰：亦如聲之轉也。
	9	言部		誅	力代反。《廣雅》：誅誤也。与謬同爲僻誤之誤也。
4	9	言部		誑	徒涅反。《方言》：南楚或謂支註曰誑轉語也。在口部也。
	9	言部		誑	息移反。《説文》：數諒也。
5	9	欠部		歡	欣款反。《説文》：平喜也。《廣雅》：咲怒也。
	9	欠部		歡	慮紀反。《字書》：古文喜字也。喜樂也。在喜部。
6	18	丌部		巽	《周易》：巽入也、巽伏也。《尚書》：庸命巽朕位、孔安國：巽從也。《論語》：巽与之言、苞咸曰：巽恭也。野王案、訓恭從亦与憇字、義同、在心部。《説文》：此篆文巽字也。
	18	丌部		巽	《周易》：巽入也、巽伏也。《尚書》：庸命巽朕位、孔安國：巽從也。《論語》：巽与之言、苞咸曰：巽恭也。野王案、訓恭從亦与憇字、義同、在心部。《説文》：此篆文巽字也。
7	22	山部		嶰	扶弗反。《説文》：小脅道也。
	22	山部		嶰	扶弗反。《説文》：山脅道。《埤蒼》：嶰山兒也。野王案：《子虛賦》：槃行嶰嶰是也。

8	27	糸部		紕	徒展反。《考工記》：凡相角、老牛之角紕而錯。鄭衆曰：讀為珍、縛之珍、謂牛橈角理也。《說文》：紕縛也。
	27	糸部		紕	居忍反。《聲類》亦緊字也、緊急也、乱也。在緊部。
9	27	糸部		縱	子用反。《尚書》：欲敗度、縱敗礼。孔安國曰：放縱情欲、毀敗礼度也。野王案：縱猶恣也。《礼記》：欲不可縱、志不可滿是也。《毛詩》：縱送忌。《傳》曰：發矢曰縱。又曰：縱我不往、子寧不來。野王案：《廣雅》：縱置也。《左氏傳》：而縱尋斧焉。杜預曰：縱放也。《礼記》：縱言至於礼。鄭玄曰：縱言、記說事也。《尔雅》：縱乱也。郭璞曰：縱放乱法也。《說文》：縱緩也。
	27	糸部		縱	《字書》：亦縱字也。
10	27	糸部		綺	口故反。《淮南》：短衣不綺、以便涉游。野王案：《說文》：脛衣也。相如《上林賦》：綺白虎。《漢書音義》曰：綺絆絡之也。
	27	糸部		綺	《字書》：古文綺字也。
11	27	糸部		紕	《字書》：亦緬字也。
	27	糸部		紕	亡結反。《蒼頡篇》：紕細也
12	27	糸部		絲	《說文》：古文糸字也。
	27	糸部		絲	蘇姿反。《尚書》：沅州青州貢絲。《周礼》：豫州之利絲枲。《說文》：蠶所吐也。

上記の12組24字の項目は、前節2.3で『篆隸万象名義』の重出字を判別する際の規準を適用すると、次のように分析できる。

非重出字：8（1組2字）

字体レベルの重出字 T1：3・5・6・7（4組8字）

字種レベルの重出字 T2：1・2・4・9・10・11・12（7組14字）

ここにおいて重出字として判断した項目は 11 組 22 字である。詳しく注文を比較すると、少しずつ異なる特徴が見えてくる。6 番の「巽」、原本『玉篇』では異なる項目ではなく、同一の項目の双掲出字である。2 番の「護」、掲出字画像が相異を示すが、両項目の注文は全同である。7 番の「崩」、両項目の注文はいずれも意味注記のみであるが、後者の意味注記のほうがさらにくわしい。3 番の「諫」・4 番の「謏」、多音注記の字を分項して、異音異義で立項すると見える。1 番の「諫」・5 番の「歎」・9 番の「縦」・10 番の「綺」・11 番の「紉」、いずれも中の一項目は『字書』の記述による。また、9 番の「縦」・10 番の「縦」・11 番の「紉」・12 番の「絲」、いずれも一方の項目は字体注記を説明する異体掲出字である。以上の調査を通し、掲出字の原本画像と注文内容と比較することによって、原本『玉篇』での重出項目は異体字に関係するものが多いことが分かった。

#### 5.4.2 篆隸万象名義の重出字の原本玉篇残巻での確認

本研究で判定した『篆隸万象名義』の重出字の中、原本『玉篇』残巻に存在する字は次の 21 字がある。「畢・讒・謏・諫・善・云・單・欽・欣・歎・矜・輶・輦・瀾・涵・灑・磻・隆・隅・孫・絲」

さらに、「謏・諫・欽」は原本『玉篇』残巻でも重出字と判定した。逆に原本『玉篇』残巻で重出字と判定した 11 組 22 字の中、『篆隸万象名義』でも重出字と判定したのは次の 7 組である。「諫・謏・歎・縦・綺・紉・絲」

### 5.5 篆隸万象名義の重出字の分布

#### 5.5.1 部首における分布

字体レベル重出字 T1 と字種レベル重出字 T2 を合わせたデータの同異部首の配属状況は、同部首 164 組 328 字であり、異部首 54 組 108 字である。

同部首の重出字項目は 61 部首に分布し、重出字の配属順位によって示すと次の通りである。(重出字項目組数、部首、部首数の順で示す)

- 13 組：日部・人部 (2)
- 11 組：雨部 (1)
- 10 組：風部 (1)
- 8 組：谷部・木部 (2)
- 7 組：大部 (1)
- 6 組：彡部 (1)
- 5 組：金部・水部 (2)
- 4 組：艸部・心部・玉部・竹部 (4)
- 3 組：車部・弓部・目部・肉部・言部 (5)

2組：髟部・疒部・刀部・耳部・禾部・珣部・口部・齋部・黒部・示部・手部・土部（12）

1組：二部・白部・虫部・彡部・豆部・多部・巾部・革部・冡部・火部・亼部・見部・巾部・斤部・臼部・耒部・鬲部・釐部・皿部・欠部・去部・石部・殳部・覞部・邑部・雲部・止部・豸部・舟部（29）

異部首の重出項目は47種の部首の組合せに散在し、配属する重出字項目数の順位で示すと次の通りである。（重出字項目組数、部首の組合せ、部首数の順で示す）

4組：【見部・耳部】（1）

2組：【雨部・雲部】【覞部・耳部】【殺部・刀部】（3）

1組：【隹部・毛部】【云部・雲部】【月部・明部】【邑部・赤部】【頁部・豈部】【頁部・米部】【言部・語部】【田部・單部】【心部・攴部】【糸部・子部】【勿部・易部】【尾部・出部】【田部・冫部】【黍部・禾部】【手部・刃部】【収部・牽部】【尸部・尾部】【身部・呂部】【入部・冫部】【丘部・冫部】【欠部・金部】【欠部・斤部】【乾部・月部】【女部・鬼部】【目部・見部】【木部・示部】【門部・月部】【力部・刀部】【珣部・琴部】【斤部・金部】【見部・苜部】【亼部・入部】【夂部・日部】【阜部・生部】【阜部・馬部】【歹部・糸部】【大部・大部】【辵部・廴部】【冫部・十部】【艸部・皿部】【艸部・苟部】【艸部・萑部】【日部・異部】（43）

『篆隸万象名義』と見比べると、原本『玉篇』残巻の方は零巻であるため、重出字の部首分布も比較的単純である。11組全部が同部首であり、詳細は次の通りである。

言部4組・糸部4組・欠部1組・冫部1組・山部1組

### 5.5.2 帖における分布

調査の結果、重出字の帖における分布の詳細は次の通りである。

第1帖：40組80字（対象字は第1帖31字、第2帖2字、第3帖1字、第5帖6字）

第2帖：28組56字（対象字は第2帖22字、第3帖4字、第5帖2字）

第3帖：20組40字（対象字は第3帖10字、第5帖5字、第6帖5字）

第4帖：24組50字（対象字は第4帖18字、第5帖3字、第6帖3字）

第5帖：103組206字（対象字は第5帖100字、第6帖3字）

第6帖：10組20字（対象字は第6帖10字）

上記のデータでは、ほかの帖と比べると第5帖に相当量の重出字項目が存在することが明らかとなった。これは、編纂上の方針の異なりを示すのではないかと考えられ、次節で検討する。

## 5.6 重出字からみる第5帖の特殊性

附表の重出字調査データから分かるように、第5帖の91丁から136丁まで重出字が集中している。具体的には、91丁から136丁までの46丁に、重出字70組が存在する。すなわち平均1丁1.5組の重出字がある。『篆隸万象名義』全体では、第1帖101丁、第2帖94丁、第3帖91丁、第4帖86丁、第5帖153丁、第6帖190丁の、合わせて716丁に224組の重出字があり、平均して1丁0.3組の重出字があるにすぎない。これは第5帖の91丁から136丁の特定部分に重出字が密集していることが一目瞭然である。実例をみてみよう。

(12) 「𦣻」の例

(13) 「𦣻」の例

𦣻

𦣻 公鳥反。如也、明也。(篆隸万象名義 第5帖125丁表 日部)

𦣻

𦣻 激也。(篆隸万象名義 第5帖125丁表 日部)

𦣻

𦣻 公鳥反。明也、皎也。[𦣻：上文。](篆隸万象名義 第5帖125丁裏 日部)

𦣻

𦣻：上文。(篆隸万象名義 第5帖125丁裏 日部)

これらは重出するいずれもが隣り合っているので、合わせて例とする。最初の重出では上下二段の項目の掲出字である。二度目の重出は一つの項目にあり、「𦣻」が隸書掲出字で、「𦣻」は注文に繰り込まれた埋字である。注文の内容を見比べると、「𦣻」では字音の注記が同じで、義注には異同がある。「𦣻」は「𦣻」の異体字で、両方の注文を確認すると、前出が意味注記で後出が字体注記である。

(14) 「暮」の例

暮

暮 莫故反。冥。(篆隸万象名義 第5帖125丁表 日部)

暮

暮 綿故反。晚也、夕也。(篆隸万象名義 第5帖126丁表 日部)

「暮」の例では、字音の反切用字に相違があるほか、義注にも異動がみられる。

これまでの例で、重出する項目の注文はいずれも掲出字に関わるが、字音を説明する反切用字、義注、異体字の説明など少しずつ異なることが分かった。また、所在も同じ丁の表裏にあったり、離れても二丁程度であったりするなど、比較的近い位置で出現している。第5帖は体裁や反切用字などの特殊性について先行研究ですでに論じられているが、重出字においても特徴があるのである。

## 5.7 重出字の種類

### 5.7.1 多音字の分項

(15) 「愷」の例



愷 除蒸反。平也。(篆隸万象名義 第2帖 81丁裏 心部)



愷 除承反。失志兒。(篆隸万象名義 第3帖 2丁表 心部)



愷 直陵切。心平也。又直庚切。失志也。(宋本『玉篇』 上 77丁表 心部)

cf. 愷 愷怛失志又音愷。直庚切。(宋本広韻 庚韻)

失志兒又音澄。宅耕切。(宋本広韻 耕韻)

平也又竹萌切。直陵切。(宋本広韻 蒸韻)

「愷」は、掲出字の原本字形が同じであるため、同部首の字体レベル重出字 T1 に分類する。宋本『玉篇』と宋本広韻では多音注記があり、多音字を分項し、異音異義のそれぞれで立項したものと見える。このような重出字は 20 項目以上が存在する。原本『玉篇』の一部の多音字を抄出するにあたって、発音によって分項し、異音異義のそれぞれで立項するプロセスが存在した可能性がある。

### 5.7.2 類型同字の分項

(16) 「鍥」の例



鍥 口結反。鑣。(篆隸万象名義 第5帖 52丁裏 金部)



鍥 可結反。缺也。〔録：丁果反。缺。〕(篆隸万象名義 第5帖 59丁裏 金部)

後者について、呂(2003)は、「“缺”義未詳」とする。『新撰字鏡』には次のようにあ

り、『篆隸万象名義』の後項の「缺也」と一致する。

𠄎

𠄎

𠄎β 𠄎 二形同。古屑反。鎌也、■（錡）缺也。

（新撰字鏡 卷第6・25 丁裏 金部）<sup>25</sup>

このように『新撰字鏡』では類形同字の項目は、『篆隸万象名義』では別々に立項され、重出字項目になっているものは「𠄎」以外も何個がある。仮説ではあるが、『篆隸万象名義』ではこのような類形同字をそれぞれ立項したことが、重出字の成因の一つになったのではないかと推測する。

## 5.8 まとめ

本章、篆隸万象名義データベースを利用して『篆隸万象名義』における重出字問題を検討した。これは、電子化した古辞書の本文データを研究目的に応じていかに利用するかをめぐると一つの試みにすぎないが、実際の調査を通じ、データの処理や問題点の抽出などに有効であることが分かった。

結論は、以下の通りである。

- ① 『篆隸万象名義』の全体で重出字は 224 組 448 字である。
- ② そのうち、字体レベルの重出字 T1 は 141 組 282 字であり、字種レベルの重出字 T2 は 83 組 166 字である。
- ③ 原本『玉篇』残巻にて確認できた重出字は 11 組 22 字である。そのうち『篆隸万象名義』でも重出字と判定したものは次の 7 組がある。  
「諫・讒・歎・縦・綺・紉・絲」
- ④ 『篆隸万象名義』の重出字の同・異部首の配属状況は、同部首 164 組 328 字であり、異部首 54 組 108 字である。
- ⑤ 『篆隸万象名義』の重出字の帖における分布は、第 1 帖 40 組 80 字、第 2 帖 28 組 56 字、第 3 帖 20 組 40 字、第 4 帖 24 組 50 字、第 5 帖 103 組 206 字、第 6 帖 10 組 20 字である。
- ⑥ 重出字から見ても第 5 帖は特殊であり、第 5 帖の 91 丁から 136 丁までの特定部分に重出字が密集することが分かった。
- ⑦ 重出の理由の一つとして、多音字と類形同字を分項したことが考えられる。

<sup>25</sup> 出典群「切韻 B」（貞莉（1998）参照）。

以上、『篆隸万象名義』における重出字問題を考察してきた。説文解字、原本『玉篇』残巻での部首内出現順位の視点から、『篆隸万象名義』の重出字と説文解字との関係はどうなっているか。また、これらの重出字は、どの段階でどのような位置に増補されたのかについては今後の課題にしたい。

附表 5 字体レベル重出字 T1

TBID1	Radical1	Entry1	Def1	TBID2	Radical2	Entry2	Def2	R_diff
1_019_A63	示	禕	禕：子内反。月祭也。	1_019_B11	示	禕	子内反。月祭也。	S
1_021_A33	二	恒	何登反。久也、猛也、常也。（𠄎：古文。）（恒 β：同上。）（𠄎：求宣也。）	3_007_A21	心	恒	何登反。久也、強也、常也、慨也、太也。	D
1_025_A63	玉	理	理：力紀反。分也、事也、治也。	1_027_A42	玉	理	理：力紀反。正也、吏也、分也、性也、事也、道也、從也、治也、媒也。	S
1_028_B32	玉	珣	力九反。	1_028_B41	玉	珣	力九反	S
1_028_B53	玉	玆	玆：胡黠反。	1_029_A22	玆	玆	玆：胡黠反。	S
1_028_B62	玉	璿	璿：苦話反。	1_029_A26	玆	璿	璿：苦話反。	S
1_029_A21	玆	璣	扶福反。（玆：胡黠反。）（璣：吁羽反。）	1_029_A34	玆	璣	璣：扶福反。皮篋。	S
1_029_A24	玆	班	補姦反。別次也、賦也、徧也、位也、列也、賜也、布也、還。（玆：胡黠反。）（璿：苦話反。）	1_029_A35	玆	班	班：補姦反。還也、次也、賜也、布也。	S
1_029_A31	玆	琴	渠林反。（璽(seal)：古文。）（琴 β(seal)：又作。）	5_017_A61	琴	琴	渠林反。楚。	D
1_034_A22	土	場	除良反。春夏為圃、秋冬為場。	1_036_B53	土	場	如羊反。坻也、鼠壤也。（璽：何黠反。）	S
1_036_B32	土	壤	杜交反。	1_036_B311	土	壤	壤：杜交反。	S
1_038_A51	田	畱	側飢反。業也。（璽：力之反。理也。）	5_032_B64	田	畱	今田。	D
1_040_B41	丘	坨	奴鷄反。（璽：胡觥反。）	1_040_B56	冂	坨	坨：奴鷄反。張字。	D
1_041_A22	臺	缺	古穴反。缺也。	1_041_A32	臺	缺	古穴反。缺也。	S
1_042_A52	邑	郝	舒石反。	5_147_B52	赤	郝	呼各反。人姓。	D
1_049_A23	邑	郛	似矩反。（郛：胡光反。）	1_049_A62	邑	郛	郛：知矩反。	S
1_051_A13	人	健	健：渠建反。伉。	1_051_A21	人	健	渠建反。伉也。	S
1_051_B11	人	佳	古崖反。佳、大也。	1_051_B13	人	佳	佳：革崖反。善。	S

1_054_A21	人	僮	渠鎮反。財能也、劣也、少也。	1_054_A32	人	僮	渠鎮反。少也。	S
1_060_B22	人	伋	扶嚴反。輕也。	1_060_A611	人	伋	伋：扶嚴反。	S
1_060_B41	人	倮	楚立反。鬼點。	1_063_B12	人	倮	楚立反。	S
1_061_A11	人	俯	弗武反。下首也。	1_063_B42	人	俯	弗武反。俛也、進也、退也、曲也。	S
1_062_A62	人	倅	他井反。倅也、徑。	1_062_B41	人	倅	他反。倅也。	S
1_063_B21	人	倮	之車反。	1_064_B31	人	倮	之車反。儼也。	S
1_063_B22	人	倮	補孔反。屏捧也。	1_064_B32	人	倮	補孔反。屏倮也、上小兒也。	S
1_066_B12	人	倮	倮：求敏反。櫛	1_066_B31	人	倮	求敏反。櫛	S
1_068_B11	身	躬	居雄反。身也、己也、親也。	2_080_A11	呂	躬	居雄反。身也、親也。	D
1_081_A41	女	媿	居位反。慙也、恥也。或媿也。	5_120_A22	鬼	媿	居位反。慙。	D
1_082_B32	頁	顛	魚牛豈反。靜也、樂也。	5_019_A11	豈	顛	魚豈反。靜。	D
1_085_B22	頁	穎	力外反。疾也、難曉也、疾。	5_006_B22	米	穎	力外反。鮮白。	D
1_093_A21	目	睨	下顯反。	2_003_A61	見	睨	丑心反。頭見。	D
1_099_A52	目	瞞	瞞：亡幸反。	1_099_B11	目	瞞	亡幸反。目有餘視。	S
1_099_A53	目	睨	睨：一活反。媚。	1_099_B12	目	睨	一活反。娥媚也。	S
2_004_B21	見	覲	尸甚反。深見也。	2_005_B12	耳	覲	尸甚反。竊見也。	D
2_004_B31	見	覲	上尸反。視。	2_005_B32	耳	覲	上尸反。視也。	D
2_004_B41	覲	覲	昌反。召普見。	2_005_B42	耳	覲	入召反。並視也、比也。	D
2_004_B42	覲	覲	楷間反。畏視。	2_005_B51	耳	覲	楷間反。俱視也。	S
2_004_B51	覲	覲	欣衣反。見雨而上息。	2_005_B52	耳	覲	火利反。見雨止也。	D
2_005_B21	耳	聵	汝江反。耳中聲。	2_005_B62	耳	聵	女江反。耳中聲也。	S
2_020_B52	口	啗	呼垢反。恥辱也、厚怒也。	2_021_B21	口	啗	居候反。恥辱、詈也。	S
2_030_B41	手	挈	苦節反。提也、擊也。	5_048_B22	扌	挈	口結反。提。	D
2_031_B32	手	搯	竹涉反。拈也、提撕也。	2_048_B31	手	搯	於換反。輒拈也。	S
2_037_B51	手	扌	力則反。著於間。	2_079_A61	力	扌	似來反。杖字。力也、藝也。	S
2_066_B32	肉	膊	普各反。曝。	2_067_B52	肉	膊	脯也。	S
2_067_B11	肉	彘	蘇但反。歡也、雜肉也。	2_070_A21	肉	彘	蘇但反。歡也、雜肉也。	S

2_068_B52	肉	膾	口駭反。臞也。	2_073_B51	肉	膾	公理反。臞也。	S
2_081_B11	心	愷	除蒸反。平也。	3_002_A52	心	愷	除承反。失志兒。	S
2_086_B51	心	恣	俱放反。誤也、誑也、欺也、詐也。	3_005_B62	心	恣	俱況反。誤也、狂也、欺。	S
2_086_B62	心	傲	古堯反。冀求也。	2_091_A31	心	傲	己惕反。惕字。	S
2_090_B42	心	憂	於牛反。愁也、思也。	3_052_A12	文	憂	於尤反。優字。愁思也。	D
3_013_B42	言	讒	仕咸反。譖也。	3_016_B62	言	讒	仕咸反。譖也。	S
3_015_B61	言	讒	達泥反。呼也、啼。	3_017_A52	言	讒	忍移反。數諒也。	S
3_020_B61	言	諫	丑利反。不知也。	3_021_B11	言	諫	力伐反。誤也。	S
3_025_A31	云	云	胡熏反。施也、支也、有也、作為也。	5_116_A31	雲	云	古文。	D
3_028_B42	欠	欽	去金反。敬也、憂也。	5_062_A61	金	欽	去音反。慕也。	D
3_029_A52	欠	欣	忻欣反。樂也。	5_038_B61	斤	欣	許斤反。	D
3_029_B51	欠	歎	欣疑反。卒憊也、咲怒也。	3_031_B62	欠	歎	虛紀反。喜字。樂也。	S
3_039_B51	夬	昊	朝老反。吁也、皓也。	5_127_A53	日	昊	胡老反。天氣大。	D
3_047_B51	辵	廷	徒聽反。朝廷也。	3_057_B31	辵	廷	達聽反。正也、宜也、真也。	D
3_058_B41	止	歷	力的反。遠也、次也、逢(逢)也、數也、近也、相也、行也、過也、選也。	3_058_B42	止	歷	古文。	S
3_067_B22	門	間	居閑反。開 <sub>門</sub> 奈(隙)也、愈也、俄也、須也、伺也、取也、紂也、伐也、迭也、譯也、毀也、加也、隔也、非也、闕也、塞也、興也。	5_129_A42	月	間	古。	D
3_077_B41	疒	癩	力達反。痛也、辛也。	6_010_B52	广	癩	力秣反。庵。	S
4_001_A33	木	櫛	櫛：柚字也。	4_008_A61	木	櫛	餘招反。其上復生也、奇者也。	S
4_001_B32	木	柰	那賴反。如何也、遇、那也。	4_001_B41	木	柰	柰字。楛也。	S
4_003_A12	木	椽	代反。菜音。櫛木也。椽字。	4_024_A51	木	椽	才羊反。牆驪柱也。	S
4_003_A41	木	櫛	時穿反。木名也。櫛字。	4_016_A52	木	櫛	丁果反。櫛也、度也。	S
4_010_B51	木	柴	仕佳反。塞也、小木也。	1_017_A631	示	柴	柴：仕佳反。燔。	D

4_028_B31	艸	莓	亡救反。署預也。土莓也。	4_044_B41	艸	莓	莫菱反。美盛也。實似桑椹可食。	S
4_029_B12	艸	萑	胡官反。細葦也。	6_073_B32	萑	萑	公操反。萑也、水鳥。	D
4_031_B52	艸	苳	資□(豕)反。名苳蒨也。染紫也。	4_042_B61	艸	苳	員貳反。文草也。椒木也。	S
4_062_B52	竹	箴	且廉反。驗也、鑿以鏡貫也。	4_061_B52	竹	箴	箴字。	S
4_062_B62	竹	箴	之深反。戒也、陳也、捶也、刺、諫也。	4_065_B31	竹	箴	古斬反。竹名、綴衣竹。	S
4_074_B52	耒	耒	徒兀反。耕禾間也。	4_075_A42	耒	耒	大兀反。	S
4_077_B21	黍	糜	亡皮反。稌也。	5_002_A31	禾	糜	糜爲反。糜也。	D
4_081_A61	禾	秦	似津反。禾名也。	5_002_B11	禾	秦	疾律反。囷(國)也。	S
4_081_B63	禾	种	直中反。稚。	4_082_A62	禾	种	直忠反。稚也。	S
5_008_B12	嗇	廡	疾漿反。垣。	5_008_B21	嗇	廡	(上字。)	S
5_009_A12	入	全	聚緣反。完。	5_010_A41	入	全	聚訟反。具也、完也。	D
5_010_A42	入	令	力貞反。使。	6_160_A42	卩	令	力政反。命也、善也、伶也、告也、使也。	D
5_014_B62	去	去	力矜反。	5_015_A11	去	去	居力口繩反。去官。	S
5_022_A52	皿	盪	力讀反。竭。	5_022_B12	皿	盪	力讀反。盪字。	S
5_034_B52	勿	易	余致反。	6_085_B11	易	易	餘尺反。異也、奪也、始也、悅也、輕也、活也。	D
5_035_B62	弓	彊	苦□(彊)反。弦所居。	5_037_A12	弓	彊	菩侯反。弓端弦所居。	S
5_036_B42	弓	彊	女恚反。波。	5_036_B53	弓	彊	女志反。波。	S
5_038_A51	斤	斤	牛弭(引)反。劑。	5_061_B11	金	斤	魚斤反。鐸。	D
5_038_B14	斤	斷	力可反。擊也。	5_038_B32	斤	斷	力可反。	S
5_047_A51	刀	剔	他狄反。(勢：同上。記歷反。屠、剝治也。)	5_047_A53	刀	剔	他狄反。(勢：同上。記歷反。屠、剝治也。)	S
5_047_A52	刀	勢	勢：同上。記歷反。屠、剝治也。	5_047_A54	刀	勢	勢：同上。記歷反。屠、剝治也。	S
5_050_B41	金	鑪	力胡反。盛火。	5_053_B12	金	鑪	力鹿反。錯也、摩也。(鋁：上文。)	S
5_052_A31	金	鑪	郡灼反。銷也、美也、摩也。	5_062_A42	金	鑪	舒灼反。	S
5_059_A42	金	錄	丁果反。缺。	5_059_B12	金	錄	錄：丁果反。缺。	S
5_071_A43	車	輶	輶·巢字。	5_077_A51	車	輶	胡罪反。才匹擬支礙也。	S

5_072_A64	車	害	害：同上。	5_077_B11	車	害	轄字。	S
5_073_B22	車	輩	懷概反。部也、類也。	5_074_B41	車	輩	古文。(𠃉非棗：上文。)	S
5_088_B41	水	瀾	同上。漪。	5_097_B23	水	瀾	力且反。潘也、釋也。	S
5_095_A52	水	涵	亦涵。	5_104_A52	水	涵	下啗反。沒。	S
5_107_B33	𠃉	𠃉	𠃉：子來反。害也。今災。	5_107_B43	𠃉	𠃉	𠃉：子來反。害也。	S
5_109_A22	谷	豁	呼活反。空也、大也。	5_109_B61	谷	豁	呼活反。空通谷也、大量。	S
5_109_A41	谷	豁	苦奚反。([豁]：呼活反。同上。空也、大也。)	5_109_B52	谷	豁	苦号(兮)反。	S
5_109_A51	谷	繆	力彫反。空谷。	5_109_B62	谷	繆	力周反。空谷深。	S
5_109_B21	谷	谿	渠陸反。谷。	5_110_A41	谷	谿	渠六反。谷名。	S
5_110_B32	𠃉	洞	胡炯(炯)反。冷。	5_111_A62	𠃉	洞	胡炯(炯)反。冷也。	S
5_112_B41	雨	霰	所咸反。微雨。	5_113_A11	雨	霰	所成(咸)反。微雨。	S
5_112_B42	雨	霰	力沾反。久雨。	5_113_A32	雨	霰	刀(力)占反。久雨。	S
5_113_A52	雨	霰	柯霰反。霑濡。	5_113_B32	雨	霰	匹各反。霑濡也。	S
5_113_B42	雨	霧	霧字。	5_114_A12	雨	霧	同上。	S
5_114_B31	雨	霤	先立反。大雨。	5_115_A52	雨	霤	先立反。大雨。	S
5_114_B41	雨	霤	丑涉反。小雨。	5_115_A61	雨	霤	力涉反。小雨。	S
5_114_B61	雨	霤	喉壁反。大雨。	5_115_B32	雨	霤	惟辟反。大雨。	S
5_115_B42	雨	黔	於今反。雲蔽日。舍：古文。	5_116_A33	雲	黔	於林反。雲覆日。(舍：古文。)(𠃉勾土：古文。)	D
5_115_B51	雨	雲	有軍反。	5_116_A21	雲	雲	從龍。禹軍反。山川氣也、運也。	D
5_117_A41	風	颶	思陸反。𠃉風蜚風。	5_118_A22	風	颶	思六反。寒也。	S
5_117_A51	風	颶	所留反。風音。	5_118_B31	風	颶	所留反。颶。	S
5_117_B12	風	颶	楚飢反。疾風。	5_118_A52	風	颶	楚飢反。疾兒。	S
5_117_B22	風	颶	補棘反。風也。	5_118_A61	風	颶	補棘反。	S
5_117_B42	風	颶	柯諧反。疾兒。	5_118_B11	風	颶	柯諧反。疾也。	S
5_117_B52	風	颶	似立反。和兒。	5_118_B12	風	颶	似立反。大也。	S
5_121_B32	日	昧	莫憤反。爽明也。	5_127_A52	日	昧	武蓋反。不明也。	S
5_122_A22	日	暘	余亦反。覆雲暫見。	5_122_B31	日	暘	余亦反。日覆雲暫見。	S
5_122_B42	日	晚	无遠反。暮後也。	5_122_B62	日	晚	莫遠反。後也、暮也。	S

5_124_A12	日	曬	所隘反。暴也。	5_124_B12	日	曬	所隘反。日乾物。	S
5_125_A21	日	噉	公鳥反。如也、明也。	5_125_B31	日	噉	公鳥反。明也、皎也。(噉：上文。)	S
5_125_A22	日	噉	激也。	5_125_B32	日	噉	噉：上文。	S
5_125_A31	日	暮	莫故反。冥。	5_126_A52	日	暮	綿故反。晚也、夕也。	S
5_126_B21	日	𣎵	渠基反。會也、當也。	5_126_B41	日	𣎵	渠基反。古期也。(囊：古基也。)會也、當也。	S
5_128_B21	乾	朝	同上。朝。(幹：柯旦反。強也、貞固也、安也、本也、事也、主也、體也、友也。)	5_129_A61	月	朝	陟驕反。早也、旦也。	D
5_130_B32	多	𣎵	𣎵：古。	5_130_B42	多	𣎵	𣎵：古多字。	S
5_133_A52	大	𣎵	雉揆反。大。	5_133_B12	大	𣎵	知栗反。大。	S
5_133_A61	大	𣎵	丁計反。大也。	5_133_B22	大	𣎵	丁計反。大。(注文全文抹消)	S
5_133_A62	大	𣎵	飢薙反。大也。	5_133_B32	大	𣎵	飢薙反。大、不大。	S
5_133_B22	大	𣎵	丁計反。大。(注文全文抹消)	5_133_B31	大	𣎵	丁計反。大。	S
5_136_A11	火	焯	許酷反。火熾也。	5_139_B21	火	焯	口老反。焯。	S
5_144_B51	黑	黧	止林反。黑。	5_145_A32	黑	黧	居咸反。黑。	S
5_146_A62	黑	黧	之忍反。美髮。	5_147_A32	黑	黧	之忍反。美髮。	D
6_017_A12	石	磻	子石反。補。	6_019_B22	石	磻	士畝反。敬。	S
6_024_B41	阜	隆	力弓反。多也、豐大也。	6_167_A51	生	隆	生力反。豐大。	D
6_026_A51	阜	𡵓	麻家反。益。	6_034_A12	馬	𡵓	■(扶)九反。益也、盛也。	D
6_056_A32	豸	貉	同上。	6_056_B22	豸	貉	莫格反。北夷也、惡也。	S
6_073_A31	隹	隹	亡到反。鳥毛盛。	6_113_A52	毛	隹	而尹反。毛聚。	D
6_089_A51	虫	蛸	先條反。蛸子也。	6_091_A22	虫	蛸	所交反。	S
6_124_A11	革	鞞	且流反。馬紂。	6_124_A21	革	鞞	且流反。馬紂。	S
6_142_B52	系	孫	蘇昆反。	6_181_B52	子	孫	息昆反。孫字。	D

附表 6 字種レベル重出字 T2

TBID1	Radical1	Entry1	Def1	TBID2	Radical2	Entry2	Def2	R_diff
1_017_A45	示	祗	祗：俾利反。	1_017_A51	示	祗	俾利反。祭祠（祠）命名也。	S
1_018_A42	示	禡	禡：思離反。福也。	1_018_A43	示	禡	思離反。福也。	S
1_021_A41	二	𠄎	思緣反。求宣也。小全反。謂𠄎也。	1_021_A342	二	𠄎	𠄎：求宣也。	S
1_060_B51	人	倅	倉憤反。副也、盈也。	1_063_B11	人	倅	倉憤反。盈也、副也。	S
1_061_A31	人	𠄎	蘇舌反。老也。	1_061_B41	人	𠄎	蘇后反。老也。	S
1_062_B62	人	𠄎	遐嘏反。夏字也。	1_063_A52	人	𠄎	遐嘏反。复（夏）也。	S
2_001_A42	目	𠄎	丑世反。目𠄎也。	2_001_A51	目	𠄎	丑世反。𠄎救目也。	S
2_004_B11	見	𠄎	亡登反。盲也、火不明也。	2_005_A11	𠄎	𠄎	亡登反。盲。	D
2_004_B12	見	𠄎	亡結反。勞也、目无光也。	2_005_A12	𠄎	𠄎	亡結反。目勞无精。	D
2_004_B22	見	𠄎	古辨反。視也。	2_005_B22	耳	𠄎	古辨反。視也。	D
2_004_B32	見	𠄎	於革反。驚也。	2_005_B41	耳	𠄎	於革反。視也	D
2_005_B11	耳	𠄎	力彼反。聚也、連也、及也、合、續也。	2_005_B61	耳	𠄎	力然反。聚也、連也、及也、續也、難也。	S
2_013_B22	口	𠄎	都礼反。呵也、欺也、𠄎也。	2_020_A61	口	𠄎	都礼反。訶也、𠄎也。	S
2_026_B12	髟	髮	夫幽反。長髮也。	2_026_B21	髟	髮	府月反。髮根也、首上毛也。	S
2_026_B41	髟	髻	渠圓反。髮好也。	2_029_B11	髟	髻	丘權反。好也。	S
2_049_A12	収	𠄎	餘石反。繒也。繒字。	3_038_B62	𠄎	𠄎	餘石反。伺視也、調也、樂也。	D
2_077_B21	力	𠄎	渠月反。𠄎也。	5_047_B22	刀	𠄎	渠月反。強。	D
3_001_B11	心	𠄎	力甚反。敬也、危也、懼也。	3_004_B52	心	𠄎	力甚反。悵悲吟兒。	S
3_022_B52	言	𠄎	是闌反。吉也、工也、佳也、太也。	3_023_A111	言	𠄎	是闌反。告也、巧也、大也、佳也。	D
3_026_B21	𠄎	單	丁安反。一也、大也、隻也。	6_175_A31	單	單	時闌反。單榮也。	D
3_071_A51	尸	屬	時欲反。合、聚也、錄也、會也、足也、解也、近也、續也、連也、繫也、著也、獨、適也。	3_072_A12	尾	屬	之時反。聯也、會也、錄也、解也、續也、近也、著也、獨也、適也、定也、連。	D
3_072_A21	尾	屈	𠄎物反。治也、收也、𠄎豆寸也。	6_167_A21	出	屈	丘勿反。曲也。𠄎字。	D

3_074_B63	疒	瘡	字。	3_081_A62	疒	瘡	丁道反。心病也。瘡字也。	S
3_083_B12	歹	殄	之戎反。歿也。終字。	6_130_A22	糸	殄	上古文。	D
3_089_A51	屮	屯	陟倫切。享也、難也、始生也。	6_177_B11	十	屯	從昆反。陳也、冢也、村也。	D
4_003_A52	木	櫨	於嶷反。初也。於力反。梓也。	4_004_A12	木	櫨	於力反。梓也、大棺也、小弓也。	S
4_005_A11	木	桴	力胡反。桴桴也。	4_005_B41	木	桴	來𠄎木后反。木名也。	S
4_009_A62	木	朵	都果反。嚼也。	4_009_B31	木	朵	如琰反。木垂也。	S
4_015_A51	木	榘	薄雉反。圓也、美酒一榘也。	4_018_B51	木	榘	蒲歷反。圓榘也。	S
4_030_A22	艸	芍	都歷反。蓮中子也。	4_030_A42	艸	芍	時灼反。芍藥香草五味也。離草。	S
4_036_B52	艸	蓋	胡騰反。覆也。苦名也。	5_022_B21	皿	蓋	居泰反。掩也、上也、裂也、辭也。	D
4_039_B62	艸	藎	具居反。菜似蘇也。	4_052_A11	艸	藎	渠与(與)反。𠄎艸舌(苦)賈也、菜也。	S
4_049_B22	艸	苟	公后反。誠也、且也、得也、偷也、稟菜也。	6_161_A21	苟	苟	一居力反。急也。	D
4_059_B11	竹	筴	楚革反。筴箸也、謀、籌也。	4_067_A31	竹	筴	古協反。箸也、謀也。	S
4_060_B42	竹	篔	力桑反。篔也、車篔也、盛物也。	4_068_A11	竹	篔	力桑反。筴也、籃也。	S
4_070_A41	市	市	甫味反。木小兒。	6_149_B41	市	市	補物反。釋也。鞞也。	S
5_007_B32	白	皀	陷反。小阱也。	5_007_B32	白	皀	土高反。小阱也。	S
5_008_B13	畜	牆	同上。牆、■。籀文。	5_008_B22	畜	牆	上字。	S
5_008_B62	亼	倉	都合反。蒼也、當也、對也。	5_009_A22	亼	倉	丁合反。蒼字。	S
5_019_B52	豆	豉	時真反。五味和。	5_019_B62	豆	豉	時真反。搗也。	S
5_028_B61	鬲	鬻	徒狡反。熬。	5_029_A11	鬲	鬻	楚𠄎彳交反。熬也。	S
5_036_A42	弓	𠄎	反。滿弓有所向。	5_036_A61	弓	𠄎	口孤反。持也、張也。	S
5_041_B62	殳	毅	魚既反。致果。	5_042_A12	殳	毅	魚既反。忍也。	S
5_042_A62	殺	布	布：上古文。	5_048_A42	刀	布	布殺β斲：古。	D
5_042_B21	殺	弑	尸忘反。子煞文(父)也。	5_048_A51	刀	弑	尸至反。煞。弑又煞。	D
5_049_A12	金	鉞	胡經反。似鐘頸長	5_054_B63	金	鉞	胡經反。似鐘頸長。	S
5_052_B12	金	鍬	口結反。鏟。	5_059_B11	金	鍬	可結反。缺也。(錄：丁果反。缺。)	S

5_079_A12	舟	艦	音艦。	5_079_A41	舟	艦	艦反。屋船也。	S
5_091_B41	水	汎	君洧反。	5_091_B42	水	汎	居洧反。泉也。	S
5_091_B42	水	汎	居洧反。泉也。	5_102_B11	水	汎	姑扰反。人姓。	S
5_098_B21	水	灑	須芮反。飲敵。	5_098_B41	水	灑	須絹反。飲。	S
5_109_A52	谷	涇	呼江反。谷。	5_110_A11	谷	涇	呼江反。谷空。	S
5_109_B31	谷	硤	胡東反。大壑。	5_110_A31	谷	硤	胡東反。大谷。	S
5_109_B51	谷	飶	渠周反。饅。	5_110_A42	谷	飶	渠周反。饅也、亭。	S
5_110_A22	谷	籩	力涉反。	5_110_A51	谷	籩	力涉反。余聚。	S
5_110_B12	彳	凌	力水反。水室也、水坏。	5_111_B51	彳	凌	力承反。水(冰)室也。騰凌字。	S
5_110_B21	彳	凋	丁■(弔)反。半傷。	5_110_B31	彳	凋	丁聊反。傷也、弊也。	S
5_110_B42	彳	滌	徒頰反。浹(浹)也。	5_111_B21	彳	滌	徒頰反。浹(浹)也。	S
5_110_B62	彳	涇	渠井(井)反。寒。	5_111_B32	彳	涇	渠井反。寒兒。	S
5_111_A31	彳	准	之允反。準字。	5_111_B41	彳	准	之允反。均平。	S
5_113_B51	雨	霓	五奚反。雲似龍。	5_114_A22	雨	霓	五奚反、又五結反。雲色似龍。	S
5_114_B11	雨	霎	山狹反。小雨。	5_115_A42	雨	霎	山狹反。小雨。	S
5_114_B21	雨	霽	日立反。霽也。	5_114_B22	雨	霽	普立反。	S
5_115_A62	雨	靄	虛鬼反。震雷兒。	5_115_B41	雨	靄	虛鬼反。雷震。	S
5_116_A42	雲	隼	徒載反。	5_116_A51	雲	隼	他愛反。不明也。	S
5_117_A22	風	颯	附娛反。自上下。	5_118_A12	風	颯	附娛反。風上下。	S
5_117_A32	風	颯	又呼月反、呼出反。	5_118_A31	風	颯	呼月反。	S
5_117_A61	風	颯	君絹反。小風。	5_118_A42	風	颯	尹絹反。小風。	D
5_117_B21	風	颯	匹周反。吹風也。	5_118_A51	風	颯	叵周反。吹兒。	S
5_120_B62	白	皚	去千反。際見白也。	5_121_A21	白	皚	去弓反。際見兒。	S
5_123_B12	日	晡	禹况反。往也、美也。	5_124_A21	日	晡	禹况反。美光也。	S
5_124_A11	日	暴	蒲敕反。	6_164_B11	異	暴	蒲到反。疾也、陵反、犯也、戴。	D
5_124_B21	日	晞	許機反。暴也。	5_124_B22	日	晞	欣機反。慘。	S
5_126_A51	日	曖	於戴反。似春。	5_126_B11	日	曖	於戴反。暗也。	S
5_126_A62	日	暘	虛疑反。熱也、盛兒。	5_126_B12	日	暘	虛疑反。盛兒。	S
5_127_B22	日	暘	勅愛反。不明也。	5_127_B32	日	暘	徒愛反。不明也。	S

5_129_B11	月	明	靡京反。光。	5_129_B41	明	明	靡京反。辨哲也、潔也、朗也、齊也、照也、發也、著也、尊也。	D
5_133_A22	大	𡗗	牛𡗗(𡗗)反。大。	5_133_B21	大	𡗗	牛𡗗反。大。	S
5_133_A41	大	𡗗	普教反。大也。	5_133_B11	大	𡗗	叵教反。大也。	S
5_134_B22	大	𡗗	餘石反。容也、盛也。	5_134_B32	大	𡗗	余石反。盛兒。	S
5_134_B31	大	𡗗	義纏反。	5_134_B41	大	𡗗	義纏反。大。	S
6_038_A62	𡗗	𡗗	力之反。耗字也。	6_038_B11	𡗗	𡗗	力之反。𡗗字。雜毛牛。	S
6_149_B22	巾	𡗗	昌瞻反。絕。	6_149_B31	巾	𡗗	昌瞻反。絕起。	S

## 第6章 掲出字の文字同定

### 6.1 高山寺本の原本字形

高山寺本『篆隸万象名義』の研究価値が高いことと誤脱が多いことについて、早くから清末の学者楊守敬の日本訪書志では指摘があった。高山寺古辞書資料第一に収録された『篆隸万象名義』の「解説」白藤（1977a）も次のようにこの点について触れている。

「万象名義」の写本としての価値は、誤写の多いことで若干割引かれねばならないであろう。漢字の字形について、現在の字形意識をそのまま「万象名義」にはあてはめる訳には行かないが、それにしても誤写と考へられるものが多い。しかし、高山寺本は、唯一の写本であり、本書の原となった原本『玉篇』を大部分佚してゐる現在、この「万象名義」は極めて貴重である。ただその利用においては、本文に対して慎重な検討が必要である。

以上の指摘から、『篆隸万象名義』を解読する際に、次の二点について配慮しなければならない。①漢字の字形について、現在の字形意識をそのまま「万象名義」にはあてはめる訳には行かない、一見、誤写かと思われる例の中には、中国南北朝時代以来を残すものもあって、誤写か古い字体かを判断するのは容易ではない。②高山寺本『篆隸万象名義』が書写されるまでに、誤写・誤脱の問題が多く生じ、本来の価値を見出すには、精密な校正が要求される。

本章は、『篆隸万象名義』の骨組みとなる掲出字の文字同定に注目・考察するものである。次に、実例によって、『篆隸万象名義』における字形・字体の実態の一端を示す。

前述のように、高山寺本『篆隸万象名義』では字体の誤写・誤脱が多く、解読上難しい面があるのは確かである。一方で、現在の字形意識と異なって、原本『玉篇』（中国南北朝）に相当する古い字体要素が保存されているという見方もできる。実際に、高山寺本『篆隸万象名義』にある字形・字体の実態は多彩であると言える。この点に関連して、掲出字の同形異字である問題が存在する。つまり、掲出字の字形は同じであるが、注文に字音・字義に関する説明が全く異なるので、解読上それぞれ別の通行字体に文字同定せざるを得ない。下記の(1)(2)(3)は、字形はいずれも「絡」の形に見えるが、実はそれぞれ別の字である三字セットの例である。（参考のため、原本『玉篇』残巻・宋本『玉篇』・『新撰字鏡』の対応部分も示した。）

(1) 絡 a

**絡** 絡 力九反。緯十絲為絡。(篆隸万象名義 第6帖 127丁裏)

**絡** 絡 力九反。『説文』: 維十絲為絡。(『玉篇』残卷 卷27糸部)

**絡** 絡 力九切。緯十絲曰絡。(宋本『玉篇』 下篇 55丁裏)

**絡** 絡 力九反。十絲為。(新撰字鏡 卷4・7丁裏)

(2) 絡 b

**絡** 絡 力各反。繞也、縛也、繩也、綸也、絮。(篆隸万象名義 第6帖 136丁裏)

**絡** 絡 力各反。『山海經』: 九五(丘)以木絡之。郭璞曰: 絡繞也。『方言』: 自關而東周洛韓魏之間、或謂繞為絡。…或為韜字。在索部。(『玉篇』残卷 卷27糸部)

部)

**絡** 絡 力各切。繞也、縛也、所以轉篋絡車也。(宋本『玉篇』 下篇 57丁裏)

**絡** 絡 力各反。入: 絹也、絮也、縛也、一曰天漚也、繞也、綸也、布也。  
(新撰字鏡 卷4・2丁表)

(3) 絡 c

**絡** 絡 祛逆反。麤也。(篆隸万象名義 第6帖 137丁表)

**絡** 絡 祛逆反。『毛詩』: 為絺為絡。『傳』曰: 精曰絺、麤曰絡。『韓詩』: 結曰絺、辟曰絡。『説文』: 粗葛也。(『玉篇』残卷 卷27糸部)

**絡** 絡 去逆切。粗葛也。(宋本『玉篇』 下篇 58丁表)

**絡**  
**絡**  
**絡** 絡 三同。去逆反。入: 麤葛布。(新撰字鏡 卷4・4丁裏)

表 6-1 絡 a・絡 b・絡 c についての諸先行研究の認定

	白藤 (1977b)	宮澤 (1977)	池田 (1994・2011・2016)	呂 (2007)
絡 a	絡	絡	絡	絡
絡 b	絡	絡	絡	絡
絡 c	絡	絡	絡	絡

絡 a・絡 b・絡 c の注文の内容を確認すると (表 6-1)、音注も義注も異なるので、「絡」・「絡」・「絡」と解説すべきであり、諸先行研究の認定もほとんど一致している<sup>26</sup>。『篆隸万象名義』、原本『玉篇』、『新撰字鏡』における字形がほぼ同じである<sup>27</sup>。これは、これらの字書の誤写と考えるより、むしろ当時このような同形異字が使われており、後の時代に異なる字

<sup>26</sup> 宮澤 (1977) は認定ミスや原本字形近似字体のために「絡」に翻刻した。

<sup>27</sup> 新撰字鏡では「絡」に関して三つの異体字を挙げた。

体に分化されたと考える方が自然であると思う。高山寺本『篆隸万象名義』における字形情報が多彩かつ複雑で、の掲出字をより正確に解読するため、諸先行研究を照合し、認定に異同があるものについてさらなる検討をする必要がある。

## 6.2 先行研究における文字同定

### 6.2.1 概観

従来、『篆隸万象名義』の掲出字認定に関する先行研究について、形態・データ形式・掲出字の翻刻・掲出字画像の提示・注目の翻刻の面から概観して、結果を表 6-2 にまとめた。

表 6-2 『篆隸万象名義』の掲出字認定に関する先行研究についての概観

	白藤 (1977b)	宮澤 (1977)	池田 (1994・2011・2016)	呂 (2007)
形態	索引	一覧表	データベース	リスト
データ形式	手書き	手書き	電子テキスト	活字
掲出字翻刻	あり	あり	あり	あり
掲出字画像	なし	なし	あり	なし
注文翻刻	なし	なし	あり	あり

ただし、各先行研究は『篆隸万象名義』の掲出字を認定する目的が異なるため、それぞれの特徴を備え、用いた翻刻字体も異なる方針が見える。次に各先行研究の詳細についてみてみよう。

### 6.2.2 白藤 (1977b) (1977c)

白藤 (1977b) は高山寺古辞書資料第一に収録された高山寺本『篆隸万象名義』影印テキストの掲出字を検出するための索引である。凡例の最初に、索引の内容・構成について次のように記述している。

一、本索引は、『篆隸万象名義』において注を附された字の検索の便のために、全ての掲出字（篆体は除く）を、『篆隸万象名義』の 542 部首を改めて、康熙字典に倣い、214 部首に分類し、画数順に配列したものである。

そして、索引に用いられる翻刻字体について、凡例では次のような記述がある。

一、『篆隸万象名義』の字形が、康熙字典以下の字体といちじるしく差のある場合は、通用の字体を [ ] に囲んで示し、その下に『篆隸万象名義』の字形を掲げた。

一、字体の確認には、「宋本『玉篇』」「広韻」諸橋轍次編「大漢和辞典」などを参看した。

上記の凡例の記述で、索引に用いられる翻刻字体について次の二点に分かる。まず、順序が前後するが、2 点目に挙げた凡例により、索引を作成した際に、宋本『玉篇』・広韻・大漢和辞典などの康熙字典体に近い資料を参照したうえ字体確認をしたことが分かった。次に、1 点目に挙げた凡例により、索引では主に通行字体として康熙字典体を用いているが、

字体差が著しい場合、原本字形も併用することが分かる。<sup>28</sup>

上述のように、索引は検字が主目的であるため、通行字体たる康熙字典体を用いながら、原本字形を重視する特徴がある。さらに、場合によって通行字体・原本字形近似字体を両方索引に取り込んだ掲出字も存する。これらは、索引の目的に応じての処置であると考えられる。また、索引の最後「不明」とした掲出字 16 字が、判読に問題となる箇所として示されている。そして、白藤（1977c）は、『玉篇』残巻、玉篇佚文、玉篇佚文補正、大乘理趣六波羅蜜經積文などの文献や資料を参照し、掲出字の認定上の問題点を示し、出現順にまとめた研究成果である。

### 6.2.3 宮澤（1977）

宮澤（1977）は『篆隸万象名義』の骨組みとなる掲出字を解説したうえ、高山寺本の配列形式で一覧にした研究成果である。一覧表は『篆隸万象名義』の掲出字を一覧しただけでなく、万象名義で注文に繰り込まれている掲出字（埋字に相当するもの）なども示される。そして、万象名義を説文解字、『玉篇』残巻などの先行文献とも対照し、脱字に相当するもの、つまり玉篇に本来存した可能性の高い字を一覧表に反映させた。

「掲出字一覧表」の凡例の最初と最後に、翻刻字体に関して、次のような記述がある：

一、この表は『篆隸万象名義』の掲出字を、通行字体によって掲げ、宋本『玉篇』との対照及

び原本『玉篇』佚文等の所在を示したものである。

…

一、表末に附した索引は、本表に登載した字のうち、〔〕・□で囲んだ字<sup>29</sup>、及び篆隸万象名義と字体が甚だしく異なる字を検出する為のものである。

上記の凡例の記述で、一覧表に用いられる翻刻字体について次の二点に分かる。まず、『篆隸万象名義』の掲出字を判読・解釈によって、通行字体に改める作業が行われた。「通行字体」について明記されていないが、実際照合したところ主に「康熙字典体」であることが分かった。次に、『篆隸万象名義』と字体が甚だしく異なる字を検出するために、表後に附さ

<sup>28</sup> 実際に索引を読んだところ、凡例に示されない特徴も潜んでいることに気づいた。一例を挙げると、第5帖73丁裏1行目上段の項目は「鈎 如振反枝輪木」とある。ほかの先行研究により掲出字を「𠄎」に翻刻したところに対し、索引では「鈎」だけで示した。掲出字の検出が索引の目的であるため、原本字形にかたよる傾向も観察される。もう一例を見てみると、第3帖29丁裏上段1行目の項目は「款 口緩反至也誠也重也叩也愛忽也」とあり、索引では「欠部」の7画に「欸」と8画に「款」とが同一所在を示すうえ、二回出現することを確認した。「欸」は原本字形近似字体であり、「款」は通行字体である。

<sup>29</sup> 宮澤（1977:496）篆隸万象名義で注文に繰り込まれている掲出字、篆隸万象名義で脱落していると認められる字、宋本『玉篇』に存する字（増補部分を除く）等を、一字分下げて随所に挿入する。各字に附した記号は次の通りである。○玉篇現存残巻に存する字。△宋本『玉篇』に無い字。〔〕□篆隸万象名義に無く、宋本『玉篇』に存する字。（〔 〕）は、新撰字鏡または説文解字にも見られる字で、玉篇に本来存した可能性が高い

れた索引を参照することから、一覧表は忠実に原本字形を反映することより、解釈の面が強いという性格が窺える。一方で、原本字形と大きくずれがある場合、原本字形に近い形の索引が参照できる。掲出字を検出する実用的な面と元の字形情報を反映する面とがある。

#### 6.2.4 池田（1994）（2003b）（2011）（2014a）（2016）

池田は、篆隸万象名義データベースに関する一連の論考を発表している。その内容を要約すれば次のようになる。

池田（1994）では、篆隸万象名義データベースは、『篆隸万象名義』の本文研究を主要な目的とするものであると述べた。公開された暫定版のデータベースを通して、『篆隸万象名義』に掲出される 16,000 余字の所在、諸橋大漢和辞典番号、玉篇卷数・部首番号、JIS 区点番号等の情報を得ることができる。そして、『篆隸万象名義』第一～四帖（目録部分を含む）の範囲の掲出字について、JIS0208 で約三割、ISO/IEC 10646-1（基本多言語面）で約七割が処理できるという調査結果を得た。

池田（2003b）の調査により、『篆隸万象名義』の全掲出字のうち 46 字のみが今昔文字鏡（ver.3 単漢字 10 万字版）で未登録であり、今昔文字鏡を使えばほとんどの掲出字が処理できるようになったのである。しかしながら、データ処理にはかなり制約があった。

池田（2011）では、2011 年のコンピュータ環境では、CJK 統合漢字 20,902 字、拡張 A の 6,582 字、拡張 B の 42,111 字などが使用可能であり、『篆隸万象名義』の掲出字の処理状況について調査したところ、テキストベースでは、ほぼすべてを扱うことが可能となったのである。

池田（2014a）、池田他（2016）は平安時代の日本の古辞書の総合データベース(HDIC)を構築するプロジェクトとして、日本の古辞書から『篆隸万象名義』・『新撰字鏡』・『類聚名義抄』のデータベース化に取り組んでいる。データベース構築は、各掲出字の一字ごとの画像データベースを作成し、元となった中国側の漢字字書や韻書の電子テキストを利用・作成し、それらの連携（リレーションシップ）をとって行う方法を採用する。『篆隸万象名義』の全文入力が完了し、点検校正中である。公開に関して、UCS（Universal Coded Character Set; 国際符号化文字集合）の範囲で掲出字・所在情報などを整理した UCS 対応版が完成し、公開済である。そして『篆隸万象名義』の本文の一部も試験公開中なので、検索サイトで‘HDIC Database’をキーにしての検索と閲覧ができる。

氏の一連の研究では、『篆隸万象名義』の本文研究を主要な目的に、情報処理の手法で篆隸万象名義データベース構築が行われてきた。情報処理上、データの交換性・汎用性の高いことで優れている。そして、掲出字の文字同定は関連する中国側の漢字字書・韻書、日本のほかの古辞書との連携をとって行われ、効率性と正確性が高い。

### 6.2.5 呂 (2007)

呂 (2007) は中華書局写真版のテキストを基礎とし、高山寺古辞書資料第一に収録されたテキストも参考に、先行研究の劉 (1995)、白藤 (1977b) を参考にし、説文解字、『玉篇』残卷、宋本『玉篇』、干祿字書、龍龕手鑑、一切経音義、広韻、集韻、全韻玉篇、香字鈔、葉字鈔などの文献と照合し、校勘を加え万象名義の全文を翻刻したものである。必要となる場合、校勘内容も注文後に附された。『篆隸万象名義』において脱落と判定された掲出字が対応する部末に掲げられた。収録項目を検索する便宜のため、漢語大字典の検索法を採用し、『篆隸万象名義』の元の部首系統を用い、画数順の索引も附した。

凡例に相当する「説明」の部分に、翻刻字体に関して、次のような記述がある。

『名義』の原貌を保つため、『篆隸万象名義校釈』になるべく元の字形（簡化字、俗体字等）を採用する。

この記述で分かるように、『篆隸万象名義校釈』では主に原本字形近似字体を用いる方針がうかがえる。ところが、実際には項目によって、高山寺本篆隸万象名義の字形より原本『玉篇』残卷の字形に近い字体や解釈したうえの宋本『玉篇』の字形に近い字体を用いて翻刻することがある。

まとめると、次の三つの特徴があるといえよう。①項目ごとに校勘注記が付される。②翻刻字体はなるべく原本字形に近い字体を採用し、校釈の部分に通行字体に対応すべきものを注記する例が多い。

## 6.3 掲出字同定の総合

### 6.3.1 原本字形と翻刻字体との照合

前述のように、先行研究における『篆隸万象名義』掲出字の翻刻は、手書き・活字・電子テキストなどの形式で表示される。翻刻者によって、違いを認識した部分は手書き・活字に反映されるが、そうでない部分は翻刻字体に表現できない問題がある。原本字形を表示して、先行研究による翻刻字体と照合・比較したうえ、文字同定上の問題を整理する。

篆隸万象名義データベースに入力済みのデータに基づき、原本『玉篇』残卷と対応する部分のデータをピックアップする。

### 6.3.2 諸家の認定に関する照合

篆隸万象名義データベースでは、掲出字について原本画像（原本字形）と電子テキスト[池田他 (2016)](翻刻字体)との両方で示される。これを利用して、諸家の先行研究[白藤 (1977b) 宮澤 (1977) 呂 (2007)]における高山寺本『篆隸万象名義』掲出字の解読結果の照合作業台帳を作成した。例示に作業台帳のサンプルを次の図 6-1 に示す。

TB_no	TBID	部首	万	宋	原	新	Ike.	Miya.	Shira.	Lv.	分類	TB_def
T05850	3_005_A61	心	悻	悻		悻	悻					于匪反。恨也。
T05851	3_005_A62	心	慙		慙	慙	慙					眉隕反。多病也。
T05852	3_005_B11	心	悬	悬	悬	悬	悬					古顔反。邪、偽也。
T05853	3_005_B12	心	悻	悻	悻	悻	悻					公翻反。變也、謹也、
T05854	3_005_B21	心	愬	愬	愬	愬	愬					所革反。譖也、驚克
T05855	3_005_B22	心	悻	悻	悻	悻	悻					仇營反。單也、獨也。

図 6-1 諸先行研究の『篆隸万象名義』掲出字解読結果の照合作業台帳

図 1 で示すように、作業台帳に 13 個のフィールドがある。

1～3 は、『篆隸万象名義』における通し番号・所在・部首などの情報を示す。

4～7 は、字形参考の為、『篆隸万象名義』・宋本『玉篇』・原本『玉篇』残巻・『新撰字鏡』の掲出字画像も作業台帳に取り入れてみた<sup>30</sup>。

8～11 は、池田他 (2016)・宮澤 (1977)・白藤 (1977b)・呂 (2007) の比較対照欄<sup>31</sup>となる。

12 は、分類を記入する欄である。

13 は、入力済みの『篆隸万象名義』の本文内容である。

照合作業をした際、基本は『篆隸万象名義』、原本『玉篇』残巻の画像と諸家の認定と見比べて、総合して宋本『玉篇』、『新撰字鏡』の画像も参考場合がある。

池田他 (2016) は篆隸万象名義データベースの掲出字翻刻結果そのものであり、出現順となっている。宮澤 (1977) と呂 (2007) は『篆隸万象名義』の出現順であるため、照合作業が比較的順調にできた。白藤 (1977b) は索引であるため、直接照合することは難しい。そこで、篆隸万象名義データベースにおける大漢和辞典番号の情報をキーにして、並び替えてから索引に近似する配列を得て、照合作業を行った。

## 6.4 調査結果

### 6.4.1 概観

以上の手順で、諸家の先行研究における高山寺本『篆隸万象名義』の掲出字解読結果を照合した (原本『玉篇』残巻対応部分 2,087 字)、諸家の認定が一致する掲出字が 1,833 字あり、相違のある掲出字が 254 字ある。相違のあるものは全体の約 1 割強を占めている。文字同定が一致するものが主に次の二種類に分類できる。

#### ① 原本字形と翻刻掲出字とが同じ形のもの

<sup>30</sup> 辞書表記の略称は次の通り：万→篆隸万象名義、宋→宋本『玉篇』、原→原本『玉篇』、新→『新撰字鏡』。

<sup>31</sup> 比較対照欄の表記と先行研究との対応関係は次の通り：Ike.→池田 (2014a)、Miya.→宮澤 (1977)、Shira.→白藤 (1977b)、Lv.→呂 (2007)。

(4) 話 話 朝快反。謂也、調也。〔論也：話字。〕(篆隸万象名義 第3帖 11丁表)

②原本字形と翻刻掲出字とが異なる形のもの

(5) 謙 謙 去嫌反。輕也、敬、虛也。(篆隸万象名義 第3帖 11丁表)

6.4.2 文字同定に相違のある掲出字の特徴

①包摂できるもの (49例)

(6) 韻 韻 爲鎮反。音和。(篆隸万象名義 第3帖 26丁表)

池田 (2014a)	宮澤 (1977)	白藤 (1977b)	呂 (2007)
韻	韻	韻	韻

「韻」の右上の「口」の部品は、諸家の認定では「口」と「ム」との二通り翻刻があるが、包摂範囲で処理できるので、代表字を決めて、異なる翻刻字体を代表字の同一グループに入れて整理することができる。

②異体字関係であるもの (174例)

(7) 諫 の例

諫 諫 丑利反。不知也。(篆隸万象名義 第3帖 20丁裏)

諫 諫 猪飢丑利二反。『方言』：諫不知也。沅澧之間凡相問而不知、答曰諫。郭璞曰：亦如聲之轉也。(『玉篇』残卷 卷9言部)

諫 諫 同上。又力代切。誤也。(宋本『玉篇』上篇 84丁裏)

諫 諫 丑知反、又丑利反。去：不知也、誤也、如聲之傳。(新撰字鏡 卷3・8丁表)

池田 (2014a)	宮澤 (1977)	白藤 (1977b)	呂 (2007)
諫	諫	諫	諫

康熙字典の記述により、「諫」と「諫」とは異体字関係であることを確認し、「諫」は原本字体に近いが、翻刻方針によって、「諫」も翻刻字体の一種として可能である。このように異体字関係で認定に相違があるものは、代表字を決めて、異なる翻刻字体を代表字の同一グループに入れて整理することができる。

③別字と衝突するもの (28例)

(8) 設 の例

設 設 犴牙反。拏字。持也、把。(篆隸万象名義 第3帖 20丁裏)

設 設 犴牙反。『字書』：或拏字也。拏持也、把也。在手部。(『玉篇』残卷 卷9言部)

**設** 設 犭牙反。拏字。持也、把也。(新撰字鏡 卷3・9丁裏)

池田 (2014a)	宮澤 (1977)	白藤 (1977b)	呂 (2007)
設	設	設	設

関連する古辞書、漢語大字典の記述により、「設」は「拏」の異体字であり、「持也、把也」の意味である。一方で「設」は「誦」の異体字であり、「語貌不正」の意味となる。白藤(1977b)と宮澤(1977)とは原本字形に近い「設」に認定し、別字である「設」と衝突することになる。文字同定上は間違いとは言えないが、このような別の字と衝突するものは、先行研究を参照する時に、注意すべきである。

#### ④難読字を別の通行字体(或いはIDS)で翻刻したもの(3例)

(9) **𪔐**の例

**𪔐** 𪔐 眉隕反。多病也。(篆隸万象名義 第3帖5丁表)

**𪔐** 𪔐 眉隕反。『説文』: 古文閔字也。閔病也。存門部。(『玉篇』残卷 卷8心部)

**𪔐** 𪔐 眉隕反。多病也。(新撰字鏡 卷2・23丁裏)

池田 (2014a)	宮澤 (1977)	白藤 (1977b)	呂 (2007)
𪔐	𪔐	𪔐	𪔐

原本字形は難読字であるため、諸家の認定は注文の内容にもとづき、別の通行字体に改め翻刻を行ったと思われる。この種のもは字数少ないのだが、掲出字の元の字形との差が甚だしいので、さらに、文字同定上に検討の余地がある。

## 6.5 掲出字翻刻の階層化

### 6.5.1 翻刻階層

古写本の古辞書を翻刻する際に、元の字形情報を反映、確認する目的と、古辞書の内容を解説・理解したうえ、原本テキストを校訂・整理する目的がある。現在の篆隸万象名義データベース掲出字について、原本画像と翻刻した掲出字テキストとの二つの階層に分けているが、難読字や字体の揺れがある掲出字などをより精確に表現するため、次の四つの表現階層(H1~H4)に分けて、篆隸万象名義データベースの掲出字を翻刻するモデルを提言する。

H1 代表字・字種 (代表字の符号化した抽象文字)

H2 原本近似字体/解釈字体 (原本字形に近い形で翻刻した字体/解釈によった字体)

H3 原本再現字形 (原形に近い符号化した抽象字形・手書き・作字・IDS)

#### H4 原本字形（原本画像）

このモデルでは、該当字に対する翻刻表現が H4 から H1 へ抽象度が上昇するといえる。H4 の原本字形、H1 の代表字が必ず存すべき情報である。状況によって、H2 と H3 が H1 と同じなる場合もあるし、あるいはそれぞれ異なり、必要な情報を記述する場合もある。諸家の認定に相違が生じたものの場合、H3 か H2 のレベル、場合によっては H1 のレベルの文字同定に意見が分かれたということになる。

次に、漢字情報の整理・記述に関する情報処理システムである CHISE 文字オントロジーに採用されている多粒度漢字構造モデルをみてみよう。

#### 6.5.2 CHISE 多粒度漢字構造モデル

守岡（2015a）（2015b）により、CHISE 文字オントロジーは Unicode に収録された文字の情報の他に、漢字に関しては Unicode の包摂規準以外に超抽象文字や字体・字形といった複数の包摂粒度による漢字のグリフに関わる情報を持っている。CHISE で IDS (Ideographic Description Sequence) 形式に基づく漢字の構造情報データベースが利用できる。部品として複数の異なる包摂粒度を持つものを用い、複数の部品の組合せで構成される漢字の各部品の包摂範囲を示すことで、その漢字の包摂範囲を示すことができる。これを多粒度漢字構造モデルと呼ぶ。

CHISE 文字オントロジーで採用している多粒度漢字構造モデルは本来現在使われている漢字を整理するためのシステムである。次の 4 階層の基本となる包摂粒度がある<sup>32</sup>。

抽象文字粒度	<字>	UCS 等の抽象文字に相当する包摂粒度	=>
抽象字体粒度	「字」	字形デザイン差を捨象した字体に相当する包摂粒度	=
抽象字形粒度	《字》	Adobe-Japan1、汎用電子、文字基盤の IVS で指示されるような抽象的な字形に相当する包摂粒度	==
例示字形粒度	『字』	字形を示す包摂粒度	===

さらに、守岡（2015b）では、前近代の漢字字形を対象にする場合の適応性を検証することと、各包摂粒度の包摂範囲を合理的に規定するための字体・字形用例の存在を確認することを目的に、漢字を対象とした「漢字字体規範データベース HNG」と CHISE との統合を試みた。

#### 6.5.3 両者の対応

標準漢字文献を対象とする HNG と性質の異なる漢字字書データベースの場合、どのよう

---

<sup>32</sup> 守岡（2016）

に結び付けられるだろうか。篆隸万象名義データベース掲出字翻刻表現階層と多粒度漢字構造モデルと比較してみると、それぞれの階層が次の通りに対応させることができるかと考えている。

掲出字翻刻階層	⇔	多粒度漢字構造モデル
H1 代表字・字種	⇔	抽象文字粒度
H2 原本近似字体/解釈字体	⇔	抽象字体粒度
H3 原本再現字形	⇔	抽象字形粒度
H4 原本字形	⇔	例示字形粒度

階層的に掲出字を翻刻するのは、より精確的に古字書の掲出字を表現・記述できる一方、CHISE の多粒度漢字構造モデルと階層的に対応できる設計で、情報処理上、両システムが連携をとる必要がある場合も、比較的便利になると考えられる。

## 6.6 まとめ

篆隸万象名義データベースを利用して、諸家の先行研究における高山寺本『篆隸万象名義』の掲出字解説結果を照合し（原本『玉篇』残巻対応部分 2,087 字）、諸家の認定に相違がある掲出字が 254 字であり、全体の 1 割強を占めている。認定に相違がある掲出字 254 字を 4 種類に分類してみた：①包摂できるもの；②異体字関係のもの；③別字と衝突するもの；④難読字を別の通行字体で翻刻したもの；最後に、掲出字を段階的に翻刻表現するため、そこで情報処理上の CHISE システムの多粒度漢字構造モデルに合わせて、データベースにおける掲出字翻刻表現階層の設計を提言してみた。

今後、関連する文献を参考し、まず原本『玉篇』残巻の対応部分の諸家の文字同定に相違がある掲出字の個々について校釈をしたうえ、掲出字翻刻に対する修正意見をまとめる。次に、原本『玉篇』残巻の対応しない部分の掲出字について、諸家の文字同定を比較し、校訂・修正意見をまとめてみる。さらに、掲出字の翻刻内容を、階層化的設計に適応しながら、CHISE の多粒度漢字構造モデルとの連携の実現などを課題にしたい。

## 第7章 大乘理趣六波羅蜜經釈文による本文研究

### 7.1 日本資料と篆隸万象名義の本文研究

本章は日本平安初期に撰述した仏典音義『大乘理趣六波羅蜜經釈文』を利用して、『篆隸万象名義』の本文研究を行うものである。

『篆隸万象名義』について、従来日本や中国では数多くの研究成果がある。近年、異体字や本文についての研究成果が注目される。概して、日中両国の研究は、本国の辞書編纂史に重点を置きがちである。原本『玉篇』と『篆隸万象名義』は日本の辞書編纂史では重要な位置を占めるが、中国の研究では、日本で撰述した仏典音義・古辞書を取り上げることは少ない。

そこで、本章で取り上げる日本平安初期に撰述した『大乘理趣六波羅蜜經釈文』は唐の貞元四年（788）年に般若の訳した『大乘理趣波羅蜜多經』の音義である。現存するものは平安末期の古写本と言われる。その発見、体裁および内容について影印本の首尾に付される序文〔神田（1972）〕と解説〔上田（1972）〕に詳しい（詳細後述）。漢土に亡佚した書物の多くの引用が見られ、特に、原本『玉篇』による引用は約400条近く存在する。原本『玉篇』、『篆隸万象名義』の本文研究に価値が大きいことは言うまでもない。しかしながら、その研究価値に相応するほどの注目を集めていない。管見の限り、日本では神田（1972）、上田（1972）以降は、『大乘理趣六波羅蜜經釈文』に関する研究は見られず、中国では仏典音義の研究では本書を言及することはない<sup>33</sup>。

筆者の所属する北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座池田研究室では、『篆隸万象名義』・『新撰字鏡』・『類聚名義抄』を対象にする日本平安時代漢字字書総合データベース（HDIC）を構築するプロジェクトを進めている<sup>34</sup>。これらの字書を解読するために、同時に中国で撰述した原本『玉篇』と大広益会玉篇のデータベースも独自に作成している。また、玉篇の研究<sup>35</sup>・「玉篇佚文補正」<sup>36</sup>に蒐集された『玉篇』逸文や、『大乘理趣六波羅蜜經釈文』、『令集解』、『新撰字鏡』、凶書寮本『類聚名義抄』等に引用された『玉篇』の逸文を対象にする玉篇逸文データベースも整備している。

筆者は『篆隸万象名義』の本文研究を行う目的で、『大乘理趣六波羅蜜經釈文』における逸文のデータ化をし始めた。現在、そのデータ入力はほぼ終了しており、内容の点

<sup>33</sup> 梁（2015）は十部の日本古写本仏經音義を資料として、その成立年代、撰者、体例、内容、研究価値および研究成果を紹介し、そして漢字研究の方面における考察を行った著作である。『大乘理趣波羅蜜經釈文』について、「緒論」では概要を触れたが、本文では取り上げていない。

<sup>34</sup> 池田（2014a）

<sup>35</sup> 岡井（1933）

<sup>36</sup> 馬淵（1952）

検・校正中である。本章では、日本平安時代漢字字書総合データベース（HDIC）に入力したテキストデータに基づき、『大乘理趣六波羅蜜經积文』に存する玉篇逸文の分布・特徴を考察し、その逸文を利用した『篆隸万象名義』の本文校正の実例を報告する。

## 7.2 研究資料

### 7.2.1 大乘理趣六波羅蜜經积文

『大乘理趣六波羅蜜經积文』は平安初期に日本で撰述された『大乘理趣波羅蜜多經』の音義である。現存するものは平安末期の古写本と言われる。その発見、体裁および内容について影印本の首尾に付される序文〔神田（1972）〕と解説〔上田（1972）〕に詳しい。次に、その要点をまとめてみる。

『大乘理趣波羅蜜多經』は唐の貞元四年（788）十一月、北天竺迦畢試国出身の般若三蔵が徳宗皇帝の命を奉じて長安の西明寺で譯了上進したものである。固より六波羅蜜の奥旨を説ける般若の重要聖典である。弘法大師空海が永貞元年（805）から長安の西明寺入り、般若三蔵より『大乘理趣波羅蜜多經』の傳授を承け、自ら謄写して日本に齎し帰られた。今京都仁和寺に秘藏する三十帖策子の第七帖である。真言宗の重要經典の一つであり、『大乘理趣波羅蜜多經』はおそらく真言僧徒の撰述であるべき。また、『大乘理趣六波羅蜜經积文』と題する舊鈔卷子本は1953年3月に、東京の一誠堂書店で偶然に発見された。平安末期の古写本であり、体例は慧苑の華嚴經音義に近く、『大乘理趣波羅蜜多經』の中に見えたる難解の文字を標出し、その音義を精しく注したものである。撰者不詳であるが、巻中に和訓の記載したことにより、日本人の撰であることが分かった。また、漢土に亡佚した古書を多く引用したのは本書の特徴であることを神田（1972）では指摘された。

上田（1972）は本書の引用書を調査した上、精細に解説した研究成果である。数種類の引用書及びそれぞれの引用回数の集計を次のように示されている。玉篇400条、字苑123条、切韻116条、書中59条、唐韻44条、韻詮17条、類音8条、花嚴經音義1条、系8種768条である。

### 7.2.2 経目

『大乘理趣六波羅蜜經积文』は序、歸依三寶品、陀羅尼護國品、發菩提心品、不退轉品、布施波羅蜜多品、淨戒品、安忍波羅蜜多品、精進波羅蜜多品、靜慮波羅蜜多品、靜慮波羅蜜多品之餘、般若波羅蜜多品、般若波羅蜜多品之餘の計13部分から構成され、472項目がある。

### 7.2.3 大乘理趣六波羅蜜經釈文と慧琳音義卷四一

『大乘理趣波羅蜜多經』の音義は、『大乘理趣六波羅蜜經釈文』以外、『慧琳音義』卷四一所収のものと、その後の希麟音義（987 成立）卷一所収のもので、合計三種類ある。上田（1972）は、『慧琳音義』卷四一の『大乘理趣六波羅蜜多經』と関係あるかと調べ、大乘理趣六波羅蜜經釈文の方が標出字が多く、その字も出入参差にして、訓義共通することなく、全く無関係と心得ると指摘された。

### 7.3 大乘理趣六波羅蜜經釈文における原本玉篇逸文の分布

上田（1972）『大乘理趣六波羅蜜經釈文』における原本『玉篇』の引用は全巻にわたって、豊富な逸文が玉篇研究上大価値を有することを指摘し、音韻研究上の価値の一端を述べ、その逸文によって、『篆隸万象名義』に補い得る反切 51 条、その誤脱を正し得る反切 9 条であることを示した。そこで、HDIC の玉篇逸文データベース（YQF）に整備した『大乘理趣六波羅蜜經釈文』における原本『玉篇』逸文データに基づき、その実態はどうなっているかを考察する。

調査の結果、『大乘理趣六波羅蜜經釈文』における原本『玉篇』を引用した見出しを 335 項目が確認できた。中には 55 項目の二字熟語の両方とも原本『玉篇』の内容を引用し、実際に原本『玉篇』逸文が存する掲出字は 390 字（「綸」、「晃」、「耀」、「窘」の四字が重複する）であり、相違する掲出字は 386 字である。これらの 386 字の掲出字を『篆隸万象名義』<sup>37</sup>と照合し、その逸文が玉篇の全体 30 巻にわたって、108 個の部首に属することが分かった。『大乘理趣六波羅蜜經釈文』における原本『玉篇』逸文の巻・部首レベルの分布の詳細は表 7-1 で示す。『玉篇』残巻にも掲出字が存する部首の背景をグレーにした。

表 7-1 大乘理趣六波羅蜜經釈文における原本『玉篇』逸文の巻・部首レベルの分布

玉篇	釋文逸文	部首による字数の内訳						
		卷数	掲出字数					
卷 1	6 字	一部 1	示部 2	二部 1	玉部 2			
卷 2	10 字	土部 7	田部 1	邑部 2				
卷 3	21 字	人部 14	予部 1	身部 1	女部 5			
卷 4	9 字	頁部 3	鼻部 2	目部 3	耳部 1			
卷 5	13 字	口部 8	彡部 1	彡部 4				
卷 6	21 字	手部 21						

<sup>37</sup> 原本『玉篇』が約八分の一の残巻がしか存しないため、『篆隸万象名義』を原本『玉篇』の代用として調査を行った。

卷7	21字	足部7	骨部1	肉部9	筋部1	力部1	癩部2	
卷8	15字	心部15						
卷9	31字	言部21	号部1	欠部2	食部2	甘部1	辵部4	
卷10	4字	彳部1	行部1	走部1	立部1			
卷11	11字	宀部1	門部1	履部1	疒部2	叔部1	歹部2	穴部3
卷12	7字	木部7						
卷13	14字	艸部14						
卷14	7字	竹部6	箕部1					
卷15	12字	麥部1	禾部5	香部1	网部3	鹵部1	臥部1	
卷16	2字	鼓部1	鬲部1					
卷17	17字	冫部1	矢部2	弓部1	斤部3	矛部1	戍部2	刀部7
卷18	18字	金部17	支部1					
卷19	23字	水部23						
卷20	9字	雨部1	雲部1	風部2	日部5			
卷21	13字	火部8	炎部1	黒部1	赤部1	交部1	尢部1	
卷22	14字	山部2	广部2	石部4	阜部6			
卷23	10字	馬部3	羊部1	犬部2	鹿部1	熊部2	虎部1	
卷24	5字	几部1	鳥部4					
卷25	36字	虫部19	虺部4	蟲部3	黽部2	貝部8		
卷26	11字	羽部2	毛部2	角部1	皮部1	革部5		
卷27	13字	糸部12	絲部1					
卷28	4字	巾部1	衣部3					
卷29	5字	収部1	口部2	凵部2				
卷30	4字	乙部1	丁部1	桀部1	酉部1			

一方で、大乘理趣六波羅蜜經釈文の各経目ごとの構成部分に原本『玉篇』の引用状況を調べ、結果は表 7-2 で示す。

表 7-2 各経目ごとの構成部分に原本『玉篇』の引用状況

経目	項目数 ①	玉篇引用 項目数②	②/①
序	35	25	71.4%
歸依三寶品	94	55	58.5%
陀羅尼護國品	44	28	63.6%
發菩提心品	19	15	78.9%
不退轉品	144	108	75.0%
布施波羅蜜多品	26	18	69.2%
淨或品	20	15	75.0%
安忍波羅蜜多品	19	14	73.7%
精進波羅蜜多品	16	15	93.8%
靜慮波羅蜜多品	28	20	71.4%
靜慮波羅蜜多品	5	4	80.0%
般若波羅蜜多品	11	10	90.9%
般若波羅蜜多品之餘	11	8	72.7%
小計	472	335	71.0%

表 7-2 で分かるように、各構成部分の原本『玉篇』の内容を引用した項目数が平均数 71.0%を下回るのは「歸依三寶品」・「陀羅尼護國品」・「布施波羅蜜多品」の三つであるが、いずれも 50%より高い。そして、表 7-1 のデータで示す通り、原本『玉篇』内容の引用は、原本『玉篇』全 30 巻に及んでいる。これらのデータから、大乘理趣六波羅蜜經積文が編纂された当時、参考文献として撰者の手元におそらく完本である原本『玉篇』が存在したと考えられる。また、大乘理趣六波羅蜜經積文の各構成部分における原本『玉篇』を引用した項目数の高い割合から、基本的に撰者が原本『玉篇』全巻を主な参考資料とする編纂方針であったことが窺える。

#### 7.4 大乘理趣六波羅蜜經積文における原本玉篇逸文の特徴

大乘理趣六波羅蜜經積文の 390 字<sup>38</sup>の逸文掲出字は、『玉篇』残巻と対応するものは 54 字であり、対応しないものは 336 字である。『篆隸万象名義』の本文校正においては、残

<sup>38</sup> 「綸」、「晃」、「耀」、「睿」の四字重複するが、注文内容が異なるため、ここの分析は逸文の総掲出字数の 390 字に基づく。

卷と対応しない 336 字が重要だと思われるが、大乘理趣六波羅蜜經釈文の玉篇逸文が特徴を明らかにするには、対応する 54 字を残巻の内容との比較対照は不可欠な作業である。比較の結果、次の三種類に分けられることを明らかにした。

A 逸文は玉篇と完全一致するもの (2 項目)

(1) 流液 玉夷石反。楚辞吸飛泉微液懷琬琰之華英。說文液、津也。

(大乘理趣六波羅蜜經釈文 序)

液 夷石反。楚辞吸飛泉微液懷琬琰之華英。說文液、津也。

(『玉篇』残巻 卷 19 水部)

液 夷石反。津也。(篆隸萬象名義 第 5 帖 98 丁表)

(2) 嶮峻 上玉魚檢反。埤蒼嶮峻也。(大乘理趣六波羅蜜經釈文 不退轉品)

嶮 魚檢反。埤蒼嶮峻也。(『玉篇』残巻 卷 22 山部)

峻 魚檢反。嶮。(篆隸萬象名義 第 6 帖 6 丁表)

B 逸文は玉篇の一部を引用するもの (50 項目)

(3) 謝 玉似夜反。說文辞也、謂相辞謝也。鄭玄曰謝、猶聽也。王逸曰謝、去也。(大乘理趣六波羅蜜經釈文 般若波羅蜜多品)

謝 似夜反。左氏傳使邳鄭如秦謝緩賂，野王案說文謝、辭也，謂相辭謝也、國語子叔聲伯如晉謝季文子是也，礼記大夫七十而致仕若不得謝、鄭玄曰謝、猶聽也、楚辭願歲拜謝与長友、王逸曰謝、去也。

(『玉篇』残巻 卷 9 言部)

謝 以夜反。聽也、去也、辞也。(篆隸萬象名義 第 3 帖 11 丁裏)

(4) 綸溺 上玉力旬公頑二反。劉曰綸、經理也，毛詩箋云綸、釣繳也，元宋忠曰綸、絡也。(大乘理趣六波羅蜜經釈文 序)

紛綸 下玉力旬公頑二反。周易彌綸天地之道，劉瓛曰綸、經理也，毛詩箋云綸、釣繳也，元宋忠曰、綸絡也。(大乘理趣六波羅蜜經釈文 序)

綸 力旬公頑二反。周易彌綸天地之道。劉瓛曰彌廣也、綸經理也。毛詩之子于釣，言論之繩。箋云綸、釣繳也。礼記公子曰王言如絲，其出其綸。

鄭玄曰今有秋盡夫所佩也。續漢書百石青納綸一采婉轉繆織長二尺。說文糾青絲綬也。范子計然布平者綸絮之未、其无絲之國、出布不可以布平為綸未也。野王案此謂麻絲絮為綸也。尔雅釋草綸、東海有之。郭璞曰海有象之、因以為名也。太玄經鴻綸天。宋忠曰綸、絡也。方言或謂車紂為曲綸。郭璞曰今江東通呼索為綸也。(『玉篇』残巻 卷 27 糸部)

綸 力旬反。絡。(篆隸萬象名義 第 6 帖 133 丁表)

C 逸文は玉篇と異なる注文を持つもの（2項目）

- (5) 漉出 玉理屋反。考工記清其灰而漉之。野王案漉猶瀝也。爾雅漉、竭也方言曰漉澗也、漉極也。郭璞曰：漉滲極盡也。説文淥字也、書亦瀼字也。

（大乘理趣六波羅蜜經釈文 不退轉品）

漉 理屋反。考工記清其灰而漉之。野王案：漉猶瀝也。爾雅漉竭也。郭璞曰月令無漉陂々池是也。方言漉澗也、漉極也。郭璞曰漉滲極盡也。廣雅澗盡也。（『玉篇』残卷 卷19 水部）

漉 里屋反。竭也。瀼同上。（篆隸萬象名義 第5帖 97丁表）

- (6) 嘗試 上玉視楊反。公羊傳秋祭曰嘗、或云秋穀成黍。先孰曰庸道嘗新穀也。

説文口味之也。左傳杜預曰試也。（大乘理趣六波羅蜜經釈文 序）

嘗 視楊反。周礼以（…）先王。公羊傳秋（…）何休曰、嘗先辭也、秋穀成黍（…）也。論語君賜食必正席先嘗之（…）也。礼記宥之飯徧嘗之是也。左氏傳使（…）寇。杜預曰嘗試也。公羊傳君嘗訊臣矣（…）為之也。國有慶未嘗不怡、有憂（…）未嘗不戚、莊子嘗噉而不犯是也（…）。（『玉篇』残卷 卷9 旨部）<sup>39</sup>


嘗 視楊反。試也。（篆隸萬象名義 第3帖 38丁裏）

比較した結果、A 逸文は玉篇内容と完全一致し、項目数が少ないが、玉篇を代用として使えるので、本文研究上有効ではある。C 逸文は玉篇と異なる注文を持ち、現存『玉篇』残卷の系統研究に役立つものである。B 逸文は玉篇内容の一部を引用し項目が最も多く、50項目あり、調査範囲の92.6%を占める。釋文の逸文は玉篇の内容を簡略化し、義注の出典を示す記述が残され、出典明記する傾向が見える。出典明記することによって、写本の書写が判然としない場合、出典に遡ることができる。この点を利用し、『篆隸万象名義』の対応する部分の本文校訂に有効である。

## 7.5 大乘理趣六波羅蜜經釈文の逸文を利用した本文校正

### 7.5.1 「菡」「菑」

「菡」・「菑」の例を確認してみよう。まず、『篆隸万象名義』から字の形のままで翻字は次のようになる。

- (7)  胡感反。未發菡蘭也。已發芙蓉也。（篆隸万象名義 第4帖 29裏）

 感反。芙蓉也。華菡蘭也。（篆隸万象名義 第4帖 29裏）

そこで掲出字の判読が問題になってくる。大乘理趣波羅蜜經釋文では、二字熟語「菡

<sup>39</sup> この項目、残卷では闕損するため、闕損の部份を（…）で示す。

菡」の見出しに、玉篇の内容を引用している。その内容は次の通りである。

菡 上：玉胡感反。毛詩有華菡菡、傳曰荷華也。說文扶渠華未發者為菡菡、已發已者為扶容。字書菌又菡也。下：玉徒感反。爾雅扶渠、其華菡菡。說文作荅。(般若波羅蜜多品之餘 46)

『大乘理趣六波羅蜜經釈文』の記述で分かるように、『篆隸万象名義』の掲出字はそれぞれ「菡」・「菡」だと判読すべきである。

### 7.5.2 「翠」

「翠」について、『篆隸万象名義』と大乘理趣六波羅蜜經釈文の記述の次の通りである。

(8) 翠 且醉反。羽雀。(篆隸万象名義 第6上12表)

含翠 下玉且醉反。說文青羽雀也。字指南方欲取之、因其生子、漸下其巢、須可取之。(釋文)

関連する説文解字と宋本『玉篇』の記述は次のようである。

翠 青羽雀也。出鬱林。从羽卒聲。(説文解字 卷4 羽部)

翠 七遂切。青羽雀出南方。(宋本『玉篇』 上49裏)

上記の比較対照で分かるように、『篆隸万象名義』の「翠」の義注には、「青」が脱落し、「羽雀」になった。『大乘理趣六波羅蜜經釈文』の記述で、「青羽雀」という義注は元来『説文解字』由来ということが分かり、原典に遡って確認することができた。

## 7.6 まとめ

本章は日本平安初期に撰述した仏典音義『大乘理趣六波羅蜜經釈文』を利用して、『篆隸万象名義』の本文研究を行った。日本平安時代漢字字書総合データベース (HDIC) で整備したテキストデータに基づき、『大乘理趣六波羅蜜經釈文』に存する玉篇逸文は玉篇の全30巻にわたって、108個の部首に属することを明らかにした。逸文の項目と『玉篇』残巻との比較を通して、最も一般的な引用形式は、玉篇内容の一部を取り、出典明記する傾向がある。この点を利用し、『篆隸万象名義』の対応する部分の本文校訂に有効であることが分かった。最後にその逸文を利用した『篆隸万象名義』の本文校正の実例を報告した。本章は『大乘理趣六波羅蜜經釈文』を利用して『篆隸万象名義』の本文研究を行う一つの試みにすぎない。『大乘理趣六波羅蜜經釈文』にある玉篇逸文を本文研究に有効に利用するには、各項目を比較対照し、綿密な考察が必要である。

また、玉篇に存する項目であるが、『大乘理趣六波羅蜜經釈文』の方が玉篇の内容を取らずに、別の切韻・字苑等の内容を引用した原因の究明は今後の課題にしたい。

## 第8章 篆隸万象名義の全文テキストと公開システム

### 8.1 全文テキスト公開の背景

本章では、『篆隸万象名義』を例にして、古写本の全文テキストの電子化とその公開システムについて、その現状と課題を報告する。

漢字古文献の研究は Unicode の普及と定着により大きな進展を見せている。漢籍・仏典の全文テキストをオンラインで検索するのは、ごく日常的なことであり、難字を多く含む康熙字典ですら簡単に検索できる。しかし、それらの依拠するテキストは、校訂された活字テキストあるいは版本であり、所用の漢字字体は康熙字典に準拠するものが用いられている。これは中国学や仏教学において宋版・元版・明版および清版、さらに高麗版や和刻本など、版本を基礎においた研究がなされてきたことによる。筆者等が研究対象とする日本古辞書は、中国撰述の『広韻』、『玉篇』、『一切経音義』（玄応）を参照することが多いが、広韻と一切経音義は中国版本に基づく電子テキストが利用できる。

一方、日本においては奈良時代以来の古写本が数多く伝存し、それらの影印も容易に利用可能となっている。我々が対象とする日本古辞書は、国語学と中国語学の重要資料であるが、ほとんどが写本として伝わったものである。写本の常として誤写が避けられない。体例（本文の体裁）の不統一、難字、異体字、誤字、脱字、衍字、顛倒、錯簡について、関連の典籍を参照して校訂して行くことが不可欠である。

『篆隸万象名義』の本文研究の状況は次節で詳しく紹介するが、近時、中国の研究者により校訂テキストが初めて出版されるなど、関連研究が続出しているが、日本の研究成果を参照することは少ない。

このような状況の中、2016年9月1日、高山寺本篆隸万象名義データベースの全文テキストを公開した。これは、日本古辞書では初めての全文電子テキスト化とその公開となる。難字の多い古写本を電子テキスト化した点と日中の本文研究成果を総合する点に特色がある。

本章では、Unicode による篆隸万象名義データベースの構築、全文テキストおよび公開システムを中心に述べる。特に古辞書研究と文字情報処理の上で扱いやすい TSV データフォーマットで全文テキストを提供し、利用する際に必要になるデータインフォメーションについて解説を行う。

### 8.2 掲出字認定の成果

これまでの原本『玉篇』、『篆隸万象名義』に関する先行研究は、岡井(1933)から始まるが、原本『玉篇』の逸文蒐集をさらに進めた研究成果が馬淵(1952)である。音韻研究の成

果〔周(1966)・河野(1979)・上田(1986)〕は顕著であるが、訓詁と字体の研究は少ない。掲出字の全体を解説した先行研究には白藤(1977)・宮澤(1977)・池田(2014a)・呂(2007)があげられる。

白藤(1977)は、高山寺古辞書資料第一に収録された高山寺本『篆隸万象名義』影印テキストの掲出字を検出するための索引である。索引は検字が主目的であるため、通行字体たる康熙字典体を用いながら、原本字形を重視する特徴がある。

宮澤(1977)は、『篆隸万象名義』の骨組みとなる掲出字を解説したうえ、高山寺本の配列形式で一覧にした研究成果である。説文解字、『玉篇』残巻等の先行文献とも対照し、埋字・脱字に相当するものも一覧表に反映させた。

呂(2007)は、説文解字、原本『玉篇』残巻、宋本『玉篇』等の関連文献と照合し、校勘を加え、『篆隸万象名義』全文を翻刻したものである。解説積文の公刊である呂(2007)が注目を集めたが、紙媒体故に情報处理的な側面において、制約があった。それゆえ、全文テキストデータベース化が期待されていた。

池田(2014a)は、『篆隸万象名義』掲出字データベース UCS 対応版(2011年公開)を踏まえ、HDICプロジェクトの構想と進捗について詳しく解説したものである。

なお、上田(1986)は、すべての反切に厳密な校訂を加えており、掲出字の同定にも参考になるところが大きい。

### 8.3 全文テキスト

#### 8.3.1 篆隸万象名義の体系と構造

データベース化作業を行う際、古辞書自体の体系と構造が、データベースの設計に大きな影響を与える。よって、この節では部首分類と配属・配列で同一の体系を持つ原本『玉篇』と宋本『玉篇』と比較しながら、『篆隸万象名義』の全体の体系と構成を説明する。

##### 8.3.1.1 帖・巻から見た部首体系

高山寺本『篆隸万象名義』は六帖の構成で、各帖はさらに巻に分かれる。各巻は複数の部首を収める(「艸部」「木部」など、字数の多い部首は複数の巻にまたがる場合もある)。各半丁を上下二段、左右六列に書写する体例が基本である。この枠内に篆書と隸書の大字で掲出字が掲げられ、下には注文が付されている。

11世紀に簡略した宋本『玉篇』も原本『玉篇』を受け継ぐものとして今に伝わっているものである。両書の編纂方針には類似点も多いが、形式面・内容面において相違点も少なくない。

『篆隸万象名義』の構成は前半の原撰部分（空海自撰による）と後半の続撰部分（他の人による）とに分かれるが、前半の原撰部分は構成において依拠した原本『玉篇』の三十卷と異なり、百卷に分卷する方針が確認できる。一方で、宋本『玉篇』は宋太宗祥符六年（1013）に、勅令で陳彭年らによって重修増補されたものである。体系上、『篆隸万象名義』と違って、原本『玉篇』の三十卷構成は保たれている<sup>40</sup>。

原本『玉篇』・『篆隸万象名義』・宋本『玉篇』の全体を見渡すと、次のようになる。

原本玉篇： 卷-部首-掲出字-注文

篆隸万象名義： 帖-卷-部首-掲出字-注文

宋本玉篇： 篇-卷-部首-掲出字-注文

原本『玉篇』は卷子本であり、『篆隸万象名義』と宋本『玉篇』は冊子本である。『篆隸万象名義』と宋本『玉篇』は原本『玉篇』の節略本となる。分量が節略された複数の巻を帖（宋本『玉篇』の場合は篇）になす。三書の対応関係は表 8-1 に示す。『篆隸万象名義』における巻の分け方は前後が異なって、前の原撰部分は細かく分卷する方針が見られる。一方で、続撰部分は、前半の編纂方針を踏襲せず、原本『玉篇』の構成をそのまま継承している。

表 8-1 『篆隸万象名義』と宋本『玉篇』の帖・巻の対照表<sup>41</sup>

篆隸万象名義			宋本『玉篇』
帖数	対応部首	巻数	巻数
一	一～目 49 部	1-12	1-4
二	(目)～心 40 部	13-26	(4)-7
三	(心)～中 70 部	27-38	8-11
四	木～禾 38 部	39-50	12-15
五	(禾)～氏 148 部	15-21	(15)-21
六	山～亥 197 部	22-30	22-30

<sup>40</sup> この特徴から残巻となる原本『玉篇』の体系を考察する際に、代わりに宋本『玉篇』を用いる。

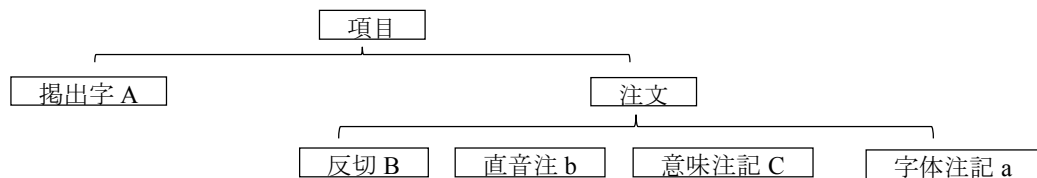
<sup>41</sup> ( )を付したものは該当部首・巻の後半部分を示す。

### 8.3.1.2 部首内の項目の配列構造

各部首における掲出項目の配列の順序は、①最初に説文解字によるものを説文解字の出現順に掲出し、②その次に説文解字に見えないものを配列する。宋本『玉篇』では、①と②の後に、説文解字、原本『玉篇』（＝『篆隸万象名義』）に掲載のないものが増補されるのが原則のようである。説文解字と玉篇との部首体系は異なるので、事情は簡単ではない。『篆隸万象名義』の掲出項目の配列の順序が確定しているわけではない。『篆隸万象名義』の本文研究から言えば、項目の配列順序を検討するためにデータベース化が必要という研究段階である。

### 8.3.1.3 項目構造

『篆隸万象名義』の項目構造は比較的単純である。



内容：形 A 掲出字 a 字体注記

音 B 反切 b 直音注

義 C 意味注記

掲出字、反切<sup>42</sup>、意味注記は、それぞれ形、音、義を解釈する役割を担う。字体注記は形、直音注は音の説明を補助する。次の「誑」で解説しよう。

A 誑 B 俱放反。C 欺也、誤也。a 愆字。

（篆隸万象名義 第1帖 20 丁裏）

掲出字「A 誑」そのものが字体を示し、反切「B 俱放反」は字音を説明するものである。「C 欺也、誤也。」は単字による義注である。「a 愆字」は異体字の説明である。

関連して、説文解字・原本『玉篇』・宋本『玉篇』では「誑」の項目は次の通りである。

誑 欺也。从言狂聲。（説文解字卷3 言部）

誑 俱放反。《國語》：天又誑之。賈逵曰：誑、猶惑也。《左氏傳》：是我誑吾兄。杜預曰：誑欺。《爾雅》：佞張誑。郭璞曰：《書》云無或佞張為眩、と欺誑人也。

<sup>42</sup> 二字の組み合わせで音を表す方法である。反切上字の声母と、反切下字の韻母および声調を組み合わせ、その漢字の音を表す。

《聲類》：或為恚字。在心部。(原本『玉篇』卷9言部)

誑 俱放切。惑也、欺也。(宋本『玉篇』上篇84丁表)

義注の「欺也」は説文解字から、原本『玉篇』・『篆隸万象名義』・宋本『玉篇』まで継承するものであり、反切「俱放反」は原本『玉篇』から伝わった音注である。「誑」は説文解字に存し、原本『玉篇』では反切による音注、典拠による例文・意味注記を加え、『篆隸万象名義』・宋本『玉篇』まで伝わった掲出項目である。

『篆隸万象名義』をデータベース化し、本文を研究することは、大部分が逸文となっている原本『玉篇』の原貌を再構する一助になると考えられる。よって、原本『玉篇』と宋本『玉篇』との比較した情報もデータベースに加える。

#### 8.3.1.4 掲出字の分類

『篆隸万象名義』は書名の「篆隸」に示されるように、その掲出字は本来篆書と隸書により掲げられるべきものである。ただし、現存の高山寺本では篆書掲出字が約6%しか存せず、隸書掲出字のみの項目が主となっている。

高山寺本『篆隸万象名義』が書写されるまでに、掲出字の脱落、誤写、重出、さらに掲出字が注文に繰り込まれるといった問題が生じた。したがって、『篆隸万象名義』の掲出字を扱う際に、大字で掲げられる掲出字を対象とすることだけではなく、脱落した掲出字(脱字)も、注文に繰り込まれる掲出字(埋字)もすべて視野に入れるべきである[李(2015)]。

この点を考慮し、『篆隸万象名義』の掲出字を四つに分類した。

隸書掲出字(約88%)・埋字(約4%)・脱字(約3%)の三つを基本の分類とする。これらに篆書か隸書かの情報を加えて掲出字の下位分類を行った(後述のGroup a, b, c)。

残りは補足的な分類で、宋本『玉篇』で増補された異体字(約5%)を加えた(後述のGroup d)。これは玉篇系字書である原本『玉篇』と宋本『玉篇』との関連を考えるための措置である。

これらの四分類を次のように説明した。

Entry\_type

Group a-- Regular headword

1 Regular (= Regular\_clerical)

2 Regular\_seal

Group b -- Embedded headword

3 Embedded\_clerical

4 Embedded\_omitted

5 Embedded\_seal

Group c -- Omitted headword

6 Omitted

7 Omitted-regular

Group d -- Variant of the Songben Yupian

8 Songben-Yupian

Group a には、基本的に『篆隸万象名義』では隸書大字で掲げられる掲出字を含めた。したがって、英語表記は Regular headword とした。篆書掲出字の有無で 2 種類に分類した。さらに、字体を付加情報として加えた。

1 Regular\_clerical は隸書掲出字のみのものを指す。

2 Regular\_seal は篆書掲出字も併存するものを指す。

隸書は、本来 clerical とするべきであるが、最も一般的な掲出字タイプであるので、字体情報を省略して Regular とした。

Group b には、基本的に『篆隸万象名義』では注文に繰り込まれる掲出字（埋字）を含めた。したがって、英語表記は Embedded headword にした。さらに、字体を付加情報として加えられ、篆書は seal、隸書は clerical とした。埋字は脱落した場合、omitted で注記した。

3 Embedded\_clerical は隸書で示す埋字を指す。

4 Embedded\_omitted は見出しが脱落した埋字を指す。

5 Embedded\_seal は篆書で示す埋字を指す。

Group c には、基本的に『篆隸万象名義』では脱落した掲出字（脱字）を含めた。したがって、英語表記は Omitted headword にした。掲出字のみ脱落する場合（注文存）、regular で注記した。

6 Omitted は諸文献に本文が存し、元来『篆隸万象名義』にもあったと考えられる掲出字を指す。

7 Omitted\_regular は掲出字のみ脱落（注文存）した掲出字を指すのである。

Group d には宋本『玉篇』で増補された異体字(8 Songben-Yupian)を含めた。

### 8.3.2 翻刻

#### 8.3.2.1 手書きによる従来成果発表

現在のパソコン環境では、Unicode が実装され、多漢字文献の処理に対応している。しかし、従来研究成果公表は手書きであった。『篆隸万象名義』の掲出字についての認定である白藤(1977)・宮澤(1977)・上田(1986)はいずれも手書きで公刊された。

### 8.3.2.2 KTBにおけるUnicode対応

2001年のUnicode3.1以降、CJK 統合漢字が拡張 B を追加し約 7 万字を扱えるようになった。近年、Unicode の基本多言語面の CJK 統合漢字・拡張 A～E により 7 万を超える漢字が処理可能となった [Lunde(2008)]。これを背景に、海外では説文解字・広韻等の古い辞書のオンライン版が続々公開され、呂(2007)が『篆隸万象名義』の活字翻刻として出版された。

KTB の入力作業も Unicode で扱える漢字の範囲で進めた。翻刻方針は、康熙字典体を基準とした。一部、とくに原本において字体の差異を問題とする場合、原文の字体を採用する。Unicode で符号化できない文字は IDS (Ideographic Description Sequence、漢字構成記述文字列) で処理した。すなわち、IDC (漢字構成記述文字、 $\square\square\square\square\square\square\square\square\square\square$   $\square\square$ 、U+2FF0～U+2FFB) を利用し、漢字部品の合成により漢字を表現したのである。

実際に HDIC では、Unicode で扱える漢字の全掲出字に占める割合は、『篆隸万象名義』99.2%・宋本『玉篇』99.8%・『新撰字鏡』89.2%となる。処理できない漢字は『篆隸万象名義』で 128 字、宋本『玉篇』で 46 字、『新撰字鏡』で 2,592 字となる(表 8-2)。表 8-3 は Unicode 漢字の内訳である。

表 8-2 篆隸万象名義(KTB)・宋本玉篇(SYP)・新撰字鏡(TSJ)処理状況

DB	Unicode 漢字	IDS	その他	合計
KTB	15,872	80	48	16,000
	(99.20%)	(0.50%)	(0.30%)	(100%)
SYP	22,954	23	23	23,000
	(99.80%)	(0.10%)	(0.10%)	(100%)
TSJ	21,408	1,512	1,080	24,000
	(89.20%)	(6.30%)	(4.50%)	(100%)

表 8-3 表 2 の Unicode 漢字の内訳

DB	統合漢字	拡張 A	拡張 B	拡張 C
KTB	10,160	2,000	3,712	0
	(63.50%)	(12.50%)	(23.20%)	(0.00%)
SYP	13,386	3,243	6,325	0
	(58.20%)	(14.10%)	(27.50%)	(0.00%)
TSJ	15,048	2,400	3,960	5
	(62.70%)	(10.00%)	(16.50%)	0.00%

### 8.3.2.3 文字の解読

高山寺本『篆隸万象名義』の本文解読上で課題となるのは、上述の難字・僻字の処理だけではない。高山寺本の中では誤写・誤脱が多く存在するのである。同時に中国南北朝以来の字形の古態を残すものもあって、本文内容、関連文献を確認しながらの文字解読が必須となる。「隊」の例で詳細を見てみる。



隊の例

隊 階古諧也。道也、梯也、陞。(篆隸万象名義第6帖24丁表)

この項目は、原本画像で確認したところ、形式的に見る限り、『篆隸万象名義』ではごく普通の項目である。だが、注文内容を読んでみると、不自然な点があることに気づいてくる。この点について、内容・字順・字形の三方面からみることにする。

内容：原本『玉篇』・宋本『玉篇』の内容と見比べ、注文は「階」に相応しい説明であり、注文の1字目「階」は掲出字に相当する。「古諧也」は反切の誤写である。従って、原本に掲出字の位置にある「隊」の字は異常とみられる。

字順：この箇所について、原本『玉篇』残巻、宋本『玉篇』、『篆隸万象名義』自身の前後の掲出字の配列順を比較すると、

原：…階・除・階・阡…

宋：…階・除・階・阡…

万：…階・除・隊(階)・阡…

ここでは、三書における字順は一致しているように見える。

字形：「隊」は現在「隊」の簡体字として使われており、字形が「隊」としていつ頃から使われていたのかは不明である。この字は説文解字・原本『玉篇』残巻・宋本玉篇・『新撰字鏡』等の古い時代の文献では出現していない。

よって、この位置に「隊」という掲出字が書かれた原因を考えると、その前後の掲出字「除」か「阡」かの傍の部分が、最初の筆画においていずれも「人」との類似により、誤写で「隊」になり、掲出字を修正するより（紙面の清潔さを考慮したか）、注文の1字目に書き添えた可能性は否定できない。すると「隊」は衍字となる。したがって、この項目本来の掲出字は「階」と認定すべきである。

## 8.4 公開システム

### 8.4.1 公開の準備と方法

#### 8.4.1.1 所蔵者の許諾

篆隸万象名義データベースの公開は、高山寺典籍文書総合調査団（代表者：石塚晴通 北海道大学名誉教授）の配慮・指導の下に高山寺当局から許諾を得た。さらに、漢字字体規範データベース(HNG)との連携の許諾も得た。

- ①全文翻刻テキスト
- ②掲出字画像
- ③HNG との連携

今度の公開は①に関するものである。②は、掲出字画像を公開し、IDS 検索を可能とするシステムを念頭においている。③は HNG のデータは、CHISE でも検索可能となっており、どのように連携をはかればよいか、検討中である。

#### 8.4.1.2 公開計画

篆隸万象名義データベース（KTB）は平安時代漢字字書総合データベース（HDIC）の一環となすものである。HDIC プロジェクトの全体のホームページは <http://hdic.jp> である。主に次の情報を示す。

- ・進捗・イベント等の最新情報
- ・プロジェクト全体の紹介
- ・編纂委員会の構成
- ・関連する論文、学会発表等の情報
- ・関連の漢籍・仏典のソース、ツール等へのリンク

『篆隸万象名義』のテキストを公開する形式は次の三種類がある。

- (1) テキストを一覧するウェブサイト

<http://hdic3.let.hokudai.ac.jp/ktb/>

- (2) 部品による掲出字画像の検索システム

<http://hdic2.let.hokudai.ac.jp/ktb/>

- (3) 最新版の全文テキスト

<https://github.com/shikeda/HDIC>

(1) は TSV 形式のファイルを HTML 化して部首ごとに掲出字と注文を通覧できるようにしたものである。（担当者李媛）

(2) は IDS による部品検索と掲出字画像の表示を可能としたシステムである。（担当者劉冠偉）

(3) は TSV 形式のファイルを掲載し、順次構成をすすめているものである。最初に掲載したファイルは、原文に比較的忠実に翻刻する方針のもとに作成されているが、これに校訂を加え、明らかな誤字、脱字、衍字等を修正したものに作り変えている。(担当者 池田)

#### 8.4.1.3 ライセンス

Github はソフトウェア開発プロジェクトのための共有ウェブサービスである。オープンソースのライセンスが要求される。HDIC のデータ公開は改善の共有に配慮する公開である。そのため概ね、公開されているデータを自由に複製・配布することが可能であり、メールで報告された意見・問題点等は修繕される。今後は、次のように GPLv2 の明記を考えている。

This data is distributed under GPLv2. Send bug reports and feature requests via email.

#### 8.4.2 データフォーマット

##### 8.4.2.1 TSV

データフォーマットについては、TSV データフォーマットを採用した。

TSV (Tab-Separated Values) とは、複数の項目で構成されるデータを複数件列挙して表現することができる汎用的なデータ形式の一つで、項目間の区切り文字にタブ文字を用いるものである。

データを文字の連なりとして表現するテキストデータおよびテキストファイルの形式であり、複数の項目をタブ文字で区切って一件のレコードを構成し、複数件のレコードを改行文字で区切ってデータ全体を構成する。

TSV を採用したのは次の三点の理由である。

- (1) 『篆隸万象名義』は単字字書であり、比較的単純な項目構造をもつこと。
- (2) 古辞書研究および文字情報処理上では汎用性の高いデータフォーマットであること。
- (3) 古写本の古辞書の本文解読はマークアップ可能な精度に到達していないこと。

TSV はテキストファイルとして扱うことができるため、テキストエディタなどで手軽に編集することができ、大容量のファイルも比較的開きやすいといった利点がある。TSV は、すなわち、古辞書研究と文字情報処理の上で扱いやすいデータフォーマットと言える。

古辞書を研究資料とする人文系研究者は、エクセルで処理することが多く、本文解読の内容に関する意見を得やすいと考えたからである。

#### 8.4.2.2 TSV インフォメーション

より多くの国・地域の研究者の参考に供するため、公開データの先頭には次のように、TSV Format Information を付した。01～10 の番号は、説明の便宜ため付けた。以下解説を行う。01 から 10 までの公開情報は、その内容によって次の三つのタイプに分けられる。

I. 基本情報：所在及び構成体系の情報[01～03]、『篆隸万象名義』の掲出字と注文を翻刻したテキスト[04・07]。

II. 関連情報：玉篇系字書（原本『玉篇』と宋本『玉篇』）の対応所在情報。[08・09]

III. 校勘情報：作成者による掲出字の分類、諸家による掲出字同定の相違、校勘意見。[05・06・10]

I は『篆隸万象名義』に関する本文情報である。

II は関連字書の対応する対照情報である。

III は先行研究、諸関連文献の内容を総合した上での作成者の校勘意見である。

#### TSV Format information:

- 01 TBID (v\_www\_xyz) : Book(v), leaf(www), recto-verso(x), line(y) and number(z)
- 02 TB\_vol\_radical (xx#yyy) : Volume(xx) and radical number(yyy)
- 03 TB\_radical : Radical of Chinese character
- 04 Entry: Headword
- 05 Entry\_type: For details, refer to the following section
- 06 Entry\_diff: Differences of transliteration with other scholars
- 07 TB\_def: Definition of pronunciation, meaning and variant(s)
- 08 SYID (vwwwxyyyz): Book(v), leaf(www), recto-verso(x), line(yy) and number(z)
- 09 YYID (Ywwwxyy-z): Volume(ww), leaf(xxx), line(yy) and number(z)
- 10 TB\_remarks: Editor's notes

#### 解説：

- 01 TBID は該当掲出字 ID を示す。『篆隸万象名義』における所在の帖数 v・丁数 www・表裏 x・列数 y・字順 z を v\_www\_xyz の形式で示す。TB は『篆隸万象名義』の略称。
- 02 TB\_vol\_radical は『篆隸万象名義』における該当掲出字の巻数 xx と部首番号 yyy を xx#yyy の形式で示す。
- 03 TB\_radical は該当掲出字の『篆隸万象名義』に所属する部首の部首代表字である。
- 04 Entry は該当掲出字の翻刻された字体を示す。データベース作成者の判断が含まれる。本文は Unicode で扱える漢字の範囲で入力した。符号化されていない漢字は IDS 方式で表現する。

- 05 Entry\_type は該当掲出字の分類である。詳細は 3.1.4 を参照。
- 06 Entry\_diff は該当掲出字の判読について、諸家の認定意見と分かれるときに示すものである。主に白藤(1977b)・宮(1977)・上田(1986)・呂(2007)を参照した。
- 07 TB\_def は該当掲出字の注文内容を翻刻したものである。注文内容の音注・義注・字体注の解説を示すために、句読点を付し、書名に括弧を付す。
- 08 SYID は該当掲出字が宋本『玉篇』データベースに対応するものの ID を示す。宋本篇(SY)における所在を篇数 v・丁数 www・表裏 x・列数 yy・字順 z の順に示す。
- 09 YYID は該当掲出字が原本『玉篇』データベースに対応するものの ID を示す。原本玉篇残卷(YY)におけるの巻数 ww・頁数 xxx・列数 yy・字順 z の順に示す。
- 10 TB\_remarks はデータベース作成者による総合的な校勘意見である。

#### 8.4.2.3 データサンプル

例えば、掲出字「哥」(表 8-4)と「舩」(表 8-5)の TSV データの詳細を示す。

表 8-4 「哥」の TSV データの詳細

01	TBID	3_024_A31
02	TB_vol_radical	v9#96
03	TB_radical	可
04	Entry	哥
05	Entry_type	Regular
06	Entry_diff	
07	TB_def	古何反。詠言也。
08	SYID	a088a031
09	YYID	Y09a-21-12-2
10	TB_remarks	詠言：據尚書本文「詩言志，歌詠言」。詠字，尚書作永。

- 01 第 3 帖 24 丁表 3 列の 1 字目 (所在)
- 02 卷 9・部首 96 番目 (巻数・部首番号)
- 03 可部 (部首)
- 04 哥 (掲出字)
- 05 隸書掲出字 (掲出字タイプ)
- 06 諸家認定に異同なし (先行研究との照合)
- 07 古何反。詠言也。(注文内容)
- 08 対応する宋本『玉篇』の所在は上篇 88 丁表 3 列 1 字目 (関連字書所在)

- 09 対応する原本『玉篇』の所在は巻9の21紙12  
列2字目（関連字書所在）
- 10 詠言：據尚書本文「詩言志，歌詠言」。詠字，  
尚書作永。（校勘意見）

表 8-5 「船」の TSV データの詳細

01	TBID	5_077_B32
02	TB_vol_radical	v18#283
03	TB_radical	舟
04	Entry	船
05	Entry_type	Regular
06	Entry_diff	宮
07	TB_def	時專反。舟。
08	SYID	b069b072
09	YYID	Y18a-17-09-1
10	TB_remarks	

- 01 第5帖77丁裏3列の2字目（所在）
- 02 巻18・部首283番目（巻数・部首番号）
- 03 舟部（部首）
- 04 船（掲出字）
- 05 隸書掲出字（掲出字タイプ）
- 06 宮澤(1977)の認定字「船」と異なることを示す。（先行研究との照合）
- 07 時專反。舟。（注文内容）
- 08 対応する宋本『玉篇』の所在は中篇69丁裏7  
列2字目（関連字書所在）
- 09 対応する原本『玉篇』の所在は巻18の17紙9  
列1字目（関連字書所在）
- 10 なし（校勘意見）

## 8.5 まとめ

古写本の古辞書の文字情報処理は、その前提として正確な翻刻本文が必要不可欠である。日本の古辞書研究では、その土台となった中国字書、とくに玉篇系字書である原本『玉篇』残巻、『篆隸万象名義』、宋本『玉篇』との対照作業が不可欠となっている。これまでの古辞書データベース化では、玉篇系字書のデータベース化を疎かにしていた。

HDIC は古辞書翻刻・入力作業の効率化をはかるため、まず古版本である宋本『玉篇』をデータ化し、これを土台に高山寺本『篆隸万象名義』の入力作業も完成した。本年4月に宋本『玉篇』、9月に『篆隸万象名義』の全文テキストデータを順次に公開した。ま

た、研究の国際対応を考慮し、これまで国際学会での発表を行い [Li(2015)・池田(2015b)・池田(2016b)]、公開データには英文凡例と中文校記を付け加えている。公開したデータ、古辞書研究上の活用と文字情報処理での応用を期待する。

また、公開したテキストデータに基づき、IDS 部品検索による字体研究・マークアップ言語の XML による本文の構造化・国会図書館 (NDL) デジタルコレクションの画像データとの連携などは今後の課題にしたい。

## おわりに

本研究では、文字学と情報処理学との研究方法を融合し、日本平安初期に成立した字書である『篆隸万象名義』について、文字学と情報処理学との二つの観点から本文解説にアプローチした。以下、各章における議論の要旨を記す。

第1章は、文字学と情報処理学との二つの観点から、本研究の研究対象とする玉篇系字書（原本『玉篇』・『篆隸万象名義』・宋本『玉篇』）に関する主な研究成果、本文研究、音韻、文字、電子化などの視点からまとめた。

第2章は、まず筆者が所属する研究室では目下推進中である平安時代漢字字書総合データベース（HDIC）について概要を記し、本研究で扱った篆隸万象名義データベースはその一環に位置付けられることをした。次に、『篆隸万象名義』と原本『玉篇』残巻との対応部首を指摘した上で、そこを中心に、篆隸万象名義データベース構築上の Unicode 対応、包摂問題、翻刻方針の詳細を検討した。最後に、研究目的に応じたテキストデータの活用方法について、つまり情報処理学的な研究方法を述べた。具体的には、単漢字レベルの検索に関する例としては、「『篆隸万象名義』と原本『玉篇』の漢字字体史研究へのアプローチ」と漢字部品レベルの検索に関する例としては、「IDS データによる古辞書の漢字字体研究」をそれぞれ取り上げた。

第3章は、高山寺本『篆隸万象名義』の原本調査と近世写本の調査に基づき、書誌情報や本文内容について検討した。まず、高山寺本六帖における押界について調査結果を報告した。次に、高山寺本と近世写本との比較対照によって、「第一帖・巻第十一・頁部」における錯簡の問題を指摘した。さらに実例を挙げながら、近世写本を利用した本文研究の結果を述べた。最後には、近世写本の研究資料としての価値の高さに言及した。

第4章は、主に『篆隸万象名義』の項目の記述構造に着目し、埋字と脱字を整理することによって、隸書掲出字以外に、注文レベルにかつて存在した可能性のある掲出字と脱落したと考えられる掲出字を考察した。本来『篆隸万象名義』の掲出字数を想定できる範囲は 16,523 字から 16,999 字であることを指摘した。

第5章では、掲出字の相関関係を考えるため、篆隸万象名義データベースを利用して字体と字種との区別から『篆隸万象名義』における重出字を考察した。電子化した古辞書の本文データを研究目的に応じていかに利用するかその一つの試みとして、実際に調査を行い、本章が採る方法論がデータの処理や問題点の抽出などにおいて有効であることを示した。結果、『篆隸万象名義』の全体で重出字は 224 組 448 字であることを明らかにした。さらに、第五帖は体裁や反切用字などの先行研究において指摘された点において特殊であるだけでなく、重出字から見ても特殊であることを指摘した。そして最後

は、重出字の成因が、多音字と類形同字の分項にあることを突き止めた。

第6章では、篆隸万象名義データベースを利用して、諸家の先行研究における高山寺本『篆隸万象名義』の掲出字解読結果を照合し（原本『玉篇』残巻対応部分 2,087 字）、諸家の認定に相違がある掲出字を考察した。相違のあるものは 254 字で、全体の 1 割強であった。筆者はこの 254 字を次の 4 種類に分類した：①包摂できるもの ②異体字関係のもの ③別字と衝突するもの ④難読字を別の通行字体で翻刻したものの 4 種である。最後に、これらの掲出字を段階的に翻刻表現するに、情報処理上の CHISE システムの多粒度漢字構造モデルに合わせた、データベースにおける掲出字翻刻表現階層の設計を提言した。

第7章は、日本平安初期に撰述した仏典音義『大乘理趣六波羅蜜經積文』を利用して、『篆隸万象名義』の本文研究を行った。平安時代漢字字書総合データベース（HDIC）で整備したテキストデータに基づき、『大乘理趣六波羅蜜經積文』に存する『玉篇』逸文は、『玉篇』の全 30 巻にわたって 108 個の部首に属することを明らかにした。逸文の項目と『玉篇』残巻との比較を通して、最も一般的な引用形式は、『玉篇』内容の一部を取り、出典を明記するものであることを明らかにした。最後には、この逸文の利用が『篆隸万象名義』の対応す部分の本文校訂において有効であることを実例で示した。

第8章においては、Unicode による篆隸万象名義データベースの構築、全文テキストおよび公開システムについて論じた。特に古辞書研究と文字情報処理の上で扱いやすい TSV データフォーマットで全文テキストを提供し、利用する際に必要になるデータインフォメーションについて解説した。

以上、文字学的な研究方法を用い、『篆隸万象名義』の研究に関連する資料を蒐集し、書誌調査によって、基本情報の確認・記述を行った。本文校勘により、本文研究へアプローチした。情報処理学的な研究方法を用い、総合文献のデータベースの設計、包摂問題、翻刻方針、データ分析、プレーンテキストの工夫等を検討した。本研究において文字学的な研究方法と情報学的研究方法を採用した。これら二種の研究方法は互いに相反するものではない。むしろ両者の融合は大きな実りをもたらすことを本研究によって示せた。

本稿の研究成果は、最近公開した『篆隸万象名義』全文テキストに反映されている。公開データ内の【関連情報】・【基本情報】・【校勘情報】は、本文解読・研究する上で整合する必要となる資料・情報：【A 関連資料】、【B 構造・部首体系・内容】、【C 先行研究の成果との照合】の三つに対応している。（現段階で描く研究推進状況の全体像を次の図に示す）。

# 篆隸万象名義の研究

## 文字学的な研究方法

資料蒐集・書誌調査・本文校勘

## 情報処理学的な研究方法

総合文献の Database 設計・包摂問題・翻刻方針  
データ分析・プレーンテキストを研究目的に応じた適合

解読・本文研究を行うには

整合する必要がある資料・情報



A 関連資料の参照

B 『篆隸万象名義』 自体の構造  
部首体系・内容

C 先行研究の成果との照合

篆隸万象名義のデータベースの構築

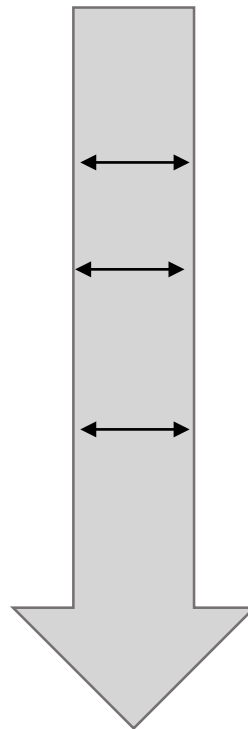
及び全文テキスト公開



HDIC により複数の字書等を自在  
に参照 [関連情報]

KTB に取り込む所在、部首体系、  
掲出字、注文内容 [基本情報]

諸家による掲出字同定の相違の記  
述、及び校勘意見 [校勘情報]



文字情報処理学の融合的な古辞書研究

また、『篆隸万象名義』は後の時代における辞書編纂に多大な影響を与えた古辞書であり、更なる研究の余地が残されている。次に、文献学、情報処理学、国語学の三分野にわたって、今後の課題に触れておく。

## 文字学

- ・未調査の五種の『篆隸万象名義』の近世写本についての調査
- ・高山寺本原本調査による本文研究

## 情報処理学

- ・入力済みのプレーンテキストを研究目的に応じた適合
  - IDS データによる『篆隸万象名義』の部品レベルの字体研究
  - XML タグ付けで本文構造化による文字列検索の実現
- ・国会図書館（NDL）デジタルコレクションの画像データとの連携

## 国語学

『篆隸万象名義』における意味注記（特に単字注）は、和訓の成立に密接の関係があると想定される。このテーマについて、Li (et.al) (2015) では「言部」の実例を取り込んで、漢字字書の義注の視点から、義注の和訓化について検討した。調査の結果は、和訓化は漢字の中国語における意味用法を示すため増補されるのではないかとの結論に至った。今後はさらに幅広いデータを対象とし、和訓を収める古辞書である『類聚名義抄』における対応和訓の配列順位や『色葉字類抄』における対応同訓異字との総合的な分析を行う必要がある。

## 参考文献

- 阿部隆一（1983）『増訂中国訪書志』、汲古書院
- 池田証壽（1994）「篆隸万象名義データベースについて」、『国語学』、178 集
- 池田証壽（2003a）「コーパスによる文字の研究」、『日本語学』、22 卷 5 号、 明治書院
- 池田証壽（2003b）「篆隸万象名義データベースの改訂」、『漢字文献情報処理研究』、漢字  
文献情報処理研究会編、第 4 号、好文出版
- 池田証壽（2011）「篆隸万象名義データベースの整備と問題点」、『平成二十二年度高山寺  
典籍文書綜合調査団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団
- 池田証壽（2014a）「平安時代漢字字書綜合データベースの構築」、『北海道大学文学研究  
科紀要』142
- 池田証壽（2014b）「平安時代漢字字書綜合データベースー現状と課題 2014 夏ー」、『漢デ  
ジ 2014：デジタル翻刻の未来』、京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学  
研究センター編
- 池田証壽（2015a）「平安時代漢字字書綜合データベースの構築」、『高山寺典籍文書綜合調査團  
研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査團
- 池田証壽（2015b）「佛經音義與日本古字書」、『佛經音義研究：第三屆佛經音義國際學術  
研討會論文集』、上海辭書出版社
- 池田証壽（2016a）「『大広益会玉篇』データベースの構築と利用ー『篆隸万象名義』『新  
撰字鏡』『大宋重修広韻』との対応ー」、『情報科学と言語研究』、現代図書
- 池田証壽（2016b）「新撰字鏡本文解読上の諸問題ーHDIC の紹介とその活用ー」、『アジ  
ア諸民族の文字 2』、口訣学会
- 池田証壽（2016c）「平安時代漢字字書綜合データベース構築の方法と課題ー『類聚名義  
抄』を中心にしてー」、『漢字字体史研究』二、勉誠出版
- 池田証壽・李媛・申雄哲・賈智・斎木正直（2016）「平安時代漢字字書のリレーションシ  
ップ」、『日本語の研究』12(2)、日本語学会
- 石塚晴通（1984）『圖書寮本日本書紀 研究篇』、汲古書院
- 石塚晴通（2012）「漢字字体史研究ー序に代えてー」、『漢字字体史研究』 勉誠出版
- 上田正（1970）「『玉篇』 残卷論考』『神戸女学院大学論集』、第 17 卷 1 号
- 上田正（1972）「解説」、『大乘理趣波羅蜜經釋文』、優鉢羅室叢書
- 上田正（1986）『玉篇反切総覧』、私家版
- 大柴清圓（2008）「『篆隸万象名義』における俗字の研究（1）ー後漢の隸変字から魏晋の  
草書の楷書化までー」、『高野山大学密教文化研究所紀要』、第 21 号

- 大柴清圓（2009a）『篆隸万象名義』における俗字の研究（2）－魏晋から隋唐までの楷書の俗字－、『高野山大学密教文化研究所紀要』、第 22 号
- 大柴清圓（2009b）『篆隸万象名義』の部首一覧並びに部首索引表、『高野山大学大学院紀要』11 号
- 大柴清圓（2011）『篆隸万象名義』における俗字の研究（3）－附録・『篆隸万象名義』俗字表－、『高野山大学密教文化研究所紀要』、第 24 号
- 岡井慎吾（1933）『玉篇の研究』、東洋文庫論叢第 19 東洋文庫
- 河野六郎（1979）「玉篇に現れたる反切の音韻的研究」、『河野六郎著作集』二、「中國音韻學論文集」平凡社（1937 年東京大学卒業論文の再録）
- 川瀬一馬（1955）『古辞書の研究』、大日本雄辨會講談社
- 神田喜一郎（1966）「篆隸萬象名義解題」、『篆隸萬象名義』、高野山大学編、密教文化研究所
- 神田喜一郎（1972）「序」、『大乘理趣波羅蜜經釋文』、優鉢羅室叢書
- 工藤祐嗣（2002）「原本系『玉篇』字体注記の『篆隸万象名義』・『大広益会玉篇』への受容の状況について－「重文」を中心とした考察」、『訓点語と訓点資料』第 108 輯、訓点語学会
- 齋木正直・池田証壽（2011）「漢字字体の変遷－HNG に見る変わる字体と変わらない字体－」、『計量国語学』、27 卷 8 号
- 貞苺伊徳（1958）「玉篇と篆隸万象名義について」、『国語学』、31 集
- 貞苺伊徳（1989）「日本の字典－『篆隸万象名義』『新撰字鏡』『類聚名義抄』－」、漢字講座 2 『漢字研究の歩み』、明治書院
- 貞苺伊徳（1998）『新撰字鏡の研究』、汲古書院
- 白藤禮幸（1977a）「篆隸万象名義掲出字解説」、『高山寺古辞書資料第一』東京大学出版会
- 白藤禮幸（1977b）「篆隸万象名義掲出字索引」、『高山寺古辞書資料第一』、東京大学出版会
- 白藤禮幸（1977c）「校勘記」、『高山寺古辞書資料第一』、東京大学出版会
- 高田時雄（1995）「篆隸萬象名義解説」、『定本弘法大師全集』第 9 卷、高野山大学密教文化研究所
- 豊島正之（1999）「書評 横山詔一・笹原宏之・野崎浩成・エリク＝ロング編『新聞電子メディアの漢字－朝日新聞 CD-ROM による漢字頻度表－』」、『日本語科学』6、国書刊行会
- 築島裕（1984）「解説 高山寺蔵本『篆隸萬象名義』」、『篆隸萬象名義』、『弘法大師空海

- 全集』第7卷、筑摩書房
- 馬淵和夫（1952）「玉篇佚文補正」、『東京文理科大学国語国文学会紀要』3号、東京教育大学東京文理科大学国語国文学会
- 馬淵和夫（1978）「紹介 高山寺古辞書資料第一」、『国語と国文学』55-2、東京大学国語国文学会
- 宮澤俊雅（1977）「掲出字一覧表」、『高山寺古辞書資料第一』、東京大学出版会
- 宮澤俊雅（1998）「崇文書版篆隸萬象名義について」、『平成九年度高山寺本典籍文書綜合調査団研究報告論集』、高山寺典籍文書綜合調査団
- 守岡知彦（2015b）「長安宮廷写經の漢字字体と包摂規準 - HNG と CHISE の統合を通じて-」、東洋学へのコンピュータ利用第27回研究セミナー
- 守岡知彦（2016）CHISE 文字オントロジーのための漢字字体・字形粒度の記述に関するガイドライン Ver.0.9.1
- 山田孝雄（1928）「解題」『篆隸萬象名義 空海撰』、崇文叢書 第1輯之27-43、崇文院
- 吉田金彦（1954）「圖書寮本類聚名義抄出典攷（中）」、『訓点語と訓点資料』、第3輯、訓点語学会（『古辞書と国語』、2013、臨川書店に再録）
- 丁福保（1970）『説文解字詁林』、台北商務印書館
- 管锡华（1987）『说《说文》重出字』、『安徽教育学院学报（社会科学版）』第九期、合肥师范学院
- 郭敬燕（2013）「从形义统一角度谈《说文解字》重出字组」、『现代语文（语言研究版）』、曲阜师范大学
- 何瑞（2005）「宋本《玉篇》重出字调查」、『中国文字研究』第6輯、教育部语言文字应用研究所・华东师范大学中国文字研究与应用中心
- 胡吉宣（1989）『玉篇校釋』、上海古籍出版社
- 黄正雨（1995）「杨守敬日本访书考略」、『图书情报论坛』、总第28期
- 孔仲温（2000）『玉篇俗字研究』、台湾学生書局
- 梁曉虹（2015）『日本古寫本單經音義與漢字研究』、中華書局
- 柳建鈺・劉芹芹・李慧楠（2013）「《篆隸萬象名義》收字积层狀況研究」、『三峡大学学报（人文社会科学版）』35卷2期、三峡大学
- 劉尚慈（1995）「校字記」、『篆隸萬象名義』、中華書局
- 呂浩（2003）「《篆隸萬象名義》重出字初探」、『古籍整理研究學刊』第2期、东北师范大学古籍整理研究所
- 呂浩（2006）『《篆隸萬象名義》研究』、上海古籍出版社
- 呂浩（2007）『篆隸萬象名義校釋』、学林出版社

- 王平 (2005) 「《说文》《玉篇》《万象名义》联合检索系统的开发：从原本《玉篇》到宋本《玉篇》」、『中国文字研究』第 6 輯、华东师范大学中国文字研究与应用中心
- 郝志群 (1997) 「论杨守敬版本目录学的成就及地位」、『首都师范大学学报 (社会科学版)』、总 119 期
- 楊守敬 (1897) 『日本訪書志』、(『國家圖書館藏古籍題跋叢刊』2002 に再録、22 冊・23 冊、國家圖書館編)
- 楊守敬 (1901) 『日本訪書志』、(『楊守敬集』第 8 冊、1988、湖北人民出版社に再録)
- 臧克和 (2004) 「《玉篇》的层次——基于“《说文》《玉篇》《万象名义》联合检索系统”调查比较之一」、『中国文字研究』第五輯、华东师范大学中国文字研究与应用中心
- 張煦 (1934) 「玉篇原帙卷數部第敘說」、『國立山東大學文史叢刊』1 期、國立山東大學出版課
- 张峰·孙丽娜 (2007) 「《说文解字》重出字研究」、『佳木斯大学社会科学学报』、佳木斯大学
- 周祖謨 (1935) 「論篆隸萬象名義」、『國學季刊』第 5 卷、第 4 号、國立北京大學
- 周祖謨 (1966) 「萬象名義中之原本『玉篇』音系」、『問學集』、中華書局 (1936 年北京大學卒業論文の再録)
- 朱葆华 (2004) 『原本『玉篇』文字研究』齊魯書社
- Li Yuan (2015) The Creation of a Tenrei Bans-hō Meigi Database and its Textual Study, 9th Conference of the European Association of Chinese, Stuttgart University (Germany), (2015).
- Li Yuan, Shin Woonchul, Kazuhiro Okada (2016) ‘Japanese rendition of Tenrei Bansho Meigi’ s definition in early Japanese lexicography: An essay’, Journal of the Graduate School of Letters 11, Graduate School of Letters · Hokkaido University
- Lunde, Ken (2008) *CJKV Information Processing, 2nd Edition*. O’Reilly Media, Inc.
- Morioka Tomohiko (2015) Multiple-policy character annotation based on CHISE. Journal of the Japanese Association for Digital Humanities, Vol.1, No.1

## 使用テキスト

- 篆隸万象名義** 『高山寺古辞書資料第一』（高山寺資料叢書六）、高山寺典籍文書綜合調査団編、東京大学出版会、1977
- 新撰字鏡** 『新撰字鏡』増訂版、京都大学文学部国語学国文学研究室編、臨川書店、1967
- 凶書寮本類聚名義抄** 『凶書寮本類聚名義抄』、宮内庁書陵部解説、勉誠社、1969
- 観智院本類聚名義抄** 『類聚名義抄』正宗敦夫校訂、風間書房、1986
- 大乘理趣波羅蜜經釋文** 『大乘理趣波羅蜜經釋文』、優鉢羅室叢書、1972
- 説文解字** 『説文解字』、中華書局、2013（澤存堂本）
- 原本玉篇** 『古逸叢書』遵義黎氏、1884  
『東方文化叢書第六』東方文化学院、1932-35  
『原本玉篇殘卷』（古代字書輯刊）、中華書局、2004（初版 1985）
- 大広益會玉篇** 『大廣益會玉篇』（古代字書輯刊）、中華書局、2008（初版 1987）  
（澤存堂本）
- 大宋重修広韻** 『校正宋本廣韻附索引』藝文印書館、2002

## 規 格

日本工業標準調査会「JIS X 0208:1997 7ビット及び8ビットの2バイト情報交換用符号化漢字集合」日本規格協会 2000

The Unicode Consortium (2014) *The Unicode Standard, Version 7.0*, Mountain View, CA, Unicode Consortium

## 附 録

台北故宮博物院文献館所蔵近世写本八冊本

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

都合により図版の掲載を省略する

## 附 記

本稿をなすにあたり、次の諸機関の蔵書を利用した。

高山寺（京都）、宮内庁書陵部図書寮（東京）、京都大学附属図書館（京都）、国立故宫博物院文献館（台北）、国家図書館善本書室（台北）、中国国家図書館古籍館（北京）。記して感謝申し上げます。

上記諸機関への文献調査を行った際には、2015 年度富士ゼロックス株式会社小林節太郎記念基金外国人留学生研究助成プログラムの支援を受けた。

また、『篆隸万象名義』の原本調査を行うことが出来たのは、高山寺典籍文書総合調査団ならびに高山寺当局の御高配の賜物である。

本稿各節の初出は以下の通りである。いずれも必要な加筆・修正を加えた。再録をお許しいただいた諸学会、出版社に感謝申し上げます。

第 2 章（2.2～2.4、2.5.1）『国語国文研究』146、2015

第 2 章（2.5.2）『情報処理学会研究報告. 人文科学とコンピュータ研究会報告』、2016-CH-110、2016

第 3 章（3.2・3.4）富士ゼロックス株式会社小林節太郎記念基金 2015 年度研究助成論文、2016

第 4 章 『訓点語と訓点資料』135、2015

第 5 章 第 114 回訓点語学会研究発表会（2016 年、京都大学）での発表に基づく

第 7 章 『第三屆佛經音義研討會論文集』、2016

第 8 章 『じんもんこん 2016 論文集』、2016（池田証壽先生との共著）

諸論文・発表に対する諸先生および諸氏のご指導に感謝申し上げます。

本稿をなすにあたっては、前述のほかにもさまざまな支援を受けた。

指導教官である池田証壽先生、北海道大学での小野芳彦先生・佐藤知己先生・近藤浩之先生・松江崇先生・石塚晴通先生・宮澤俊雅先生をはじめとする先生方、富山大学の小助川貞次先生・国立国語研究所の高田智和先生をはじめとする先生方のご指導をいただき、その学恩に深く感謝する。また、諸先輩や同輩・後輩たちにも多くのご指摘と友情を受けた。さらに、これまで、自分の思う道を進むことに対し、温かく見守りそして辛抱強く支援してくれた家族に対しては深い感謝の意を表して謝辞とする。名前を挙げなかった方も含め、すべての方々のご厚誼に深く感謝申し上げます。

学部卒業後、しばらく民間企業で働いた。北海道大学文学部研究生として入学してから、本稿が一応のかたちをなすまで六年の月日が流れた。四季折々に豊かな表情を見せる北大のキャンパスで、学問と師友と過ごせた六年間は一瞬であった。

平安初期に弘法大師空海が唐土から、多くの経典を日本に将来した。中国では早く散逸した南北朝の顧野王の原本『玉篇』は、その中にあった。空海はこれに依拠し、830年以降『篆隸万象名義』の編纂にとりかかった。日本に伝わる原本『玉篇』残巻と『篆隸万象名義』は、駐日公使の随員として東京に渡った清末の学者である楊守敬によって、その存在と文献の価値が中国に知らしめられた。このように、『玉篇』を中心に、漢字に関わる日中の辞書の交流は絶えずに継続し、その歴史は千年に及ぶ。機縁に恵まれ、玉篇系字書の研究に携わる一員になれたことへの感謝、ならびにこの先も古辞書の研究に邁進してゆく決意をもって、本稿を終えたい。